

皇學館大学大学院
博士（文学）学位請求論文

奈良朝政治体制の研究

—天平期を中心として—

大友 裕二

平成二十六年十二月四日

目次

序章 天平期以前の政治体制	—本稿の視点と研究史の整理—	1
---------------	----------------	---

第一部 天平期政治体制の研究

第一章 「藤原四子体制（武智麻呂政権）」の再検討	14
第二章 藤原豊成小考	39
第三章 「橘諸兄政権（体制）」について	50
第四章 「藤原広嗣の乱」に関する一考察	62

第二部 奈良朝政治史の諸問題

第五章 天平元年四月癸亥条の再検討	75
第六章 知太政官事に関する一考察	85
第七章 八世紀における行幸と留守	105
第八章 春日大社成立考	119
終章 天平期政治体制の実態	147
—天平三年八月辛子条の解釈を中心に—	

初出一覧

参考文献一覧

【凡例】

一、本稿では、『続日本紀』を頻繁に使用するため、同書からの引用はすべて新訂増補国史大系本により、年月日のみを記した。

一、『日本書紀』、『令義解』、『延喜式』、『公卿補任』、『尊卑分脉』からの引用は、すべて新訂増補国史大系本によった。

一、『古事記』、『万葉集』、『懷風藻』は日本古典文学大系本、『武智麻呂伝』は群書類従本を用いた。

一、前記した以外の引用史料の出典については、適宜、割注で施した。

一、基本的に引用史料の字体は、常用漢字に改めた。

一、史料に付した傍線・傍点の類は、すべて筆者が付した。

一、引用した史料の出典によつては、句読点が「、」になっていたが、本稿では「。」に統一した。

一、出典史料に返り点がなかったものについては、適宜、筆者が施した。

一、次頁の表は、本稿で扱う主要人物の年齢を一覧できるように掲載した。

【主要人物年齢一覧】

年 (略)	藤原不比等 (略)	藤原武智麻呂	藤原房前	藤原宇合	藤原麻呂	藤原豊成	藤原仲麻呂	橘諸兄	長屋王 (略)
天武天皇9年(680)	22	誕生							5
10年(681)	23	2	誕生						6
11年(682)	24	3	2						7
12年(683)	25	4	3						8
13年(684)	26	5	4	(誕生)				(誕生)	9(誕生)
14年(685)	27	6	5	(2)				2	10(2)
朱鳥元年(686)	28	7	6	(3)				3	11(3)
持統天皇元年(687)	29	8	7	(4)				4	12(4)
2年(688)	30	9	8	(5)				5	13(5)
3年(689)	31	10	9	(6)				6	14(6)
4年(690)	32	11	10	(7)				7	15(7)
5年(691)	33	12	11	(8)				8	16(8)
6年(692)	34	13	12	(9)				9	17(9)
7年(693)	35	14	13	(10)				10	18(10)
8年(694)	36	15	14	誕生(11)				11	19(11)
9年(695)	37	16	15	2(12)	誕生			12	20(12)
10年(696)	38	17	16	3(13)	2			13	21(13)
文武天皇元年(697)	39	18	17	4(14)	3			14	22(14)
2年(698)	40	19	18	5(15)	4			15	23(15)
3年(699)	41	20	19	6(16)	5			16	24(16)
4年(700)	42	21	20	7(17)	6			17	25(17)
大宝元年(701)	43	22	21	8(18)	7			18	26(18)
2年(702)	44	23	22	9(19)	8			19	27(19)
3年(703)	45	24	23	10(20)	9			20	28(20)
慶雲元年(704)	46	25	24	11(21)	10	誕生		21	29(21)
2年(705)	47	26	25	12(22)	11	2		22	30(22)
3年(706)	48	27	26	13(23)	12	3		23	31(23)
4年(707)	49	28	27	14(24)	13	4		24	32(24)
和銅元年(708)	50	29	28	15(25)	14	5		25	33(25)
2年(709)	51	30	29	16(26)	15	6		26	34(26)
3年(710)	52	31	30	17(27)	16	7		27	35(27)
4年(711)	53	32	31	18(28)	17	8		28	36(28)
5年(712)	54	33	32	19(29)	18	9		29	37(29)
6年(713)	55	34	33	20(30)	19	10		30	38(30)
7年(714)	56	35	34	21(31)	20	11		31	39(31)
靈龜元年(715)	57	36	35	22(32)	21	12		32	40(32)
2年(716)	58	37	36	23(33)	22	13	誕生	33	41(33)
養老元年(717)	59	38	37	24(34)	23	14	2	34	42(34)
2年(718)	60	39	38	25(35)	24	15	3	35	43(35)
3年(719)	61	40	39	26(36)	25	16	4	36	44(36)
4年(720)	62	41	40	27(37)	26	17	5	37	45(37)
5年(721)		42	41	28(38)	27	18	6	38	46(38)
6年(722)		43	42	29(39)	28	19	7	39	47(39)
7年(723)		44	43	30(40)	29	20	8	40	48(40)
神龜元年(724)		45	44	31(41)	30	21	9	41	49(41)
2年(725)		46	45	32(42)	31	22	10	42	50(42)
3年(726)		47	46	33(43)	32	23	11	43	51(43)
4年(727)		48	47	34(44)	33	24	12	44	52(44)
5年(728)		49	48	35(45)	34	25	13	45	53(45)
天平元年(729)		50	49	36(46)	35	26	14	46	54(46)
2年(730)		51	50	37(47)	36	27	15	47	
3年(731)		52	51	38(48)	37	28	16	48	
4年(732)		53	52	39(49)	38	29	17	49	
5年(733)		54	53	40(50)	39	30	18	50	
6年(734)		55	54	41(51)	40	31	19	51	
7年(735)		56	55	42(52)	41	32	20	52	
8年(736)		57	56	43(53)	42	33	21	53	
9年(737)		58	57	44(54)	43	34	22	54	
10年(738)						35	23	55	
11年(739)						36	24	56	
12年(740)						37	25	57	
13年(741)						38	26	58	
14年(742)						39	27	59	
15年(743)						40	28	60	
16年(744)						41	29	61	
17年(745)						42	30	62	
18年(746)						43	31	63	
19年(747)						44	32	64	
20年(748)						45	33	65	
(略)						(略)	(略)	(略)	

* 『続日本紀』、『公卿補任』、『尊卑分脉』、『懷風藻』などを基に作成。

* 宇合の年齢は二説に分かれるため、併記した。(第一章参照)

* 長屋王の年齢については、『懷風藻』や『公卿補任』、『扶桑略紀』によると、二つの説が存するため、両方とも示した。

序章 天平期以前の政治体制

— 本稿の視点と研究史の整理 —

はしがき

【表①】

天皇	太上天皇	年号	政権担当者	備考
文武天皇	持統太上天皇	大宝元年(七〇一)		三月廿一日、不比等、大納言就任。 八月三日、大宝律令完成。 十二月廿二日、持統太上天皇崩御。
		二年		
		慶雲元年(七〇四)		
		四年		
元明天皇		和銅元年(七〇八)		六月十五日、文武天皇崩御。 七月十七日、元明天皇即位。
		三年		三月十三日、不比等、右大臣就任。 三年三月十日、平城遷都。
元正天皇	元明太上天皇	靈龜元年(七一五)	藤原不比等政権	九月二日、元明天皇讓位。 元正天皇即位。
		養老元年(七一二)		
		二年		三月十日、長屋王、大納言就任。
		四年		八月三日、藤原不比等薨去。
		五年		正月五日、長屋王、右大臣就任。
聖武天皇	元正太上天皇	神龜元年(七二四)	長屋王政権 (体制)	二月四日、元正天皇讓位。 聖武天皇即位。
		天平元年(七二九)		長屋王、左大臣就任。
		六年	藤原四子体制	二月十二日、「長屋王の変」。
		九年		三月四日、武智麻呂、大納言就任。
		十年		正月十七日、武智麻呂、右大臣就任。
		十二年		疫病の流行により、「藤原四子」薨去。
		十五年	橘諸兄政権 (体制)	九月廿八日、諸兄、大納言就任。 正月十三日、諸兄、右大臣就任。
		廿年		九月三日、「藤原広嗣の乱」勃発。 五月三日、諸兄、左大臣就任。 十月十五日、大仏造立の詔。
孝謙天皇	聖武太上天皇	天平勝宝元年(七四九)		四月二十一日、元正太上天皇崩御。 七月二日、孝謙天皇即位。
		八年		仲麻呂、大納言就任。
		天平宝字元年(七五七)		八月二日、仲麻呂、紫微令就任。 九月七日、紫微中台を設置。
淳仁天皇	孝謙太上天皇	二年	藤原仲麻呂政権	五月二日、聖武太上天皇崩御。 正月二日、橘諸兄薨去。
		四年		七月二日、「橘奈良麻呂の変」。
		八年		八月一日、孝謙天皇讓位。 淳仁天皇即位。
称徳天皇		天平神護元年((七六五)	称徳・道鏡政権	廿五日、仲麻呂、大保(右大臣)就任。 仲麻呂、大師(太政大臣)就任。
		神護景雲元年(七六七)		六月七日、光明皇太后崩御。
		宝亀元年(七七〇)		九月十一日、「藤原仲麻呂の乱」勃発。 九月二十日、道鏡、大臣・禪師に就任。
光仁天皇	光仁太上天皇	天応元年(七八一)		十月九日、淳仁天皇を廢す。 十月二日、道鏡、太政大臣・禪師に就任。
桓武天皇		延暦元年(七八二)		八月四日、称徳天皇崩御。 八月二十一日、道鏡左遷。
		四年		十月一日、光仁天皇即位。 四月十五日、桓武天皇即位。 十二月廿三日、光仁太上天皇崩御。
				十一月十一日、長岡京へ移幸。

【表①】の年表は、我が国の正史の一つ、『続日本紀』に基づいて、奈良時代における政治権力の推移を簡潔に表したものである。

この流れは、世間に広く紹介されており、いわば、不動の通説たる奈良時代の政治体制といえるであろう。

本稿では、題目に冠した通り、このうち「天平」という時代の政治体制として知られる「藤原四子体制(武智麻呂政権)」と「橘諸兄政権(体制)」を中心に言及していく。しかし奈良時代は、前掲した表から明らかなように、政府の主導者はめまぐるしく代わっている。よって、これらの中から、あえて天平期に絞って論を進めていくためには、それなりの理由を明記しておくてはならないだろう。

一、本稿の視点

そもそも、「天平」の時代といった場合、これを知る多くの方は、主に二つの情景を思い浮かべるのではなからうか。その一つは、皇親や貴族による権力抗争を主体とした、劇的な政争史である。例えば、「長屋王の変」や「藤原広嗣の乱」といった事件は、この歴史観を植え付ける有名な出来事といえるだろう。一方で、小野老が『万葉集』に、

青丹吉 寧楽乃京師者 咲花乃 薫如 今盛有

と歌っていることや(『万葉集』巻三、三二八)、大伴四綱が、

藤浪之 花者盛尔 成来 平城京乎 御念八君

と歌っているように(『万葉集』巻三、三三三〇)、奈良の都を舞台とした華やかな様子も見受けられる。これは、「天平文化」と呼称されていることからわかるように、当該期の印象として認識されている一面であろう。

このように、「天平」の廿年間は、泥沼化した政争が渦巻いている様相と、「天平文化」による絢爛なイメージとが混在する時期であり、奈良時代の特色を集約した時期といえる。特に、同時代の文化が「天平文化」と称されていることなどは、現代の我々にとって「天平」という期間が、奈良時代を代表する時期だということを示している。そうすると、安易な発想であるかもしれないが、「天平」の時代の政治体制を局地的に分析してみることは、奈良時代の政治体制を大局的に見据えるための材料となるのではなからうか。要するに、「長屋王政権」や「仲麻呂政権」の実態を解明しようとするならば、「藤原四子体制(武智麻呂政権)」や「橘諸兄政権(体制二)」の実態を把握してみることが肝要なのではないかと思うのである。

しかしながら、筆者の微々たる能力では、奈良朝全体の政治体制を論じきることは難しい。故に本稿では、奈良時代を代表する「天平」の時代の政治体制を局地的に専論してみること、低調したと言われる議論に一石を投じてみたい。換言すると、従来の見解を再検討し、議論の矛盾点を明らかにしたうえで、それと関わりを持つ諸問題に問題提起をしてみること、奈良朝政治史を鮮明にする

ための一助としたいのである。もともと、論を進めていくと、天平期における政治体制の実態に迫ることができはすなので、併せてその見通しも提示していく。

そこでまずは、その導入として、「天平」の時代が幕開けする以前の政治体制について触れておく。先に「不動の通説」と紹介した政治体制の変遷も、少なからず補足や訂正をしなくてはならない段階にきているからである。よってここでは、先行する学説に導かれながら、「天平」までの政治体制の変遷過程を概観しておきたいと思う。

二、大宝令体制

日本古代国家における政治機構の転換期は、何といっても大宝律令の完成時だろう。大宝元年(七〇一)三月甲午条に「始依^二新令^一。改^三制官名位号^一。」とあるように、新令による新たな政治組織が誕生した。このとき整えられた布陣は、次のようであった(『公卿補任』大宝元年条、参照)。

左大臣	正二位	多治比島
右大臣	正三位	阿部御主人
大納言	正三位	石上麻呂
	正三位	藤原不比等

従三位 紀麻呂

持統天皇四年（六九〇）に「大臣」となつて以来^{（持統天皇四年七月庚辰条）}、長くその座に就いていた多治比島を左大臣とし、阿部御主人を右大臣に加え、石上麻呂、藤原不比等、紀麻呂の三人が、新設された大納言に任命されている^{（大宝元年三月甲午条）}。つまり、この時の陣容は、新たに人材を登用したものではなくて、旧体制の有力者らを新官制に任じ直したものと判断される。したがって、多治比・阿部・石上・藤原・紀氏といったように、各氏の代表者が太政官入りを果たしている構図となる三。

また、この人事の中で、とりわけ注目されるのは、中納言の要職にあつた大伴安麻呂が、新体制の構成から漏れていることである。

彼は、大宝令の施行時点で「直大弐」を帯びており、「直広弐」の藤原不比等や、「直広弐」である紀麻呂よりも上位であつた^{（大宝元年三月甲午条）}。

また、「壬申の乱」での活躍も知られ^{（天武天皇元年六月己丑条）}、兄の大伴御行が薨去

^{（大宝元年正月己丑条）}した後は、大伴氏を代表する立場となつている。となると、

当然、新設の大納言に任命されるべき人物であつたと思われる。し

かも、大宝官員令の規定によると大納言の定員は四名なので^{（廢弘仁二年四月丙寅条）}、

先に紹介した三名の他に欠員が一つ生じている。にもかかわらず、

安麻呂が大納言から外されていることは、伝統氏族の一つ大

伴氏が、最初の廟堂構成から除外されたことを窺わせるだろう四。

このように、大宝令施行以後の新体制は、令制以前の氏族的な体制の面影を残しつつ、新官制に基づいて、有力者を律令貴族として位置づけ直したものであることが明らかにされている。つまり、氏族的性格を有する従来の体制から、律令貴族を中心に太政官を構成し、運営していくようになる画期と位置づけられるのである。野村忠夫氏^五は、こうした大宝令の施行による新体制を「大宝令体制」と称し、中川収氏^六は野村説を踏襲して、「大宝令体制」は不比等の新たな権力伸張の基盤」とみておられる。

三、藤原不比等政権

令の施行による新体制の発足後、大規模な人事異動が慣行された

^{（和銅元年三月乙未条）}。この人事は通常、平城遷都と関連づけて触れられ、

「律令支配の強化・貫徹をはかる」ものだ^八と理解される。すでに右

大臣となつていた石上麻呂が左大臣へと昇格し、藤原不比等が右大

臣に就任するなど、上層部にも変化がみられる。『公卿補任』和銅元

年（七〇八）条を参考に、この段階での太政官構成を示すと、次の

ようになる。

知太政官事 二品 舍人親王

左大臣 正二位 石上麻呂

右大臣	正二位	藤原不比等
大納言	正三位	大伴安麻呂
中納言	從三位	栗田真人

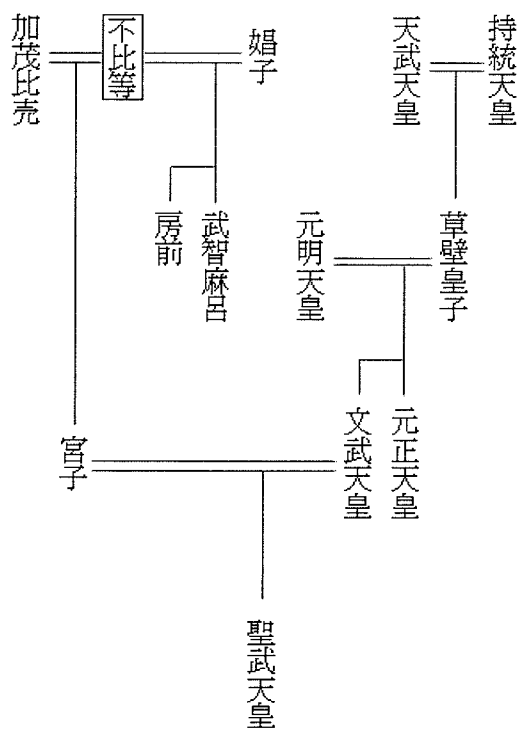
從三位	高向麻呂
正四位上	小野毛野

從四位上	阿部宿奈麻呂
正四位下	中臣意味麻呂
參議	正四位下 下毛野古麻呂

さて、一見すれば明らかのように、当該期における官人の序列は、不比等が第一位ではない。このうち、知太政官事については、本稿第六章で詳述するため、ひとまず触れないでおくが、もう一人、不比等の上官として石上麻呂が確認できる。この事実からすると、單純に当該期の政治体制を「藤原不比等政權」とみることが憚られるだろう。けれども、不比等が右大臣に就任した和銅元年三月辺りから、これを「藤原不比等政權」と捉えることには、大きく二つの理由がある。

その一つは、すでに多くの先学が指摘するように、天皇を含む皇親との密接な結びつきである^九。すなわち不比等は、娘の宮子を文武天皇の夫人として入内させており、和銅元年時点で七歳になる首皇子（後の聖武天皇）の存在が知られている（「系図」^{一〇}）。しかも、首皇

【系図一】不比等と宮中の関係



* 高島正人氏の『藤原不比等』（『吉川弘文館』）参照。

子の立太子と即位を実現させることが皇室の課題であり、皇子の祖父不比等もまた、同じ目的を持っていたことが明らかにされている^{一〇}。また、皇室と不比等との関係を見るならば、橘三千代の存在も挙げられるだろう。彼女については、義江明子氏^二による詳しい研究があるため、そちらを参照していただきたいが、和銅元年の時点で、元明天皇からその忠勤ぶりを称賛されたほどの人物である（^{天智八}）。つまり不比等は、和銅元年の段階で皇権を背景とする強力な支持基盤を形成しており、三千代を介して良好な関係を保っていたの

である^二。

もう一つは、左大臣石上麻呂についての評価である。和銅三年三月辛酉条に、

始遷^三都于平城^一。以^三左大臣正二位石上朝臣^四磨^一為^三留守^一。

とあつて、平城京への遷都の際、石上麻呂が藤原京の留守に補されていたことが明らかとなる。このことから、麻呂が政局から取り残されていたことがわかるとして、次のような見解が出されているのである。

野村忠夫氏^二は、「左大臣麻呂は六十九歳の老齡で、さほどの権勢をもっていたらしくもない」とし、笹山晴生氏^四は、麻呂がすでに六十九歳の老齡であつたことから、「その政治力からいっても、右大臣不比等の比ではなかつたであろう」と評されている。また、黛弘道氏^{二五}は、「その晩年の元明朝での政治活動に見るべきものはなく、(中略)不比等の後塵を拝している有様であつた」と述べられているし、高島正人氏^{二六}も「旧都藤原京の留守官に任じたのは左大臣石上朝臣麻呂であつた。このことは、朝廷における政治の実権が左大臣の石上麻呂ではなく、右大臣の不比等にあつたことを示唆しよう」とみておられる。

このように、和銅元年三月に右大臣となつた不比等は、皇室という強力な支持基盤を有しており、政界においても、老齡で領導力を

發揮できなかった石上麻呂を凌いでいたという見方から、政治運営は不比等が領導するところであつて、「藤原不比等政權」が成立していたと主張されてきたのである。

ところが、野村忠夫氏^{二七}は、不比等の権力の大きさを認めつつも、早くからこの頃の政治体制を「和銅元年体制」と提唱されている。すなわち、不比等は右大臣就任の時点で実質的な政權の担当者となつていたが、上席たる左大臣石上麻呂の存在には留意しなければならぬとし、「政府首班の座と政權の実質的担当者とは一致しない」ということから、「右大臣不比等の実質的な地歩を機構的に一歩進めたといえるが、これまでの議政官構成の伝統はなお保たれていて、不比等の絶対的な地位はまだ確定し切つてはいない」ため、「不比等の権勢が感性的に確立するための準備期間」とみておられるのである^{二八}。また、木本好信氏^{二九}は、慶雲元年に右大臣となつた石上麻呂を重要視し、不比等が右大臣となる和銅元年までを「石上麻呂主導体制」とみておられる。本稿でも触れることになるが、石上麻呂が朝廷や人民から信頼されていた^(養老元年三月癸卯条)ことからすると、不比等はかりではなく、かかる人物にも注目した木本氏の想定は、視野に入れないでならないだろう。

以上みてきたように、「藤原不比等政權」に入る前、「和銅元年体制」や「石上麻呂主導体制」なる政治体制が提示されている。これ

らの見方が広く一般に浸透するためには、なお検討が必要となるであらう。しかし、紹介した学説を踏まえるならば、一口に「藤原不比等政権」と区切るのではなくて、「大宝令体制」から不比等主導による体制が成立するまでに、「和銅元年体制」、もしくは「石上麻呂主導体制」の時期が存することになるだろう。

四、長屋王政権（体制）

養老四年（七二〇）八月、藤原不比等が薨去した（養老四年八月癸未条）。不比等を失った政界の動揺は大きかったらしく、翌日には、しばらく中断していた知太政官事に舍人親王が就任した（養老四年八月甲申条）。そして、同年十月には弁官以下の人事異動がなされ（養老四年十月戊子条）、翌年正月、長屋王が右大臣に就任することによって（養老五年正月壬子条）、長屋王を政府首班とする不比等薨後の新たな体制が始まることになった。この段階での太政官構成を『公卿補任』養老五年（七二二）条を参考に示しておく、次のようになる。

知太政官事	一品	舍人親王
右大臣	從二位	長屋王
大納言	從三位	多治比池守
中納言	從三位	巨勢祖父

大伴旅人

藤原武智麻呂

参議

從三位 藤原房前

正四位上 多治比三宅麻呂

長屋王を政府首班とする体制は、いわゆる「長屋王の変」にて王が自尽するときまで続く。もちろん、それまでに人員の変化はみられるが、長屋王はその後も順調に左大臣へと昇進し（神龜元年二月甲午条）、令制官第一位の座を占め続けることになる。しかも政界には、天武天皇の皇子で、「宗室之年長」（養老三年十月辛丑条）といわれた舍人親王が知太政官事として存在し、新田部親王が知五衛及授刀舍人事として軍事を掌る立場にあった。これらの構成をもって皇親勢力の復活と位置づけることがあり二〇、皇親と貴族勢力（特に藤原氏）とによる対立の関係が指摘されている二一。

しかしながら、こうした見方に対しては、早くから直木孝次郎氏三三が、「藤原氏などの律令的官僚貴族層に対して、皇族を結集して白鳳的皇親政治を再現し得たとも考えられない」と批判的な意見を высказывая、吉川真司氏三三の研究によつて、それは決定的なものとなった。すなわち吉川氏は、唐令との比較検討によつて、「合議が必ずしも君主制と対立するものではない」ことを明らかにされ、律令国家では「君主側が実質的・規範的に貫徹」しており、「（天皇対

太政官」という対立の図式はさほど有効ではない」ことを精査されたのである。この卓見を踏まえてみると、藤原氏との対立関係を前提に打ち出された「長屋王政権（体制）」の実態は、再検討されなくてはならないだろう。吉川氏^{三四}は近年、このような立場のうえから、「長屋王が政府首班として、太政官の総意をまとめ上げていたと簡単に言えない」とし、「その権力構造や意志決定プロセスについては、元正太上天皇の動向を含めて、さらに実態に即した検討が必要であろう」と述べられている。また、中川収氏^{三五}は、「藤原不比等政権」との比較検討から、長屋王は不比等の権力掌握過程の中で、その身分的尊厳から「活用価値の高い存在」であつたために、不比等の政権基盤の増長とともに政界での地歩を得たので対抗するような意志はなく、むしろ、「長屋王首班体制は形態ばかりか廟堂構成員の資質においても不比等政権と大差はなかった」ことを明らかにされ、これを「形式的皇親政治」とみておられる。

このように、皇親と貴族とが対立の関係にあつたということは否定されつつあり、長屋王の政界での動きは、不比等との関わりに注目して論じられる傾向にある^{二六}。

ほかにも、長屋王が首班たる時代については、長屋王家木簡の研究にも注目が集まっている。例えば、「長屋親王」と書かれた木簡^{（平城宮発掘調査出土木簡）}について東野治之氏^{二七}は、こうした特殊な呼称の用例は、

長屋王の近親者に多くみられるため、「私的、身内的な意識と結びついた表記」ではあるものの、その背景には「諸王を臣下とみるよりも、親王に近い地位とする意識」があつたのだと考えられている。また、森公章氏^{二八}は、いわゆる「長屋王の変」について、文献史料から考えられることだけではなく、木簡から明らかとなる「長屋王家の膨大な財力も考慮」して、事件の背景について考えていかなければならないと指摘されている。「長屋王政権（体制）」の実態は、木簡から明らかとなった長屋王家の実態を踏まえつつ、解明していかなくてはならないだろう。

こうした「長屋王政権（体制）」は、天平元年（七二九）二月の「長屋王の変」によつて終焉を迎える。ここでは『続日本紀』によりながら、事件のあらましを説明するに留めておく。

天平元年二月十日、漆部君足と中臣宮處東人による、「称下左大臣正二位長屋王私学^{（月）}三左道^{（未）}」。欲上^{（月）}傾^{（未）}国家^{（年）}。」との密告があつた^{（天平元年二月）}。この報を受けた朝廷は、直ちに三関を固く守り、藤原宇合・佐味虫麻呂・津島家道・紀佐比物らに六衛の兵を率いさせ、長屋王の宅を囲ましめた^{（天平元年二月）}。翌十一日には、舍人親王・新田部親王・多治比県守・藤原武智麻呂・小野牛養・巨勢宿奈麻呂らを長屋王の宅に派遣し、罪状を窮問させている^{（天平元年二月）}。その結果、十二日には長屋王をはじめ、その室吉備内親王、王の子である膳夫王・桑田王・

[illegible]

*寺崎保広氏の『長屋王』(吉川弘文館、二〇〇一)参照。

むすび

本章の最後に、これまで確認してきたことを整理しておく。文末の【表②】は、それをまとめたものである。

一、大宝令の施行後、それ以前の旧体制の面影は残っていたが、天皇を中心に太政官の合議によつて政治を運営していく新体制、「大宝令体制」がはじまった。

二、「大宝令体制」の中で、新興貴族である藤原不比等が、皇室との婚姻関係や橘三千代の助力によつて力を得ることになる。和銅元年三月、不比等は右大臣に就任するが、上席には左大臣石上麻呂がおり、これを「藤原不比等政権」とするには差支えがある。そういった意味で、「和銅元年体制」や「石上麻呂主導体制」にも注目しなければならぬだろう。

三、不比等の薨去後、長屋王が右大臣となり、政府首班の座を占め続ける。しかし、これは皇親政治の復活を示すものではない。むしろ、不比等との関係にも注目すべきである。そして、長屋王家木簡からの情報も踏まえ、より論議を重ねて実態を説明していく必要がある。

さて、「長屋王の変」から四ヶ月後の六月、左京職から背中に「天王貴平知百年」と記された亀が献上された^(天平元年六月己卯)。聖武天皇は、この祥瑞出現を契機とし、年号を神亀から「天平」へと改元された^(天平元年)。

八月。ここに、本稿が主題とする「天平」の時代が幕を開けるのである。

【表②】

天皇	太上天皇	年号	政権担当者	備考
文武天皇	持統太上天皇	大宝元年(七〇一)	大宝令体制	三月廿一日、不比等、大納言就任。 八月三日、大宝律令完成。 十二月廿二日、持統太上天皇崩御。
		二年		
		四年	(石上麻呂主導体制)	六月十五日、文武天皇崩御。 七月十七日、元明天皇即位。
元明天皇		和銅元年(七〇八)	和銅元年体制 (藤原不比等政権)	三月十三日、不比等、右大臣就任。 三年三月十日、平城遷都。 九月二日、元明天皇讓位。 元正天皇即位。
元正天皇	元明太上天皇	靈龜元年(七一五)		三月三日、石上麻呂薨去。 三月十日、長屋王、大納言就任。 八月三日、藤原不比等薨去。
		養老元年(七二七)	藤原不比等政権	正月五日、長屋王、右大臣就任。 二月四日、元正天皇讓位。 聖武天皇即位。 長屋王、左大臣就任。
		二年		
		四年		
		五年		
聖武天皇	元正太上天皇	神龜元年(七二四)	長屋王政権 (体制)	二月十二日、「長屋王の変」。 三月四日、武智麻呂、大納言就任。 正月十七日、武智麻呂、右大臣就任。 疫病の流行により、「藤原四子」薨去。 九月廿八日、諸兄、大納言就任。 正月十三日、諸兄、右大臣就任。 九月三日、「藤原広嗣の乱」勃発。 五月三日、諸兄、左大臣就任。 十月十五日、大仏造立の詔。 四月二十一日、元正太上天皇崩御。
		天平元年(七二九)	藤原四子体制	七月二日、孝謙天皇即位。 仲麻呂、大納言就任。 八月二日、仲麻呂、紫微令就任。 九月七日、紫微中台を設置。 五月二日、聖武太上天皇崩御。 正月二日、橘諸兄薨去。 七月二日、「橘奈良麻呂の変」。 八月一日、孝謙天皇讓位。 淳仁天皇即位。 廿五日、仲麻呂、大保(右大臣)就任。 仲麻呂、大納言(太政大臣)就任。 六月七日、光明皇太后崩御。 九月十一日、「藤原仲麻呂の乱」勃発。 九月二十日、道鏡、大臣・神祇に就任。 十月九日、淳仁天皇を廃す。 十月二日、道鏡、太政大臣・神祇に就任。
		二年		
		四年		
		八年		
孝謙天皇	聖武太上天皇	天平勝宝元年(七四九)	藤原仲麻呂政権	八月四日、孝謙天皇崩御。 八月二十一日、道鏡左遷。 十月一日、光仁天皇即位。 四月十五日、桓武天皇即位。 十二月廿三日、光仁太上天皇崩御。
		八年		
淳仁天皇	孝謙太上天皇	天平宝字元年(七五七)		
		二年		
		四年		
		八年		
桓武天皇		天平神護元年((七六五) 神護景雲元年(七六七) 宝龜元年(七七〇)	神德・道鏡政権	十一月十一日、長岡京へ移幸。
		四年		
光仁天皇	光仁太上天皇	天応元年(七八一)		
桓武天皇		延暦元年(七八二)		
		四年		

【註】

野村忠夫『律令政治の諸様相』(塙書房、一九六三)。岸俊男『藤

- 原仲麻呂』(吉川弘文館、一九六九)。早川庄八『日本の歴史 第四卷 律令国家』(小学館、一九七四)。笹山晴生『日本古代史講義』(東京大学出版、一九七七)。坂本太郎『天平の政治と文化』(『古代の日本 坂本太郎著作集第一巻』所収、吉川弘文館、一九八六)。
- 中川収『奈良朝政治と皇位継承』(高科書店、一九九一)。榮原永遠男『天平の時代』(集英社、一九九一)。倉本一宏『奈良朝の政変劇』(吉川弘文館、一九九八)。佐藤信編『律令国家と天平文化』(吉川弘文館、二〇〇二)。仁藤敦史『女帝の世紀—皇位継承と政争—』(角川学芸出版、二〇〇八)。
- 二 「二〇一二年の歴史学会—回顧と展望—」(『史学雑誌』一二二—一五、二〇一三)。
- 三 林陸朗『光明皇后』(吉川弘文館、一九六二)。野村忠夫『大宝令体制』(『律令政治の諸様相』所収、塙書房、一九六三)。早川氏前掲註一。笹山氏前掲註一。高島正人『藤原不比等』(吉川弘文館、一九九九)。榮原氏前掲註一。
- 四 野村氏前掲註三論文。高島氏前掲註三。
- 五 野村氏前掲註三論文。
- 六 中川収『藤原不比等の政権形成過程』(『奈良朝政治史の研究』所収、高科書店、一九九一)。
- 七 北山茂夫『万葉における慶雲期の諸様相』(『万葉の世紀』所収、東京大学出版会、一九五三)。
- 八 野村忠夫『和銅元年体制』(『律令政治の諸様相』所収、塙書房、一九六三)。
- 九 早川氏前掲註一。笹山氏前掲註一。中川氏前掲註六論文。榮原氏前掲註一。倉本氏前掲註一。中村修也『女帝の世紀』(『続日本紀の世界—奈良時代への招待』所収、思文閣出版、一九九九)。高島正人『藤原不比等の藤氏振興策』(『奈良時代の藤原氏と朝政』所収、吉川弘文館、一九九九)。寺崎保広『長屋王』(吉川弘文館、二〇〇一)。吉川真司『聖武天皇と仏都平城京』(講談社、二〇一)。佐藤氏前掲註一。
- 一〇 林氏前掲註三。坂本太郎『律令政治の展開』(『古代の日本 坂本太郎著作集第一巻』所収、吉川弘文館、一九八六)。中川氏前掲註六論文。倉本氏前掲註一。中村氏前掲註九論文。瀧浪貞子『帝王聖武』(講談社、二〇〇〇)。吉川氏前掲註九。
- 一一 義江明子『県犬養橘三千代』(吉川弘文館、二〇〇九)。
- 一二 野村氏前掲註八論文。岸氏前掲註一。早川氏前掲註一。高島氏前掲註三。吉川氏前掲註九。
- 一三 野村氏前掲註八論文。

一四 笹山晴生『奈良の都』（吉川弘文館、一九九三）。

一五 黛弘道『日本書紀』と藤原氏』（『律令国家成立史の研究』所収、吉川弘文館、一九八二）。

一六 高島氏前掲註三。

一七 野村氏前掲註八論文。

一八 中川収氏^{（前掲註六論文）}は、野村氏の意見を尊重し、「和銅元年体制」を継承されている。

一九 木本好信「石上麻呂と藤原不比等」（『律令貴族と政争』所収、塙書房、二〇〇一）。

二〇 川崎庸之「万葉集の時代的背景」（『記紀万葉の世界』所収、御茶の水書房、一九五一）。北山茂夫「七四〇年の藤原廣嗣の叛亂」（『日本古代政治史の研究』所収、岩波書店、一九五九）。林氏前掲註三。岸氏前掲註一。早川氏前掲註一。坂本氏前掲註一論文。

二一 野村忠夫「長屋王首班体制から藤原氏子体制へ」（『律令政治の諸様相』所収、塙書房、一九六三）。木本好信「藤原不比等の遺業」（『奈良朝政治と皇位継承』所収、高階書店、一九九五）。中村氏前掲註九論文。瀧浪氏前掲註一〇。

二二 直木孝次郎「長屋王の変について」（『奈良時代史の諸問題』所収、塙書房、一九六八）。

二三 吉川真司「律令太政官制と合議制——早川庄八著『日本古代官僚制の研究』をめぐって——」（『日本史研究』三〇九、一九八八）。

二四 吉川氏前掲註九。

二五 中川収「長屋王首班体制とその政治」（『奈良朝政治史の研究』所収、高科書店、一九九二）。

二六 倉本氏前掲註一。寺崎氏前掲註九。高島氏前掲註三。仁藤氏前掲註一。

二七 東野治之「長屋親王」考」（『長屋王家木簡の研究』所収、塙書房、一九九六）。

二八 森公章「長屋王家の興亡」（『長屋王家木簡の基礎的研究』所収、吉川弘文館、二〇〇〇）。

二九 林氏前掲註三。野村氏前掲註一。岸俊男「光明立后の史的意義」（『日本古代政治史研究』所収、塙書房、一九六六）。直木氏前掲註二二論文。犬養孝「長屋王の変と万葉集」（『国文学』十一—十三、一九六六）。田中多恵子「長屋王の変についての一考察」（『日本歴史』二八三、一九七七）。北村進「長屋王の変と小野老」（『上代文学』五〇、一九八三）。瀧浪氏前掲註一〇。中西康裕「長屋王事件」（『続日本紀と奈良朝の政変』所収、吉川弘文館、二〇〇二）。佐藤絵梨「長屋王の変と政治過程」（『新潟史学』五六、二〇〇六）。

三〇 神龜元年二月、聖武天皇の母、藤原宮子が尊んで「大夫人」と称されるようになった（神龜元年二月丙申癸）。ところが、三月になって長屋王らが、「公式令」によると「皇太夫人」と称すべきであるため、令の規定に従うと「皇」の字を失し、令文に従って「皇太夫人」とすると「違勅」になってしまうため、どうするべきか意見を求めた（神龜元年三月庚申癸）。これを受けて聖武天皇は、「先勅」を撤回し、文では「皇太夫人」と記し、言葉では「大御祖」とする勅を発している（神龜元年三月庚申癸）。

三一 中川収「長屋王とその王子たち」『政治経済史学』三〇〇、一九九一。大山誠一「長屋王と吉備内親王」『長屋王家木簡と奈良朝政治史』所収、吉川弘文館、一九九三。木本好信「長屋王政権の実態―弱体説への反論―」『奈良朝政治と皇位継承』所収、高科書店、一九九五。倉本氏前掲註一。寺崎氏前掲註九。仁藤氏前掲註一。義江氏前掲註一一。

第一部

天平期政治体制の研究

第一章 「藤原四体制（武智麻呂政権）」の再検討

はしがき

天平元年（七二九）二月、時の左大臣である長屋王が、「私かに左道を学び、国家を傾けんと欲す」と密告をされ、罪状の糾問を受けて自尽した^{（天平元年二月辛未、癸酉集）}。いわゆる「長屋王の変」である。この事件の後、藤原不比等の嫡子である武智麻呂が大納言に就任した^{（天平元年三月甲午集）}。そして、天平三年（七三一）八月丁亥条に、

詔。依^二諸司^一擢^二式部卿從三位藤原朝臣宇合。民部卿從三位多治比真人^一。兵部卿從三位藤原朝臣麻呂。大藏卿正四位上鈴鹿王。左大弁正四位下葛城王。右大弁正四位下大伴宿祢道足等六人^一。並為^二參議^一。

と記されていることから、武智麻呂の弟である宇合や麻呂が参議に就任し、太政官の構成員となることが知られるのである。このとき、すでに「参^二議朝政^一」していた藤原房前を含め^{（養老元年十月丁亥集）}、不比等の子である「藤原四子」が、大納言武智麻呂を中心に、揃って太政官の構成員となる政治体制となった。今日では、この政治体制を「藤原四子体制」、もしくは「武智麻呂政権」と称している^二。

通説では、こうした政治体制を背景として、例えば、「長屋王の変」

直後の天平元年四月癸亥条に、

（前略）太政官処分。舍人親王参^二入朝^一。時。諸司莫^二爲^レ之下^一座。 （後略）

とある舍人親王の礼式改変について、親王の実質的地位の低下を指摘し、藤原氏勢力が増強したと解されている^三。この史料に関しては、第五章にて検討するため、詳しくはそちらを参照していただきたい。

また、先に掲げた天平三年八月にみられる参議任命についても、「諸司擢」という前例のない選任の方法であることと、有力氏族の代表者一名が太政官に列すという伝統を破つて、宇合や麻呂が任命されているという結果から、藤原氏勢力を拡大するための武智麻呂による策略であつたと想定されている^三。

こうした政策を藤原氏勢力の拡大と位置づけるためには、少なくとも、武智麻呂の政治権力が強力でなくてはならないだろう。しかし、まだ大納言であつた武智麻呂に、はたしてそのような力があつたのかと疑問に思う^四。前述のような見方には、「藤原四子体制（武智麻呂政権）」が成立する前後の時期に、「藤原四子」が結束することによって生まれる政治勢力の存在が前提にあるのではなからうか。本章では、「藤原四子体制（武智麻呂政権）」のもとで、「藤原四子」が結束して生まれる政治勢力が存在していたのかどうかについて検

討する。そこで注目してみるのが、武智麻呂と房前の子女間でなされている婚姻関係である。詳しくは後述するが、房前の娘が武智麻呂の子に嫁いでいる事実がある。この婚姻関係の意義を見出すことで、「藤原四子」結束の有無を探る材料としたい。また、不比等在世中の武智麻呂と、武智麻呂在世中の豊成の立場を比較してみる。これは、「藤原四子」相互の関係を明らかにするだけで、「藤原四子」結束により生じる政治勢力を認めることには疑問が残るからである。以上の二点を考察することにより、「藤原四子体制（武智麻呂政権）」として論じられてきた天平前期の政治体制について、再検討してみたい。

一、四子の軌跡

まずは基本的な作業である、「藤原四子」の叙位や任官に関する略歴を、『続日本紀』によりながら確認しておく。

不比等の長子である武智麻呂は、天武天皇九年（六八二）、蘇我連子の女娼子との間に生まれた^五。国史における武智麻呂の初見は、慶雲二年（七〇五）十二月癸酉条であるが、『武智麻呂伝』により慶雲二年以前の経歴も確認できるため、そちらも参考に確認していく。

大宝元年（七〇一）、武智麻呂は良家の子であることを理由に内舎

人となり、「三公之子」であるから別勅によつて正六位上に叙され、律令官人として歩みはじめる（『武智麻呂伝』）。そして、大宝二年（七〇二）正月には中判事となる（『武智麻呂伝』）。しかし、幼いころから病弱であつたらしく翌三年四月、一時免官している^六。それでも、大宝四年（七〇四）三月には大学助となり、政界に復帰している（『武智麻呂伝』）。以後、武智麻呂は順調な出世をみせ、養老二年（七一八）九月には式部卿の任に就き（『養老二年九月戊戌条』）、父不比等が薨去した翌年、養老五年（七二二）正月には従三位中納言となつていた（『養老五年正月壬子条』）。その後、天平元年二月に起こつた「長屋王の変」を経て、同年三月には正三位大納言の地位を占め（『天平元年三月甲午条』）、同三年八月には大宰帥を兼ね（『天平三年八月癸酉条』）、同六年（七三四）正月には従二位右大臣となり政界の首班格たる存在になる（『天平六年正月己卯条』）。そして天平九年（七三七）七月、病に臥せる武智麻呂は正一位左大臣となり翌日五十八歳で薨じた（『天平九年七月丁酉条』）。

房前は不比等の次子であり、天武天皇十年（六八二）に生まれ、武智麻呂と同じく蘇我連子の女娼子を母としている^七。国史における初見は、大宝三年（七〇三）正月甲午条で、正六位下で東海道巡察使となつたことが知られる。また和銅二年（七〇九）九月には東海東山道巡察使となり（『和銅二年九月己卯条』）、若いころは地方で活躍していたことが窺える。しかし、養老元年（七一七）十月、武智麻呂よりも先んじて朝政に参議し（『養老元年十月丁亥条』）、位階も順調に進め、養老五年十月には内

臣となり、帝業を輔翼すべきとの詔を賜っている（養老五年十一月戊戌条）。以後、授

刀長官や中衛大將・近江若狭按察使・中務卿や民部卿を歴任し（公卿補任）、

天平九年四月、正三位参議兼民部卿として薨去している（天平九年四月辛酉条）。

宇合は、持統天皇八年（六九四）、不比等の三子として誕生した八。

その母については、『尊卑分脉』に「母同房前」と記されているのであるが、妹である宮子の母賀茂比賣と考えるのが妥当であるとの指摘がある九。

国史における宇合の初見は、霊龜二年（七一六）八月癸亥条で、

ここから遣唐副使として唐に派遣されたことが明らかとなる。そして、帰朝直後の養老三年（七一九）正月、位階は正五位上に達している（養老三年正月壬寅条）。また、同年七月庚子条に、「常陸守正五位上」とある

ことからすると、帰唐後ほどなくして常陸守に就任し、任国へ派遣

されていたことが確認される（『懐風藻』）。その後、安房・上総・下総の按

察使となり（養老二年七月庚子条）、持節大將軍（神龜元年四月丙申条）や知造難波宮事（神龜二年十月庚午条）、式

部卿などを歴任し（公卿補任）、天平三年八月、参議として太政官入りを果

たす（天平三年八月丁亥条）。その後、天平三年十一月の畿内副惣官（天平三年十一月丁卯条）、同四

年正月の西海道節度使を経て（天平四年正月丁亥条）、同六年には位階も正三位とな

り（天平六年正月己卯条）、政界の中枢を担う存在となる。宇合は、天平九年八月に

四十四歳で薨去するが、この時の官位は正三位参議式部卿兼大宰帥

であつた（天平九年八月丙午条）。

不比等の四子である麻呂は、持統天皇九年（六九五）に誕生した二〇。

その母について、初めは天武天皇の夫人であり、後に不比等に嫁い

だ五百重娘であると伝えられている二。国史における麻呂の初見は、

養老元年十一月癸丑条で、これによると、元正天皇の美濃行幸に際

し、当時美濃介であつた麻呂は褒賞として従五位下に昇叙している。

以後、位階は順調に進み、官職も左右京職を務め（天平五年六月辛丑条）、天平三年

には兵部卿兼参議となり、位階も従三位に進んでいた（公卿補任）。そして、

天平四年に山陰道鎮撫使を務めるが（天平三年十一月丁卯条）、天平九年七月に四十三

歳で薨去したときは、従三位参議兼兵部卿左右京大夫と記されてい

る（天平九年七月乙酉条）。

以上、「藤原四子」の簡単な経歴を確認したが、より詳細なものは

表にまとめ記しておく（表二）。なお便宜上、後に紹介する豊成の

叙位・任官も併せて記載しておく。

さて、「藤原四子」の足跡をたどることで注目されるのが、天平三

年八月になると大納言武智麻呂を筆頭に、「藤原四子」が太政官の構

成員となつてのことである（表二）。これについては、「はしがき」

でも紹介したように、藤原氏（主に武智麻呂）による政略だったと

理解されることが多い。しかしながら、例えば中川氏三が、

諸司推挙という前例のない方式を採つたのは、二人の弟がすで

にそれぞれ卿の任にあることから必ず推挙されると考えたか

【表二】藤原四子の叙位・任官

年月日	藤原武智麻呂	藤原房勢	藤原宇合	藤原麻呂	藤原不比等	藤原朝成	備考
大室元年	正六位上・内舍人〔武智麻呂伝〕						
三年三月甲午条	中判事〔武智麻呂伝〕				大納言		
三年正月		東海道巡察使（この時点で正六位下）					
藤原元年							
三年三月	大宰卿〔武智麻呂伝〕	從五位下				顯生〔公卿補任〕	
二年十二月癸酉条	從五位下						
三年七月	大宰卿〔武智麻呂伝〕	遠山陵使					
四年十月丁卯条	國體詔來侍從〔武智麻呂伝〕						
和銅元年三月							
丙午条		東海東山道巡察師			右大臣		
二年九月己卯条							
三年四月癸卯条	從五位上						長屋王、式部卿
四年四月壬午条	近江守〔武智麻呂伝〕	從五位上					
五年六月	從四位下						
六年正月丁亥条	從四位上						
重祿元年正月癸巳条	從四位上						
二年八月癸亥条		從四位下	遠藤朝臣（この時点で正六位下）				
己巳条		從五位下					
十月	式部大輔〔武智麻呂伝〕						
養老元年七月丁亥条							
十一月癸丑条		參議朝政					長屋王、大納言
二年三月乙巳条							
三年正月壬寅条	式部卿〔公卿補任〕・〔武智麻呂伝〕	正五位上（この時点で正五位下）					
七月	正四位下	安房・上総・下総の按察使（この時点で常陸守）					
康子条	東宮傅〔武智麻呂伝〕						
四年八月癸未条							
五年正月壬午条	從三位・中納言						長屋王、右大臣 多治比池守、大納言
六月辛丑条		從三位					
九月	遠宮卿〔武智麻呂伝〕	内臣					
十月戊戌条							
七年							
神龜元年二月甲午条	正三位・兼知遠宮司事〔公卿補任〕	正三位					長屋王、左大臣
壬午条							
四年丙申条							
二年正月丁未条							
十月庚午条							
三年	兼知遠宮司事〔公卿補任〕	授刀長官・兼近江若狹按察使〔公卿補任〕					
四年	兼知遠宮司事〔公卿補任〕	兼近江若狹按察使〔公卿補任〕					長屋王の寮
五年七月	播磨守・兼授察使〔武智麻呂伝〕						舍人親王、礼式改寮
天平元年							大納言・多治比池守・兼 大伴旅人、大納言
三年	大納言						
三月甲午条		中務卿					
四月癸亥条		兼民部卿或中務卿〔公卿補任〕					
九月乙卯条							
二年							
九月己未条		中務大將〔公卿補任〕					
十月二日		中務大將・兼民部卿或中務卿〔公卿補任〕					
三年							
三月							
七月辛未条							
八月丁亥条							
九月癸酉条	兼大寺卿		參議				大納言・大伴旅人・兼
十一月丁卯条							
四年	兼大宰府卿〔公卿補任〕	中務大將・兼民部卿或中務卿〔公卿補任〕	畿内副按察 兼式部卿〔公卿補任〕	山陰道鎮撫使 兼兵部卿・左（右）京大夫〔公卿補任〕			
正月甲子条							
八月丁亥条		東海東山道度使	西海道節度使	兼兵部卿・左（右）京大夫〔公卿補任〕			
五年	兼大宰府卿〔公卿補任〕	中務大將・兼民部卿或中務卿〔公卿補任〕	兼式部卿〔公卿補任〕	兼兵部卿・左（右）京大夫〔公卿補任〕			
六年	兼大宰府卿〔公卿補任〕	中務大將・兼民部卿或中務卿〔公卿補任〕	兼式部卿〔公卿補任〕	兼兵部卿・左（右）京大夫〔公卿補任〕			
正月己卯条	從二位・右大臣		正三位	兼兵部卿・左（右）京大夫〔公卿補任〕			
七年		兼民部卿或中務卿〔公卿補任〕	兼式部卿〔公卿補任〕	兼兵部卿・左（右）京大夫〔公卿補任〕			
十一月乙丑条							
八年		兼民部卿或中務卿〔公卿補任〕	兼式部卿〔公卿補任〕	兼兵部卿・左（右）京大夫〔公卿補任〕			舍人親王・兼
九年							
正月丙申条							
二月戊午条							
四月辛酉条							
七月乙酉条							
丁酉条	正一位・左大臣／即日薨						
八月丙午条							

* 出典がないものは『続日本紀』による。

らであろう。

と言われるようなことには疑問が残る。なぜなら、中川説に基づいた場合、ここで選出されなかった宮内卿・刑部卿・治部卿も、当然、候補になるからである。しかも、宮内卿と治部卿には在任者が認められる（詳しくは、終章を参照）。このことからすると、宇合と麻呂が、「卿の任にあることから必ず推挙される」保証はないのではなからうか。この問題については、終章にて詳しく触れるため、ここで深く言及することとは控えておく。

ところで、天平三年の太政官構成を『公卿補任』から確認しておくと、次のようになる。

知太政官事	一品	舍人親王
大納言	正三位	藤原朝臣武智麿
中納言	従三位	阿倍朝臣広庭
参議	正三位	藤原朝臣房前
	従三位	藤原朝臣宇合
	従三位	多治比眞人県守
	従三位	藤原朝臣麿
	正四位上	鈴鹿王
	正四位下	葛城王
	正四位下	大伴宿祢道足

一見すれば明らかなように、太政官を構成する全十名のうち、四名が藤原氏である。中川氏^三の分析によると、「他の議政官の全てが、明らかに反藤原氏の立場をとっていない」ため、「四人が結束して事にあたった場合の政治勢力はきわめて強力なものになる」らしい。しかし、このような見方は、あくまで「四人が結束」した場合の政治勢力であり、そもそも「四人が結束」していなかったらばどうであろうか。次にこの問題について言及してみたい。

二、四子結束の有無について

ここで注目するのは、『尊卑分脉』から知られる武智麻呂の子息と房前の娘との婚姻関係である。こうした武智麻呂と房前との血縁関係には、どのような意義を見出せるのかを起点とし、「藤原四子」結束の有無について考察していく。そこでまずは、この婚姻関係がいづころ成立したのかを推定しておきたい（次の「藤原四子」に関する系図は、『続日本紀』・『尊卑分脉』・『公卿補任』・『武智麻呂伝』を総括して作成した）。

豊成の子である縄麻呂は、宝龜十年（七七九）十二月己酉条に記される薨伝によって、「年五十一」で薨去していることがわかる。したがって、逆算すると誕生は天平元年ということになる。一方、仲麻呂の子である久須麻呂は、没時を含め年齢を特定する史料が残さ

五百娘
女
不比等
娼子

光明子（聖武天皇皇后）
宮子（文武天皇夫人）
麻呂
宇合
房前
武智麻呂

広嗣
御楯
真楯
永手
仲麻呂
女
豐成
女

久須麻呂
縄麻呂

つて初叙を迎えたかと判断することができらう。とすると、仲麻呂が天平勝宝二年（七五〇）に従二位となつてゐることは間違いないため、そこから天平宝字二年までの間に久須麻呂は正六位下に叙されてゐたことになる。仮に、父である仲麻呂が従二位となつた時点（天平勝宝二年）で蔭位による叙位がおこなわれ二十一歳であつたとするならば、久須麻呂の誕生は天平三年ということになる。また、蘭田香融氏^{二五}は、『万葉集』に採用された久須麻呂の歌が、「天平十七年（七四五）を降らないもの」との見立てから、「当時十八、九歳」と想定されている。これを換言すると、久須麻呂の誕生は神龜四年（七二七）から同五年であるとの結論となる。そして、蘭田氏の見解を踏まえてみると、縄麻呂と久須麻呂の誕生は、天平元年前後、具体的には神龜四年から天平三年までの間であつたことが明らかとなる。

は同母であることも併考してみると、血縁的には極めて親密な関係で、そこに強固な人的関係があったとしても、何ら不自然なことではないだろう。

ところが、両者については、政治的立場の分析によつて、従来から微妙な対立関係が指摘されている^{一六}。また、不比等の後継者は「名実ともに嫡長子武智麻呂」^{一七}であり、天平元年の段階では藤原氏の中心的存在である。さらに官位は正三位大納言と、政界における地位や立場は安定していたことが看取される。こうした諸点を要してみると、武智麻呂には、政治的な地位や立場を獲得するために、あえて他の兄弟と協力し合う必要はなかった可能性もある。となると、血縁関係から浮かび上がる武智麻呂と房前との結びつきには、「藤原四子」の結束とは別の事情も考えられるのではなからうか。これについては、吉川敏子氏^{一八}の論を紹介し、そのうえで若干の私見を交えて提示しておく。

吉川氏は、慶雲四年四月壬午条にみられる不比等への二〇〇〇戸の功封の子孫への伝世過程の分析を起点とし、八世紀における律令貴族の継嗣や功封の役割について検討されている。その中で、天平十三年正月丁酉条などから確認できる「故太政大臣藤原朝臣家」とはいかなるものなのかについて言及された。そのうえで、天平十三年正月丁酉条に記される「故太政大臣藤原朝臣家」が収公される三

〇〇〇戸に注目し、これが「藤原四子」の位封・職封の数量と合致することから、「藤原四子」の位封・職封と判断された。そうすると、「故太政大臣藤原朝臣家」が「不比等やその後継者一人の家政機関」とは考えられないことから、「四子を含めた不比等の直系卑属より成る集団」であると位置づけられている。そして、不比等を起点としている限り、藤原氏は宮子・光明子・聖武天皇・孝謙天皇を内包し「外戚としての立場を有効利用」できることから、「常に不比等の子であり孫であることを旨として、結束している必要があった」と指摘されている。こうした理解のもと、さらに中臣鎌足と房前の対比を行つて、律令の継嗣法では嫡子継承の規制が強く「傍系継承の入り込む余地」がないのであるが、かといつて庶子を排除していたわけではなく、傍系の者に対し「政治的にも経済的にも宗家から独立していける道を開いていた」ことを明らかにし、「家の継嗣という点においては嫡子に強固な権限を与えるが、(中略)律令官僚制は傍系の宗家からの独立を認めていた」と結論づけておられる。

この吉川氏の論を踏襲すると、件の武智麻呂・房前間での婚姻関係は、同じ「故太政大臣藤原朝臣家」に含まれる宗家武智麻呂の家と、傍系から自身を祖とする家の確立を目指した、房前家との婚姻であつたと想定されるのではなからうか。だとすると、この婚姻により房前の家は、強固に「故太政大臣藤原朝臣家」と結びつくこと

になる。つまり、傍系ながら宗家からの独立を目指しつつも、あくまで「故太政大臣藤原朝臣家」として得られる有利な立場を維持し続けることを狙いとしていたと考えられるのである。したがって、この婚姻により最も利益を得たのが傍系の房前と判断されるため、この婚姻は、房前が希望しておこなわれた感が強いのではなからうか。以上の考察結果から、この婚姻関係は、「藤原四子」結束の一環として捉えるよりも、房前個人が地位や立場を保つものであり、宗家からの独立を意識してのことであつたと結論づけておきたい。

一方で、宇合や麻呂はどうであつたのか。このうち宇合については、木本氏^{二九}が武智麻呂との強力な結びつきを指摘されておられる。これに依拠するならば、宇合と武智麻呂の間での結束の意志は認められるだろう。宗家に対する庶子として、武智麻呂を支える立場であつたことによるものと理解したい。

麻呂については、まだ明らかではないことが多い。よつて、武智麻呂と宇合の関係だけでは、「藤原四子」の結束に発展させることはできないだろう。しかし近年、二条大路木簡の分析から、武智麻呂と麻呂の間には、強力な結びつきがあつたと指摘されている^{三〇}。たしかに、武智麻呂から麻呂邸に対し、物資の運送がなされていることからすると^{三一}、兄弟としての友好関係は実証されるだろう。しかしそれが、政治的な面での協力関係を示しているとは限らないので

はなからうか。というのも、麻呂については、『懷風藻』に次のような伝記が残されているからである。

五言。暮春於弟園地置酒。一首。并序

僕聖代之狂生耳。直以^二風月^一為^レ情。魚鳥為^レ翫。貪^レ名狗^レ利。未^レ適^二冲襟^一。對^レ酒當^レ歌。是諧^二私願^一。乘^二良節之已暮^一。尋^二昆弟之芳筵^一。（中略）一醉之飲。伯倫吾師。不^レ慮^二軒冕之榮^一。身。徒知^二泉石之樂^一。性。於^レ是。絃歌迭奏。蘭蕙同欣。（中略）宜^下裁^二四韻^一。各述^中所懷^上云爾。

右の傍線を引いた箇所から、麻呂は地位や身分にあまり関心を持っておらず、藤原氏の勢力云々には興味を示していなかったことが窺えるだろう。また、『尊卑分脉』鷹卿伝にも、次のような記述がある。

（前略）平生為^レ人惠并多能属^レ文。雖^二才為世出^一。沈^二湏琴酒^一。常談云。上有^二聖主^一。下^二賢臣^一。如^レ僕何為畢。尚事^二琴酒^一。耳。及^二其終^一。命。朋友泣血云々。

こちらでも、『懷風藻』に近い麻呂の人物像が伝えられている。これら諸伝によるならば、立場や地位のために、麻呂が武智麻呂と政治的に協力していた姿をあえて想定する必要はないだろう。林氏^{三二}が「四人それぞれの立場があつて、堅い一枚岩というわけではなかった」と述べられることは、妥当な指摘であると思われる。したがって「藤原四子」は、各個人が藤原氏のためではなくて、例えば房前

が宗家からの独立を意識していた可能性があるように、あくまで個人的な一人の律令官人として、異なる政治意識を有していたとみるのが穏当なのではなからうか。

これまで述べてきたことをまとめると、①武智麻呂と房前について、その血縁関係から窺い知れることについて検討し、それが房前主導で行われ、宗家からの独立を意識していたのではないかと結論づけた。②また、『懷風藻』や『尊卑分脉』に記載される伝記がある以上、麻呂と武智麻呂とが政治的な面で協力関係にあったと論じることができるのではないと指摘した。しかし、『懷風藻』や『尊卑分脉』に伝わる麻呂の人物像には、なお検討の余地が残っている。また、私見を裏付ける明確な史料の提示ができないことも問題となるだろう。よって、ここでの検証だけでは、「藤原四子」の結束がみられないとするには不十分である。

そこで次に、先行する学説が「藤原四子体制（武智麻呂政権）」の成立とする天平三年前後において、武智麻呂の子である豊成の昇進が早くはなく、際立った補任もないことに着目し（前掲表（二）参照）、「藤原四子」結束の有無について考えてみたい。

三、親子三代からみる藤原氏勢力の存在

ここでは、不比等在世中の武智麻呂と、武智麻呂在世中の豊成に対する叙位と任官の比較を中心に考察してみたいと思う。

そもそも不比等は、周知のとおり、霊龜・養老年間の時点で、太政官において強大な勢力を有していた。そこで注目されるのが、前掲した【表一】からも確認できるように、不比等が大納言以上に就任している間、武智麻呂と房前の極めて順調な出世が見て取れることである。特に、養老元年十月にみられる房前の「参議朝政」、養老二年九月にみられる武智麻呂の式部卿への任官が特筆される。このような武智麻呂や房前の人事について、「自らの藤原氏の繁栄のためのそれぞれのシートに配置したのが不比等最後の施策」とする指摘もある^{二三}。こうした先学に導かれるならば、不比等は生前、自身の政治的立場を駆使して「藤原四子」の地位を確保していたことになるだろう。であるならば、不比等が藤原氏という氏族の繁栄を、少なくとも念頭に置いていたことは明白である。けれども、不比等の薨後、太政官における後継者は、彼が後押ししていた長屋王となる^{二四}。したがって、一般論に則してみると、不比等は太政官における後継者として長屋王に期待を寄せつつも、藤原氏という自身の氏族繁栄も考慮していたことになる。

一方で、武智麻呂が在世中の豊成はどうであろうか。養老七年（七二三）に兵部大丞となり^{二五}、翌年の神龜元年には従五位下兵部少輔

となり(天平神護元年十一月甲申奏)、天平四年(七三二)正月によく従五位上に叙され(天平四年正月甲子奏)、「藤原四子」が薨去する直前の天平九年二月に正五位上に叙されている(天平九年二月戊午奏)。ちなみに史料上からは、神龜元年に兵部少輔への補任が確認されてから「藤原四子」が薨去する天平九年まで、官職の異動は確認できない(前掲「表」二参照)。したがって、繰り返し述べられているように、不比等在世中の武智麻呂に比して、特筆すべき叙位や任官が確認できないのである。この事実からすると、武智麻呂は不比等に比して、氏族の繁栄を考慮していなかったのではないかと考えられる。しかし、豊成の叙位や任官については、彼の年齢的制約や官人としての資質が影響している可能性があるため、直ちに結論づけることは難しい。よってここでは、年齢的な制約によるものかどうかを見極める。そこで、令制における叙位と任官についてを先学に導かれながら概観しておく。そのうえで、改めてこの問題を取り扱ってみたい。なお、豊成の官人としての力量については、第二章を参照していただきたい。

官人の補任について、まず注目されるのは、和銅六年(七一三)四月丁巳条二六の規定であろう。というのは、「人事権を掌握することが出来る得る式部卿は、政治を動かす中枢勢力と連動する」二七など、官人の補任に式部卿が及ぼす影響の強大さを指摘する見解が提示されているからである。しかし、茨木一成氏二八や早川庄八氏二九の

研究によつて、式部省の職掌は奈良時代の前期にかけて増大はしていたが、太政官を構成する参議以上の任官に影響を与えるほどのものではなかったことが明らかにされている。したがって、官人の任官についていえば、式部卿であることよりも太政官入りしていること、つまり参議以上であることのほうが重要なのである。

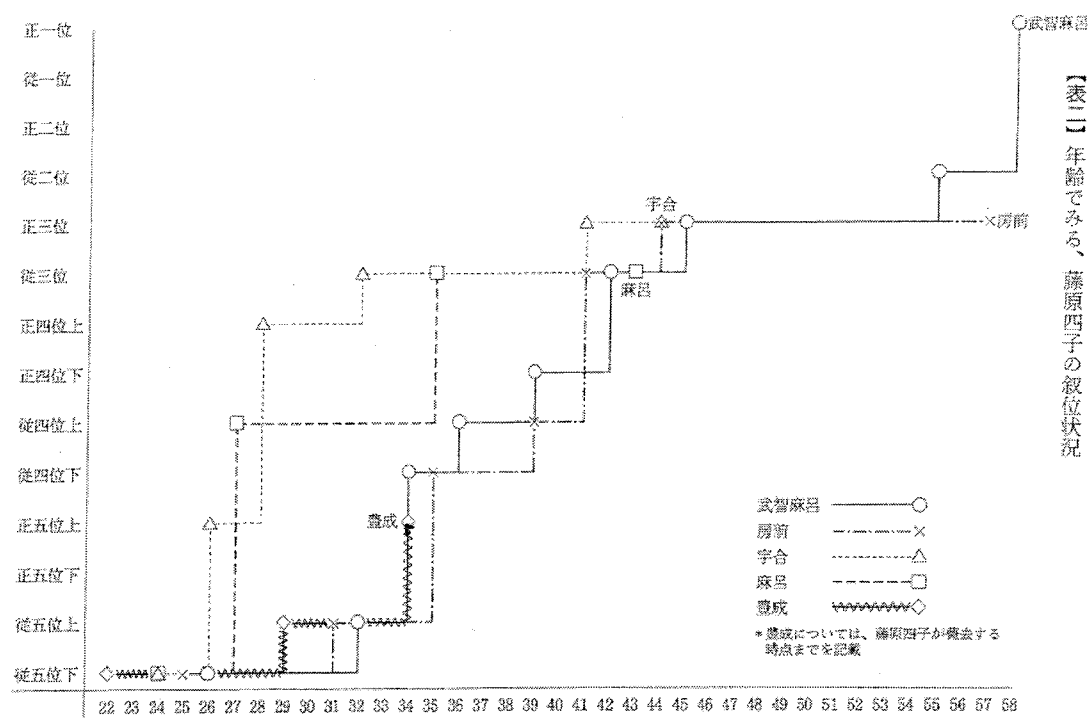
叙位については、位記に署名することが定められている、太政官の長官や式部卿・中務卿の影響が強かったと考えられる。そこで、上記の官職の職掌を確認してみると、官人叙位の決定権を有していなかったことが窺える三〇。このことは、和銅五年(七一二)五月丙申条三が傍証となるだろう。つまり、太政官の決定がないと、位記の発行はできなかったのである。となると、叙位に関しても、式部卿や中務卿といった職にあることよりも、太政官入りしていることのほうが重要であると思われる。

以上の叙位・任官の確認を踏まえたうえで、天平前期の「藤原四子」を振り返ってみたい。武智麻呂が唯一の大納言となる時点(天平三年七月以降)、間もなく「藤原四子」は揃って参議に就任する。なかでも、宇合は式部卿を兼任しており、藤原氏の政治的立場が優勢となる人事をおこなうことが可能であったと思われる(前掲「表」二参照)。しかし、先述したとおり、叙位に関しては宇合の一階と豊成の四階しか確認できず、豊成の補任に異動はみられない。すでに概括したと

おり、叙位や任官について重きが置かれるのは太政官入りを果たしていることであるため、兄弟揃って参議以上に列していることからすると、ここに疑問を抱いてしまう。ただ、豊成についていうと、年齢的な制約を一考してみる余地がある。そこで、父である武智麻呂との比較をしてみよう。

武智麻呂が従四位下に叙されたのは、三十四歳の時であった。これに対し、天平三年の時点で二十七歳である豊成は、若すぎるといふ年齢的制約を受けていたことが認められる。そして、これを抛りどころにしてみると、先の疑問は即座に解消することになる。すなわち豊成は、若すぎるといふことで昇叙がなかったわけである。しかしながら、養老五年正月にみられる「藤原四子」の叙位に目を向けると、やはり違った要因が考えられるのである。というのも、宇合が二十八歳で正四位上、麻呂が二十七歳で従四位上に昇叙しているからである(後掲「表二」参照)。つまり、同じ藤原氏の中で、こうした前例があることを考慮すると、豊成に限って年齢的制約により昇叙がなかったとみる必要はなくなるのではなかろうか。また、かかる前例が他に類をみない越階であることや、不比等の薨後で強力な後ろ盾があるとは思えない状況下での昇叙であったことに留意しておく。

すでに三十歳前後に達している豊成の場合、右大臣武智麻呂・式部卿宇合という構成で、この時期に「藤原四子」による政治勢力が



想定されるならば、位階が四位に到達していても不自然なことではないだろう。豊成が二十一歳で五位となっているのが極めて早いことであり、これが「藤原氏の宗家たる後継者として至極当然」とする指摘もある^{三三}。また、当時の麻呂の位階について「從三位が限界」とする意見もあつて^{三四}、これと同じような理解を求めてみると、豊成の位階の限界は四位ということになる。そして、こうした諸説に留意しつつ、「藤原四子体制（武智麻呂政権）」のもとで、「藤原四子」による強力な政治勢力の存在が想定されている定説に抛り、かつ武智麻呂が五十代であつたことも考慮してみると、藤原氏の嫡子たる豊成が、年齢的制約によつて昇叙できないことのほうが不自然なのではなからうか。

以上の考察結果から、「藤原四子体制（武智麻呂政権）」の確立が指摘されている天平前期において、必ずしも藤原氏の勢力拡大がおこなわれていた（考慮されていた）わけではなかったと結論づけておきたい。

むすび

「藤原四子」は、血縁関係や太政官構成を一見すると、強力な政治勢力を構築していたと判断することができるであろう。しかし、本

章で明らかにしたように、立場を利用して勢力拡大を推進（考慮）していた姿を想定することは難しい。したがって、「藤原四子」が結束することによつて生じる政治勢力や、武智麻呂個人による突出した権力は見出すことができないのである。すなわち、こうした概念は、武智麻呂・房前・宇合・麻呂という一律令官人を、古代史上において優れた力を発揮した、一人の律令官人である不比等が残した四人の子どもである故に、「藤原四子」という便利な用語によつて、あたかも一人の律令官人であるかのように仕立ててしまった、先学が生みだした虚像といえるのではなからうか。そして、本章による見解が成立するならば、「藤原四子」結束の観念を払拭し、一律令官人として太政官政治を円滑にすることを課題としていた「藤原四子」の姿を、考えていかななくてはならないだろう。

【註】

一 例えば、野村忠夫「長屋王首班体制から藤原四子体制へ」（『律令政治の諸様相』塙書房、一九六三）。中川収「藤原四子体制とその構成上の特質」（『奈良朝政治史の研究』高科書店、一九九二）。林陸朗「天平期の藤原四兄弟」（『国史学』一五七、一九九五）。

また瀧浪貞子氏（『武智麻呂政権の成立―内証―房前論の再検討』／『日本古代宮廷社会の研究』所収、思文閣出版、一九九二）は、武智麻呂と房前の経歴を比較し、武智麻呂を「有官的経歴（コース）」、房前を「無官的経歴（コース）」と位置づけ、嫡子と庶子の分析とを併せたうえで、野村氏が房前重視で考えられている「藤原四子体制」に異論を提示された。結果、あくまで不比等の後継者は武智麻呂であつたことが明らかとなり、「藤原四子体制」とは異なる概念である「武智麻呂政権」を提唱されている。

さらに木本好信氏（『武智麻呂政権の成立―野村氏の房前重視説への反論を中心として―』／『奈良朝政治と皇位継承』所収、高科書店、一九九五）は、瀧浪氏の天平三年成立とは異なり、「政権」と称すためには「議政官内での領導力が強力でなくてはならない」との見方から、大臣以上でなければ「議政官を領導する地位を得たとはいえない」と考えられ、武智麻呂が右大臣に就任する天平六年をもつて、「武智麻呂政権」の確立とみておられる。

二 野村氏前掲註一論文。中川氏前掲註一論文。木本氏「長屋王政権の実態」（『奈良朝政事と皇位継承』所収、高科書店、一九九五）。林氏前掲註一論文。

三 中川氏前掲註一論文。木本氏前掲註一論文。林氏前掲註一論文。

四 武智麻呂は、「長屋王の変」直後に大納言に就任し（『天平元年』、右大臣となるのは天平六年である（『天平六年』、月己卯条）。

五 『武智麻呂伝』によると、薨去した時点で「春秋五十有八」なので、逆算すると生まれは天武天皇九年となる。また、武智麻呂の母は一般に「娼子」とされているが、『尊卑分脉』武智麻呂卿伝には「大紫冠蘇我武羅自古大臣之女 子娘也」と記され、『公卿補任』天平九年条には「右大臣蘇我武羅自古之女温子」と記されている。なお本章では、通説に従い「娼子」としておく。

六 『武智麻呂伝』によれば、「三年四月以疾而罷」とあり、病氣を理由に免官していることが確認できる。

七 『尊卑分脉』房前卿伝によると、「年五十七」で薨去したことが記されており、逆算すると生まれは天武天皇十年の生まれとなる。母については、『尊卑分脉』房前卿伝に「母与上同」とあり、同書撰家相統孫に「母右大臣大紫冠蘇我武羅自古女娼子」と記されているため、武智麻呂と同母であることは明らかである。

八 『懷風藻』や『公卿補任』天平九年条、『尊卑分脉』撰家相統孫に、四十四歳で薨去したことが記されている。よって、ここから逆算すると生まれは持統天皇八年となる。

しかし、『懷風藻』の天和刊本・宝永刊本・寛政刊本には「年三十四」とあるらしく（『金井清一「藤原宇合年考」／『万葉』詩史の論』所収、笠間書院、一九八四）、『萬葉代匠記』（『源神全集』）には「懷風藻二此人ノ詩ヲ載、題下二記シテ云ク、年五十四。」と

の記述もみられる。つまり、契沖の所持した『懷風藻』には、宇合薨去が「五十四」と記されていたのである。これらのことから澤瀉孝久氏^{〔萬葉集注釈〕}は、先の『万葉集』諸本にみられる「三」は、「五」の誤写である可能性を指摘しておられる。さらに、これを受けた金井清一氏は、『万葉集』巻一―七二に確認される宇合の歌が、慶雲三年（七〇六）の難波行幸時のもので、四四歳没年説では宇合がこの時一三歳となってしまうことを根拠に加え、五四歳没年説を支持されている^{〔藤原宇合年考〕／『万葉詩史』の論所収、笠間書院一九八四}。

こうした見解については、すでに木本好信氏が『藤原四子』^{〔ミネア書房二〇一三〕}の中で触れられ、四四歳没年説のほうが妥当であることを示されている。すなわち、①大野保氏^{〔宇合年考〕／『早稲田大学国文学研究』五八、一九七六}によつて、『万葉集』の左註は題詞よりも信憑性に欠けると指摘されていること、②五四歳没年説によると、宇合が祖父鎌足の蔭叙によつて正六位下を与えられたのが、慶雲元年（七〇四）以降となる。そうすると、父の不比等が政界での地歩を進めている状況の中で、一二年間も宇合には昇叙がなかったことになってしまう^{〔鑑鏡二年（七一六）の宇合初見に「正六位下」と確認される。〕}、という点を挙げておられる。

こうした木本氏の見解に、さらに一点付け加えるならば、先の『万葉集』にみられる和歌も、宇合が文学的才能に恵まれていた

とすると^{〔尊卑分脉宇合傳〕}、一三歳という若さで作詩することに不自然はないだろう。よつて、これらの諸点を総括すると、宇合の誕生は四四歳没年説から持統天皇八年と考えられる。

九 宇合の生母について、『尊卑分脉』撰家相統孫には「母同房前」とあり、武智麻呂や房前と同母であると記されている。しかし角田文衛氏^{〔不比等の娘たち―初期律令政治運営の秘奥をめぐって〕／『律令國家の展開』所収、塙書房、一九六五}によつて、娼子が武智麻呂と房前を生んで間もなく他界したことが明らかにされており、宇合の生母について、『尊卑分脉』に記されていることは「甚だしい誤り」であることが早くから提示されている。木本氏^{〔藤原武智麻呂政権と皇位継承〕所収、高杉書店一九九五}は、この角田氏の見解を踏襲され、さらに一歩踏み込んだ見解として、宮子の妹である賀茂比賣を想定されている。本章では、こうした先学に依拠し、宇合の母は、武智麻呂・房前とは異なるとする理解に従いたい。

一〇『尊卑分脉』鷹卿伝には、薨去した時点で「年四十四」と伝えられているが、同書撰家相統孫や『公卿補任』天平九年条では「四十三」となっているため、本章では四十三歳で薨去したと考え、逆算して生まれは持統天皇九年としておく。

一一麻呂の母については、『尊卑分脉』鷹卿伝に、「母大織冠内大臣之女。五百重夫人也」と記され、「初浄御原天皇生三新田部親王」。

後嫁「淡海公」生「磨卿」と伝えられている。

二 中川氏前掲註一論文。

一三 中川氏（前掲註一論文）は、天平三年八月の時点で太政官に列している人物一人ずつを分析し、「長屋王の変」時における動向や前後の叙位や補任の過程から藤原氏と敵対する様子は窺えず、同調的であったと指摘されている。

一四 仲麻呂が従二位に叙されるのは天平勝宝二年正月であり（天平勝宝二年正月）、以後、天平宝字四年正月の従一位への昇叙（天平宝字四年正月丙寅）まで仲麻呂は従二位である。そのため、天平宝字二年に正六位上として登場する久須麻呂は、蔭位による昇叙の可能性が考えられるのではなかろうか。

一五 藺田香融「恵美家子女伝考」(『日本古代の貴族と地方豪族』所収、塙書房、一九九二)

一六 例えば瀧浪氏（前掲註一論文）は、養老二三年にかけての武智麻呂の短期間での昇任を「房前の任参議（養老元年）に対応する人事」と位置づけて、房前の参議就任の時点で「武智麻呂の反発を招いた」との見解を示されている。

一七 房前の参議朝政時、武智麻呂の位階が房前よりも上位であった事実から、太政官入りが早かったことなどを論拠とする房前重視

の考えは見直された。その結果、不比等の後継者は武智麻呂であるということが明白となり、瀧浪氏（前掲註一論文）、木本氏（前掲註一論文）、林氏（前掲註一論文）、吉川敏子氏（「律令以後と幼封」／「律令貴族成立史の研究」塙書房、二〇〇六）など、諸氏が指摘されている。

一八 吉川氏前掲註一七論文。

一九 木本氏（前掲註一論文）は、「長屋王の変」において王の邸宅を包囲するたに「六衛の兵」を率いたのが、衛府職とは無関係にあった宇合であったという事実から（天平元年二月辛未）、「宇合は房前とは一歩距離をおいて、長兄の武智麻呂とともに藤原氏の主導体制を指向していた」と述べられている。また、天平三年十一月丁卯条にみられる畿内惣管・鎮撫使の設置について、その真の目的が「藤原氏の権力確立に向けての、より大きな軍事力の掌握」にあったと想定され、六衛府とは別の形で、副惣管として宇合が軍事力を握ったことは、宇合が武智麻呂を中心とする藤原氏体制を支えていたことを示すとされる。

二〇 木本氏前掲註八。

二一 「天平七年六月」の年紀を持つ「石見国那賀郡右大殿御物海藻一籠六連」と記された荷札木簡が麻呂邸から出土しており（『平城京木簡』三一九五）、これによって、石見国那賀郡から「右大殿」、つまり武智麻呂邸に海藻が進上されおり、それが麻呂邸に贈られ消費されたこ

とがわかる。

二三 林氏（前掲註論文）は、麻呂が「藤原四子体制」として引き摺られていった」と指摘されているが、ここに若干の疑問が残る。なぜならば、本文でも触れたように、武智麻呂は他の兄弟に協力を求める必要はなく、麻呂が「引き摺られていった」様子を見出すことが出来ないからである。しかし、「四人それぞれの立場があつて、堅い一枚岩というわけではなかった」との指摘は、まさにその通りであると思う。

二三 林氏前掲註一論文。

二四 長屋王は、不比等在世中の養老二年三月、大納言に就任し（養老二年三月）、不比等が薨去した翌年の養老五年正月には従二位右大臣となり（神龜元年二月）、太政官の首班たる地位に就いている。また、寺崎保宏氏（長屋王、吉川弘文館、一九九九年）は、「不比等は権力基盤の拡大」のため「娘たちを皇族をはじめとする有力者」に嫁がせていたことを指摘し、その中に長屋王が含まれていたことから、「それだけ長屋王が有力視され、また不比等との関係も良好であつた」と述べられている。

二五 薨伝によると、この時点で内舎人も兼任している。栄原永遠男氏（藤原豊成「軍事と仏教」／『平城京の落日』所収、清文堂、二〇〇五年）は、軍防令五位子孫条の規定も考慮して、豊成の誕生が大宝三年である可能性も指摘されている。

二六 「詮衡人物」。黜陟優劣。式部之任。務重他省。宜論勲績之日。無式部長官者。其事勿上焉。とある。ここから、「人物を詮衡し、優劣を黜陟」することが式部省の務めであり、その職務が「他省より重し」と考えられていたことが明らかとなる。

二七 小杉則義「律令国家成立期に於ける式部卿の研究」、『政治経済史学』三四四、一九九五。

二八 茨木一成「式部卿の研究」、『続日本紀研究』十・十一合併号、一九五三。

二九 早川庄八「選任令・選叙令と郡令の「試練」」、『日本古代官僚制の研究』所収、岩波書店、一九八六。

三〇 中務省が「考叙」権を有するのは「女初位以上」の場合であり（新訂増補国史大系本「令集解」職官令中務省案、朱説）、式部卿の「選叙」権は、「位案を校ずる等」のことであり、「先ず校定し状を成選」した後「官に申す」ことになっている（新訂増補国史大系本「令集解」職官令中務省案、朱説）。

三一 「太政官処分。凡位記印者。請於太政官。下諸国符印者。申於弁官。」とあり、太政官の決定がなければ位記の発行ができなかったことが窺える。

三二 中西康裕「藤原仲麻呂―星は昇り、落つ―」、『平城京の落日』所収、清文堂、二〇〇五。

三三 林氏（前掲註
一論文）は、麻呂の位階について「従三位が限界」と指摘し、これは武智麻呂・房前・宇合の位階を超えるからであるとされている。この指摘を豊成に当てはめてみると、四位ならば「藤原四子」の位階を超えることがないため、天平三年以降で豊成が四位に昇叙することは可能である。

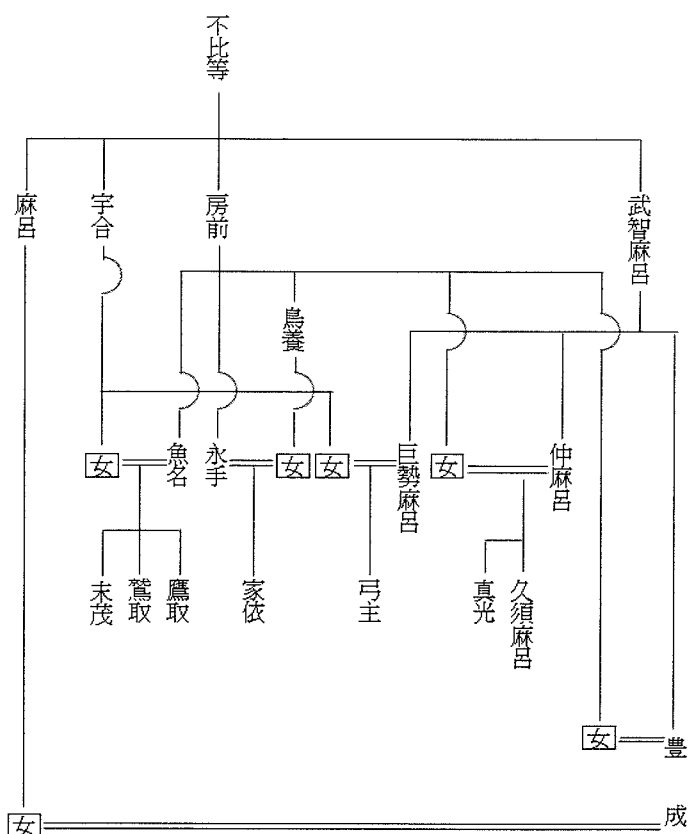
付論 「藤原四子」に関する婚姻関係

筆者は第一章にて、天平期における政治体制で通説的な理解となつてゐる、実態としての「藤原四子体制（武智麻呂政権）」の存在に疑義を呈した。その論拠としたのは、豊成の政治的立場である。それは、不比等が生前中の武智麻呂に比して、武智麻呂が在世中の豊成に、特筆すべき出世過程がないという点である。

ここではさらに、その補足として、先に大きく取り上げることのなかつた「藤原四子」の子女間の婚姻関係について、若干の気づいた点を記しておく。ここでいう婚姻関係とは、『続日本紀』や『公卿補任』、『尊卑分脉』などから確認される【系図1】である。

このような婚姻関係は、「藤原四子体制（武智麻呂政権）」の成立、ないし「藤原四子」による勢力拡大の根拠として用いられることがある。なぜなら、房前の娘二人が武智麻呂の子息にそれぞれ配され、麻呂の娘も豊成に嫁ぎ、宇合の娘二人が房前の子息と結ばれているなど、婚姻関係による「藤原四子」の結束を窺わせるからである。つまり、「藤原四子」は政略結婚を駆使することによって、政界での立場を固めていったと解されているのである。

【系図1】「藤原四子」の子女系図



ところで、【系図1】に記した女性について、これを誰に比定するのかは、天平勝宝元年（七四九）四月甲午条に、

（前略）正三位橘夫人従二位。従四位上藤原朝臣吉日従三位。従五位上藤原朝臣袁比良女。藤原朝臣駿河古並正五位下。无位

多治比真人乎婆売。多治比真人若日売。石上朝臣国守。藤原朝臣百能。藤原朝臣弟兄子。藤原朝臣家子。大伴宿祢三原。佐伯宿祢美努麻女。久米朝臣比良女並從五位下。(後略)

とある叙位記事を手掛かりとして、角田文衛氏^二と高島正人氏^三が詳細に検討されている。このうち、「藤原朝臣吉日」と「藤原朝臣袁比良女」、「藤原朝臣駿河古」と「藤原朝臣百能」については見解が一致している。

藤原吉日は、角田氏^四による詳しい分析があり、不比等の娘であったことが指摘されている。また氏は、彼女が前掲史料に従三位とあることに注目し、これが高官の妻であるということを示唆するとしたうえで、橘諸兄の室に比定された。『公卿補任』天平廿一年(七四九)条によると、橘奈良麻呂について「左大臣正一位諸兄一男。母淡海公女。従三位多比能朝臣。」とあり、『尊卑分脉』橘氏にも、奈良麻呂に関し「母淡海公女」とある。さらに、『尊卑分脉』撰家相統孫の多比能には、「左大臣橘諸兄公室。母同光明皇后。」と記されているため、諸兄の妻が不比等の娘であることは間違いなく、名を多比能といったことがわかる。

ここで問題となるのは、吉日と多比能とが同一人物なのかである。角田氏は、①万葉仮名の「き」の用字は「伎」や「吉」であり、「伎」は「支」とも混用される、②光明皇后は「藤三娘」と自署すること

もあるため、吉日は「吉日娘」とも呼ばれていたと想定される、という二点から、かかる問題を次のように解されている。すなわち、「吉日」吉日娘「支比娘」多比娘「多比能」といった具合に誤写してしまったというのである。そして、このような理由から、『続日本紀』に見える「吉日」と、『公卿補任』や『尊卑分脉』の「多比能」とは、同一人と認められる」と結論づけられている。こうした角田氏の推定は、高島氏も支持されておられる。

藤原袁比良女は、仲麻呂の室とされている。天平宝字六年(七六二)六月庚午条の薨伝に、

尚藏兼尚侍正三位藤原朝臣宇比良古薨。贈太政大臣房前之女也。轉^三絶百疋。布百端。鉄百延^一。

とあつて、房前の娘であつたことがわかる。また、『尊卑分脉』武智麻呂公孫によると、仲麻呂には久須麻呂や真光、朝狩らの子息が確認される。このうち、真光について、『公卿補任』天平宝字六年条の注書きに、「大師押勝二男。母三木房前女(正三位表比良姫)」と記されている。このことから、真光の母は名を「袁比良姫」ということが明らかとなる。しかも、『尊卑分脉』武智麻呂公孫に「母同上」とあり、同書の久須麻呂に「母参議房前女」とあることから、「袁比良姫」は房前の娘で仲麻呂に嫁ぎ、久須麻呂と真光を儲けていたことが証明される。ここでの「表比良姫」や薨伝の「宇比良古」が、

天平勝宝元年四月甲午条の「藤原朝臣袁比良女」と同一人物であることは、すでに角田氏^五が指摘されているところである。したがって、仲麻呂の室となった房前の娘は、藤原袁比良で疑いないだろう。

藤原駿河古は、豊成の室とされている。この人物は、前掲の叙位記事からのみ素性が知られる。位階の面で袁比良と同格であり、かつ同時期の昇叙であることから、身分と年齢の面で両者に大きな差異はないと推測されている。そして、袁比良が仲麻呂の室であるならば、件の女性も相応の人物に嫁いでいたはずであるとの見方から、時の右大臣であつた豊成に嫁いでいたと判断されるのである。

藤原百能は、『尊卑分脉』鷹卿孫や、『続日本紀』延暦元年四月己巳条などから、麻呂の娘であつたことがわかる。しかも、同条には「適^三右大臣従一位豊成」とあることから、豊成の室であつたことも判明する。豊成には正妻として駿河古がいるため、百能は後妻として迎え入れられたことが指摘されている^六。

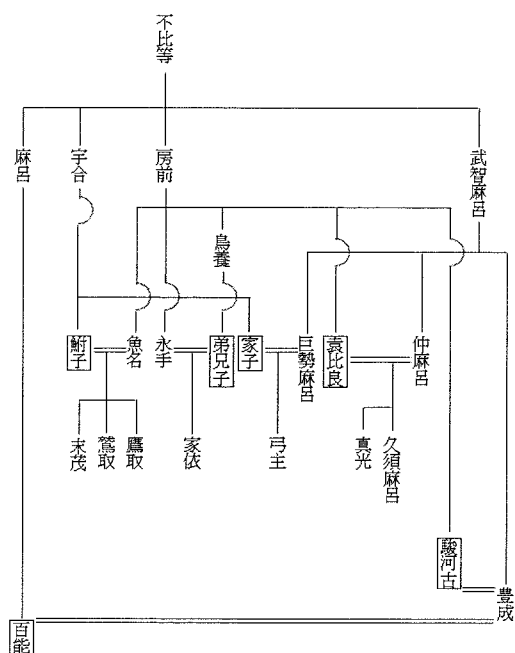
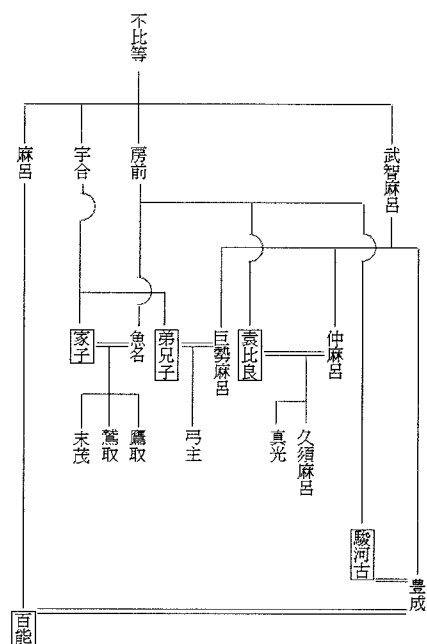
このように、前述の四名については見解が一致しており、史料的にみても疑う余地はないだろう。問題は、「藤原朝臣弟兄子」と「藤原朝臣家子」である。この二名については、二氏の想定にも若干の違いがあるため、以下、両者の経歴に触れつつ、両氏の見解を紹介しておく。

○

藤原家子は、天平勝宝元年四月、無位より従五位下に叙されたことを初見とする^(天平勝宝元年四月甲午条)。同二年(七五〇)には正五位上となり^(天平二年八月庚申条)、天平宝字五年(七六一)十二月には従四位下に昇叙している^(天平宝字五年十二月戊午条)。そして、神護景雲元年(七六七)正月に正四位下^(神護景雲元年正月己巳条)、同二年(七六八)十月には正四位上^(神護景雲二年十月乙卯条)、宝龜二年(七七二)正月の叙位では従三位に昇り^(宝龜二年正月庚申条)、宝龜五年(七七四)七月、尚膳従三位として薨去している^(宝龜五年七月戊午条)。

こうした家子の昇進過程に着目された角田氏^七は、「天平神護元年から宝龜二年頃までの期間、執政として太政官にあつた執政のうち誰かの妻であつたことを示唆している」とし、当該期の太政官構成員のうちから条件に合う人物を見出され、「確証はないけれども、藤原家子は魚名の妻となった宇合の娘に比定される」と述べられている。これに対し高島氏は、「家子が従五位上に叙せられたとき魚名はまだ従五位下で授爵者の最下位である」ことから、角田氏の説明には疑問が残るとし、巨勢麻呂の室に比定された。両氏の見解は、限られた史料からの分析であるため、いずれも明証を欠くものの、貴重な提示である。現段階では、魚名の位階を越えて、その室が叙位に預かったとは考えにくいとする高島説のほうが、無理のない理解

【系図 3】高島説



藤原弟兄子は、前掲した天平勝宝元年四月、無位より従五位下に叙された記録が唯一の史料である。角田氏は、この一事をもつて巨勢麻呂の室と推測されている。しかし高島氏は、家子を巨勢麻呂の室と推定されており、鮎子を魚名の室に比定していることから、消去法で弟兄子を鳥養の娘に比定されている。この場合も、史料に限りがあるため、共に確証を得ないのが現状である。したがって、ここでは二氏による想定があるということを紹介するに留めておきたい。

以上、確認してきたことを図にまとめてみると、【系図 2・3】のようになる。角田氏と高島氏とで、宇合の娘を誰に比定するのかで意見は分かれているが、史料の制約があるため、いずれの説にも確証は持てず、この問題を直ちに解決するのは困難である。しかしながら、宇合の娘二人が、巨勢麻呂と魚名とにそれぞれ嫁いでいることは事実として認められる。そして、巨勢麻呂と宇合の娘との間には弓主が、魚名と宇合の娘との間には鷹取・鷺取・末茂らが生まれているのである。

ここで注目してみたいのは、これまで確認してきた婚姻関係が、いつ成立したのかである。言い換えると、「藤原四子」が薨去する以前のもののなか、それとも薨去後のものであるのかを確かめてみたいのである。というのも、これを追究することによって、件の婚姻関係が「藤原四子」主導の下で行われたのか否かを判断したいからである。つまり、これらが「藤原四子」の薨去前（≡天平九年（七三七）以前）であるならば、先行学説が説くように、「藤原四子」が血縁関係を深めることによって、政界での地歩を固めていったとしても問題はないだろう。しかし、それ以後のことであるならば、「藤原四子」とは切り離して捉えなくてはならないと思う。ここに踏み込んだ見解は見当たらないため、確かめておきたい。

このうち、豊成と駿河古、仲麻呂と袁比良については、第一章にて触れ、それぞれの長子の誕生が神亀四年（七二七）から天平三年（七三一）までの間となるため、「藤原四子」が生前中になされたものであることを明らかにしている。したがって、ここでは先に触れることのできなかった、巨勢麻呂と宇合の娘、魚名と宇合の娘との婚姻関係成立時期を中心に検討してみたい。

まず、巨勢麻呂と宇合の娘との婚姻をみてみたい。『尊卑分脉』武智麻呂公孫によると、二人の間には弓主が誕生していることがわかる。この弓主の官歴をたどってみると、宝龜十年（七七九）正月

に正六位上から従五位下に叙され（宝龜十年正月甲子条）、同年九月には右兵衛員外佐（宝龜十年九月癸酉条）、天応元年（七八二）四月には左兵衛員外佐に転じ（天応元年四月丙申条）、同年五月には阿波守を兼任し（天応元年五月癸未条）、延暦元年（七八二）閏正月には右衛士佐となっている（天応元年閏正月庚子条）。国史に確認される弓主に関しては以上となり、他に史料は見当たらない。よって、彼の生没年は不明である。したがって、弓主の年齢を参考に、巨勢麻呂と宇合の娘との婚姻が、いつ成立したのかを探ることは難しい。

ところが、木本好信氏^九は、弓主の孫、諸成が延暦十二年（七九三）生まれ^{一〇}であることから推測し、「弓主の母なる女性の生年は養老四年から神亀二年（七二五）頃」と判断された。確たる根拠はないものの、現段階では、件の婚姻関係や彼女の年齢を示唆する唯一の見解だと思われる。この木本氏の推定が正鵠を射ているならば、彼女は天平九年の時点、すなわち「藤原四子」が薨去する段階で十三く十八歳であったということになる。仮に、養老四年（七二〇）の生まれであったとすると、天平九年時には十八歳で、婚姻や出産の適齢期と考えられるだろう。しかし、神亀二年とした場合は十三歳となるため、婚姻・出産ともに、もう少し下った年代のほうが適当となるのではなからうか。いずれにしても、宇合の娘は、年齢的にみて「藤原四子」の薨去直前、ないし彼らの薨去後に巨勢麻呂に嫁いだと判断するのが妥当となる。もっとも、以上のことは、史料

による裏付けを持たないため、あくまで一つの可能性として考え置くに留めておきたい。

魚名と宇合の娘との間には、『尊卑分脉』魚名公孫によると、鷹取・鷲取・末茂の三子が確認される。国史にみられる三者の記事は、叙位と補任が中心で、すべてを列挙すると煩雑になってしまう。よって、ここでは省略しておくが、いずれも生没年未詳で、この婚姻関係がいつ結ばれたのかを想定することは難しい。高島氏は、この娘を鮒子に比定されており、「神亀」の生まれで、天平後期に魚名の室となり（後略）と述べられている。また木本氏^二は、鷲取に注目され、彼の誕生を宝龜四年とする『尊卑分脉』の記事^三は誤りであることを指摘されている。そのうえで、魚名が二〇歳すぎに鷲取は生まれたと仮定し、その出生を天平一三年と推察された。さらに氏は、直木孝次郎氏^三による、皇女の第一子出産の平均年齢が一八歳前後であるとする見解を踏まえられ、「この女子が生まれたのは養老年間末から神龜年間初め（七二一〜七二五）頃」と推測されている。

これらの研究成果を踏まえてみると、宇合の娘は、天平九年の時点で一三〜一七歳となる。これは、先にみた巨勢麻呂の室とさほど変わらない年齢である。ということは、魚名と宇合の娘との婚姻関係もまた、「藤原四子」の薨去直前、あるいは薨去後の可能性が大きい。

くなるであろう。

○

このように、巨勢麻呂と魚名に嫁いだ宇合の娘二人は、いずれも天平九年の段階で十三〜十八歳と推測される。このことからすると、両者の婚姻関係は、「藤原四子」の薨去直前、ないし薨去後に成立したと考えることができるだろう。

さて、そうすると、「藤原四子」が生存中に結ばれたと確証が持てる婚姻関係は、実は、豊成と駿河麻呂、仲麻呂と袁比良の二例だけであることが証明される。もともと、戸令聴婚嫁条に「凡男年十五。女年十三以上。聴^二婚嫁^一。」とあるため、巨勢麻呂と宇合の娘、魚名と宇合の娘との婚姻は、「藤原四子」の薨去前という可能性もなくはない。しかし、直木孝次郎氏^四による美濃国加毛郡半布里戸籍の分析結果では、「第一子出産年齢は十七歳以上が多く、ピークは十七〜十九歳」で、三十一歳以上の高齢出産者を除いても、平均年齢が二十二歳であるという。このことを考慮してみると、「藤原四子」の薨去後であるとも想定される。よって現段階では、いずれの場合も裏付けの史料を欠くため、「藤原四子」薨去後も含め、幅広く考えておかななくてはならないだろう。

要するに、系図上にみられる婚姻関係は、一見すると「藤原四子」相互の結束を強固なものにしていると察知されるが、実態は、「藤原四子」が薨去した後に結ばれたものも含まれているのである。そしてこのことは、「藤原四子」らが政略結婚を介して結束し、勢力の拡大を図っていたとみる積極的な根拠とはならないことを意味している。むしろ、こうした一族間での婚姻関係は、天平九年の疫病、あるいは天平十二年の「藤原広嗣の乱」など、「藤原氏」という氏族が危機的状況に陥った中で、「藤原四子」の次世代たちが、政局の打開を狙って案出した政略だったのではなからうか。

小論で取り上げた婚姻関係がなぜ結ばれたのか、詳細の究明は今後の課題である。よって、ここではひとまず、件の婚姻関係が必ずしも「藤原四子」主導ではなかった可能性があることを示すに留め、第一章の補足としておく。博雅のご批正を乞う次第である。

【註】

- 一 例えば、関根淳氏は、拙稿「藤原四子体制」の再検討」(『皇學館論叢』四十三―四、二〇一四)に触れられ、「姻戚関係や長屋王の変での連携を考えれば、四人の政治的な協力体制を否定することは難しい。」と述べられている(『奈良朝政治史研究に関する一考』(『奈良朝政治史研究』四七、二〇一四)。

二 角田文衛「不比等の娘たち―初期律令政治運営の秘奥をめぐって―」(『律令国家の展開』所収、法蔵館、一九八四)、同B「藤原袁比良」(『律令国家の展開』所収、法蔵館、一九八四)、同C「藤原朝臣家子」(『律令国家の展開』所収、法蔵館、一九八四)。

三 高島正人「奈良時代における藤原氏一門の女性」(『奈良時代諸氏族の研究―議政官補任氏族―』所収、吉川弘文館、一九八三)。本章で高島氏の見解を参照するときは、すべてこの論文による。

四 角田氏前掲註二A論文。

五 角田氏前掲註二B論文。

六 遠藤慶太「尚侍からみた藤原仲麻呂政権―議政官とヒメマチキミ―」(木本好信編『藤原仲麻呂政権とその時代』所収、岩田書院、二〇一三)。

七 角田氏前掲註二B論文。

八 角田氏前掲註二C論文。

九 木本好信『藤原四子』(ミネルヴァ書房、二〇一三)。

一〇 藤原諸成は卒伝によると、斉衡三年(八五六)に六四歳で卒去していることがわかる。ここから逆算すると、生まれは延暦一二年となる。

一一 木本氏前掲註九。

二三 「弘仁八三廿四薨^{四五}」とあり、逆算すると宝亀四年の誕生となる。

二三 直木孝次郎「額田王の年齢と蒲生野遊獵―第一子出産年齢考―」（『続日本紀研究』三三二、二〇〇一）。

一四 直木氏前掲註二三論文。

第二章 藤原豊成小考

はしがき

前章では、いわゆる「藤原四子体制（武智麻呂政権）」と称される時期に、「藤原四子」が結束することによって生じる政治勢力は存在し難く、彼らが立場や地位を利用して、勢力拡大を推進していたわけではないと指摘した。その論拠の一つとして、武智麻呂在世中の豊成の出世が、不比等在世中の武智麻呂に比して、早くはないことを提示した。しかし一方で、その要因が彼の官人としての資質にあったのではないかという点を課題として残している。そこで本章では、かかる疑問を解消することを狙いとし、藤原豊成について考えてみたい。

そもそも豊成は、左大臣藤原武智麻呂の嫡子であり、最終的には従一位右大臣にまで昇進した人物である。そして、「藤原広嗣の乱」や「橘奈良麻呂の変」、「藤原仲麻呂の乱」など、奈良時代における様々な出来事に関与しており、奈良朝政治史を考えるうえでは欠かせない人物だといえるだろう。

ところが、これほど重要な人物であるにもかかわらず、彼についての研究は意外なほど少ない。管見におよぶ限りでは、榮原永遠男

氏^二の研究が、豊成の生涯や人物像に迫る唯一のものである。そのため、今後の豊成研究は、この榮原氏の論文が起点になると思うので、ここにあらかじめ要点を摘出しておく。

一、豊成の生涯を跡付けることにより、「彼が律令国家の軍事全般と深く関係していた」ことを指摘されている。

二、正倉院文書から明らかとなる、豊成と仏教との関係から、聖武天皇から信頼を得ていたことを明らかにされた。

三、道祖王の廃太子事件に考察を加えられ、豊成には「すぐれた政治的バランス感覚」があると評された。

四、「橘奈良麻呂の変」への関与を検討することにより、豊成がその一味に加わっていないことを明らかにされた。そのうえで、クーデタ派の行動を防ぎきれなかったことから、「政治認識に甘さがうかがえる」としながらも、奈良麻呂らが事件後に、豊成を主導者にしようとしていたことから、「包容力がある」との評価もされている。

五、「橘奈良麻呂の変」後、豊成が左降される理由について、『続日本紀』に記述される理由では、「決め手」に欠けると判断され、「決定的な証拠がないまま、豊成は追い落とされた」と結論づけられている。

六、道祖王の廃太子事件と、「橘奈良麻呂の変」から明らかとなつ

た豊成像のまとめとして、「仲麻呂が兄に対する対抗意識を燃やしていた」様子を見出し、「豊成は、仲麻呂に対して精神的に優位に立っていた」と述べておられる。

右の諸点については、ほとんど異論はない。ただ、これで豊成が論じ尽くされたわけではないだろう。なぜなら、豊成と留守官との関係には補足の余地があるように思われるし、豊成の左降理由についても、史料の解釈から氏の結論を一步進めることができるのではないかと思うからである。

そこで以下、榮原氏の論文に導かれつつ、これらの点について追加的考察をおこなってみたい。その過程で、前述した課題を解消していく。

一、豊成と留守官

豊成の官歴の中で、天平十二年（七四〇）二月の難波行幸を契機とし、計四度の留守官補任が確認できる。ここで注目する留守官とは、天皇が行幸される際、あるいは遷都のときに、諸王や有力官人を任命し、都を管轄させるものである。その存在は、『日本書紀』斉明天皇四年十一月庚辰条を初見とし、特に、聖武天皇の彷徨と呼称される天平十二年から同十七年の間に、顕著に確認することができ

る。

こうした留守官については、仁藤智子氏^三による詳細な研究があるので、以下、そのあらましを紹介しておく。

氏は、まず七世紀に確認できる留守官の事例について、「彼らはその時点ではこれといった要職に就いているわけではなく、留守の条件・資格として、必ずしもその本官が問われているわけではない」と述べておられる。そして、大王と豪族が人格的に結びついていた律令制以前の社会と結びつけて、七世紀段階での留守条件は、「必ずしも要職についているということではなく、いかに大王（天皇）と人格的にむすびついているか、信頼されているかということだった」と指摘される。また、天平期に多く確認できる留守官の事例には、「一人以上は議政官クラスから選出されているという事実」があるため、当該期の留守条件として、「律令官僚制を機能させるうえで必要な要職についていることが、留守官の重要な一条件」であったとされている。そして、これらの指摘を踏まえて、留守官は「天皇個人の恣意的な、人格的な選定から、官職を第一義的にみる、律令官僚制にのっとった形へ変わっていった」と想定しておられるのである。

こうした仁藤氏の見解は、留守官の補任事情を知るうえで重要である。しかし氏が、天平期に入ると、天皇との信頼関係より「官職

を第一義的にみる」とされた点には賛同できない。というのは、氏自身の指摘によれば、留守官は「公的通信・交通手段の使用」が許されており、「天皇の権能の一部を有していた」可能性があるという^四。だとすると、天皇と距離のある人物が、はたして留守官に起用されることがおこりうるのかと疑問に思うのである。

そこで次に、大宝・養老令施行後に留守となった人物の、天皇との信頼関係如何を検討してみたい。その材料とするのは、和銅三年（七一〇）三月辛酉条である。次に引用しておく。

始遷^三都于平城^一。以^三左大臣正二位石上朝臣麿^一為^三留守^一。

右の史料は、平城京への遷都の際、左大臣石上麻呂が留守となったことを示すものである。当時の太政官には、知太政官事穗積親王を筆頭に、左大臣石上麻呂、右大臣藤原不比等、大納言大伴安麻呂ら^五がおり、なかでも麻呂は七十一歳の年長者であった。このことをうけて、鑑弘道氏^六は、

左大臣石上麻呂は七十七年七十八歳の高齢でなくなっているから、その晩年の元明朝での政治活動に見るべきものはなく、平城遷都（七一〇）にあたっては旧都藤原京の留守官を仰せ付けられ、不比等の後塵を拝している有様であった。

とみておられるが、これなどは、石上麻呂が太政官では重視されておらず、政界から疎外されたという捉え方である^七。

こうした見方が成り立つとすれば、麻呂が留守として旧都に残されたことは、天皇からの信頼を失っていたかのように感じるだろう。しかしながら、高齢が故に政界で重視されなくなることと、天皇からの信頼がなくなることは、必ずしも同義ではない。このように考えるのは、元正天皇朝における薨去記事が一つの拠りどころとなっている。

【史料一】靈龜二年（七一六）八月甲寅条

二品志貴親王薨。遣^三從四位下六人部王。正五位下県犬養宿祢筑紫^一。監^三護喪事^一。親王 天智天皇第七皇子也。（後略）

【史料二】養老元年（七一七）正月己未条

中納言從三位巨勢朝臣麻呂薨。小治田朝小徳大海之孫。飛鳥朝京職直大参志丹之子也。

【史料三】養老元年三月癸卯条

左大臣正二位石上朝臣麻呂薨。年七十八。帝深悼惜焉。為^レ之罷^レ朝。（中略）百姓追慕。無^レ不^二痛惜^一焉。（後略）

【史料四】養老三年（七一九）二月甲子条

正三位粟田朝臣真人薨。

【史料五】養老四年（七二〇）正月庚辰条

（前略）大納言正三位阿倍朝臣宿奈麻呂薨。後岡本朝筑紫大宰帥大錦上比羅夫之子也。

【史料六】養老四年八月癸未条

(前略) 是日。右大臣正二位藤原朝臣不比等薨。帝深悼惜焉。

為_レ之廢_レ朝。挙_三哀内寝_一。特有_二優_一。勅_一。弔賻之礼異_三于群臣

一。大臣近江朝内大臣大織冠鎌足之第二子也。

これらの史料を概観してみると、【史料三】の石上麻呂と【史料六】の藤原不比等には、「帝はその死を深く悼み惜しんで、この人が死んだために朝を廃した」と解釈できる一文が同じように記されている。

このことは、石上麻呂と藤原不比等とが、同等の評価であったことを示している。すなわち石上麻呂は、留守官に任命された後も、天皇がその死を惜しむほど信が置かれていたのである^八。したがって、令制下で留守となる人物にも、天皇との信頼関係があったと考えることができるだろう。そうすると、留守官であった豊成もまた、天皇との関係は良好であった可能性が大きいのである^九。

次に、豊成の留守官補任記事をもとに、彼がどのような人物であったのかを考察してみたい。まず、四度の補任記事を先に掲げておく。

【史料①】天平十二年(七四〇)二月甲子条

行_三幸難波宮_一。以_三知太政官事正三位鈴鹿王。正四位下兵部卿

藤原朝臣豊成_一為_二留守_一。

【史料②】天平十二年十月壬午条

行_三幸伊勢国_一。以_三知太政官事兼式部卿正二位鈴鹿王。兵部卿

兼中衛大將正四位下藤原朝臣豊成_一為_二留守_一。(後略)

【史料③】天平十三年(七四一)九月丁丑条

行_三幸宇治及山科_一。五位已上皆悉從_レ駕。追_三奈良留守兵部卿正四位下藤原朝臣豊成_一為_二留守_一。

【史料④】天平十七年(七四五)八月癸丑条

行_三幸難波宮_一。以_三中納言從三位巨勢朝臣奈豆麻呂。藤原朝臣豊成_一為_二留守_一。

ここに挙げた史料で留意すべきことは、【史料①】～【史料③】の場合において、表記される官職名が「兵部卿」、あるいは「兵部卿兼中衛大將」となっていることである。

仁藤氏^{一〇}の論によると、この時期における留守官補任の第一義条件は、「律令官僚制を機能させるうえで必要な要職についていること」であり、「一人以上は議政官クラス」から選ばれていなくてはならない。そして、これを踏まえてみると、【史料①】【史料②】【史料④】については仁藤氏の指摘通りである。ところが、【史料③】の事例には、仁藤氏が提示された条件で解決できないことがある。

たしかに、このとき豊成は、すでに参議となつてゐる^{一一}。その意味では、仁藤氏の条件に何ら支障はない。しかし、では、何故に補任記事には「参議」と表記されていないのであろうか。あえて兼官

の職が記されているのには、何かしらの理由が考えられるであろう。現段階では、史料に記されているところの官職に重点が置かれ、その役職としての職務こそが「留守」としての職能だったのではないかと考えている。言い換えると、豊成の場合、「参議」としてではなく「兵部卿（兼中衛大将）」として留守を任されていたのではないかと思うのである。このように考えるのは、天平十三年閏三月乙丑条に、

詔留守従三位大養徳国守大野朝臣東人。兵部卿正四位下藤原朝臣豊成等曰。自今以後。五位以上不_レ得_三任意住_二於平城_一。如有_三事故_一。必_レ須_三退歸_一。被_レ賜官符。然後聽_レ之。其見_二在平城_一者。限_二今日内_一悉皆催発。自余散_二在他所_一者亦宜_三急追_一。

とあることが一つの根拠となっている。これによると、「留守」である大野東人と豊成に、平城京に住まう人々を新京（恭仁）に移住させるよう命令している。そして、この場合、新都への移住を何事もなく遂行させるために、「大養徳国守」である大野東人と、軍事のことを掌る兵部卿である豊成が、留守官として拔擢されたと考えられるだろう。つまり、豊成の本官はあくまで「参議」だが、「留守」としての役割は、「兵部卿」としての職能に基づくものであったと考えられるのである_二。

ところで、こうした留守官として都の留守を預かる一方で、豊成

は、天平十四年以降、中衛大将として聖武天皇に近侍し、紫香樂宮に行っていた可能性があるという_三。これが事実だとすると、天皇の行幸に陪従することもあったわけで、この点も考慮してみると、豊成は様々な局面で、仕事をそつなくこなす人物であったという評価も可能である。

豊成については、これまでに、どちらかというと凡庸という人物評価がついてまわってきた。しかし、前述のような彼の働きぶりに加えて、『武智麻呂伝』に「皆有_三才学_一。名聞蓋_レ衆。」とあることや、薨伝に「大臣天質弘厚。時望攸_レ帰」とあることを参考にすると、必ずしも「凡庸」という単純な表現では片付けられないものがあるように思う。

二、左降の理由

豊成が左降された原因は、天平宝字元年（七五七）七月戊午条に、

（前略）勅曰。右大臣豊成者。事_レ君不忠。為_レ臣不義。私附_二賊党_一。潜忌_二内相_一。知_レ構_二大乱_一。無_三敢奏上_一。及_三事発覺_一。亦不_三肯究_一。若_レ怠延_レ日。殆滅_二天宗_一。嗚乎宰輔之任。豈合_レ如_レ此。宜_下停_二右大臣任_一。左_レ降大宰員外帥_上。（後略）

とみえている。榮原氏によれば、

① 忠義ではない。

② 賊党と関係を持つている。

③ 仲麻呂を嫌っている。

④ クーデタ計画を知りながら奏上しなかった。

⑤ 発覚後の追及がぬるかった。

と五つに整理されるというが、氏自身は、いずれが直接の原因であるかについては決め手に欠くとして、「結局、決定的な証拠がないまま、豊成は追い落とされた」としておられる。『武智麻呂伝』が「変事知りて奏さぬこと」のみを左降の理由として挙げていることに留意しておられるところをみると、あるいは、④を第一の原因とみておられるのかもしれないが、結論を急いではない。筆者も、氏の考えに異論があるわけではない。ただ、「橘奈良麻呂の変」の関係者を手がかりにすると、さらに踏み込んだことがいえるのではないかと思う。そこで以下は、この点について述べておく。

「橘奈良麻呂の変」に関わった人物を示す史料の一つに、天平宝字元年八月甲午条がある。ここには、

（前略）尔乃賊臣麿皇太子道祖。及安宿。黄文。橘奈良麻呂。大伴古麻呂。大伴古慈斐。多治比国人。鴨角足。多治比犢養。佐伯全成。小野東人。大伴駿河麻呂。答本忠節等。稟性兇頑。昏心軫虐。不_レ顧_二君臣之道_一。不_レ畏_二幽顯之資_一。潜結_二逆徒_一。

謀傾_二宗社_一。悉受_二天責_一。咸伏_二罪愆_一。

とあり、事件に関わった罪人とみなされ、何らかの処罰を被った人物の名が記されている。ここで問題となるのは、答本忠節と佐伯全成が含まれていることである。なぜなら後述するように、二人はむしろ、奈良麻呂らの行動には批判的であったむきがあるからである。そこで、彼らの動向をいま一度確認し、二人がなぜ罪人と見做されたのかを考えてみたい。

答本忠節は、天平宝字元年七月戊申条に（史料中の番号は、便宜的に筆者が付した。）

（前略）先_レ是。去六月。右大弁巨勢朝臣堺麻呂密奏。①為_レ問_二葉方_一。詣_二答本忠節宅_一。忠節因語云。大伴古麻呂告_二小野東人_一云。有_二三人欲_レ却_二内相_一。汝從乎。東人答云。從_レ命。②忠節聞_二斯語_一。以告_二右大臣_一。③大臣答云。大納言年少也。吾加_二教誨_一宜_レ莫_レ殺之。（後略）

とある、巨勢堺麻呂による密奏の中にその名が出てくる。よって、この史料を少し丁寧に見ておく。

まず、天平宝字元年六月、巨勢堺麻呂が以下のような密奏をする。

① 答本忠節に葉方を聞くため、その邸宅を訪れたところ、忠節が堺麻呂に対し、大伴古麻呂と小野東人が内相（＝仲麻呂）を亡き者にしようとしていることを語った。② その後、忠節は、古麻呂と東人の計画を知ったので、右大臣（＝豊成）に告げた。③ する

と右大臣は、「大納言（＝仲麻呂）はまだ年が若い。自分が教誨を加えるから、殺してはならない。」と述べた。

ここから把握できる忠節の行動は、以下の二点である。第一に、古麻呂と東人の不穏な動きを巨勢堺麻呂に語ったこと。第二に、両者の動向を知ったので、豊成に報告したことである。つまり忠節には、あくまで大伴古麻呂と小野東人の動きを、堺麻呂あるいは豊成に報告しただけであって、政変への加担者と見做される動きは確認できないのである。ちなみに、この人物について、詳しく言及されている福原榮太郎氏^{二四}は、上記二点の行動を把握されたうえで、次のように分析しておられる。

このことから忠節を反仲麻呂派とすることはできないものの、結果として忠節は反仲麻呂派として扱われるに至ったのであり、それは日頃豊成の失脚を目論んでいた仲麻呂が、奈良麻呂の変と豊成とを結びつける結節点として、忠節を奈良麻呂派と断ずる必要が生じたからであろう。

佐伯全成については、天平宝字元年七月に行われた勘問から窺うことができる^{（天平宝字元年七月成案。なお、佐伯全成に関する引用史料は、すべて本案による。）}。史料の引用は必要最小限に留めるが、こちらも詳しくみてみたい。

勘問の内容によると、奈良麻呂から勧誘を受けたのは計三回で、その最初は天平十七年である。「天平十七年。先帝陛下行幸難波」。

寝膳乖^レ宜。」とあるので、天平十七年九月の出来事であろう^{二五}。このとき奈良麻呂は、全成を仲間に取り込むとするが、全成は、

全成先祖。清明佐^レ時。全成雖^レ愚。何失^二先迹^一。実雖^二事成^一。

不^レ欲^二相從^一。

と答え、奈良麻呂の誘いを退けている。この直後、勧誘に失敗した奈良麻呂が、「莫^レ導^二他人^一」と述べているから、全成は毅然とした態度で拒んだのではなからうか。

奈良麻呂による二度目の勧誘は、「大嘗歳」におこなわれた。阿倍内親王が即位される天平勝宝元年のことであろう。奈良麻呂は、この時に全成を引き込み事を起こそうとしていた。これに対し全成は、

朝廷賜^二全成高爵重祿^一何敢違^レ天発^二惡逆事^一。是言前歳已忘。

何更発耶。

と述べ、再度拒否している。ここで、奈良麻呂が語る陰謀を「惡逆事」と捉えていることには、特に注意しておきたい。

三度目の勧誘は、「去年四月」におこなわれた。全成が勘問を受けたのが天平宝字元年だから、「去年」とは天平勝宝八歳をいうのである。このとき奈良麻呂は、全成を大伴古麻呂に会わせ、共に政治の情勢を語りあわせた。結局、全成は「此事無道。実雖^二事成^一。豈得^二明名^一。」と吐き捨てて、その場を退去している。ここでも全成は、計画に与することを拒み、奈良麻呂らを批判しているのである。

このように全成は、変事に参加することを一貫して拒否している。さらに、陰謀を「惡逆事」と述べていることから判断すると、奈良麻呂らとは相反する立場であったといえるだろう。これは「惡逆」が、いわゆる八虐の中に含まれる重罪であることから容易に推測できる。すなわち全成は、奈良麻呂らと行動を共にすることが、国家に対する大罪であると自覚していたのである。ちなみに全成は、勘問を受けた直後に自害しているが、おそらくは自身にかかる嫌疑を恥じたからであろう。あるいは、実に十五年もの間、大乱の計画を知りつつも、それを奏上しなかったことが罪であるという、自責の念があつたのかもしれない。

以上のように、答本忠節と佐伯全成が、奈良麻呂らの計画に積極的であつた様子はみられない。むしろ否定的であつたとさえいえる。つまり、事件後の供述だけでは、二人を罪人とみなす証拠はないのである。そういった意味では、彼らもまた、確たる根拠がないまま処罰されたのであり、この点で豊成と類似している。

そこで、再び豊成の左降理由を考えてみると、豊成・忠節・全成の三人には、共通する罪があることに気がつく。それは、すなわち「知_レ構_二大乱_一。無_二敢奏上_一。」である。このことは、鬪訟律密告謀反大逆条に（新訂増補国史、大系本「律」）、

凡知_二謀反及大逆_一者。密_三告隨近官司_一。不_レ告者絞。

とあることによつて裏付けられる。この規定に基づくと、「謀反」と「大逆」のを知つた場合、それを「隨近官司」に告げなければ絞首刑になる。とすると、答本忠節と佐伯全成は、間違いなく本条に抵触している。このことは、彼らが奈良麻呂らの「謀反」計画を知つていながらも、発覚後の糾問を受けるまで暴露しなかったことから疑いようがない。もつとも忠節については、堺麻呂や豊成に不穏な動きを語つてはいるが、結局それが公にはならず、朝廷の耳に入ることはなかった。よつてそれは、密告をしたとはいひ難く、謀反者と見做される要因となつたのであろう。また、鬪訟律密告謀反大逆条に類似する規定として、職制律事_レ應奏而不奏条に（新訂増補国史、大系本「律」）、

凡事_レ應_レ奏而不_レ奏。不_レ應_レ奏而奏者。杖七十。應_二言上_一而不_二言上_一。雖_二奏上_一而不_レ待_レ報而行亦同。不_レ應_二言上_一而言上。及不_レ由_レ所_レ管而越言上。應_二行下_一而不_二行下_一。不_レ應_二行下_一而行下者。答五十。

とあることも参考にならう。奏上すべきことを奏しなかった場合には罰せられるのである。さらに、陰謀のことを密奏した巨勢堺麻呂や上道斐太都らが、逆に、昇叙に預かっていることも傍証となる（天平元年七月、辛亥条）。こうした諸点から類推すると、危急なことを知りながらも、それを奏上しなかったということが、最大の罪であつたと判断できるのではなからうか。

ところで、『懷風藻』には、いわゆる大津皇子事件に際し、河島皇子が大津皇子謀反を朝廷に訴えたことの是非についての論評がある。その全文を掲げておこう。

河島皇子。一首。

皇子者。淡海帝之第二子也。志懷溫裕。局量弘雅。始与^二大津皇子^一。為^二莫逆之契^一。及^二津謀^一逆。島則告^レ變。朝廷嘉^二其忠正^一。朋友薄^二其才情^一。議者未^レ詳^二厚薄^一。然余以為。忘^二私好^一而奉^レ公者。忠臣之雅事。背^二君臣^一而厚^レ交者。悖德之流耳。但未^レ尽^二爭友之益^一。而陷^二其塗炭^一者。余亦疑之。位終^二干淨大参^一。時年三十五。

ここには、「朝廷其の忠正を嘉みすれど、朋友其の才情を薄みす」とある。つまり、河島皇子の行為を朝廷側ではその忠誠を称賛し、周りの友人らは薄情と批難したというのである。また、「余以為えらく」として、『懷風藻』編者は、「私好を忘れて公に奉ずることは、忠臣の雅事、君親に背きて交を厚くすることは、悖德の流ぞ」と評している。すなわち編者は、河島皇子が変事を密告したことについて、「忠臣の雅事」と捉えていたのである。ということとは、世の人々（史料でいう朋友）から薄情だと批判されても、私情を捨てて行動するのが誠の忠臣であるという意識が、古代社会には存在していたことが確かとなる。しかも、これが奈良時代にも確認できることは、養

老五年（七二一）正月甲戌条が示している。なぜならば、そこには元正天皇の詔として、「至公無^レ私。国士之常風。以^レ忠事^レ君。臣子之恒道焉。」とあって、忠誠を以て天皇に奉仕することは、臣下にとって当然の行為であるとされているからである。

こうしてみると、奈良麻呂らの計画を告げなかった豊成の態度は、当然「忠臣の雅事」ではなく、朝廷の意に反していたと言わざるを得ない。となると、「知^レ構^二大乱^一。無^二敢奏上^一。」というのが最大の罪であつたと考えられるのではなからうか。そうすると、『武智麻呂伝』が豊成の左降理由を「坐^二変事知而不^レ奏^一。」と記していることも、うまく説明できるだろう。すなわち、これが豊成の最大の過失だったのである。要するに豊成には、奈良麻呂らの計画を知りながら、それを奏上しなかったという明確な左降理由が存在したのである。

むすび

以上、本章では、榮原氏の研究に導かれながら、多少の補足をこころざしてきた。これを要すれば、①豊成がしばしば留守官に任じられたことは、聖武天皇と豊成との信頼関係を示す、②留守官や行幸に陪従し、その局面で任務をそつなく遂行する豊成を、凡庸と評

するのには疑問が残る、③豊成左降の最大の理由は、奈良麻呂らの計画を知りながらも、それを天皇に奏上しなかったというところにある、などの諸点である。特に②などは、第一章の補強になるであろう。推論の域を出ない点もあるが、ひとまずここに私案を提示し、本章のまとめとしておきたい。

【註】

一 栄原永遠男「藤原豊成―軍事と仏教―」（『平城京の落日』所収、清文堂出版、二〇〇五）。本章で栄原氏の論を踏まえる場合は、すべてこの論による。

もつとも、本文で挙げた事件を扱った研究や、弟である仲麻呂との対比の中で、豊成について触れられることはある。例えば、林陸朗氏（『光明皇后』／吉川弘文館、一九九六）は、「温和な性質で手腕家といえる人ではなかった」と述べられており、松尾光氏（『橘奈良麻呂の変』／『古代の王朝』と人物、所収、笠間書院、一九九七）は、豊成の人物像について、薨伝（天平神護元年十一月甲申、本稿では、本条を薨伝と記す。）に「大臣天質弘厚。時望攸_レ帰」とあることから、「温厚な人柄。悪くいえば凡庸な人物」と見做されている。また、瀧浪貞子氏（『帝王聖武』、講談社、二〇〇〇）も同様な評価をされている。しかし、「温厚な人柄」であることを「凡庸な人

物」であるとする根拠はない。

二 栄原氏は提示された系図の中で、百能の父を房前と記されている。しかし、百能の薨伝には「兵部卿従三位麻呂之女也」とあるため（延暦元年（七二八）四月己巳冬）、麻呂の娘でなくてはならない。また、こうした誤りから、豊成の息子である縄麻呂の母が百能となっている。しかし、『尊卑分脉』によると「母参議房前女」とあるので、縄麻呂の母は房前の娘となる。

三 仁藤智子「行幸時における留守形態と王権」（『平安初期の王権と官僚制』所収、吉川弘文館、二〇〇〇）。

四 仁藤氏前掲註三論文。

五 『公卿補任』和銅三年条による。本文で触れた他に、中納言として、栗田安麻呂、阿倍宿奈麻呂、小野毛野、中臣意美麻呂の五人がいる。

六 黛弘道『『日本書紀』と藤原氏』（『律令国家成立史の研究』所収、吉川弘文館、一九八二）。

七 こうした見方をしている論として、野村忠夫「和銅元年体制」（『律令政治の諸様相』所収、塙書房、一九六三）、笹山晴生『奈良の都』（吉川弘文館、一九九三）、高島正人『藤原不比等』（吉川弘文館、一九九九）がある。

八 木本好信氏（「石上麻呂と藤原不比等」／『律令貴族と政争』所収、増訂版、二〇〇一）は石上麻呂について、「百姓追慕。

無レ不三痛惜二焉。」とあることを根拠に、「人民が追慕してやまなかったわけであるから、朝廷内でも信頼されなかったわけがない」と評価されている。

九 聖武天皇との信頼関係については、榮原氏によって、豊成と写経事業の関係から指摘がある。

一〇 仁藤氏前掲註三論文。

一一 豊成の参議就任は、天平九年十二月（天平九年十一月辛亥）。

一二 事例は異なるが、仁藤氏（前掲註三論文）は、小田王が留守官に補任されることについて、天平十六年に造作が中止された恭仁宮で、残務整理があつたことを想定し、木工頭であつた小田王が留守官に任命されたのではないかと指摘されている。小田王の兼官は確認できないが、史料に明記される「木工頭」が、留守時の役割であつた可能性は大きいだろう。

一三 榮原氏は、紫香樂宮跡から出土している、「中衛」と書かれた札付を根拠とされている。

一四 福原永太郎「橘奈良麻呂の変における答本忠節をめぐる」『続日本紀研究』二〇〇、一九七八。

一五 天平十七年九月癸酉条から、聖武天皇が難波行幸中に、不予と

なっていることが確認できる。

第三章 「橘諸兄政権（体制）」について

はしがき

橘諸兄といえ、生前にして正一位左大臣となり、位人臣を極めるにいたった人物である。その人物像は、「温厚な人柄であった」と評されることが多い。周知のとおり、諸兄はいわゆる「橘諸兄政権（体制）」と呼ばれる勢力を形成し、天平後期の政治運営を担当することになる。ところが、後述するように、こうした政権が成立する時期は諸説わかれるところであり、統一された認識ではないのが現状である。また、同時期に活躍したと思われる鈴鹿王を別にしたままでは、天平後期の政治体制を把握することはできないのではないかと考えている。

そこで本章では、諸兄の生涯を跡付けながら、「藤原四子」亡き後の政治体制について、卑見を交えながら論じてみたい。特に鈴鹿王の存在に留意しつつ、「橘諸兄政権（体制）」の成立について言及してみたい。

一、出生から参議就任

橘諸兄は、臣籍降下をする前は葛城王の名で知られている。敏達天皇の三世孫、贈従二位栗隈王の孫にして、従四位下美努王の子である。母は県犬養三千代で、七世紀末から八世紀前半の宮廷において、絶大な影響力を持っていた。葛城王の誕生はというと、『尊卑分脉』や『公卿補任』の諸伝に、天平宝字元年（七五七）の薨去時に七十四歳と明記されているため、逆算すると天武天皇十三年の生まれとなる。

国史における初見は、天平元年（七二九）三月甲午条で、従四位上から正四位下への昇叙記事である。もつとも、これ以前の経歴に関しては、天平元年三月甲午条以前の「葛木王」をたどることで確認することができる。すなわち、葛城王Ⅱ「葛木王」なのである。

「葛木王」は、和銅三年（七一〇）正月戊午条に初見し、无位から従六位上を授かっている。同年十二月に馬寮監に補任され（和銅三年十二月乙巳条）、養老元年（七一七）正月には従五位上（養老元年正月乙巳条）、同五年（七二二）には正五位下（養老五年正月壬子条）、同七年（七二三）には正五位上となり（養老七年正月丙子条）、神亀元年（七二四）二月には従四位下となっている（神亀元年二月壬子条）。以後、「葛木王」は史料上から姿を消すが、その到達位階が葛城王の初見記事につながるからみて、葛城王と同一人物であることは疑いないだろう。

では、何ゆえ「葛木王」との表記が葛城王に変化したのであろう

か。この点については、近藤信義氏^五が、「尚長屋王の変より葛木王は葛城王と変わる」とわずかに触れられているだけなので、その理由に関し、若干の私見を述べておきたいと思う。

そこで注目してみたいのが、天平元年三月以前に、諸兄とは別の「葛木王」が存在していることである。ここでいう「葛木王」とは、天平元年二月癸酉条に、

令^三王自^一尽^一。其室^三品吉備内親王。男從四位下膳夫王。无位桑田王。葛木王。鉤取王等。同亦自^一終。乃悉捉^三家内人等^一。禁^三着於左右衛士兵衛等府^一。

としてみられる人物である。右の史料によると、位階が「无位」であることや、王（＝長屋王）の子であることなどが読み取れる。そのため、神亀元年に従四位下となる「葛木王」とは、まず間違いなく別人である。よって、便宜的に諸兄ではない「葛木王」を「无位葛木王」としておく。

ところで、近藤氏の指摘によると、表記の変化は「長屋王の変」を境にみられるという。先に掲げた天平元年二月癸酉条は、事変の流れを示す一部であり、「无位葛木王」は罪人と見做され自経したと考えられる。そうすると、これが動機となって「葛城王」と改名した可能性があるのではなからうか。このことは、例えば天平宝字元年閏八月癸亥条に、

夫人正二位橘朝臣古那可智。无位橘朝臣宮子。橘朝臣麻都賀。又正六位上橘朝臣綿裳。橘朝臣真姪。改^三本姓^一賜^三広岡朝臣^一。從五位下出雲王。篠原王。尾張王。无位奄智王。猪名部王賜^三姓豊野真人^一。

とあることが、一つの根拠となる。この記事は「橘奈良麻呂の変」後のものであり、前半部には、橘古那可智をはじめとする、宮子・麻都賀・綿裳・真姪の五名が、広岡姓を賜わっていることが記されている。つまりこの賜姓は、逆賊となった奈良麻呂と同姓であることを忌み嫌い、姓を変えるための措置であったと考えることができるだろう。また、後半部では、鈴鹿王の子である出雲王や奄智王らが豊野真人姓を賜っている。この王らは、「奈良麻呂の変」に大きく関わりをもった黄文王や安宿王と従兄弟の關係にある。近親の者が罪人となり、それと同じ王族であることを恥じ、臣籍に降下したのではなからうか。

こうした事例から類推する限りでは、奈良時代には罪人と関わりがあることを忌避し、姓を改めるという行為がなされていたと推測される。であるならば、葛城王の場合も、罪人となった「无位葛木王」と同名であることを憚り、改名した可能性は大きいだろう。

さて、「長屋王の変」後、葛城王は正四位下となり^{（天平元年三、四月甲午癸）}、同年九月には左大弁に就任する^{（天平元年九、十月乙卯癸）}。さらに、天平三年（七三一）八

天平四年正月甲子条。

二、「藤原四子」の薨去と大納言就任

天平八年十一月丙戌条

参照。〔图1〕

【図1】 諸兄と藤原氏の関係系図



産や声望のみと理解するのが穏当なのではなからうか。

天平九年（七三七）是年条は、これを次のように伝えている。

是年春。疫瘡大發。初自筑紫来。経夏涉秋。公卿以下天下

この疫病の大流行によって藤原四子は相次いで没し^九、当時、唯一の中納言であつた多治比県守も倒れている^(天平九年六月丙寅)。中川収氏^{二〇}の分析によると、八名いた議政官構成員のうち五名を失い、八省卿で生存が明らかかな者は一名で、五位帯位者の四割が卒去するなど、内官の三割近くが犠牲になったという。

このように、逼迫した太政官を再建するため、同九年九月に新たな人事が行われる^(天平九年九月己亥)。このとき諸兄は、中納言を経ずして大納言に就任し、序列第二位に昇るのである。このときの太政官構成を、『公卿補任』天平九年条を参照し掲げておく。

知太政官事 従三位 鈴鹿王

大納言 従三位 橘宿祢諸兄

中納言 従三位 多治比真人広成

参議 正四位下 大伴宿祢道足

一見すれば明らかのように、知太政官事の鈴鹿王を除くと、諸兄は大納言として太政官首班の座に就いたといえる。なんとすれば、『令義解』職員令太政官条に、「謂与^三右大臣以上^一共参^三議天下之庶事^一。若右大臣以上並無者。即大納言得^三専行^一。」という解釈があるからである。これによる限り、大納言は大臣不在の場合であれば、それに代わって「得^三専行^一」ことができる^二と認識されていたことがわかるだろう。したがって、天平九年九月の場合、大臣を欠く廟堂では、

唯一の大納言たる諸兄が「得^三専行^一」資格を有していたことになる。

こうした事実関係をもつて、先行する学説のいくつかは、諸兄を中心とする政治体制が発足したと主張されている^二。その拠りどころとなるのは、鈴鹿王が就任した知太政官事が、「長屋王の変後、その地位は著しく形骸化し、機能はほとんど作用減退の状態」^{二三}にあったという点である。要するに、機能を失った知太政官事では政治を領導していくことはできないはずであり、だとすると、大納言の諸兄が首席となる政治体制であつたとみるのである。

しかし、この見方には疑問が残る。というのは、そもそも知太政官事の形骸化は、天平元年四月癸亥条に、

(前略) 太政官処分。舍人親王参^三入朝^一庁^二之時。諸司莫^二為^レ之下^レ座。(後略)

とみられる太政官処分を論拠とするのであるが、第五章で詳述するように、ここから知太政官事の形骸化を導くことはできないと判断されるからである。知太政官事鈴鹿王を別にしたままでは、当該期の政治体制の実態は把握できないと考える。

三、右大臣への就任

諸兄は大納言就任後、わずか三ヶ月たらずで右大臣に就任し、位

階も正三位となる（天平十年正月壬午癸）。『公卿補任』天平十年（七三八）条をみてみると、

右大臣	正三位	橘宿祢諸兄
知太政官事	正三位	鈴鹿王
中納言	從三位	多治比真人広成
参議	正四位下	大伴宿祢道足
	從四位下	藤原朝臣豊成
非参議	從三位	藤原朝臣弟貞
		百済王南典

とあつて、ここで序列第一位となつてることがわかる。

先行学説の中には、この右大臣就任をもつて、諸兄政権の確立と主張しているものがある^{二三}。とりわけ横田健一氏^{二四}は、「この黄金時代の政権担当者として、太政官の長官、今日の首相の地位に実に十八年間（七三八―七五六）の長きにわたつて、ついていたのが橘諸兄であつた」と述べられ、

七三八（天平十年）としたのは諸兄が右大臣に任じられたのが同年正月十三日だからである。（中略）鈴鹿王の知太政官事を別とすれば人臣最高位にいるが、大納言は太政官の長官ではないので天平十年から数えた。

と、その根拠を明かしている。なるほど、諸兄は右大臣となつて太

政官首席の地位におり、構成上、諸兄政権と称しても差し障りないだろう。しかし、先の天平九年説と同様に、知太政官事鈴鹿王を「別」にして結論づけられていることに問題が残るのではなからうか。また、木本好信氏^{二五}は、「藤原広嗣の乱」を契機とし、事件後の処理として諸兄が反対勢力を一掃したとの見方から、これを諸兄政権の確立とみておられる。しかし、これなども鈴鹿王を別にした見解なのではないかと思う。

諸兄が右大臣であるときの施策については、岸俊男氏^{二六}による詳論がある。氏の検証によつて、「天平九年七月以降は、政局の上における新しい時期であると考えるべきであり、それが諸施策の上にも反映している」ことから、「凶作・疫病による窮迫した当時の社会情勢に対処してとられた処置」や、「地方政治体制の整備簡素化」などが実施されたことが明らかとなつている。そして氏は、分析結果を総括し、

天平三年以来の連年の凶作飢饉による社会の疲弊動揺のうちに政権を受け継いだ諸兄らは、その危機に対処して前述のような動向を内包した数々の重要施策をつぎつぎと実施してきた。というよりも律令制の矛盾、社会の窮状に推されて、初期律令制に比して著しく後退的・消極的な施策をとらざるをえなかつたと表現すべきであらう。

と、当該期の政治政策を特徴づけておられる。

ところで、諸兄が主導する政策の一つとして、恭仁京への遷都が数えられる^{一七}。天平十二年（七四〇）十二月戊午条に、「右大臣橘宿祢諸兄在^レ前而発。經^コ略山背国相楽群恭仁郷^一。」とある一文からみて、これに大きく関与していたことが察知される。この後、天平十四年（七四二）八月以降、聖武天皇は幾度か紫香樂宮に行幸されている。ここに、当時の政治体制を知るうえで、重要な手掛かりがみられるので、関係する史料を列挙しておきたい。

【史料1】天平十四年（七四二）八月己亥条

行^コ幸紫香樂宮^一。以^三知太政官事正三位鈴鹿王^一。左大弁從三位巨勢朝臣奈氏麻呂。右大弁從四位下紀朝臣飯麻呂。為^二留守^一。摂津大夫從四位下大伴宿祢牛養。民部卿從四位下藤原朝臣仲麻呂為^二平城留守^一。即日。車駕至^二紫香樂宮^一。

【史料2】天平十四年十二月庚子条

行^コ幸紫香樂宮^一。知太政官事正三位鈴鹿王。左大弁從三位巨勢朝臣奈氏麻呂。右大弁從四位下紀朝臣飯麻呂。民部卿從四位下藤原朝臣仲麻呂等四人為^二留守^一。

【史料3】天平十五年（七四二）四月壬申条

行^コ幸紫香樂^一。以^三右大臣正二位橘宿祢諸兄^一。左大弁從三位巨勢朝臣奈氏麻呂。右大弁從四位下紀朝臣飯麻呂。為^二留守^一。遣^二

宮内少輔從五位下多治比真人木人^一為^二平城宮留守^一。

【史料4】天平十五年七月癸亥条

行^コ幸紫香樂宮^一。以^三左大臣橘宿祢諸兄^一。知太政官事鈴鹿王。中納言巨勢朝臣奈氏麻呂為^二留守^一。

以上の記事から特筆しておきたいことは、当該期において、太政官の上位に位置していた諸兄か鈴鹿王のどちらかに対し、京師の留守を任せていたことである。ひるがえつてみると、一方を行幸に陪從させ、もう一方には留守を命じていたのである。特に鈴鹿王は、先の四例を含め計七度も留守を預かっている（^{四二}）。しかも、前掲【史料3】と【史料4】の事例以外では、諸兄はすべて天皇に陪從している。こうした傾向からすると、諸兄はどちらかという陪從を中心にしており、鈴鹿王は主に留守を委ねられていたといえそうである。

遷都、もしくは行幸の際、留守として残されることは、天皇からの信頼を失い、政界から除外されたとみる意見もある^{一八}。しかし、第二章で触れたように、留守を命じられたからといって、天皇との人的関係が希薄になるわけではないだろう。むしろ、留守を任されていることが天皇から信頼されていることの証であって、留守時に帯びている官職の職能が、その時の役割となっていた可能性もある。だとすると、諸兄と鈴鹿王の場合、太政官首班の座にいる二人を行幸

【図2】天平期の留守

番号	年月日	留守者	位階	記載官職	兼官	留守の場所	備考
1	天平十二年二月甲子条	鈴鹿王	正三位	知太政官事	式部卿	平城	二月二十七日、車駕宮に還る。
		藤原豊成	正四位下	兵部卿	参議・中衛大将		
2	天平十二年十月壬午条	鈴鹿王	正三位	知太政官事兼式部卿		平城	
		藤原豊成	正四位下	兵部卿兼中衛大将	参議		
3	天平十三年閏三月乙丑条	大野東人	従三位	大養徳国守	参議	平城	五位以上の平城居住を禁止する。
		藤原豊成	正四位下	兵部卿	参議・中衛大将		
4	天平十三年九月丁丑条	藤原豊成	正四位下	参良留守兵部卿	参議・中衛大将	恭仁	十月二日、車駕宮に還る。
5	天平十四年八月己亥条	鈴鹿王	正三位	知太政官事	式部卿	恭仁	九月四日、車駕宮に還る。
		巨勢奈氏麻呂	従三位	左大弁	参議・神祇伯・春宮大夫		
		紀麻呂	従四位下	右大弁			
		大伴牛養	従四位下	摂津大夫	参議		
		藤原仲麻呂	従四位下	民部卿			
6	天平十四年十月庚子条	鈴鹿王	正三位	知太政官事	式部卿	恭仁	天平十五年正月二日、車駕紫香案より至れり。
		巨勢奈氏麻呂	従三位	左大弁	参議・神祇伯・春宮大夫		
		紀麻呂	従四位下	右大弁			
		藤原仲麻呂	従四位下	民部卿			
7	天平十五年四月壬申条	橘諸兄	正二位	右大臣		恭仁	四月十六日、車駕宮に還る。
		巨勢奈氏麻呂	従三位	左大弁	参議		
		紀麻呂	従四位下	右大弁	参議		
		多治比木人	従五位下	宮内少輔			
8	天平十五年七月癸亥条	橘諸兄	(従一位)	左大臣		恭仁	十一月二日、天皇恭仁宮に還る。
		鈴鹿王	(従二位)	知太政官事	式部卿		
		巨勢奈氏麻呂	(従三位)	中納言	参議		
9	天平十六年閏正月乙亥条	鈴鹿王	従二位	知太政官事	式部卿	恭仁	十三日、安積親王薨す。
		藤原仲麻呂	従四位上	民部卿	参議・左京大夫		
10	天平十六年二月丙申条	鈴鹿王	従二位	知太政官事	式部卿	恭仁	二月二十四日(元正)太上天皇及び橘諸兄、留まりて難波宮に在り。 四月二十三日紫香案宮を営す。
		小田王	従五位下	木工頭			
		大伴牛養	従四位上	兵部卿	参議		
		大原授井	従四位下	大藏卿			
		穂積老	正五位上	(大藏)大輔			
		紀清人	正五位下	治部大輔			
		巨勢島村	外従五位下	左京亮			

と留守とに分けることで連携・協力をさせて、その時々で必要となる政策などを円滑に進めていくための人事だったのではなからうか。
 なお、当該期における留守官については、第七章にて論じるため、詳しくはそちらを参照していただきたい。

四、左大臣就任から薨去

天平十五年五月、阿倍内親王が五節の舞を舞い、聖武天皇と元正太上天皇による、親子の道理を群臣に理解させるためのやりとりが行われた^(天平十五年五月癸亥条)。この際、君臣・親子の道理を忘れることなく先祖の名を大切にし、長くお仕え申し上げよとの意から、冠位を上げるという詔が発せられた。諸兄はこれによって従一位を授かり、左大臣に就任することになる。

諸兄は、則闕の官たる太政大臣を除くと、令制官第一位の左大臣にまで昇りつめる。そして、この従一位左大臣という官位をもつて、当時の政策を諸兄が恣意的に行っていたのであれば、それを「橘諸兄政権(体制)」と見做してもよいかもしれない。しかしながら、当該期の政治政策には、あくまで聖武天皇の意思が明確に反映されている。これを最も端的に表しているのが、天平十五年十月辛巳条の詔である。そこには、「夫有三天下之富一者朕也。有三天下之勢一者朕

也。」との御意があり、天皇の強い意志を察知し得る。とすると、この頃の政治運営は、諸兄を首座とする太政官が聖武天皇の意向を尊重して、推進していたということになるだろう。もつとも、遷都や行幸の時に確認される留守官就任のことを考慮すると、諸兄と鈴鹿王とで、行幸先（新都）か都（旧都）にわかれ、それぞれの「官」（太政官と留守官）の長官として活躍していたと想定される。つまり鈴鹿王も、この時期の政策には必要不可欠の人材だったといえるだろう。要するに、聖武天皇が主導する政策を諸兄と鈴鹿王の双方が政府の首班格として、領導していく体制だったと考えられるのである。

関晃氏^{一九}は、この頃の政治体制について、

この時期の政府首班を鈴鹿王とすることは、明らかに問題であつて、この時期について、橘諸兄政権とか橘諸兄時代というようない方が一般に用いられているのは、決して理由のないことではない。

と述べられている。傾聴すべき指摘であり、鈴鹿王を首班と考えることに問題があるとする点に異論はない。しかし、天平九年以降の鈴鹿王に重点を置いてみると、彼が当時の政策に無関係であるとは言い難く、「諸兄政権（体制）」と称することも困難なのではなからうか。

さて、天平十七年（七四五）九月になると、知太政官事鈴鹿王が薨去する。この時の太政官構成を示せば、次のようになる（『公卿補任』^{二〇}）。天平十七年冬。

左大臣 従一位 橘宿祢諸兄

中納言 従三位 小勢朝臣奈弓麿

藤原朝臣豊成

参議 従三位 大伴宿祢牛養

正四位上 藤原朝臣仲麿

従四位下 紀朝臣麻路

非参議 従三位 藤原朝臣弟貞

百済王南典

竹野王

一見すれば明らかなように、諸兄の立場は、他の公卿らに比べ突出している。さらに諸兄は、天平十八年（七四六）四月に大宰帥をも兼任し（天平十八年四月丙戌条）、天平勝宝元年（七四九）四月、ついに正一位を拝受する（天平勝宝元年四月丁未条）。これ以後、諸兄は正一位左大臣兼大宰帥として、太政官第一位の座を占め続けることになる。しかし、聖武天皇の讓位を契機とし、藤原仲麻呂が台頭することによって^{二一}、次第に史料上から姿を消していく。そして、天平勝宝七年（七五五）十一月、諸兄の祇承、佐味宮守による誣告があつて、諸兄は致仕することになる（天平宝字元年六月甲辰条）。この一件が、諸兄と仲麻呂との政争の一環かどうかは

判断しかねるが、天平宝字元年（七五七）正月、七四歳でその一生を終えるのである（天平宝字元年正月乙丑冬）。

こうした生涯を送った諸兄の人物像について、横田健一氏^三は、「運にめぐまれなければ彼ていどの才能では、左大臣までゆける人物ではなかった」と酷評されている。また、今井啓一氏^{三三}も、「橘諸兄はげにラッキーボーイであつた」とし、「橘諸兄は凡庸の貴公子であつた」と見做されている。さらに、市村宏氏^{三三}は、「この人は大政治家の器量を具えた人ではなく、今日いうところの文化人であつたし、また幸運児でもあつた」と分析され、黛弘道氏^{三四}も「政治家としてけつして有能であつたとはいえない。彼の出世もひとえに三千代のおかげ」と述べておられる。こうした見解をまとめてみると、諸兄の政治家としての評価は決して高いものではない。

たしかに、先学が説かれるように、母である三千代の力が大きく影響していることは否めない。そして、天平九年に疫病が流行し、大臣への道が開かれたことを踏まえてみると、運に恵まれていたとの評価も妥当である。けれども、運に恵まれていただけで、正一位左大臣にまで昇りつめることができるのであろうか。

例えば「長屋王の変」後、参議として公卿の仲間入りをし、絶妙ともいえる時期に臣籍降下を行っているのは、諸兄に政治家としての手腕があつたからではなからうか。また、「母である三千代のおか

げ」なのかもしれないが、そうではなく、その母の権威を「利用した」とも考えることができるだろう。このようなことは、藤原不比等が娘を諸兄に嫁がせていたなど、不比等が期待を寄せていたことから類推される。第二章で明らかにしたように、温厚であるということは、すなわち凡庸ではないのである。

したがって、これらの諸点を併考してみると、橘諸兄という人物は、運に恵まれただけの存在ではなく、温厚にして非凡な才を持った人物であつたと評価することができだろう。だからこそ、正一位左大臣という位人臣を極めることに成功したのではなからうか。

むすび

本章で述べてきたことを要約すると、およそ次のようになる。

一、諸兄の生涯を官歴を中心に振り返った。後掲の年譜は、そのまとめである。

二、従来提唱されている、「橘諸兄政権（体制）」の成立時期について卑見を述べた。主に、天平九年の大納言就任時、天平十年の右大臣就任時、天平十二年の「広嗣の乱」後、と大きく三つの時期が提示されていたが、知太政官事鈴鹿王を重視すべきことを指摘し、再検討を促した。

【表 1】橘諸兄年譜

天皇	太上天皇	西暦	年月日	橘諸兄	年齢	一般事項
天武天皇		684	天武天皇十三年	諸兄誕生。	一歳	
持統天皇		686	朱鳥元年九月丙午条		三歳	天武天皇崩御。
文武天皇	持統太上天皇	702	大宝二年十二月甲寅条		十九歳	持統太上天皇崩御。
		703	三年正月壬午条		二十歳	詔して、三品刑部親王に太政官の事を知らしむ。
		705	慶雲二年七月丙午条		二二歳	二品穗積親王に詔して太政官の事を知らしむ。
		707	四年六月丁卯条		二四歳	文武天皇崩御。
元明天皇		708	和銅元年五月辛酉条		二五歳	從四位下美努王卒す。
			十一月廿五日			県犬養橘三千代、橘宿禰の姓を賜う。
		710	三年正月戊午条	從五位下を授けられる。	二七歳	
		711	四年十二月壬寅条	馬寮監に補せられる。	二八歳	
元正天皇	元明太上天皇	717	養老元年正月乙巳条	從五位上を授けられる。	三四歳	
		720	四年八月甲申条		三七歳	詔して舍人親王を以て知太政官事と為す。
		712	五年正月壬子条	正五位下を授けられる。	三八歳	
			十二月己卯条			元明太上天皇崩御。
		723	七年正月丙子条	正五位上を授けられる。	四〇歳	
聖武天皇	元正太上天皇	724	神龜元年二月壬子条	從四位下を授けられる。	四一歳	
		729	天平元年二月辛未条		四六歳	長屋王の変。
			三月甲午条	正四位下を授けられる。		
			九月乙卯条	左大弁に補せられる。		
		730	二年九月戊寅条	催造司監に補せられる。	四七歳	
		731	三年八月丁亥条	参議に補せられる。	四八歳	
		732	四年正月甲子条	從三位を授けられる。	四九歳	
		733	五年正月壬子条		五〇歳	内命婦正三位県犬養橘三千代薨す。
		736	八年十一月丙戌条	葛城王・佐為王、上表して橘姓を請う。	五三歳	
			十二月壬辰条	葛城王・佐為王、橘宿禰を賜う。		
		737	九年四月辛酉条		五四歳	藤原房前薨す。
			七月乙酉条			藤原麻呂薨す。
			丁酉条			藤原武智麻呂薨す。
			八月丙午条			藤原宇合薨す。
			九月己亥条	大納言に補せられる。		從三位鈴鹿王を以て知太政官事と為す。
		738	十年正月壬午条	正三位を授けられ、右大臣に補せられる。	五五歳	
			五月辛卯条	橘諸兄らを遣わし、神宝を伊勢大神宮に奉らしむ。		
			十月十七日			右大臣橘卿の旧宅に集い宴飲す。『万葉集』
		739	十一年正月丙午条	從二位を授けられる。	五六歳	
		740	十二年八月戊子条	橘諸兄、勅を宣べて位を授く。	五七歳	
			九月丁亥条			藤原嗣の乱
			十一月甲辰条	正二位を授けられる。		
			十二月戊午条	山背国相楽郡恭仁郷を略す。		
			丁卯条			恭仁京遷都。
		741	十三年三月乙巳条		五八歳	国分寺建立の詔。
			十一月戊申条	橘諸兄奏す。「此の間朝廷何の名号を以てか万代に伝えん」と。		
		743	十五年正月辛丑条	橘諸兄を遣わして、在前に恭仁宮に還らしむ。	六〇歳	
			三月癸卯条	橘諸兄を遣わして、寺に就て衆僧を慰勞せしむ。		
			四月壬申条	恭仁京の留守に補せられる。		
			五月癸卯条	從一位を授けられ、左大臣に補せられる。		
			乙丑条			聖田永年私財法。
			七月癸亥条	恭仁京の留守に補せられる。		
			十月辛丑条			盧舍那仏造立の詔。
		744	十六年二月戊午条	太上天皇・橘諸兄、留まりて難波宮に在り。	六一歳	
			二月庚申条			難波宮を皇都と為す。
		745	十七年九月戊午条		六二歳	鈴鹿王薨す。
		746	十八年正月	詔に依えて歌を詠む。『万葉集』	六三歳	
		748	二十年四月庚申条		六五歳	元正太上天皇崩御。
		749	天平勝宝元年四月甲午条	勅して橘諸兄を遣わし、仏に白す。	六六歳	
			丁未条	正一位を授けられる。		
			七月甲午条			聖武天皇讓位。
			十二月丁亥条	橘諸兄、詔を奉て神に白す。		
孝謙天皇	聖武太上天皇	750	二年正月乙巳条	朝臣の姓を賜う。	六七歳	
		752	四年十一月八日		六九歳	左大臣橘家において宴す。『万葉集』
		753	五年二月十九日		七〇歳	左大臣橘家において宴す。『万葉集』
		754	六年三月廿五日	山田御母の宅に宴す。『万葉集』	七一歳	
			七月壬子条			大皇太后宮子崩御。
			七月癸丑条	造山司に補せられる。		
		755	七年五月十一日	右大弁多比国真人の宅に宴す。『万葉集』	七二歳	
			五月十八日	橘奈良麻呂の宅に宴す。『万葉集』		
			十一月廿八日	橘奈良麻呂の宅に集い宴す『万葉集』		
		756	八年二月丙戌	致仕す。	七三歳	
		757	天平宝字元年二月乙卯条	薨去。『公卿補任』・『尊卑分脉』	七四歳	

* 出典がないものは、『続日本紀』による。

三、諸兄が行幸に陪従し、鈴鹿王は主に留守となつてゐる事情に着目し、両者がそれぞれの「官」の長官として、天皇の意向に従つて、時世に必要な政策を運営する構造であつたと主張した。

四、従来、政治家としての評価があまり高くなかつたが、視点を變えてみることで、決してそうではないことを述べた。

これら諸点が、概ね妥当なものであるとすると、今日まで論じられてきた「諸兄政權（体制）」での政策や事件について、再考の余地が残る可能性を提示することができるだろう。ただし、大きく賛同を得るために、検討しなくてはならない課題は多い。しかし、それは今後の課題とし、ひとまず、本章での論を終えておきたい。

【註】

一 坂本太郎『日本全史、二、古代Ⅰ』（東京大学出版会、一九六〇）。
本本好信「橘諸兄と奈良麻呂の変―諸兄の変への関与―」（『日本史学集録』十五、一九九二）。

二 胡口靖夫氏（『美努王をめぐる二、三の考察』、『国史学』九十二、一九七四）は、『日本書紀』や『続日本紀』に登場する美濃王・三野王・弥努王・美努王について、「二人説」を

唱えられている。これに対し、鈴木治氏（『三野王について』、『天理大学季報』九十八、一九七五）は、「一人説」を唱えられている。

三 橘三千代については、義江明子氏の『県犬養橘三千代』（吉川弘文館、二〇〇九）に詳しい。

四 近藤信義「橘諸兄と万葉集」（『国学院雑誌』六十九―一、一九六八）。

五 近藤氏前掲註四論文。

六 市村宏氏「橘諸兄」（『東洋学研究』九、一九七五）。

七 近藤氏前掲註四論文。今井啓一「橘諸兄恭仁京経略の一考察」（『皇學館論争』一一三、一九六八）。

八 今井氏前掲註七論文、藤木邦彦「奈良・平安朝における皇親賜姓について」（『国士館大学人文学会紀要』二、一九七〇）など。

九 天平九年四月、藤原房前が薨去し（天平九年四月辛酉条）、七月には麻呂と（天平九年七月乙丑条）武智麻呂が（天平九年七月丁酉条）八月には宇合が没している（天平九年八月丙午条）。

一〇 中川収「橘諸兄首班体制の成立と構成」（『奈良朝政治史の研究』所収、高科書店、一九九二）。

一一 中川氏前掲註一〇論文。平あゆみ「黄文王帝位継承企謀と橘奈良麻呂の変―長屋王皇統への可能性とその再挫折―」（『政治経済史学』二八七、一九九〇）。

一二 中川氏前掲註一〇論文。

一三 横田健一「橘諸兄と奈良麻呂」(『白鳳天平の世界』所収、創元社、一九七三)。川崎庸之氏「橘諸兄―初期諸兄政權と藤原広嗣の乱―」(『記紀万葉の世界』川崎庸之歴史著作選集一)所収、東京大学出版会、一九八二)。

一四 横田氏前掲註一三論文。

一五 木本好信「石上乙麻呂と橘諸兄政權」(『奈良朝政治と皇位繼承』所収、高科書店、一九九五)。

一六 岸俊男「郷里制廃止の前後」(『日本古代政治史研究』所収、塙書房、一九六六)。

一七 今井氏前掲註七論文。

一八 野村忠夫「和銅元年体制」(『律令政治の諸様相』所収、塙書房、一九六三)、黛弘道「『日本書紀』と藤原氏」(『律令国家成立史の研究』所収、吉川弘文館、一九八二)、笹山晴生「奈良の都」(吉川弘文館、一九九三)、高島正人「藤原不比等」(吉川弘文館、一九九九)。

一九 関晃「知太政官事と藤原氏」(『日本古代の国家と社会』所収、吉川弘文館、一九九七)。

二〇 仲麻呂についての研究は膨大であるが、岸俊男氏(『藤原仲麻呂』吉川弘文館、一九六九)や

木本好信氏(『藤原仲麻呂 ミネルヴァ書房、二〇一〇)が、彼の生涯を跡付けつつ詳しく論じられている。

二二 横田氏前掲註一三論文。

二三 今井氏前掲註七論文。

二四 市村氏前掲註六論文。

二五 黛弘道「橘三千代」(『古代を飾る女人像』所収、講談社、一九八五)。

第四章「藤原広嗣の乱」に関する一考察

はしがき

「広嗣の乱」の研究は、多岐にわたってなされており、①政治史的な視点、②軍事関係からの考察、③史料批判、④その他の観点からの追究、といった具合に分類できるだろう^一。こうした研究の中で、国家に対する反体制的な反乱とみることや、貴族間での権力（勢力）抗争であったと位置づけることについては大方一致しており、いわゆる通説として広く知られている。そして、このような見解は、広嗣挙兵以前の政治動向が前提となつて導きだされている。すなわち、天平九年（七三七）に発生した疫病の大流行によつて^{（天平九年是歳癸）}、藤原氏勢力は衰退を余儀なくされたという背景である^二。要するに、多くの先行学説が、広嗣が兵を起こした根底には、衰退しつつあった藤原氏勢力の復興があると説いておられるのである。

ところが筆者は、第一章にて、これまで「藤原四子体制（武智麻呂政権）」と称されてきた、「藤原四子」が結束することによつて生じる政治勢力について再検討を試みた。詳細は譲るが、そこでは不比等・武智麻呂・豊成の比較検討を通じ、不比等に比して、武智麻呂は豊成の出世に関与していないことを明らかにした。そして、こ

の事実から、「藤原四子体制（武智麻呂政権）」に疑義を呈している。そうすると、「藤原四子体制（武智麻呂政権）」が存在するという前提の上に立った「広嗣の乱」について、改めて論じなくてはならないだろう。なぜなら、乱以前に「藤原四子体制（武智麻呂政権）」が認められないとすると、広嗣が回復を図る勢力などそもそも存在せず、挙兵の動機は別のところに求められるからである。

そこで本章では、かかる視点を軸にして、特に反乱の要因について考察を加えてみたい。

一、「広嗣の乱」の原因に関する従来の説と本章での視点

広嗣が挙兵した動機については、天平十二年（七四〇）八月癸未条に、

大宰少式從五位下藤原朝臣広嗣上^レ表。指^二時政之得失^一。陳^二天地之災異^一。因以^レ除^二僧正玄昉法師。右衛士督從五位上下道朝臣真備^一為^レ言。

とある。これによると、「時政之得失」により「天地之災異」が発生するため、その元凶たる玄昉と吉備真備を除いてほしいと上表している。つまり、広嗣挙兵の直接的な原因は、「時政之得失」への不満であったと考えられる。そして、その具体的な施策については、玄

昉と真備が橘諸兄の補佐役として政界に進出してきたことと絡め、「橘諸兄政権(体制)」下で実施された天平十年前後から盛んになる仏教政策や三、「律令制に対する後退的・消極的」な政策^四、「藤原智麻呂・宇合体制下での政策を打ち消すが如き、政策転換」^五などが想定されている。また、鈴木拓也氏^六は、水野柳太郎氏^七と瀧浪貞子氏^八の研究成果を踏まえたうえで、反乱の最大の要因は、平城京を捨てたことにあるとの主張をされている。

こうした先行学説は、「広嗣の乱」を政治史的に論じるうえで、傾聴すべき見解である。しかし一方で、松尾光氏^九は、玄昉と真備の出世過程を跡づけられ、両者が諸兄のブレーンであるのかどうか疑問であるとの問題提起をされている。林陸朗氏^{一〇}によって、玄昉と真備は宮中に勢力を有していたことが明らかにされているため、松尾氏の抱く疑問はもつともである。となると、玄昉と真備が、主に天皇や後宮からの信頼を得て政界に進出していたことを重視しつつ、「時政之得失」について考えてみる必要性が出てくるのではなからうか。

このうち、天皇との接点から論じられている見解は存在する。先に紹介した松尾光氏^二は、玄昉と真備の政界進出には、聖武天皇との信頼関係が影響していたことを指摘されている。そのうえで、天平九年の疫病後、壊滅した太政官の再建を主導したのが聖武天皇で

あったと想定し、「聖武天皇の登用策・人事への不信」が、広嗣の批判であったと結論づけられている。しかし、人事に関与する式部省官人であった広嗣^三が、そこに不平や不満を抱くのかと疑問が残る。

仁藤敦史氏^三は、広嗣の上表文が記されている『松浦廟宮先祖次第并本縁起』に信を置き、「広嗣は軍団兵士制を廃止するなど、対外的防衛を怠った聖武を批判している」とし、この「聖武の弱腰」な政策が批判対象であったと推測されている。たしかに、この史料を信頼すると、仁藤氏の指摘どおりかもしれない。しかし、『松浦廟宮先祖次第并本縁起』の信憑性をめぐっては、まだ決着がついていないように見受けられる^四。よって現段階では、これに基づき結論を出すのは早計なのではなからうか。

以上の二説は、蓄積された研究成果を踏まえつつ、聖武天皇の動向に重点を置き、「時政之得失」について具体的に言及したものである。しかし、これらの説は、あくまで天皇との関係から考察されているのであって、後宮との結びつきについては触れられていない。したがって、広嗣が指した「時政之得失」については、玄昉・真備と後宮との関係性から論じる余地が残されているだろう。そこで以下、かかる視点を念頭に置きつつ、卑見を述べてみたい。

二、「時政之得失」への補足

そこで想起されるのが、天平十年（七三八）正月におこなわれた、阿倍内親王の立太子である。ここでは、これが「時政之得失」の一部であると考え理由を述べていく。

第一に、玄昉と真備の二人が、阿倍内親王の立太子に、何らかの形で関与していたと想定されることである。この立太子については、中川収氏^{二五}が詳しく述べられているので、その要点を摘出し、次に紹介しておく。

中川氏は、この立太子がおこなわれる直前の政治状況を分析し、天平九年の「藤原四子」没後以降、「聖武天皇が直接政治に関与し、決裁していた」と考えられている。そして、こうした状況のなかに阿倍内親王立太子を位置づけ、「庖瘡の流行によって壊滅的打撃をうけた支配体制の再建、復興の一環に含めて理解」できると指摘されている。そのうえで、

この立太子のことが親しく政治上に関与し、再建の主導的役割を果たしていた聖武天皇の意向によるものであったという見方も成り立つのである。

と結論づけ、光明皇后の存在を考慮して、「光明の積極的な発意に聖武が動かされた」とみておられる^{二六}。これらのことは、後に孝謙天皇（＝阿部内親王）自身が宣命で、光明皇后の仰せに従ったと述べ

ていることからみても（天平^{五十六}六年六月^{庚戌}条）、首肯すべき見解であろう。

さて、そうすると、天皇や後宮との信頼関係を築いていた玄昉と真備が、この立太子に何かしら携わっていたことは想像に難くない。なぜなら、天平十年正月という立太子の時期と併考すると、彼らが皇后宮にて宮子の病を治し、天皇や後宮の人々から信頼を得た直後だからである（天平^{九十九}年十一月^{丙寅}条）。また、真備については、東宮学士を歴任していることや（天平^{十三}年七月^{辛亥}条）、薨伝に「天平七年帰朝。授^三正六位下^一。拜^三大^二学助^一。高野天皇師^レ之。受^三礼記及漢書^一。恩寵甚渥。賜^三姓吉備朝臣^一。」とあることから（宝龜^六年十一月^{壬戌}条）、阿倍内親王との人的関係を確認することができる。一方で玄昉も、世の人々から憎悪を買うほどの榮寵を、皇朝から受けていたことを見逃してはならない（天平^{十八}年六月^{己亥}条）。これらの伝からすると、玄昉と真備が天皇や宮中からの信用を獲得し、阿倍内親王の立太子に影響を及ぼしていたとしても不可思議なことではないだろう。

第二点は、この時の立太子に対し、不満を持つ官人が幾人かいた事実である。普通、立太子が行われる場合、官人への昇叙を行うのが通例なのだが、この時にはそれがなく、阿部内親王の立太子を認めない政治勢力が存在していたことを示している^{二七}。また、天平宝字元年（七五七）七月庚戌条に、

（前略）天平十七年。先帝陛下行^二幸難波^一。寢膳乖^レ宜。于^レ

時奈良麻呂謂^二全成^一曰。陛下枕席不^レ安殆至^二大漸^一。然猶^レ無^レ立^二皇嗣^一。恐有^レ變乎。願率^二多治比國人。多治比懷養。小野東人^一。立^二黃文^一而為^レ君。以答^二百姓之望^一。大伴佐伯之族隨^二於此^一。前將^レ無^レ敵。方今天下憂苦。居宅無^レ定。乘路哭叫。怨歎実多。緣^レ是議謀。事可^二必成^一。相隨以否。(後略)

とあることによつて確實視することができる。右の史料からは、天平十七年(七四五)の難波行幸の時、橘奈良麻呂が「猶ほ皇嗣を立つること無きがごとし」と述べており、時の皇太子である阿倍内親王を「皇嗣」として認めていないことが明らかとなる。義江明子氏^八は、この奈良麻呂の発言について、

「女だから忌避されたのだろう」と推定する前に、当時の貴族たちにとつてのあるべき皇位継承理念の中で、「藤原氏所生の男女」ひいては「草壁皇子の嫡系」という選択肢自体が疑念の對象だった可能性をも考えてみるべきではないか。

と述べられている。古代における女帝の存在を考慮すると、女であるがゆえの忌避ではないとの指摘は重要である。

そして、義江氏の論を踏まえてみると、阿倍内親王が故事にない女性皇太子であつたことを看過すべきではないだろう。なんとすれば、我が国の歴史を顧みると、女帝は皇太子を経ずに即位しているという共通点があるからである。つまり、阿倍内親王の場合、義江

氏が提示された検討課題も勿論残るが、「女性皇太子」は前例に反する、という点で問題を残すことになってしまう。そうすると、彼女の立太子に直面した広嗣が、ここに不服の念を抱いた可能性も十二分にあるのではなからうか。しかし、このように理解するためには、広嗣が持つ思想を考えておかななくてはならないだろう。

そこで注目しておきたいのが、次に掲げる史料である。

【史料①】天平十二年十月戊午条

(前略) 広嗣云。而今知^二勅使^一。即下^レ馬。兩段再拜申云。広嗣不^二敢捍^二朝命^一。但請^二朝廷乱人二人^一耳。広嗣敢捍^二朝廷^一者。天神地祇罰殺。(後略)

【史料②】天平十二年十一月戊子条

(前略) 広嗣自捧^二馱鈴一口^一云。我大忠臣也。神靈弃^レ我哉。乞頼^二神力^一風波暫静。

右の二例は、広嗣の肉声として『続日本紀』に収められており、「天神地祇」や「神靈」・「神力」といった発言を確認することができる。

『続日本紀』にはこのような用語が散見され^九、田中卓氏^{二〇}が当該期における神祇政策の重要性を説かれていることからすると、神祇の思想は奈良時代の社会に根付いていたと考えられる。そして、こうした当時の風潮の中に先の二史料を位置づけてみると、広嗣が神祇に関心を持っていたことが強調されるのではなからうか。また、

当該期に仏教政策が盛んであったことを考慮してみると、日本古来より存する思想を尊重していた姿も想定することができる。するとここに、広嗣の人格的一面を垣間見ることができるであろう。

ところで、「天神地祇」といえば、『日本書紀』天武天皇八年五月乙酉条の、いわゆる「吉野の盟約」のなかにも出てくる。周知のとおり、「壬申の乱」の教訓から、再び皇位継承争いを起こすことのないように、草壁皇子以下の諸皇子に、吉野の地で誓約させる話である。注目すべきは、草壁皇子が「天神地祇及天皇証也。」と宣誓していることである。この時の誓いが、皇位継承の安泰を願うものであることからすると、「天神地祇」が皇位継承の在り方と深く結びついていることが窺える。なお、「天神地祇」と皇位との関連は、令文にも反映されており、天皇即位時に「天神地祇」を祀るという規定がある^三。

そして、この関係を踏まえたうえで、【史料①】を読み返してみると、「(広嗣の主張が)むやみに朝廷に背いたならば、天神地祇が罰し、(広嗣を)殺すだろう」と解釈できる一文がある。これはもちろん、自身の行動を正当化するための釈明であったという可能性もある。しかし、この史料による限りでは、広嗣が「天神地祇」の判断を意識していたと解釈することも許されるだろう。となると、その内容は「天神地祇」と関わりがあるもの、すなわち、皇統に関わる

問題が含まれていたと考えることもできるのではなからうか。

このような理由から、阿倍内親王の立太子も「時政之得失」の一端であると考ええる。要するに広嗣は、皇位継承という国家の大事に、史上例をみない女性皇太子が誕生したことを憂い、上表したのである。既出の【史料①】に、勅使が来たと知るや「即下^レ馬。兩段再拜」して、朝廷を敬う様子が記されていることや、同じく【史料②】に、「我大忠臣也」とあるように、朝廷に対して忠節を尽していた自負があつたと述べていることからすると、朝廷に対する敬意の念や忠臣としての自覚があつたのではなからうか^三。

附言としてもう一つ、血縁関係のことに触れておきたい。第一章でも述べたように、当時の藤原氏が、何らかの意志を全員で共有していたとは思えない。とすると、阿倍内親王の立太子が、たとえ一部藤原氏にとつて有利であるにせよ、それを広嗣までもが望んでいたとは限らないと考えられる。このことは、後にも触れる、広嗣と宇合との親子関係が陰悪であつたこととも無関係ではないだろう。

三、広嗣が指した「親族」とは

これまで述べてきたように、阿倍内親王の立太子が「時政之得失」の枠組みに入るとすると、合理的な解釈が可能となる問題がある。

それは、天平十二年九月癸丑条に、

勅^三筑紫府管内諸国官人百姓等^一曰。①逆人広嗣小来凶惡。長益^三詐^二奸^一。其父故式部卿常欲^三除^二弃^一。不^レ能^レ許。掩藏至今。②

比在京中^一讒^三乱親族^二故令^レ遷^レ遠。冀^三其改^レ心^一。(後略)

とある、広嗣が「讒乱」した「親族」とは、いったい誰のことなのかという議論である。

これについては、橘諸兄の台頭に圧倒される、藤原豊成とみるのが一般的である^三。この見解は、「藤原四子」の薨後、橘諸兄が太政官の首班となるのだが、こうした藤原氏勢力の後退に対し、当時、一族の中で唯一参議に就任していた豊成が、勢力の回復に務めなかったため、広嗣は憤^レ氣し「讒乱」していたとの理解に基づいている。しかし、第一章で詳述したように、広嗣が意識するような藤原氏勢力の存在は認め難い。また、豊成が批判を被るほど無能な人物ではなかったことを、第二章で明らかにした。したがって、広嗣が豊成を批判していたことには疑問が残ってしまう。

一方で、平あゆみ氏^三四は、「広嗣が讒^三つた親族とは、皇太夫人宮子のことであろう。宮子と玄昉についてのことを謗議し、よって玄昉及び真備を廢することを進言したのである」と述べられている。この主張に対し、木本好信氏^三五は否定的な立場をとられているが、平氏の指摘は傾聴するべきではなからうか。よって、ここでは、そ

の理由を明示することで、広嗣が「讒乱」した「親族」とは、皇太夫人宮子や光明皇后である可能性を再評価してみる。まずは、該当史料を便宜上二つに別け、いま一度、丁寧に解釈しておきたい。

まず①についてである。ここから、広嗣が「小来凶惡」であったため、父である宇合でさえも、「除弃」ことを天皇に願ひ出していたことが明らかとなる。时期的なことに触れておくと、宇合の薨去が天平九年八月なので、当然、これ以前の話となる。そして、この一文から、少なくとも藤原氏の内部で、宇合と広嗣の親子関係が良好ではなかったことが明らかとなるだろう^三六。もともと聖武天皇は、こうした宇合の恩感を「掩藏」して退けている。そうすると、聖武天皇が広嗣に対し、「小来凶惡」であったとはいえ、期待感のようなものを寄せていたことを察知しうる。こうした聖武天皇の御心については、後述することに絡むため、ここで留意しておきたい。

また、②からは、広嗣が「讒^三乱親族^二」したとき、「京中」にいたことが確実となる。広嗣の大宰少貳就任が天平十年十二月なので、これより以前の行為である。すると、これが前述した阿倍内親王の立太子を含む時期であることに気付く。すでに確認したとおり、この立太子には玄昉や真備と密接に結びつく後宮の関与が想定される。そうすると広嗣は、立太子に関わりのある「親族」、すなわち、皇太夫人宮子や光明皇后という、後宮に存在していた「藤原氏」を「讒

「乱」していた可能性を見出すことができるだろう。このことは、「護乱」の対象が「親族」と曖昧に表記されていることから推測される。つまり、名称を記すことに憚りある身分の者、それは天皇の母である宮子や光明皇后だったのではなからうか。

しかし、このように考えるためには、先に触れた木本氏^{三七}の疑問に答える必要があるだろう。そもそも氏は、職制律指斥乗輿条（新訂増補国史大系本）に、

凡指斥乗輿。情理切害者斬。非切害者。徒二年。对捍詔使。而無二人臣之礼者絞。

とあることから、天皇・太皇太后・皇太后・皇后を非難すれば二八、斬刑、もしくは徒二年に処せられるため、宮子を仮に護乱した場合、「令遷遠。冀其改心。」という懲罰で済むはずがないと考えられている。律という法的根拠に基づくため、もつともな指摘であると思う。しかし、先に確認した①や、次に掲げる二つの事例を参照すると、直ちに賛同することには躊躇してしまう。そのうちの一つは、養老六年（七二二）正月壬戌条に、

正四位上多治比真人三宅麻呂坐^下誣告謀反。正五位上穗積朝臣老指^中斥乗輿^上。並^レ処斬刑。而依^三皇太子奏^一。降^二死^一等。

とある。右の史料によると、「謀反を誣告」した多治比三宅麻呂と、

「乗輿を指斥」した穂積老とが斬刑に処せられるところを、皇太子（後の聖武天皇）のはからいで流罪に減刑されていることがわかる。これは、聖武天皇の仁愛ぶりを物語っているだろう^{三九}。また、天平宝字元年六月甲辰条に、

先是。去勝宝七歲冬十一月。太上天皇不豫。時左大臣橘朝臣諸兄祇承人佐味宮守告云。大臣飲酒之庭。言辞无礼。稍有^三反状^一云々。太上天皇優容不咎。大臣知^レ之。後歲致仕。

（後略）

とある出来事にも目を向けてみたい。この史料によると、時の左大臣であつた橘諸兄が酒宴の席で、太上天皇（聖武太上天皇）に対し不敬を働いたのであるが、このことを知った太上天皇は、優容して咎めることはしなかったことがわかる。この場合、臣下が太上天皇に対し、礼義を欠いていたことは明白であり、木本氏の論に依るならば、このとき諸兄は、厳罰に処されなくてはならないだろう。ところが事実とは逆で、諸兄が何らかの処分を被つた形跡は見当たらない。この翌年、諸兄は責任を感じてか左大臣の職を退いているが、これはあくまで「致仕」なので、かかる事件による罰ではない。

こうした事例から類推する限りでは、極刑を好まない聖武天皇の姿を窺い知ることができる。つまり広嗣は、こうした天皇の善処によつて、厳罰を免れたと考えられるのである。もちろん、天皇と

の信頼関係も考慮しなくてはならないが、先にも触れたように、広嗣にはこうした関係が認められる。故に、木本氏による「令_レ遷_レ遠_二冀_二其改_レ心」という懲罰で済むはずがないとの指摘は、一応の説明ができるのであつて、「天皇の母で、皇太夫人の宮子を「親族」といいうるかどうかが頗る疑問」というのも解消できるのではなからうか。

ここでの考察をまとめてみると、広嗣が「讒乱」した「親族」を、当時、後宮に存在した藤原氏と考へても差し支えないだろう。したがつて広嗣は、阿倍内親王の立太子を推進した、後宮にいた藤原氏を「讒乱」したと結論づけておきたい。

むすび

本章では、「藤原広嗣の乱」について、先学による研究成果を補足する形で私見を述べてきた。最後に、まとめに代えて、筆者が想定する反乱の流れを附しておく。

天平十年正月十三日、阿倍内親王の立太子がおこなわれた。このとき広嗣は式部少輔であり、同年四月には大養徳守に就任する。このころから、前代未聞となる女性皇太子には反対だったらしく、立太子に関与した「親族」、あるいは玄昉・真備に不満を抱き、「讒乱」

するようになった。こうした様子を聞きつけた聖武天皇は、広嗣を大宰少弐とすることで改心させようと試みる。ところが、その期待とは裏腹に、広嗣からの上表が届くことになる^{三〇}。その内容は、前例のない女性皇太子を誕生させたことなど、「天地之災異」を引き起こす「時政之得失」を挙げ、その元凶たる玄昉・真備の排斥を望むものであった。そして、同年九月三日、遂に広嗣は行動を起こしたのである。

ここでは、多くを推論に委ね、筆者が思うところを述べてきた。故に、精度の高い実証については、今後の大きな課題となる。それでも、『続日本紀』の解釈を見直し、「広嗣の乱」の新たな一面を提示できたのではなからうか。今後は、より正確な要因を抽出していくことで、「広嗣の乱」を真に理解することができるのであろう。しかし、ひとまず筆者の臆説を示すに留め、論を終えておきたい。

【註】

一 政治史的な研究を最初にされたのは北山茂夫氏（『七四〇年の藤原廣嗣の叛亂』／岩波書店、一九五九）であろう。北山氏の見解を基に、稲光栄一氏（『藤原廣嗣の乱に関する一考察』／『歴史教育』六、一九五八）、松田好夫氏（『大伴家持と藤原廣嗣の乱』／『国文学』九五八）、林陸朗氏（『光明皇后』、吉川、弘文館、一九七二）、中川収氏（『藤原廣嗣の乱』／『奈良朝政』、と皇位継承、所収、教育社、一九七九）、木本好信氏（『藤原廣嗣の乱について』／『奈良朝政治』、と皇位継承、所収、高杉書店、一九九五）

松尾光氏（「藤原広嗣の乱と聖武天皇」／「天平の政治と争乱」所収、笠間書院、一九九五）、森田剱氏（「藤原広嗣の乱について」／「政治経済史学」三四七、一九九五）、瀧

浪貞子氏（「彷彿する天皇」／「帝王聖武」所収、講談社、二〇〇〇）らの諸氏が、政治史的な研究をされている。軍事関係からの考察としては、丸山二郎氏をはじめ（「藤原広嗣の乱と鎮西府」／「歴史教育」三）、横田健一氏（「天平十二年藤原広嗣の乱の一考察」／「律令国家の基礎構造」所収、吉川弘文館、一九六〇）、竹尾幸子氏（「広嗣の乱と筑紫の軍政」／「古代の日本」三、九州」所収、角川書店、一九七〇）の研究が挙げられる。史料批判的な考察としては、

坂本太郎氏をはじめ（「藤原広嗣の乱とその史料」／「古典と歴史」所収、吉川弘文館、一九七二）、桑門知重紀氏（「藤原広嗣の乱と災異記事」／「日本歴史」六、一九九九）、中西康裕氏（「藤原広嗣の乱と政治」／「日本史」六、一九九九）、

性（「藤原広嗣の乱と政治」／「日本史」六、一九九九）に注目して「広嗣の乱」の性格を分析された八木充氏（「藤原広嗣の乱と政治」／「日本史」六、一九九九）の研究がある。その他としては、大宰府の特殊性に注目して「広嗣の乱」の性格を分析された八木充氏（「藤原広嗣の乱と政治」／「日本史」六、一九九九）の研究がある。これに類似する形で、広嗣が太宰少式であつたにも拘らず、「太宰府という大官司の全権力を掌握できた」理由について、広嗣の父である宇合が築いた「非律令的派閥」による「七光りの権威を有した」と推察されている利光三津夫氏（「藤原広嗣の乱と政治」／「日本史」六、一九九九）の研究がある。また、「九州の民衆」と天平十

一年三月の「祥瑞出現」に注目し、この二つの意義づけから「広嗣の乱」を考察されている長洋一氏（「藤原広嗣の乱と政治」／「歴史評論」四一七、一九八五）の研究がある。

二 天平九年の疫病により、いわゆる「藤原四子」が薨去する。その結果、「藤原四子体制（＝武智麻呂政権）」と称される政治体制

は崩壊し、太政官運営の主導権は橘諸兄の手へと移っていく。そして、広嗣が挙兵する天平十二年八月の段階では、武智麻呂の嫡子豊成が、藤原氏の中で唯一、参議として太政官構成員に列するのみであつた。

三 北山氏前掲註一論文。

四 岸俊男「郷里制廃止後の前後」（『日本古代政治史研究』所収、

塙書房、一九六六）。また中川氏（「藤原広嗣の乱と政治」／「日本史」六、一九九九）は、この岸氏の論を踏まえ、

天平十年前後の政策内容が「地方制度の整備、簡素化であり、農民の負担軽減」であるとし、これが「表面的にみればまさしく律令制の後退」であるから、広嗣の批判するところであつたと述べられている。

五 木本氏前掲註一論文。また瀧浪氏（「藤原広嗣の乱と政治」／「日本史」六、一九九九）は、広嗣が「時政の得失

を指し、天地の災異を陳」べたのは、「藤原四兄弟に代わって登場した諸兄政権を批判し、その元凶を聖武や諸兄のブレーンである玄昉と真備とみて、二人の追放」を迫るためだと述べられている。

中西氏（「藤原広嗣の乱と政治」／「日本史」六、一九九九）は、広嗣が提出した上表文にみられる「天地の災異」を「天平九年の疫病や天候不順」、「時政の得失」を天平九年以降行われてきた「地方行政機構の縮小と軍事削減」と考えて、これらが「広嗣の批判の対象」であつたと述べられている。

六 鈴木拓也「天平九年以後における版図拡大の中断とその背景」

『杜都古代史論叢』今泉隆雄先生還暦記念論文集刊行会、二〇〇八。

七 水野柳太郎「関東行幸と恭仁遷都」『日本歴史』第六七六、二〇〇四。

八 瀧浪氏前掲註一論文。

九 松尾氏前掲註一論文。

一〇 林氏^{〔前掲註一論文〕}は、「玄昉は内道場の僧となって、天皇をはじめとする皇室内部に私的な関係で密接になっていったと思われ、とくに仏道に帰依せられていた光明皇后との関係は深いものがあつた」と述べられている。その根拠として、①皇后の発願一切経の書写が、玄昉の持ち返つた『開元教目録』を基にしており、玄昉の帰朝の翌年におこなわれていることが『正倉院文書』から明らかにすること、②光明皇后が玄昉のために隅寺を建立していること、③「主治医のような立場」で皇后宮に出入りしていたこと、などを挙げておられる。また、真備については、天平九年頃に中宮亮となつていことから「後宮とくに宮子との接触」を想定され、後に東宮学士や東宮大夫に就任することを踏まえたうえで、「皇太夫人・皇后・皇太子（内親王）」という線で宮廷内部に関与した^{〔前掲註一論文〕}

とし、さらに踏み込んで「宮子・光明子らの後宮との接触は単なる僚司という関係をこえて、学友玄昉を媒介とした私的関係に及んでいた」と述べられている。そして、こうした二人の関係を総括し、「玄昉と真備とは、提携して宮中に一つの勢力を張っていた」と結論づけられている。

一一 松尾氏前掲註一論文。

一二 天平十年四月乙卯条から、式部少輔であつたことがわかる。また、田中卓氏^{〔所謂「上階官人歴名」について」、『続日本紀研究』三二二、一九五六〕}と野村忠夫氏^{〔所謂「上階官人歴名」断簡補正」、『続日本紀研究』三二七、一九五六〕}が誤記と指摘されてはいるが、正倉院文書に所収される「上階官人歴名」には「式部卿」とある^{〔大日本古史文書二四〕}。

一三 仁藤敦史『女帝の世紀 皇位継承と政争』（角川選書、二〇〇六）。

一四 『松浦廟宮先祖次第并本縁起』の信憑性をめぐっては、今なお議論が続くところである。信頼に足るとする意見としては、宮田俊彦氏^{〔吉備真備、吉川弘文館、一九六六〕}による指摘が代表的であろう。宮田氏は、①本書に記される官位に齟齬がないこと、②当該期の政治状況がよく反映されていること、③玄昉・真備の関係をよく伝えていること、④広嗣の主張にある兵士^{〔吉備真備、吉川弘文館、一九六六〕}のことが、当時の事情と合致していること、の四点を理由に、信用し得ると評価されている。一方で坂本太郎氏^{〔前掲註一論文〕}は、A、所収の上表文が正式なものであれば、その文

体が明らかに違格であること、B、上表文に文章の修飾がおおすぎることに、C、上表文中に引用されている「劉向五紀論」が、奈良時代に伝来していた証左がないことなどの理由を挙げて、信頼できる点もあると述べてつも、「上表文は明らかに後世の造作である」と結論づけられている。このように、相反する二説がある中で、筆者は、坂本氏の論を支持したい。なぜなら、宮田氏は広嗣の上表文として伝えられている箇所を書き下しておられるが、坂本氏が偽作と判断された根拠の一つ、「劉向五紀論」の部分を中略されているからである。つまり、宮田氏の論拠よりも坂本氏が提示されたもののほうが、正鵠を射ていると判断できるだろう。また、細井浩志氏（「藤原広嗣上表文」の真偽について／「古代の天文記事と史書」所収、吉川弘文館、二〇〇七）は、『続日本紀』未記載の天文記事を分析され、かかる史料の信憑性を説かれているが、坂本氏が指摘する「劉向五紀論」の問題点については言及されていない。したがって本章では、『松浦廟宮先祖次第并本縁起』に信を置くことは避けたいと思う。

一五 中川収「阿倍内親王の立太子」（『政治経済史学』三七〇、一九九七）。

一六 渡辺晃宏氏（『平城京と木簡の世』、講談社、二〇〇二）も、「政権の首班にいた橘諸兄は光明子や藤原氏と協調的な関係にあったとみられる」ことを前提に、阿

倍内親王立太子の推進力を聖武天皇や光明皇后とみておられる。

一七 木本好信『藤原仲麻呂』（ミネルヴァ書房、二〇一一）。

一八 義江明子「古代女帝論の過去と現在」（『天皇と王権を考える―第七巻 ジェンダーと差別―』所収、岩波書店、二〇〇二）。

一九 菅見に及ぶ限りでは、『続日本紀』中に三例の「神力」（神護景雲三年五月丙申、宝龜十一年十二月丁巳、延暦四年七月癸丑）、二例の「神靈」（天平十二年十一月戊子、天平神護元年正月己亥）、一例の「神威」（大寶二年）が確認できる。

二〇 田中卓「聖武天皇の神祇崇敬」（『神社と祭祀 田中卓著作集十―I』所収、国書刊行会、一九九四）。

二一 神祇令即位条（令義）に「凡天皇即位。惣祭三天神地祇。散齋一月。致齋三日。其大幣者。三月之内。令三修理訖。」とある。

二三 時代は大きく下るが、水戸学の祖として知られる徳川光圀は、本文に掲げた『続日本紀』記事と『松浦廟宮先祖次第并本縁起』を頼りとし、広嗣を評価しているむきがある（『天日本史』巻百十七、列伝二、藤原広嗣／義公生誕三百年記念会、二九）。

二三 松尾氏（前掲註）は、広嗣が「譏り乱」した人物は、「温厚な人物で、聖武天皇の専制的で不適当な人事・重用を抑えられない」豊成のことであるとされ、木本氏（前掲註）は、「親族」として個人名が明記されていないことをヒントに、「藤原氏の復権と諸兄政権の打倒」

を目指した広嗣は、その「同調と協力」を「豊成や仲麻呂・乙麻呂、永手らに求めた」が、位階の問題から豊成らは躊躇し、こうした「親族の優柔不断なる態度」が「親族への讒乱の言葉」であると推察されている。瀧浪氏^{（前掲註論文）}もまた、時の太政官では武智麻呂の長男である豊成のみが藤原氏で唯一参議に列していたにすぎない現状から、「さして能力のない豊成らへの謗り、暴言となった可能性」を提示されている。

二四 平あゆみ「吉備真備右大臣就任の歴史的諸前提―孝謙稱徳女帝の師傳と「軍事参謀」への論考―」（『政治経済史学』二九五、一九九〇）。

二五 木本氏^{（前掲註論文）}は、律の規定を根拠に「天皇の母で、皇太夫人の宮子を「親族」といいうるかどうかが頗る疑問である」と批判されている。

二六 仮に、「時政之得失」が武智麻呂・宇合体制下での政策であったと考えてみると、險悪であった父の政策を擁護するような行動をとるのかと疑問に思う。この点からも、「時政之得失」に対する木本・瀧浪両氏の見解は見直されるべきではなからうか。

二七 木本氏前掲註一論文。

二八 名例律称乘輿車駕御条逸文に、「乘輿」とは天皇を指す言葉であ

るが、太皇太后・皇太后・皇后もこれに準じるとある^{（新訂増補国史大系本「律」）}。ここから木本氏^{（前掲註論文）}は、「皇太后や皇后を非難しても天皇に対したのと同様の刑罰が適用される」と考えられ、「宮子は立后を経験した母后の皇太后ではないが、皇太夫人ということであるから、同様に考えられてよい」と理解されている。

二九 新日本古典文学大系本『続日本紀二』補注九―一では、元明太上天皇の崩御を受け、藤原氏勢力と名門他氏族との対立が顕著になる中で、前者が藤原氏一族に反感を持つ二人を処分し、それと同時に皇太子（後の聖武天皇）の仁慈を天下に公表するための策であった、との可能性を指摘している。

三〇 天平十二年八月癸未条の日付が、上表文作成時のものか、都に届いた日とするのかで議論が展開されている。前者を支持するものとして、直木孝次郎氏^{（大宰府・平城京間の日程／『奈良時代史の諸問題』所収、塙書房、一九六八）}、青木和夫氏^{（『聖制』所収、吉川弘文館、一九七二）}、柳雄太郎氏^{（『広嗣の乱と勅符』／『古代史』所収、塙書房、一九八八）}、新日本古典文学大系本『続日本紀二』補注一三―一五、木本氏前掲註一論文、中西氏前掲註一論文などがある。後者とする見解は、坂本氏前掲註一論文、榮原氏前掲註一論文などである。

第二部

奈良朝政治史の諸問題

第五章 天平元年四月癸亥条の再検討

はしがき

『続日本紀』天平元年（七二九）四月癸亥条によれば、同年二月に起きた、いわゆる「長屋王の変」の直後に、次のような太政官処分が下されている。

（前略）太政官処分。舍人親王参入朝庁之時。諸司莫_二為_レ之下_レ座。（後略）

文意はけつして難解なものではなく、「舍人親王が朝堂に参入した場合、諸司は座を下りなくてもよい」という内容である。

この太政官処分をめぐって、例えば野村忠夫氏^三は、早くから「この太政官処分が知太政官事である舍人親王への礼式を改変したことを意味する」ことを指摘され、「舍人親王の地歩が大きく後退したことを示す一つの現われ」であると結論づけられている。また中川収氏^三は、これにより「舍人親王が帯する知太政官事の地位・権能が太政官に対して何ほどの権限をも保持するものではなくなったことを示す」と論じられている。そして木本好信氏^三は、これを「舍人親王の政治的立場の凋落を意味するもの」と位置づけられ、林陸朗氏^四も、「その地位の実質的降下を思わせるに十分である」と述べられている。

る。

こうした先学の研究を概観してみると、この太政官処分によって、舍人親王の実質的地位が低下したとみることが一般化していることがわかる。なかでも、瀧浪貞子氏^五は、舍人親王への礼式改変を示した右の太政官処分に触れ、

変の二カ月後であることから、事件に対する責任を負わされたあらわれとみられるが、これもまた皇親勢力の抑圧の一つであったといつてよい。しかもこの舍人親王は、数カ月後の八月、光明子の立后に際しては、皮肉にもその宣命を述べる役目を担わされている。ここに至って皇親勢力は完全に後退し、武智麻呂^六藤原氏の傘下に入ったといえよう。

と述べ、一連の出来事を皇親勢力の後退と把握されている。たしかに、こうした通説は、太政官処分の下された時期が「長屋王の変」の直後であることを考えると、説得力をもつであろう。ところが、諸説を顧みても、件の太政官処分が「長屋王の変」と一連の関係にあるとみる史料根拠は、管見に及ぶ限り見当たらない。それでも、諸家が事件直後を論拠として、舍人親王の地位低下を主張するのは、おそらく、皇親勢力と貴族層（特に藤原氏）との対立軸の中で、この太政官処分と事変とを一体のものとして捉えたと、前者の衰退について穏当な解釈ができるからであろう。

しかし筆者は、①舍人親王は、王を窮問するという形で事件に関わりを持つているため^(天平元年二月壬申条)、何ら責任を負う必要はなく、罪を被る理由がない、②長屋王を意識し、皇親勢力と結びつけて理解するならば、新田部親王にも何らかの制裁があつてしかるべきではないか、③変事に対する個々の処罰や褒賞は二月の段階で終えており^六、この太政官処分が事件後の責任を負ったもの、あるいは負わされたものであるとみるならば、なぜこうした処置と同時になされていなのか、という三点を理由に、「長屋王の変」とは切り離して検討するべきだと考える。要するに、先行研究では、「長屋王の変」の直後という時期に、依拠しすぎているのではないかと思うのである。

一、光明子立後の宣命

ところで、瀧浪氏が、舍人親王が光明子立後の宣命大夫を務めたことを皇親勢力の完全な後退と評価する点には疑問が残る。ここにある宣命とは、天平元年八月の光明子の立後の十四日後、「五位及諸司長官」を前にして舍人親王が述べたものである^(天平元年八月壬午条)。このときの宣命が立后について釈明している内容であることは、よく知られている。

『続日本紀』には、六十二例の宣命が確認できるが、【表一】に

【表一】『続日本紀』において、宣命大夫が明らかとなる事例

年	宣命大夫	内容
7 天平元年八月壬午条	知太政官事一品舍人親王	光明子の立后。
8 同	中納言從三位阿倍廣麻呂	光明子の立后が常の事ではないので、物を結うとすることを述べ、皇太子である阿倍内親王の五節舞を元正天皇に奉獻。
9 天平十五年五月癸卯条	右大臣(正二位)橘諸兄	元正天皇から聖武天皇への報告。
10 同	元正天皇の口勅か?	元正天皇の宣命を受けて、叙位を行うことを述べた宣命。
11 同	右大臣(正二位)橘諸兄	陸奥國の黄金産出を仏の恵みとし、百官を率いて仏前に奏する。
12 天平勝宝元年四月甲午条	左大臣(從一位)橘諸兄	天平勝宝改元。
13 同	從三位石上乙麻呂	大仏造立について、宇佐の八幡大神に感謝の意を表明。
15 天平勝宝元年十二月丁亥条	左大臣(正一位)橘諸兄	光明皇太后が、攝政王ら五人を戒める。
18 天平五年七月己酉条	内相(從二位)藤原仲麻呂か?	惠美押勝を太師(太政大臣)に任じる。
26 天平五年四月丙寅条	孝謙太上天皇(口勅)	淳仁天皇の崩位を告げる、孝謙太上天皇の宣命。
29 天平五年八月癸巳条	左兵衛督(從三位)山村王	白壁王の立太子。
47 宝龜元年八月癸巳条	左大臣(從一位)藤原永手	藤原永手の死を弔う。
51 宝龜元年二月乙酉条	正三位中納言兼中務藤原文室大市	藤原永手に太政大臣を追贈。
52 同	正三位員外中納言兼宮内卿石川豊成	能登内親王を弔い、一品を贈り、その子を二世王とする。
58 天応元年二月丙午条	參議左大臣正四位下大伴伯麻呂か?	

掲げた一覧表からわかるように、宣命大夫を特定できる事例は意外に少ない。また、名前が特定できる宣命大夫についても、官位の高低や身分には一貫性がなく、一定の傾向は見当たらない。したがって、このことを考慮してみると、光明子立後の際に、宣命大夫として皇親の中心的人物である舍人親王が選ばれ、その名が『続日本紀』に特筆されていることは、特殊な事例とみるべきである。つまり、親王が宣命大夫に任じられたことには、何かしらの理由があつたと考えられる。

そもそも舍人親王は、養老三年(七一九)十月辛丑条に、

詔曰。(中略)況及三舍人。新田部親王。百世松桂本枝合^二於昭穆^一。万雉城石。維盤。重^二乎国家^一。理須下吐^二納清直^一。能輔^二

洪胤^一。資^二扶仁義^一。信翼^中幼齡^下。然則太平之治可^レ期。隆泰之運応^レ致。可^レ不^レ慎者哉。今^二親王。宗室年長。在^レ朕既重。実加^三褒賞^一。深須^二旌異^一。然崇^レ德之道。既有^三旧貫^一。貴^レ親之理。豈無^三於今^一。(後略)

とあるように、新田部親王とともに「宗室年長」として、国家にとって重要な存在であると評された人物である。こうした『続日本紀』の記述を根拠にすると、舍人親王は「宗室年長」として、光明子立后に威儀を持たせるため、宣命大夫に選ばれたといえるであろう。

しかし、このような考えに矛盾をきたすのが、さきの太政官処分である。通説のように、天平元年四月の礼式改変が、舍人親王の地位低下を示すとなると、その後の宮中における彼の威厳は失われたことになる。そうすると、光明子立后に威儀を持たせるために舍人親王を宣命大夫に任じた、という解釈は成立し難いであろう。むしろ、「五位及諸司長官」を説得したいのであれば、朝廷から「宗室年長」と評されていた新田部親王のほうが適任だったはずである。

養老四年八月甲申条によると、舍人親王が知太政官事に就任したと同日、新田部親王は知五衛及授刀舍人事に就任していることが確認できる。知五衛及授刀舍人事が、どのような機能や地位を有していたかは明確ではない。しかし、その名称から判断すると、軍事に關係するものであったと想定できる。したがって、新田部親王は、

軍事方面での威儀を有していたと考えられるため、舍人親王よりは適任であろう。しかし事實は、舍人親王が宣命大夫を務めているのである。

では、なぜ舍人親王が宣命を述べる役目を担ったのであろうか。これについて、明確な答えを用意しているわけではないが、今のところ、以下のように考えている。この宣命において、光明子立后の先例とされているのが、「難波高津宮御宇大鷦鷯天皇」の御世、すなわち仁徳天皇の磐之媛である。この故事については、『古事記』や『日本書紀』に基づいているであろうから、『日本書紀』の編纂に深くかわりを持った舍人親王（養老四年の完成当時の編集総裁）を宣命大夫に拔擢することによって、釈明に対し説得力を求めたのではなかろうか。

このようにみていくと、宣命大夫の一件は、必ずしも皇親勢力の完全な後退を示すものとはいえないだろう。そして、当時においても、朝廷における舍人親王の威厳と地位は、なお尊重されていたとみるべきである。

以上のような見方に大過なければ、天平元年四月の太政官処分については、改めてその意味するところを吟味する必要が生じてくる。すなわち、この処分によって、朝堂における舍人親王の地位が低下したとする通説的理解が、はたして正しいのかどうかを再考する必

要が生じるだろう。

二、親王の威儀と礼式改変

そこで、あらためて件の太政官処分のもつ意味を検討してみたい。そのために、まずは下座の礼について整理しておく。

養老儀制令序座上条には、

凡在^二序座上^一。見^二親王及太政大臣^一。下^レ座。左右大臣。当司長官。即動^レ座。以外不^レ動。

とあつて、朝堂にて親王と太政大臣を見た場合は「座を下り」^ハ、左右大臣と当司長官を見た場合は「座を動き」^九、それ以外の者に対しては動く必要がないということが定められている。『令集解』当該条所引の古記や、そこに引かれた八十一例の逸文などの記載を参考にとすると、大宝令にも同様の規定があつたことは確実である。そして、義解によれば、

謂。左右大臣見^二親王及太政大臣^一。即動^レ座。其太政大臣見^二親王^一。及親王見^二太政大臣^一。並不^レ動也。

とあるから、左右大臣が親王と太政大臣を見た場合は「座を動く」行為が必要であるが、太政大臣が親王を見た場合、もしくは親王が太政大臣を見た場合は、座を動く必要がないことになる。こ

うした義解の解釈を踏まえると、さきの序座上条は、太政大臣以外は、親王を見たら「下座」（左右大臣であれば「動^レ座」）しなくてはならず、親王は朝堂において、誰を見ても座を動く必要はなかったと解釈できるだろう。つまり親王は、朝堂において諸王や諸臣を見ても動く必要がなかったと理解できるのである。なお、この条文については、喜田新六氏^{一〇}が、

最高官たる太政大臣と並べて、系統を異にする親王が置かれてあることは、意義のあることであつて、古記によれば、親王は、有品、無品を論じないといふので、親王は、位階に拘らず、親王であるということによつて、尊ばれるのである。

と述べられているが、重要な指摘である。

こうした朝座儀礼は、その後、幾度かの変遷があり、やがて『延喜式』へと継承されるのだが^二、その変遷過程については、「親王・太政大臣に対する朝座の儀礼は、堂前起立から下座・動座・起座としたいに簡略化」していくとみたり^三、「中国風の立礼へ統一」され「朝座上での拝礼がより嚴重に徹底されていったことを示す」とする論が提示されている^三。いずれにしても、『延喜式』成立段階までに、一貫して「下座」や「動座」など、身分によつて何かしらの動作（行為）が必要であつたことには変わりない。

さて、そうすると、天平元年四月の改定は、その後の規定に影響

を与えるものではなく、舍人親王に対してのみ下されたことになる。その意味では、この礼式改変が、朝堂での儀礼において、諸司に対する舍人親王の相対的な地位が低下したとする通説的理解も誤りとはいえない。しかし、この太政官処分では、舍人親王が諸臣を見た場合については何ら言及していない。つまり、従来どおり、誰をみても座を動く必要はなかったのであろう。また、新日本古典文学大系本『続日本紀二』の補註^{二四}では、儀制令庁座上条古記の「下座。謂五位以上自^レ牀下立。六位以下。自^レ座避跪。庁外之人立^レ地也。」という一文から、「五位以上は起立の礼をとるが、六位以下は跪伏の礼に通ずる礼をとる」ことを確認し、八十一例や『延喜式』の規定を根拠に、養老年間には下座の礼が廃止されていたことを明らかにしたうえで、天平元年四月以降、舍人親王に対して「諸司すべて起立すなわち「動座」の礼とする」ことが、この太政官処分の意味するものであるとしている。

この見解を踏まえてみると、天平元年四月以降、舍人親王が朝堂に参入した場合、「下座」ではないものの、諸司は「動座」の礼をとらなくてはならないし、且つ自身は誰を見ても座を動く必要がないので、朝堂における舍人親王の優位性は、まったく失われたというわけではなさそうである。

仮に、この礼式改変によって、舍人親王の地位が低下したとする

ならば、それが親王に対する他の処遇にも影響するはずである。しかし、そうした動きはみられず、事実むしろ逆である。天平元年四月以降も、親王に対する優遇とみられる処置がおこなわれている事例が確認できる。

例えば、天平元年八月癸亥条には、

（前略）其賜^レ物。親王^二絶^一一百疋。大納言七十疋。三位卅疋。

四位一十五疋。五位一十疋。正六位上絶^二四疋綿一十屯。（後略）

とある。これは、「天平改元」に伴う褒賞の記事であるが、このとき親王は「絶^二一百疋」を賜っており、他の官人よりも多く物を賜っている。もちろん、該当する親王は、舍人・新田部の両親王である。また、天平元年八月壬午条にも、

（前略）賜^二親王^一絶^二三百疋。大納言二百疋。中納言一百疋。（後略）

略）

とあり、光明子の立后に際して、親王が一番多く物を賜っている様子が窺える。さらに、天平三年十一月庚戌条にも、

冬至。天皇御^二南樹苑^一。宴^二五位已上^一。賜^レ錢親王^二三百貫。

大納言二百五十貫。正三位二百貫。自外各有^レ差。

とあるなど、依然として親王に対する優遇措置は続いている。当該期の「親王」とは、舍人・新田部親王のみを指すことから推すと、「親王」とあってもそれは両親王を意味し、対象が限定されている

ものと捉えることができる。

もつとも、以上の事例では、礼式改変を親王身分全般に影響を与えるものではないとする、先行研究の批判材料とは見做し難いかもしれない。しかしながら、こうした事例から類推する限りでは、少なくとも、天平元年四月の太政官処分が「親王」を蔑むものではなかったことが判明しよう。

さて、そうなると、問題の太政官処分が下されてから、舍人親王個人に対する優遇がみられない限り、先学の研究を覆す指摘とはならないだろう。そこで注目してみたいのが、舍人親王と新田部親王の薨去記事である。

両親王は、「宗室年長」と評価され「親王」として身分に差はなく、没時の品位も同等なので、薨去に伴う葬儀のことに差異があつては不自然だろう。むしろ通説に従うと、舍人親王は薨去の時点で、限られた範囲とはいえ実質的な地位が低下していることになり、新田部親王にはそうした様子がないわけなので、どちらかというと、後者に対する優越があつてもおかしくはない。ところが今、彼らの薨去記事を確認してみると、新田部親王は天平七年九月壬午条に、

一品新田部親王薨。遣_二從四位下高安王等_一監_三護葬事_二。又 詔。

遣_二一品舍人親王_一就_レ第弔_レ之。親王天淳中原瀛真人天皇之第七皇子也。

とあり、舍人親王は天平七年十一月乙丑条に、

知太政官事一品舍人親王薨。遣_二從三位鈴鹿王等_一監_三護葬事_上。

其儀准_二太政大臣_一。命_二王親男女_二。悉会_二葬処_一。遣_二中納言正

三位多治比真人県守等_一就_レ第宣_レ詔。贈_二太政大臣_一。親王天

淳中原瀛真人天皇之第三皇子也。

とある。これらの史料を比較してみると、舍人親王が優遇されているのは明白である。生前に朝堂での地位低下、あるいは知太政官事の形骸化が認められるならば、このような待遇になるはずがない。

また、この対応がもし「親王」としてのことであるならば、類似することが新田部親王にも確認されなくてはならないであろう。よって、これは舍人親王にのみ施された処遇と判断でき、この処置がいかなることに起因してのことかは明瞭ではないにせよ_{二五}、「葬事」が「太政大臣に准ず」るほどの位置づけを、彼が生前中に保持していたことが明らかとなる。とすると、天平元年四月以降も舍人親王は一貫した地位を維持しつづけていたことになり、天平元年四月の太政官処分による礼式改変は、その地位低下を狙うための対処ではなかった可能性が大きくなるだろう。

三、礼式改変の意義

では、天平元年四月の礼式改変の目的は、どこにあったのであろうか。

近年、この礼式改変について詳しく考察されたのは、井上亘氏^{二六}である。井上氏は、

右のような処分が出された背景には、朝礼をうける資格のない大納言（多治比池守と藤原武智麻呂）が大臣に代わって聴政を行い、決裁を行わない親王が最敬礼をうける、という礼制上の矛盾ないしは不都合があったものと思われる。この点からみても、知太政官事は太政大臣に准ずるようなものでなく、「三木」参議であつたと考えるべきであろう。

と述べつつ、「要するに、聴政を行う大納言に対しては諸司に動座の義務すらなく（中略）、参議たる舍人親王が参入すると、大納言も諸司とともに下座の礼をとらねばならないという矛盾を解消するため、右の処分が出された」とされている。そして、これによって、「親王に対する大納言の優位が「朝庁」朝堂院において公認された」ので、皇親政治の後退は決定的な局面を迎えたとされている。

たしかに、この処分を知太政官事対大納言という構図で捉え、知太政官事Ⅱ参議という立場をとれば、礼式の変更は礼制上の矛盾を解決する結果を生んだといえよう。ただ、そうであるならば、本来、親王は、位階に関係なく親王であることによって尊ばれるはずなの

に^{二七}、こうした改変によって、その身分まで冒されることになってしまう。となると、当然、その後の舍人親王の「親王」としての待遇に影響があつてもおかしくないだろう。しかし、さきに確認したことから明らかなように、親王としての体面は依然として保たれているのである。このように考えてみると、井上氏の説には少なからず問題が残ってしまう。

こうしたことを考慮してみると、そもそも、この礼式改変を知太政官事の地位低下と結び付けて考えようとすることに、問題があるのではなからうか。天平元年四月の太政官処分が出た理由については、別に求める必要があるのではないかと思う。とはいえ、この問題を解決するのは難しく、直ちに結論を出せるわけではない。しかし、かつて虎尾達哉氏^{二八}が、

（前略）当時の知太政官事舍人親王が議政官として太政官の朝堂に頻々と参入するようになった。諸司官人がそのつど下座せねばならないとすれば、朝堂における政務はそのたびに中断され支障が生じかねない。本法令はさような政務中断を抑える措置ではなかったかと思われるのである。

と推測されたように、単純に政務手続き上の問題として捉えるべきではないだろうか。すなわち、天平元年四月の礼式改変の措置は、太政官合議の円滑化を目指す目的でおこなわれたものであつて、舍

人親王を迎えるにあたり、いちいち公卿らが座を下りて威儀を正そうとすることよりも、親王の参入後、直ちに合議が開始される体制を作り上げることが、礼式簡素化の最大の狙いではなかったかと思うのである。

礼式の改変によつて、大納言の優位性をはかろうとしても、舍人親王が「親王」である以上は、その身分的尊厳まで低下させることはできないであろう。こうしたところからも、処分の狙いが政務を迅速にするための措置と取るほうが、合理的な解釈のように思えるのである。また、前述のように、この処分が舍人親王の在世中に限定されたもので、彼のみを対象としていることを考慮すると、この処分を発議したのは舍人親王自身だったのかもしれない^{一九}。

朝堂という公の場で、立場に関係なく尊ばれるべき親王の礼式を改変するということは、彼に相応の恥辱を与えることでもあり、引いては皇室の威儀にも影響を及ぼしかねない。通説の立場からでは、皇親の代表として目される舍人親王の威厳を低下せしめれば、おのずと皇親全般の後退につながるため、彼のみへの処分で十分だったとも考えられる。しかし、礼式改変の措置が太政官処分であること、舍人親王が知太政官事であることを併考すると、舍人親王の賛同を得難く、礼式の改変を実施することは困難であつたといえよう。そのため、これを舍人親王による発案とし、皇親の代表として彼が納

得したうえでの決定と見做せば、上述のような問題は生じないし、礼式の簡素化が実行に移された事情をうまく説明できるのではなからうか。

むすび

以上の見通しは、通説とは大いに異なるため、ただちに承認は得られないかもしれない。しかし、本章での解釈は、「長屋王の変」後の皇親と藤原氏との勢力関係、さらには「藤原四子体制（武智麻呂政権）」について検討するうえで、あらたな視点となるのではなからうか。このうち、「藤原四子体制（武智麻呂政権）」のことは第一章で触れてあるので、そちらを参照していただきたい。

ここでは、『続日本紀』を素直に解釈することで、天平元年四月癸亥条にみられる太政官処分について、諸先学による視座のみでは有する意義の究明が困難であることを浮き彫りにし、虎尾説を再評価したうえで、若干の私見を提示してみた。もちろん、卑見を裏付ける根拠の提示や、なぜ礼式の簡素化が天平元年四月におこなわれたのか、など課題は多く残るが、ひとまず、通説的理解による矛盾の指摘を成果とし、欄筆しておく。

【註】

- 一 野村忠夫「知太政官事、内臣、左・右大臣―律令国家権力のメカニズム―」(『律令政治の諸様相』所収、塙書房、一九六三)。
- 二 中川収「藤原四子体制とその構成上の特質」(『奈良朝政治史の研究』所収、高科書店、一九九一)。
- 三 木本好信「武智麻呂政権の成立―野村氏の房前重視説への反論を中心として―」(『奈良朝政治と皇位継承』所収、高科書店、一九九五)。
- 四 林陸朗「天平期の藤原四兄弟」(『国史学』一五七、一九九五)。
- 五 瀧浪貞子「武智麻呂政権の成立―「内臣」房前論の再検討―」(『日本古代宮廷社会の研究』所収、思文閣出版、一九九一)。
- 六 天平元年二月戊寅条によれば、事件に関与したと上毛野宿奈麻呂らが処罰されており、同壬午条では、密告者に対する叙位がおこなわれている。
- 七 新日本古典文学大系本『続日本紀』による。
- 八 井上巨氏(『朝礼の研究』／『日本古代朝政の研究』所収、吉川弘文館、一九九八)は、『政事要略』糾弾雑事致敬拝礼下馬条(新訂増補同史大系本)に記される、惟宗直本と藤原時平との下座・動座についての答問から、「下座とは牀の座を下りて立ち、また座を下す」と、席を外すことを礼容としたもの」と結論づけられている。
- 九 井上氏(前掲註八論文)は、実際に「動座」がおこなわれた場面や状況を『延喜式』の規定から確認し、「相手の方へ向き直る」行為が「動座」であったことを明らかにされている。
- 一〇 喜田新六「令制下における君臣上下の秩序維持政策」(『令制下における君臣上下の秩序について』所収、皇學館大学出版部、一九七二)。
- 一一 養老令の施行後、朝座儀礼は、弘仁九年(八一八)三月(新訂増補同史大略弘仁九年三月戊申条)と弘仁十年六月(新訂増補同史大系本『日本紀略』弘仁十年六月庚申条)に改定があった。そして『延喜式』に継承され(延喜式部式上、朝座礼儀条)、「凡在朝堂座一見親王及太政大臣一者。皆磐折而立。若見左右大臣一及左右大臣見親王及太政大臣一者。竝起座。即就座及出門訖乃以次就座。(後略)」という条文で規定されている。
- 一二 岸俊男「朝堂の初歩的考察」(『日本古代宮都の研究』所収、岩波書店、一九八八)。
- 一三 橋本義則「朝政・朝儀の展開」(『平安宮成立史の研究』所収、塙書房、一九九五)。
- 一四 新日本古典文学大系本『続日本紀二』補注一〇―四五。

一五 新日本古典文学大系本『続日本紀』補注二二―二六では、「舍人親王が知太政官事であったこと」や、「天武皇子中、最後の存命者であった」ことが想定されている。

一六 井上亘「参議朝政考」(『日本古代朝政の研究』所収、吉川弘文館、一九九八)。

一七 喜田氏前掲註一〇論文。

一八 虎尾達哉「知太政官事小考」(武光誠編『日本古代社会史研究』所収、同成社、一九九一)。

一九 山田英雄氏(「知太政官事について」／『政治社会史論叢』所収、近藤出版、一九八六)は、「長屋王の変」直後の「緊張した雰囲気の中でこの決定に親王が加わっていたのであろうか」との疑問から、舍人親王が合議に参加していなかった可能性を指摘されている。

第六章 知太政官事に関する一考察

はしがき

奈良朝政治史、特に天平期の政治体制を解明するために、避けては通れぬ課題として、知太政官事をめぐる諸問題がある。

知太政官事とは、八世紀前半に置かれた令外の官で、刑部・穂積・舍人の三親王に、鈴鹿王を加えた計四名が就任しており、彼らが天武天皇の子孫であることに特色がある。ただし、確かな情報はこの程度であつて、職掌や位置づけなど、不確定なことは多い。無論、今日までに研究は蓄積されているが、諸説一致しているわけではない。そのためか、天平期の政治体制が論じられるとき、知太政官事について言及されることは少ないように思う。

しかしこれでは、天平期の政治体制を厳密な意味で鮮明にすることはできないだろう。とはいふものの、こうした現状にならざるを得ない要因もある。それは、知太政官事に関する研究史が整理されておらず、何がどこまで明らかにされているのかなど、研究成果を的確に把握しづらいのである。故に、天平期の政治体制論は、知太政官事の研究を十分に踏まえることなく進展してきたと思われる。かくいう筆者も、第一部にて天平期の政治体制について論じている。

しかし、いま述べた通り、知太政官事を論じないままでは、無責任な主張となってしまうだろう。

こうした問題を意識しつつ、本章では、知太政官事について、現段階でどこまで明らかにできるのかを探っていく。補任者たちが、その時になぜ選ばれたのか、如何なる役割を果たしていたのか、位置づけはどうであつたのかなど、各時期における特徴を明確にしていきたい。この作業を通じて、知太政官事の特徴を見出すことができるのではないかと考えている。そして、ここで得ることができると、天平期政治体制を究明していくための材料として提示したい。

なお、研究史の整理は、各時期を論じる際に、その都度おこなっていく。これは、筆者の力量不足によるところが大きい。知太政官事に関する論稿は、着眼点が多岐にわたっており、一括で整理するのが難しいからである。よって、各研究者の主張を適宜抽出しながら、その是非を検討していく手法をとる。

一、刑部親王の場合

刑部親王の知太政官事就任は、大宝三年（七〇三）正月壬午条に、
詔三品刑部親王知太政官事^一。

とある。非常に短い記事ではあるが、知太政官事の初見である。様々

な議論を呼び起すなか、まずは、なぜ刑部親王にこの詔が下されたのかを考えていきたい。

刑部親王といえば、周知のとおり天武天皇の皇子である。慶雲二年（七〇五）五月丙戌条の薨去記事に、「天武天皇之第九皇子也。」と明記されている。ここでいう第九皇子とは、年齢による序次ではなく、母の身分によって記されていることが明らかにされており、こうした成果によると、刑部親王は高市・草壁・大津皇子に次ぐ年齢となる。ちなみに前三者は、慶雲二年五月までに薨去しているため、刑部親王は知太政官事の就任時、天武天皇の諸皇子のなかでは最年長だったということになる。

こうした刑部親王の経歴を概観してみると、大きく二つ、特筆すべきことがある。一つは、川島皇子らと「帝紀及上古諸事」の撰定に関与していたことである。（『日本書紀』天武天皇十年三月丙戌条）もう一つは、大宝律令の編纂に携わっていたことである。特に後者は、大宝元年（七〇一）八月癸卯条に、

遣三三品刑部親王。正三位藤原朝臣不比等。從四位下下毛野朝臣古麻呂。從五位下伊吉連博徳。伊余部連馬養等撰定律令。
於是始成。大略以三淨御原朝廷為三淮正。仍賜禄有差。

とあって、その責任者たる存在であったことが知られている。これらのことから、親王が学問的な面で活躍していた様子を垣間見るこ

とができよう。しかし品位は三品と、とりわけ高い地位が与えられていたわけではなかったのである。

以上のことをまとめてみると、刑部親王は大宝三年の段階で、品位は三品と決して高いわけではないが、生存する天武天皇の諸皇子の中では最年長であり、律令撰定事業の総裁的立場であったといえるだろう。そうすると、居並ぶ親王から刑部親王が選出された理由が浮かび上がってくる。すなわち、他の親王と比較して年長であったことと、律令編纂という大きな実績があったことによると考えられる。特に前者は、先行学説でも指摘されているように、重視すべき条件の一つとして数えられる。これについて、もう少し踏み込んだ考察をされた高嶋正人氏は、刑部親王は学問・教養に優れていながらも持統天皇朝では不遇で、不比等のおかげで大宝律令の撰定者となり、これに好意を感じていたとの見方から、

藤原不比等が自分に好意的な親王刑部を若き文武天皇の輔弼者として内廷に起用することによって、右大臣阿倍御主人、年長の大納言石上麻呂らを抑えて自己の政策を遂行しやすくすることを図ったのではないか（後略）。

と想定されている。しかし高嶋説は、不比等を過大評価している感があり、もう一つ検討する余地が残ると思われる。したがって、「太政官の事を知らしむ」よう刑部親王に詔が下った理由は、親王が年

長者であったことと同時に、律令編纂による功績があったとみておくのが穏当であろう。そしてこの選任理由は、知太政官事が設置された背景と密接に結びつくのである。

知太政官事研究の第一人者といえる竹内理三氏^四は、大宝二年（七〇二）十二月の持統太上天皇崩御^{大宝二年十二月甲寅}と関連づけて論述し、知太政官事を太政大臣と同格に位置づけられ、持統太上天皇の代役として「萬機を攝行」するための人事であったとみておられる。この竹内氏の見解は、その後、多くの研究者によって継承・批判されていく。例えば、政界が動揺する中で、若い文武天皇の地歩を確保すると同時に、補佐する必要性から設置したものだと理解されたり^五、井上光貞氏^六が提唱した知太政官事Ⅱ皇族太政大臣制の継承という視点を加え、皇親勢力が太政官に対し掣肘を加えるために考案したものだと言明されたりしている^七。

しかし、このような見方は、持統太上天皇が崩御された直後の人事という時期的なことからいえば有効であるが、しばしば指摘される知太政官事Ⅱ太政大臣、もしくは皇族太政大臣制の継承という視座は、虎尾達哉氏^八の検証によって斥けられている。近江令制下での太政大臣と浄御原令制下での太政大臣とは、「その拠つて立つ官制上の基盤を異にするのであり、安易に後者を前者の継承によるものとみなすことは憚られる」ために、「知太政官事と浄御原令制下の太政

大臣との厳密な意味における継続性もまた認めがたい」とする虎尾氏の言葉は、傾聴すべきであろう。

そもそも、知太政官事の設置背景は、持統太上天皇の崩御という時期的な理由のみでは説明できないのではなからうか。なぜなら、藤原京跡左京七条一坊から、大宝二年の年紀をもつ「太妃宮職解」と解読できる木簡^九が出土しているからである。義江明子氏^{一〇}の論によると、この木簡が示唆しているのは、大宝初年の段階で阿閑皇女の「皇太妃」としての地位や待遇が確立していたことと、その家政機関として「皇太妃宮職」が設置されたことで、「持統太上天皇とともに、息子文武を後見する公的立場を確保」していたことらしい。ここでいう皇太妃宮職は中宮職の一種で、阿閑皇女は天皇大権を代行していたことがすでに指摘されており^{一一}、皇太妃宮職の存在を示す木簡がいくつも出土していることからすると^{一二}、義江論を支持することに差し支えはないだろう。そして、これらの論を踏まえてみると、持統太上天皇が崩御されてしまっても、なお皇太妃宮職の阿閑皇女が文武天皇を扶翼していたとみることができるのではなからうか。そうすると、若い文武天皇の補佐役が必要になったという理由のみで、知太政官事は創設されたわけではないと考えられるのである。したがって、知太政官事が設置された事由は、別にも求めなくてはならないだろう。

先行する学説の中には、刑部親王が知太政官事に就任したとき、左右大臣が欠員であつたことに着目して、その目的を大臣の補充とする見解がある^{二三}。たしかに、大宝三年正月の時点では左大臣を欠いており、右大臣には阿倍御主人がいるものの、同年四月に薨じていることから^(大宝三年閏四月辛酉条)、刑部親王の就任時にはすでに病床にあつたと推測でき、これが政治問題になつていたとも考えられる。しかし、例え数ヶ月でも、大臣がいる状態での補任であることに違いはないため、正鵠を射ているとはいい難い。したがって、単に大臣の補充というだけでは、うまく説明できなさそうである。

そこで、堀井崇晴氏^{二四}の意見をきいてみよう。氏は、刑部親王が就任した大宝三年正月は、律令国家建設事業が進行中であり、「律令に則った国家運営の実現が目指されていた」ことから、「知太政官事の設置と刑部の就任は大宝律令の成立と関係があると考えるべき」と指摘し、

「共同統治」の立場にあり文武天皇の後見をしていた持統太上天皇の崩御という状況にあつて、律令制を定着させるため、律令編纂に参画し律令に通じていた刑部が「太政官の事を知る」べき職に任じられたと考えることができる。

と述べられている。堀井氏がいうように、当該期には律令体制の確立を意識した政策が実施されているし^{二五}、刑部親王と他の親王とを

比較したとき、際立つのが律令編纂事業への関与だということは、先に確認したとおりである。したがって堀井氏の説は、刑部親王が選ばれた理由と整合性を持つため、首肯されてもよいだろう。また、上述のように、律令編纂事業と知太政官事の設置を結びつけて考えると、関晃氏^{二六}が刑部親王の就任事情について、

律令撰定の最高責任者であつたが故に、新制度の本来の趣旨をよく理解しており、太政官と皇室の間の連絡・調整役には最も適任と考えられていたとみられるのである。

といわれることも、よく理解することができる。さらに、廣瀬明正氏^{二七}が説かれるように、知太政官事の案出が「参議朝政」の特権と同じく、「皇親（特に親王）に対して「知太政官事」といふ職能を与へ、太政官枢機へ参加せしめた」方法であるならば、律令に詳しい刑部親王が太政官を総括し、律令体制の確立を領導していたといえるであろう。近年、原朋志氏^{二八}は、「皇族太政大臣と知太政官事を直接的に結びつけることは、適当ではない」という立場を前提に、知太政官事の「議政官としての側面」を見出したうえで、「一世王という王権内で軽視できない身位にある親王を、他の議政官と共に官人序列に組み込むことが困難であつた」という当時の現状を踏まえ、「諸王・諸臣とのバランスを考慮しつつ、親王を加えて議政官を構成するために創設された官職が、知太政官事であつた」と結論

づけておられる。

このように、「太政官の事を知らしむ」立場を得た刑部親王は、『公卿補任』を通覧すると、大納言よりも上位で大臣よりは下位に記載されている。しかもこのことは、刑部親王が知太政官事に就いていた大宝三年から慶雲二年までの期間、一貫して認められる。この事実から、大納言よりも序列が上であったことは疑いないだろう。問題は、大臣との関係であるが、現存する史料からだけでは、これを明らかにすることはできない。しかし、大納言よりは上位に位置するということは確実で、この点は重視すべきことである。

以上のことを要してみると、刑部親王の場合、①当時、在世する天武天皇の皇子としては最年長で、かつ律令編纂という大きな功績を持っていたため選出され、②その役割は、知太政官事の創設が持統太上天皇の崩御と必ずしも連動しないことからすると、律令体制の確立を主導するためだったとも考えることができ、③大臣よりも下位に列せられてはいるが、常に大納言よりも上位に位置づけられていた、と結論づけることができる。したがって、この時期における知太政官事は、太政官の総裁的な地位だったと断言することはできないが、かといって、大納言よりも序列が上である以上、大臣と同格、ないしそれに准じる立場であったと評価できるだろう。

二、穂積親王の場合

刑部親王の薨去後、穂積親王に対して「太政官の事を知らしむ」の詔が下されている。慶雲二年九月壬午条に、

詔三品穂積親王^一知太政官事^一。

とある。穂積親王が、なぜ選ばれたのかは判然としないが、前の刑部親王と同様に、詔によつてその立場を得ており、まだ正式な官職として成立していないことが看取される^{一九}。このことは、後の舍人親王や鈴鹿王の補任時に「為知太政官事^二」となつていることや、就任者の薨去記事を概観することによつて窺うことができる。

【史料1】慶雲二年五月丙戌条

三品忍壁親王薨^一遣^三使監^三護喪事^一。天武天皇之第九皇子也。

【史料2】靈龜元年（七一五）七月丙午条

知太政官事一品穂積親王薨^一遣^三從四位上石上朝臣豐庭。從五位上小野朝臣馬養^一。監^三護喪事^一。天武天皇之第五皇子也。

（後略）

【史料3】天平七年（七三五）十一月乙丑条

知太政官事一品舍人親王薨^一遣^下從三位鈴鹿王等^一監^三護葬事^上。其儀准^三太政大臣^一。命^三王親男女^一。悉会^三葬処^一。遣^三中納言正三位多治比真人泉守等^一就^レ第宣^レ詔。贈^三太政大臣^一。親王

天淳中原瀛真人天皇之第三皇子也。

【史料4】天平十七年（七四五）九月戊午条

知太政官事兼式部卿從二位鈴鹿王薨。高市皇子之子也。（後略）
一見すれば明らかのように、刑部親王のとき以外は、知太政官事が肩書きとして使用されている。ということは、刑部親王の頃は、まだ官職として見做されておらず、穂積親王の時期を堺として変化が生じたのではなからうか。これに関連して注目を集めるのが、慶雲三年（七〇六）二月辛巳条である。そこには、

知太政官事二品穂積親王季祿。准^二右大臣^一給^レ之。

とあって、知太政官事穂積親王の季祿を右大臣に准じて支給するよう定めていることがわかる。この措置の対象が、知太政官事に対してなのか穂積親王個人なのか議論は尽きないが^{二〇}、延喜式部式上知太政官事条に^{（一）}_{（式）}^{（延喜）}_{（参照）}、

凡親王知^二太政官事^一者。其季祿准^二右大臣^一。（後略）

と踏襲されていることからすると、以後、俸祿を給う官職となっていたとみても誤りではないだろう。

いま一つ、この時期での変化について、気を配っておきたい史料がある。それは、和銅四年（七一）十月甲子条である。そこには、

勅依^二三品位^一始定^二祿法^一。職事^二二品二位^一。緇卅足。絲一百紵。錢

二千文。王三位絶廿足。錢一千文。臣三位絶十足。錢一千文。

王四位絶六足。錢三百文。（後略）

とあって、品位による祿法が定められている。ここで注視しておきたいのは、「職事二品二位」とあることと、品位の記載が二品のみだということである。勅の内容からすると、「品位」を有する者が対象であり、それはつまり一品から四品、正一位から少初位下までとなるだろう。ところが、文中にみられる最高品位は二品で、最高位階は二位である。管見による限りでは、和銅四年の段階で一品と四品の親王は見当たらないが、二品には穂積親王・長親王・舍人親王・新田部親王の四名が該当しており、三品には志貴親王がいる。だとすれば、一品と四品は該当者不在で省略されたと処理することができようが、三品については、省略された何かしらの事情が考えられるであろう。

そこで注目してみたいのが、次に引用する公式令内外諸司条である^{（一）}_{（令義）}^{（解）}_{（参照）}。

凡内外諸司。有^二執掌^一者。為^二職事官^一。无^二職掌^一者。為^二散官^一。（後略）

この規定によると、内外諸司で「執掌」のある者が職事官となる。そして、この令文と和銅四年十月甲子条を合わせてみると、先の疑問は氷解するだろう。すなわち和銅四年十月甲子条の祿法は、あくまで「職事」の品位所有者に適応されるのであるから、この時点で

何らかの職に就いている形跡がなく、「執掌」を持っていなかった志貴親王は対象外だったのではなからうか。

このことを念頭に置いてみると、二品については以下のように理解される。前述のとおり、和銅四年十月時点で二品を帯びる者は四名である。このうち、穂積親王は知太政官事に就任しているが、他三名が何らかの役職を拝していた痕跡はない。つまり、和銅四年十月甲子条の「職事二品二位」の「二品」とは、唯一の有職者、すなわち穂積親王を指しているのではなからうか。逆に言うと、知太政官事たる穂積親王が「職事」と認識されていたからこそ、先の記事には二品が反映されていると考えられるのである。そして、公式令内外諸司条により、内外諸司で「執掌」を持つ者が職事官であることも踏まえてみると、このとき穂積親王は、知太政官事に付随する何らかの「執掌」を有していたことになるだろう。知太政官事を職事官ではないと強調するむきもあるが^三、当時の実態としてその扱いは、「職事」だったのではなからうか。

では、このようにみた場合、「職事」と認識されるようになった知太政官事の「執掌」は、具体的には何であつたのだろうか。現段階では、これを明確な史料によつて特定するのは困難である。しかし、解決する一つの方法として、和銅元年七月乙巳条に注目しておきたい。次に、必要箇所を引用しておく。

召三品穂積親王。左大臣石上朝臣麻呂。右大臣藤原朝臣不比等。大納言大伴宿祢安麻呂。中納言小野朝臣毛野。阿倍朝臣宿奈麻呂。中臣朝臣意美麻呂。左大弁巨勢朝臣麻呂。式部卿下毛野朝臣古麻呂等於御前^一。勅曰。卿等情存公平^二。率先百寮^三。朕聞之^レ意^レ慰于懷^一。思由卿等如^レ此。百官為^レ本至^二天下平民^一。垂拱開^レ衿。長久平好。又卿等子々孫々。各保榮命^一。相繼供奉。宜^下知^二此意^一各自努力^上。(後略)

右の史料によつて、穂積親王は、他の公卿らと同じように元明天皇の御前に召されており、「率先百寮^三」する立場であつたことが判明する。いうまでもなく、左大臣石上麻呂から中納言中臣意美麻呂までは太政官の構成員である。また、式部卿下毛野古麻呂は、大宝二年五月に「参議朝政^一」しており^(大宝二年五月丁亥条)、左大弁巨勢麻呂も「参議朝政^一」していた可能性がある^三。要するに、御前に召された九名のうち、穂積親王を除く八名は太政官を構成する人物なのである。すると、「二品穂積親王」としなくても、親王が同じように太政官の一員で、当時の太政官構成員が皆御前に召されたと読み取ることができるのではなからうか。しかも、親王の名が大臣よりも上位にあることからすると、この時の知太政官事は大臣に匹敵していたと考えられるだろう。このことは、上野国多胡郡碑に^(群馬県史編さん委員会編『群馬県史』資料編四 原始古代四)

／群馬県、
一九八五、

(前略)和銅四年三月九日甲寅。宣左中弁正五位下多治比真人。

太政官二品穗積親王。左大臣正二位石上尊。右大臣正二位藤原尊。

とあつて、「太政官二品」と刻まれる穂積親王が最上位であることや、『公卿補任』における序列が大臣よりも上位であることが傍証となる。したがって、少なくとも大納言を越える位置づけなのは確実視される。

以上を要するならば、穂積親王の場合、①その選任理由は定かでないが、②慶雲二年二月に知太政官事が本格的に官職となつたことに伴い、「職事」という認識の下で何かしらの職掌を持ちながら、③太政官内で大臣と同程度に位置づけられ、大納言よりは上席であつた、と結論づけることができる。もっとも、有する職能が何なのかという疑問については、これまでの検討だけでは解明できない。よつて、ここでは結論を急がず、残る二名の補任者の確認に移りたい。

三、舍人親王の場合

穂積親王の薨後、知太政官事はしばらく置かれなくなるが、養老四年八月甲申条に、

詔以_レ舍人親王_一為_二知太政官事_一。新田部親王為_二知五衛及授刀

舍人事_一。

とあるように、舍人親王がその座に就くことになる。舍人親王といえば、「宗室年長」として国家にとって重要な存在であると評された人物である^(養老三年十月辛丑条)。当時の評価が、このときの人選に影響を及ぼしたであろうことは想像に難くないだろう。では、舍人親王が担うことになった役割は、いったいどのようなものであつたのだろうか。

先行学説では、舍人親王の就任が不比等の薨去した翌日で、連続性を持つ人事と想定できることから、不比等が政界で果していた役割を踏襲させるための布陣とみることがある_三。しかし、すでに批判があるように、上記の説は成立し難いように思われる_四。特に、山田英雄氏_{三五}が、「不比等の勢力は右大臣の外に不比等個人の様々な背後関係に依つて構成されているのであつて、他人が同様な権力を持ちうる筈がない」とする指摘は、傾聴すべきではなからうか。

不比等薨去との関係性を採らない学説は、このとき大臣が不在となつていることに着目し、打開策として知太政官事が置かれたと推定されている_{二六}。『令義解』職員令太政官条に、

謂。与_二右大臣以上_一共参_二議天下之庶事_一。若右大臣以上並無者。

即大納言得_二專行_一。其兼彈者。雖_二是左右大臣_一。尚不得_レ為_二職掌_一。故職掌之末。別起而注。即大納言雖_二大臣以上並無_一。

不得_レ復兼彈_レ之。

年月日		内容	分類
1	大宝元年五月己卯案	入唐使栗田真人に節刀を授く。	遣唐使
2	大同二年二月己丑案	陸奥鎮東将軍巨勢麻呂、征韓後蝦夷唐生伯石湯に節刀を授く。	遣唐使
3	養老元年三月己酉案	遣唐押使多治比果守に節刀を賜う。	遣唐使
4	養老二年二月甲戌案	多治比果守、節刀を進む。	遣唐使
5	養老四年三月甲申案	中納言正四位下大伴旅人をもつて、征夷人持節大將軍となす。	征夷人
6	養老四年九月丙寅案	持節征夷將軍多治比果守、持節鎮牧守唐那部縣河に節刀を授く。	遣唐使
7	神龜元年四月丙申案	式部卿正四位上藤原宇合をもつて、持節大將軍となす。	遣唐使
8	天平五年閏三月癸巳案	遣唐大使多治比広成に節刀を授く。	遣唐使
9	天平七年三月丙寅案	入唐大使多治比広成、節刀を進む。	遣唐使
10	天平九年正月丙寅案	持節大使兵部卿從三位藤原麻呂に召して、陸奥國に派遣せしむ。	遣唐使
11	天平十二年九月丁亥案	從四位上大野東人に勅して、節を持て広綱を討たしむ。	遣唐使
12	天平勝宝四年閏三月丙辰案	遣唐大使藤原清河らに節刀を給う。	遣唐使
13	天平聖宇六年四月丙寅案	中臣鹿主に節刀を賜う。	遣唐使
14	宝龜七年四月壬申案	遣唐使に節刀を賜う。	遣唐使
15	宝龜七年十一月己巳案	遣唐大使佐伯今毛人、節刀を進む。	遣唐使
16	宝龜八年二月戊子案	遠唐副使小野石毛人、天神地祇を春日山の下に拂す。	遣唐使
17	宝龜十一年三月癸巳案	中納言從三位藤原経緒をもつて征夷大使となす。	遣唐使
18	天応元年六月辛亥案	布勢清直ら、使の節刀を進む。	遣唐使
19	延暦三年二月己丑案	從三位大伴家持を持節征夷將軍となす。	遣唐使
20	延暦七年十二月庚辰案	征夷大使紀古佐美に節刀を賜う。	遣唐使
21	延暦八年九月丁未案	持節征夷大將軍紀古佐美、節刀を進む。	遣唐使

る具体的な不備の内容は「兼弾」であり、大臣の「弾正糾不_レ当者。兼得_レ弾_レ之」という職務を指している（令義解 職 員令太政官条）。また、春名宏昭氏

実際、大臣が不在である場合、政務遂行に支障を来す懼れがある

ことを考慮すると、舍人親王の時期での知太政官事は、大臣の不在を補うこともできたと考えられるであろう。このことについて、新たな視点を提示する意味で、節刀授与に触れておきたい。まずは、

『儀式』巻十の「賜將軍節刀儀」によると、（『儀式』参照）、征夷におけ

る節刀の授与には大臣の参加が認められる。すなわち大臣は、節刀授与の際に殿上に侍り、任命する將軍を宣によつて喚す役割を担当している。鈴木拓也氏^{三八}は、延暦七年（七八八）の段階で「賜將軍節刀儀」が行われていたことを明らかにしたうえで^{（延暦七年十月、三月庚辰条）}、

これ以外の節刀授与に関する史書の記述は簡略で、『儀式』との比較はできないが、將軍と天皇との緊密な結び付きを考慮すれば、公的な空間である大極殿・朝堂院よりは、当初から内裏で行うにふさわしい儀式であると言えるであろう。

と指摘されている。これを踏襲するならば、「賜將軍節刀儀」は奈良時代にも遡る可能性があるのではなからうか。なぜなら、『続日本紀』にみられる節刀授与の際には必ず大臣が存在しており（表一）、「当初から内裏」で節刀授与が行われていたとすると、八世紀段階での式次第が後に明文化されて、『儀式』に収められたと考えることができるからである。

しかし、このように推定する場合、養老四年九月の征夷を説明しなくてはならないであろう（表一—6）。労をいとわず、その記事を引用しておく（養老四年九月丁丑条）。

以^二播磨按察使正四位下多治比真人^一爲^二持節征夷將軍^一。左京亮從五位下毛野朝臣石代爲^二副將軍^一。軍監三人。軍曹二人。以^二從五位上安倍朝臣駿河^一。爲^二持節鎮狄將軍^一。軍監二人。軍曹二人。即日授^二節刀^一。

右の史料からは、多治比県守が持節征夷將軍に、安倍駿河が持節鎮狄將軍となっており、彼らに「節刀」が授けられていることがわかる。ところが、養老四年九月の廟堂構成をみると（公卿補任、養老四年条）、

知太政官事 一品 舍人親王

大納言 正三位 長屋王

中納言 從三位 多治比真人池守

正四位下 巨勢朝臣祖父

大伴宿祢旅人

參議 從四位上 藤原朝臣房前

となっており、大臣が欠員の状態であったことが判明する。このことは、「賜將軍節刀儀」に基づいた場合、「節刀」を授与する人物が不在であることを意味している。となると、このとき代理を務めたのは誰なのかという素朴な疑問が浮かんでくる。

そこで注目されるのが、知太政官事の舍人親王である。もともと、『令義解』職員令太政官条に「若右大臣以上並無者。即大納言得^二專行^一」とある以上、大臣に代わって專行を得ることができた長屋

王も候補者となるだろう。しかし、後に編纂される『儀式』には、あくまで「大臣」と明記されており、仮に大納言が節刀授与を行っていたとすると、そのことが『儀式』に反映されるのではなかろうか。片や知太政官事はというと、刑部・穗積親王の時期から繼續して大納言よりも上位に位置し、穗積親王より「職事」として認識され、太政官の一員となっていたと思われる。よって、大納言の長屋王よりも知太政官事たる舍人親王のほうが、大臣の代役として節刀授与を執り行う立場として相応しいだろう。そして、これまでの推定が概ね当たっているならば、舍人親王が務めた知太政官事の職務に、大臣代行が含まれていたとみる、一つの手がかりとなるのではなかろうか。

ところで、舍人親王の時期を扱う際、必ず注目される記事がある。それは、『公卿補任』養老四年条に、

神龜五年三月廿八日詔書奉行注。三木一品舍人親王。列^二左大

臣長屋王上^一。六月廿二日論奏注。知太政官事舍人親王。書同

—大臣上事事稀有。仍注^レ之。

とある、舍人親王の項に施された注書きである。同書神龜五年条にも、これと同一の文がみられる。これらの記事によると、「神龜五年（七二八）三月廿八日詔」では、「三木一品舍人親王」が「左大臣長屋王の上に列」しており、「神龜五年六月廿三日論奏」では、「知太

政官事舍人親王」が左大臣長屋王よりも上に書いていて、これらが稀有だったので注書きしたというのである。このことから、知太政官事は左大臣の下におかれることもあったと指摘されている^{二九}。

このように、序列の問題で取り上げられることの多い記事であるが、より重要なのは、舍人親王が「三木」となっていることである。というのも、これを根拠とするならば、知太政官事を参議相当と見做すことができるからである。

これについて触れられた虎尾氏^{三〇}は、「三木一品舍人親王」とあることから、「知太政官事の職能の主たるものはこの「参議」にあった」と述べ、『続日本紀』に顕れる知太政官事による宣勅・宣詔の事例が「議政官としての職務遂行」であったことを挙げて、「史料上において知太政官事が一般の議政官と異なる職能を有した形跡は見出しがたい」ことから、「知太政官事が「参議」以外に有した職能も一般の議政官のそれを超えるものではなかった」ことを指摘されておられる。ただし虎尾氏は、「知太政官事は参議と同格ではないが、広義の参議」と結論づけられており、知太政官事Ⅱ参議と断言されているわけではない。

しかし近年、井上亘氏^{三一}が虎尾説を踏まえたうえで、「参議朝政」について詳しく分析し、その実態は議定の傍聴で、意味するところは太政官の就任であることを明らかにし、

王卿が勅（任官・諮問）によつて（政）朝政や（定）朝議に参与するあり方、それが天智・天武朝の「太政官」制であり、これを継承したものが「参議」制であった。七世紀の段階では、太政官を拝した王卿が聴政や議定に参議し、大宝令の施行とともにこれを大臣と大納言の職掌へとさらに限定した後、勅により参議と中納言を加えるに至った。

と整理された。そして、これを前提に据え、天平元年四月癸亥条にみられる舍人親王の礼式改変について触れ、「知太政官事が大臣に准ずる職位にあつたとすれば、親王への礼を停止する理由はまったくない」ことから、知太政官事は参議であつたと考えられている。

このように、最近では、知太政官事を参議と引きつけて理解することもある。しかし、だからといって、参議相当と位置づけてしまふのを一般化するのには早計であらう。というのは、春名氏^{三二}が唐における参議という用語を詳細に分析し、「参議」は他の宰相たちと並び立つとともに国政を議論するという意味を有し、宰相の本質的職掌を端的に表現した語」であることを明らかにしたうえで、

これを日本の太政官に引きつけて言えば、参議には広義と狭義があつて、広義の参議は、太政大臣・左右大臣（Ⅱ真宰相）や大中納言と参議（Ⅱ狭義の参議）をすべて包含した、宰相の任にある者という意味の語であると言うことができよう。知太政

官事は、この広義の参議の一つに他ならない。

と述べておられるからである。これを踏まえてみると、議政官と変わらない知太政官事の職務は、「広義の参議」としての職能ということになる。だとすると、その幅を「狭義の参議」に限定する必要はなく、太政官構成員の全てに可能性を見出さなくてはならないだろう。

知太政官事は、繰り返し述べてきたように、大納言よりも上位に位置づけられている。前掲した『公卿補任』の記事によると、左大臣の下に位置することがあったと認めなくてはならないが、これは、あくまで大臣との上下関係が問題視されるのであって、大納言よりも上だという事実は動かないだろう。また、このことが親王ならではの優遇であるならば、逆に、長屋王ら大臣の下位となる事例があること自体が不可解となる。そのため、知太政官事が大納言よりも上位であることは確実視される。したがって、序列の面から参議相当とみることはできないだろう。

また、舍人親王は大臣の代行を務めていた可能性がある。例証として「賜將軍節刀儀」を挙げたが、舍人親王を参議と仮定してしまふと、養老四年九月の征夷時に、節刀授与に従事する大臣相当の人物が居なくなってしまう。すなわち、太政官政治に不備が生じることになる。これについて合理的な理解を求めてみると、知太政官事

舍人親王は大臣に代わる存在となるのではなからうか。

さらに、『武智麻呂伝』の記事から、知太政官事と参議の差異を窺うことができる。時代が下る成立でも、奈良朝後期にはどのように認識されていたのか参考になると思うので、次に引用しておく。

(前略) 朝廷上下安静。国無^三怨讟^一。当^三此時^一。舍人親王知太政官事。新田部親王知惣管事。二弟壮卿知機要事。其間参議高卿有^三中納言丹比県守。三弟式部卿宇合。四弟兵部卿麻呂。大藏卿鈴鹿王。左大弁葛城王^一。(後略)

ここには、「朝廷上下安静。国無^三怨讟^一」というときの、官人配置について記されている。「参議高卿」の顔ぶれからすると、これは天平三年以降であると特定できる^三。ここで注目したいのは、「知太政官事」・「知惣管事」・「知機要事」が、「参議高卿」とは別に記載されていることである。もし知太政官事＝参議という認識であったならば、このように別個のものとして記されるのは不自然である。また、親王という身分が配慮されていたとすると、「二弟壮卿」たる藤原房前が別になっていることが説明できないだろう。

さらに、吉川敏子氏^{三四}は、「知機要事」を取り上げて、「機要」の語が「軍事関係の場面でのみ用いられている」ことを明らかにし、私は「知機要事」の内容を房前が軍事的に重要な役割を果たしていたことを意味したと考える。また、『藤氏家伝』下巻におい

て「知惣管事」と「知機要事」が並立されているのは、新田部親王と房前とが、同じく軍事差配を掌りながらも、管轄を分掌していたという状況を示しており、後者の果たしていた役割とは宮中警衛を預かる中衛大将としてのものであったと理解すると述べたうえで、「房前が命ぜられた内臣の主要な任務は、これ以前に事実上その役割を終えていた」と推測されている。だとすれば、舍人親王の「知太政官事」、新田部親王の「知惣管事」、房前の「知機要事」は、「参議高卿」とは異質であつたといえそうである。となると、知太政官事を参議と見做すことはできないのではなからうか。そのほかに、天平元年（七二九）八月癸亥条の、

（前略）太政官処分。舍人親王参入朝庁^二之時。諸司莫^三為^レ之下^一座。（後略）

という太政官処分によつて、舍人親王の位置づけが低下し、知太政官事も形骸化したとみる学説がある^{三五}。しかしこれは、前章で検討したように、知太政官事の形骸化と判断するのには疑問が残る。したがつて、知太政官事は、依然として特定の地位や権能を有していたとみておきたい。

以上を要するに、舍人親王の場合、①「宗室年長」として、国家にとつて重要な存在であるために選出され、②大臣の職務を代行しうる職能を持ち、③大臣との上下関係は不詳だけれども、依然、大

納言よりは上位に位置していた、と結論づけることができるだろう。参議との差異はないとする意見もあるが、天平元年八月の礼式改変で形骸化したわけではないことを念頭に、舍人親王が果たした役割の一端を考慮してみると、参議相当とする見解には疑問が残ってしまう。

四、鈴鹿王の場合

舍人親王の薨去後、知太政官事は即座に置かれることはなかつた。しかし、天平九年（七三七）九月己亥条に、

以^二從三位鈴鹿王^一為^二知太政官事^一。從三位橘宿祢諸兄為^二大納言^一。正四位上多治比真人広成為^二中納言^一。（後略）

とみられるように、鈴鹿王が就任することになる。この人事は普通、壊滅的狀態にあつた太政官の再建を意図したものだと思われ、^{三六}。鈴鹿王は当時、天武天皇の血を引く諸王の中では年長者であり、疫病で死没者が続出するなか、参議経験者で生き残った貴重な人材である。こうした状況からすると、多くの諸王から鈴鹿王が選出された理由は明らかであろう。

ともあれ鈴鹿王は、太政官の混乱を機に知太政官事となっている。そして、この事実関係を含めて、これまでの知太政官事とは異なつ

て、諸王であるという特徴がある。そのため、これらを併考し、地位や権能は低下してしまっているとする見方が強い^{三〇}。その主な論拠をまとめてみると、次のようになる。

A、前掲した天平元年八月癸亥条の太政官処分により、知太政官事は形式化している。

B、橘諸兄が右大臣に昇進してからは、常に序列が下位となっている。

C、鈴鹿王は、知太政官事でありながら、八省卿を兼官している。

このうち、Aについては、すでに前章で詳述しているから、ここではBとCの理由について検討しておく。

まずBについていえば、たしかに、鈴鹿王は数例を除き、『続日本紀』や『公卿補任』の中で、たえず橘諸兄の下にその名が記されている^{三一}。けれども、だからといって、知太政官事が形骸化している^{三二}と捉えてしまうと、刑部親王の場合を顧みたとき、整合性を欠いてしまうことになる。なぜなら、先行する学説の多くが、刑部親王の品位が三品で石上麻呂の下位であつても、件の親王が帯びる知太政官事の地位は、太政官を統括し得るものであつたと結論づけているからである^{三三}。つまり一般的には、刑部親王が石上麻呂の下位に置かれていても、「太政官の事を知らしむ」立場であつたとみられて

いるのである。となると、鈴鹿王の場合も、序列では諸兄の下位になってしまっているが、「知太政官事」として一定の権能は保つていたと想定しないと、辻褄が合わなくなってしまうだろう。もっとも、刑部親王の場合、親王としての身分ならではのことなのかもしれない。しかし、鈴鹿王は「式部尊」と尊称されていたらしく（^{四一}「問本紀元田原」ノ遺二）、身分的な問題は解決されるだろう。したがって、常に諸兄の下位に位置しているからといって、それを知太政官事の形骸化と直ちに結びつける根拠にはならないのではなからうか。

次はCについてである。『続日本紀』や『公卿補任』によると、鈴鹿王はたしかに大藏卿や式部卿を兼ねている。この点で、何らかの職との兼任がないこれまでの知太政官事とは、異質であつたとみても不都合はないだろう。例えば、請田正幸氏^{四〇}は、大納言以上で八省を兼任する例が天平宝字四年正月まで確認できないことから、「このころは大納言以上の人物が八省の卿を兼任することはない」として、

八省の卿を兼任するのは中納言以下であるという考えが定着していたのであろう。このような状況のなかで鈴鹿王が式部卿を兼任することは知太政官事の地位にあつても、実質は中納言並みと見なされるようになり、この点でも橘諸兄と鈴鹿王の差は歴然とする。

と述べておられる。請田氏が指摘するように、大納言以上が八省卿を兼任する事例は、時代が下らないと見出すことはできない。しかし、「中納言並み」と見做してしまってもよいのであろうか。というのは、『公卿補任』天平九年条によると、諸兄が大納言であったときは、知太政官事鈴鹿王のほうが上位であり、少なくとも大納言より上席であることを示しているからである。また、単純に、この時の兼官は疫病の被害による人材不足への対処であり、大納言以上が八省卿を兼ねることの初例であったと見做せば、うまく説明がつくのではなからうか。

このように考えてみると、鈴鹿王が知太政官事であった時期に、それが形式化していたことには疑問が残ってしまう。先学が提示する論拠のCについては、なお検討する余地が残るものの、AとBの蓋然性が低下するならば、当該期での形骸化は再検討を要するであろう。ならば、かかる時期での知太政官事とは、いかなる役職だったのであろうか。

そもそも、天平九年というと、疫病の大流行によって、太政官は政治を運営していくうえで危機的な局面を迎えていた。このことからすると、天平九年九月の人事は、この実情に対する処置だったといえる。ひるがえつてみると、鈴鹿王を知太政官事とした狙いの一つは、太政官の再建だったと考えられるのである。迅速な対処が図

られる中で、有名無実と化した名誉職に、貴重な人物を充てるのは現実的ではないだろう。

また、王の就任が大臣不在の状況であることからすると、望まれたのは大臣の代役だったと推測される。先に確認したように、大納言だけではしつかりと太政官を運営することができない。ために朝廷では、諸兄が大臣に昇格するまでの間、大臣の代わりを務める者が必要となる。このときの太政官構成が、

知太政官事	従三位	鈴鹿王	(九月十三日任)
大納言	従三位	橘諸兄	(九月十三日任)
中納言	従三位	多治比広成	(九月十三日任)
参議	正四位下	大伴道足	
	従四位下	藤原豊成	(十二月一日任)

であることからすると(『公卿補任』天平九年条)、これに応えることができたのは鈴鹿王しかいないだろう。しかも件の王は、この後、都の留守を預かる身として、大臣となった諸兄と協力しつつ政治運営に携わっていたと思われる。このことは、各章で適宜触れているため、ここではそれを一括りにし、概要を記しておく。

鈴鹿王の経歴を跡付けてみると、天平十二年以降、計七度の留守官補任を確認することができる^{四二}。留守官については、仁藤智子氏^{四三}による詳しい研究がある。これを踏まえつつ第二章では、都の留

守を任されるということは、天皇との人的関係を如実に示しており、その人物が帯びる役職の職能が、留守としての職分となるのではないかと主張した。もし仮に、この卑見が賛同を得られるならば、鈴鹿王は留守への補任記事すべてに「知太政官事」、あるいは「知太政官事兼式部卿」とあるため、彼が留守として果たした役割は、知太政官事の職能によるものだったと推測される。

また、鈴鹿王が留守として都に残るとき、当時、右大臣ないし左大臣であった諸兄が^{四三}、行幸に陪従していることにも注意しておきたい。前述のとおり、知太政官事は舍人親王の時期以降、形骸化していたとは考えにくい。逆にいうと、鈴鹿王の時期でも特定の権能を有していた可能性は大きいのである。とすると、太政官の上位を占める諸兄と鈴鹿王を、陪従と留守とに二分する構図であったということになるだろう。ここから第三章では、太政官政務を滞りなく遂行するため、お互いが連携・協力しながら、当該期の政治運営を担当していたのではないかと想定している。これと併せて考えてみると、鈴鹿王の時期での知太政官事は、大臣と同等の権能を有していたのではなからうか。

以上のことを要すれば、鈴鹿王の場合、①天武天皇系諸王の中では年長者で、かつ疫病の被害を免れた貴重な参議経験者であったために選出され、②大臣の代わりを務めたほか、橘諸兄と共に当該期

の政治運営に携わっていた可能性が大きく、③大納言より上席であるものの、大臣よりは下位に位置していた、といえるであろう。

むすび

【表二】 就任者ごとの特徴

就任者	選任理由	職務	位置づけ
刑部親王	①生存する天武天皇の諸子の中で最年長。 ②律令編纂という大きな功績があった。	①持統太上天皇の崩御とは、必ずしも運動しない。 ②律令体制の確立を主導。	①大臣より下位。 ②常に大納言よりも上位。
櫻積親王	①不明 ②「宗室年長」であった。	①「職事」という認識で、何かしらの「執掌」があった。	①大臣と同程度。 ②大納言よりも上位。
舍人親王	①②③「日本書紀」編纂の総體的立場。 ③「天武天皇の血を引く諸王の中では年長者」。	①大臣の職務を代行することができる職能。	①大臣との上下関係は不詳。 ②大納言よりは上位。
鈴鹿王	①疫病によって太政官が壊滅したなか、貴重な参議経験者。 ②天武天皇の血を引く諸王の中では年長者。	①大臣の代わり。 ②当該期の政治運営に関与。	①大臣より下位。 ②大納言よりも上位。

本章では、就任者を個別に考察し、選任理由や役割、位置付けについて、現段階で判明しうることを提示してみた。その結果をまとめたものが【表二】である。

これを総括して、知太政官事に対する若干の私見を示しておきたい。

一、選任の条件は、天武天皇の血を引き、知太政官事を置くときに年長でなければならないことが重要である。また、就任時までに、他の候補者よりも何らかの実績が必要であった可能性がある。

二、知太政官事の職能は、就任者ごとで若干の違いがあるものの、太政官のなかで機能するものであったことは一貫している。ただし創設当初は、詔によって与えられる権能であり、官職ではなかった。それが穂積親王の時期に、太政官の構成員として数えられるようになり、「執掌」ともなう「職事」と認識されて、大臣級の政務を行うようになったと思われる。ただし、知太政官事の職掌は大臣の職掌ではなく、あくまで職務の一つとして、大臣代行をすることができたとするに留めておきたい。

三、その位置づけは、例外なく大納言より上位であることからすると、これよりも低くみることはできない。もともと、現段階では、大臣との上下関係を追究することは難しい。

以上のことが、ここでの考察から主張できることである。職能の変遷ないし多様性が窺えることや、位置づけが各時期で異なっていることなど、今日までの研究成果と重複する結論となったこともある。しかしそれこそが、知太政官事に関する現段階の通説と捉えておきたい。

一方で、本章では、舎人親王の時期以降も形骸化したわけではなく、一定の地位と権能を有していたと評価し、養老四年九月の節刀授与を例証に、参議相当ではないことを強調してみた。よって、こ

こでの論に大過なければ、天平期の政治体制論は大きく見直されなければならないだろう。しかし、知太政官事がなぜ廃絶したのか、また二度あった中断期をどのように理解するのかなど、論じ残してしまったことは多い。これは今後の課題としておき、ひとまず論を終えておきたい。

【註】

- 一 新日本古典文学大系本『続日本紀一』補注一―一一八。
- 二 廣瀬明正「皇親政治の諸問題（下）―太政大臣・知太政官事について―」（『芸林』二四―六、一九七三）。高嶋正人「知太政官事の性格と補任事情」（『史聚』一七、一九八三）。篠川賢二「知太政官事」小論」（『日本常民文化紀要』一九、一九九六）。
- 三 高嶋氏前掲註二論文。
- 四 竹内理三「知太政官事」考」（『律令制と貴族政權』所収、御茶の水書房、一九五七）。
- 五 北山茂夫「知太政官事」（『日本古代政治史の研究』所収「七四〇年の藤原廣嗣の叛亂、補記」、岩波書店、一九五九）。西川重幸「知太政官事」一試論」（『日本史論叢』横田健一先生還暦記念会、

一九七六)。高嶋氏前掲註二論文。篠川氏前掲註二論文。

六 井上光貞「古代の皇太子」(『日本古代国家の研究』所収、岩波書店、一九六五)。

七 野村忠夫「知太政官事、内臣、左・右大臣―律令国家権力のメカニズム―」(『律令政治の諸様相』所収、塙書房、一九六三)。

皇族太政大臣制の継承という立場ではないが、早川庄八氏〔大正律令制太政官の成立をめぐって〕／『日本古代官制の研究』所収、岩波書店、一九八六も「議政官組織に対する対抗ないしはそれへの監視の機能」と結論づけられている。また、横田健一氏〔橘諸兄と奈良藤原、安積親王の死とその前後〕／『白鳳天平の世界』所収、創元社、一九七三は、「知太政官事の職務は太政大臣に

相当する」との見方から同様の見解を導いておられる。

八 虎尾達哉「知太政官事小考」(『日本古代社会史研究』所収、同成社、一九九一)。

九 『木簡研究』二五(木簡学会、二〇〇三)。

一〇 義江明子『県犬養橘三千代』(吉川弘文館、二〇〇九)。

一一 春名宏昭氏〔皇太妃阿閑皇女について―令制中宮の断―〕／『日本歴史』五一四、一九九一は、元明天皇即位前紀から、元明天皇が即位前に「詔」を発していることを根拠とし、「阿閑は皇太妃として天皇大権を代行した」と結論づけられている。

一二 前掲註九。『木簡研究』三三(木簡学会、一九八一)。

一三 山田英雄「知太政官事について」(『政治社会史論叢』所収、近

藤出版、一九八六)。春名宏昭「知太政官事一考」(『律令国家官制の研究』所収、吉川弘文館、一九九七)。

一四 堀井崇晴「知太政官事と奈良時代前期の親王」(『高円史学』第一六、二〇〇〇)。

一五 例えば、中納言の設置〔慶雲二年四月丙寅〕や慶雲三年格の施行〔慶雲三年〕などがある。

一六 関晃「知太政官事と藤原氏」(『日本古代の国家と社会』所収、吉川弘文館、一九九七)。

一七 廣瀬氏前掲註二論文。

一八 原朋志「八世紀における親王と議政官」(『続日本紀研究』第四〇三号、二〇一三)。

一九 廣瀬氏前掲註二論文。高嶋氏前掲註二論文。

二〇 廣瀬氏前掲註二論文、西川氏前掲註五論文、高嶋氏前掲註二論文、篠川氏前掲註二論文、関氏前掲註一六論文などが、知太政官事に対する季禄支給とみておられる。穂積親王個人の規定とするのは、山田氏前掲註一三論文、堀井氏前掲註一四論文などである。

二一 虎尾氏前掲註八論文。

二三 新日本古典文学大系本『続日本紀一』補注四―一六。原朋志氏〔前掲註二〕は、当該条や知太政官事の親王が宣勅・奉勅を行っている

ことなどを根拠とし、「知太政官事は令外の議政官として捉えることができると思われる」と述べられている。

二三 竹内氏前掲註四論文。廣瀬氏前掲註二論文。西川氏前掲註五論文。高嶋氏前掲註二論文。また、彦由三枝子氏（大納言大伴旅人の薨去と藤原四郎政權の確立過程―知太政官事含人親王、知五衛及授刀舎人手親田部親王との関連について―『政治経済史』二八四、一九八九）は、不比等の薨去と関連づけて、「不比等

亡き後の政局の安定化促進の一大要石であつた」とみておられる。

二四 山田氏前掲註一三論文。虎尾氏前掲註八論文。篠川氏前掲註二論文。関氏前掲註一六論文。

二五 山田氏前掲註一三論文。

二六 山田氏前掲註一三論文。春名氏前掲註一三論文。堀井氏前掲註一四論文。

二七 春名氏前掲註一三論文。

二八 鈴木拓也『蝦夷と東北戦争』（吉川弘文館、二〇〇八）。

二九 竹内氏前掲註四論文。廣瀬氏前掲註二論文。篠川氏前掲註二論文。虎尾氏前掲註八論文。

三〇 虎尾氏前掲註八論文。

三一 井上亘「参議朝政考」（『日本古代朝政の研究』所収、吉川弘文館、一九九八）。

三二 春名氏前掲註一三論文。

三三 多治比県守が中納言となるのは天平四年のことであるため、天平三年とは断言できず、天平三〇四年の頃とみるのが穏当である。

三四 吉川敏子「奈良時代の内臣」（『律令貴族成立史の研究』所収、塙書房、二〇〇六）。

三五 野村氏前掲註七論文。中川収「藤原四子体制とその構成上の特質」（『奈良朝政治史の研究』所収、高科書店、一九九二）。木本好信「武智麻呂政権の成立―野村氏の房前重視説への反論を中心として―」（『奈良朝政治と皇位継承』所収、高科書店、一九九五）。林陸朗「天平期の藤原四兄弟」（『国史学』一五七、一九九五）。瀧浪貞子「武智麻呂政権の成立―「内臣」房前論の再検討―」（『日本古代宮廷社会の研究』所収、思文閣出版、一九九二）。

三六 中川氏前掲註三五論文、木本氏（『藤原四子／ミナモト』）など。また、一歩踏み込んだ見方として、林陸朗氏（『光明皇后』／吉川弘文館、一九六二）、岸俊男氏（『藤原仲麻呂』／吉川弘文館、一九六二）などが、皇親政治の復活と位置づけておられる。

三七 野村氏前掲註七論文、廣瀬氏前掲註二論文、西川氏前掲註五論文、山田氏前掲註一三論文、篠川氏前掲註二論文など。

三八 天平九年九月己亥条と『公卿補任』天平九年条では、鈴鹿王のほうが上位となっている。

三九 竹内氏前掲註四論文、横田氏前掲註七論文、廣瀬氏前掲註二論文。

文、西川氏前掲註五論文、山田氏前掲註一三論文、高嶋氏前掲註二論文、彦由氏前掲註二三論文、篠川氏前掲註二論文、春名氏前掲註一三論文、堀井氏前掲註一四論文など。なお、先に紹介したように、刑部親王が果たした役割については諸説一致していない。けれども、これまでの研究動向として、刑部親王の時期は評価されている。

四〇 請田正幸「長屋王家の復活をめぐつて」(『続日本紀の諸相』所収、塙書房、二〇〇四)。

四一 天平十二年二月甲子条、天平十二年十月壬午条、天平十四年八月己亥条、天平十四年十二月庚子条、天平十五年七月癸亥条、天平十六年閏正月乙亥条、天平十六年二月丙申条の計七回。

四二 仁藤智子「行幸時における留守形態と王権」(『平安初期の王権と官僚制』所収、吉川弘文館、二〇〇〇)。

四三 諸兄の右大臣就任は天平十年正月(天平十年正月壬午条)、左大臣就任は天平十五年五月(天平十五年五月癸卯条)である。

第七章 八世紀における行幸と留守

はしがき

日本古代における行幸は、坂本太郎氏^一に代表されるように、古くは天皇による恣意的な遊覧と位置づけられてきた。ところが、早川庄八氏^二の研究によって、それが支配領域の巡視であつたと位置づけられることになる。そして、これを受けた鈴木景二氏^三は、行幸を本格的に専論され、「古代の行幸は、天皇が内廷関係の諸司を率い大権を発動する条件をそなえ」ており、「天皇が在地の豪族らに直接対峙して、その土地の支配とその地域の人々の服属を確認するという意味をもっていた」ことを明らかにされている。

以来、行幸研究は、王権の一端を明らかにするうえで重要な検討課題として扱われるようになり、従駕形態を詳しく分析された仁藤智子氏^四や、「大王行幸」と「天皇行幸」との比較検討をされた仁藤敦史氏^五の成果によって、飛躍的に発展した。その結果、「天皇行幸」は、天平期を画期として整備されたことが判明し、王権による権威の誇示・在地豪族との関係確認の場であるという意義が明確にされている。

一方で留守研究は、仁藤智子氏^六が「王権と律令官僚制、両者の

関係を考えるうえで重要な問題」であると述べられたように、官制研究と王権研究という二つの面を持ち合わせている。このうち、官制研究としての「留守官」については、行幸や「皇太子監国」が論じられる際に補足的な説明が加えられるものの、研究は少ないのが現状である。そのなかで仁藤智子氏^七は、これを専論されて、律令の留守規定は日本独自に改変されていることや、「議政官クラスを最高責任者である留守官としている」こと、「公的通信・交通手段の使用」が許可されていたことなどを明らかにされている。こうした仁藤氏の業績によって、「留守官」研究の基礎は築かれている。

また、王権研究と関わりを持つてくるのが、皇太子が「留守」となる「皇太子監国」についてである。これについては、荒木敏夫氏^八や瀧川政次郎氏^九らによって研究の基礎が築かれ、近年では、関根淳氏^{一〇}による成果がある。関根氏はその中で、「皇太子監国」の研究を前進させるためには、皇太子制度の成立過程や「皇位継承という視点」が欠かせないことを指摘されている。

本章では、このうち官制研究の側面から「留守官」を扱ってみたと思う。そこで検討課題となるのが、行幸時における内印の所在である。「皇権のシンボル」^{一一}と評された内印が、行幸に携行されるのか、それとも留守に預けられるのかで議論されているからである。

【表1】公式令車駕巡幸条、集解諸説の解釈

	内印の有無	説明
義解	×	唐令を案ずるに、内印給わず。
古記	言及ナシ	
朱説	×	鈴契を給うとは、御所の契に合わさんが為なり。
後説	×	御所亦政を行うべき故なり。
穴説	○	鈴契を給うと雖も、若し印給わざれば、施行することを得るべからず。然れば則ち、印亦給う。
或説	×	鈴契を給う本意は、行在所を通らんが為なり。
後師	×	其れ行在所に於いて鈴契を通す事は、外印を用いる。内印有るべからずの故なり。
	×	文に依り習いて印給わず。

携行説の根拠となるのは、公式令車駕巡幸条二三で、そこには、

凡車駕巡幸。京師留守官。給_二鈴契_一。多少臨時量給。

とある。行幸中の「鈴契」について規定されているのだが、内印についての記述はない。つまり、「京師留守官」が「給」うのは、あくまで「鈴契」であつて、ここに内印は含まれないと解釈するのである。「鈴契」に対する集解の解釈では、【表1】にまとめたように、穴記以外は内印を含まないと説明している。とりわけ注目されるのが、古記に内印についての言及がないことで_三、古記成立の天平十年段階では、原則として内印は携行されると認識されていたとみられている。

一方で、不携行説の根拠は、史料にしばしば確認される実例である_四。例えば、天平十六年（七

四四）二月丙申条には、

中納言從三位巨勢朝臣奈氏麻呂持_二留守官所_レ給鈴印_一詣_二難波宮_一。（後略）

とあつて、行幸先の難波宮に、「鈴印」を運んでいることが確認され

る。言い換えると、難波宮への行幸時に、「鈴印」は「留守官」のもとにあつたことがわかる。このことは、他の事例にも同様にみられるため、いくつか内印不携行の実例を知ることができるのである。そして、これらが八世紀の段階では一般的だったとして、内印不携行説は主張されている。

こうした行幸時における内印の所在は、その時の政務実態や天皇権力の分掌を探るうえで、重要な課題であると考ええる。よつて、その事情について考察してみたい。そして、「留守官」の設置や天皇行幸個別の目的を併せて考えてみることで、「留守官」は、律令官制のなかにどのように位置づけられるのかを明らかにしてみたい。

一、天皇行幸時の留守規定

①律令にみられる規定

まずは、律令にみられる行幸と留守の規定を確認することから始めたい。

行幸規定に関しては、すでに仁藤智子氏_{二五}が詳細に分析され、内舍人・左右兵衛・左右衛士・衛門府・侍臣が、行幸に陪従するように定められていたことを明らかにされている。ここでのいう侍臣とは、職制律從駕稽違条_{二六}の注釈に「謂。少納言侍從中務判官以上及内舍

人。」とあるため、少納言・侍従・中務判官以上・内舍人であることがわかる。宮衛令車駕臨幸条の義解では、「中務判官以上」ではなくて「中務少輔以上」となっているが、中務省の官人が行幸に陪従することになっていたことは動かないだろう。また、天平十六年二月乙未条によると「少納言從五位上茨田王」が行幸に従っていたことが知られるため、少納言が行幸に陪従している実例も確認することができる。したがって、中務省の官人や少納言は、行幸に陪従することになっていたとみて疑いないだろう。とすると、行幸先の行在所でも、通常政務を遂行することは可能であったと考えられる。

留守規定については、宮衛令車駕巡幸条、儀制令車駕巡幸条、公式令車駕巡幸条の三条を確認することができる。

宮衛令車駕巡幸条には、

凡車駕行幸。即閉^二諸門^一。随^レ便開^二理門^一。其留守^レ人者。各自^二理門^一出入。並駕還仗至乃開。

とあって、行幸時に宮城の諸門を閉じることや、「留守人」に対する「理門」からの出入りの許可が規定されている。儀制令車駕巡幸条には、

凡車駕巡幸及還。百官五位以上辞迎。留守^レ者不^レ在^二辞迎之限^一。
若不^レ經^レ宿者。不^レ用^二此令^一。

とあって、車駕の巡幸と還御時の辞迎についての規定が記されてい

る。前掲した公式令車駕巡幸条には、先に確認した通り、「京師留守官」に「鈴契」を給うことが規定されている。春名宏昭氏⁷⁾は、ここでいう「鈴契」に関し、朱説の解釈に「給^二鈴契^一者。為^レ合^二御所之契^一也。鈴亦為^レ進^二遺御所^一也。」とあることから、「鈴」は行在所に使者を派遣するときに使用するもので、「契」は天皇からの指示を確認するためのものだと考えられている。天平十七年(七四五)九月癸酉条に「勅^二平城恭仁留守^一固^二守宮中^一」。(後略)とあったり、天平十三年(七四一)閏三月乙酉条に「詔^二留守從三位大養徳国守大野朝臣東人。兵部卿正四位下藤原朝臣豊成等^一曰。(後略)」とあるように、「留守」が詔勅によつて何らかの業務を行っていることが窺えるため、春名説の参考になるのではなからうか。なお、本条と先の儀制令車駕巡幸条については、対応する唐令が復元されているが¹⁸⁾、どちらも日本の実情に合わせて改変されていることが指摘されている¹⁹⁾。

以上、律令に規定されている行幸と留守の規定を概観してみたが、ここで注目してみたいのは、留守規定のなかで、「留守人」・「留守」・「留守官」と、用語に使われがなされていることである。これらの用語は、それぞれどのように理解すればよいのかを、以下、考えてみたいと思う。

②「留守」・「留守人」・「留守官」

まず、儀制令車駕巡幸条にみられる「留守」であるが、古記に「留守。謂皇太子監国是。不然者。執契宰相是。」とあって、「皇太子

【表2】『続日本紀』にみられる「留守」

年	月	王支(日)	行幸先	場所	留守	位階	記載官職	兼官	番号
和銅3年	3	辛酉(10)	平城	藤原	石上麻呂	正二位	左大臣		1
天平12年	2	甲子(7)	難波	平城	鈴鹿王	正三位	知太政官事	式部卿	2
		壬午(29)	伊勢国	平城	藤原豊成	正四位下	兵部卿	参議・中衛大將	3
					鈴鹿王	正三位	知太政官事兼式部卿		
					藤原豊成	正四位下	兵部卿兼中衛大將	参議	
天平13年	3	乙丑(15)	恭仁	平城	大野東人	正三位	大養徳国守	参議	4
					藤原豊成	正四位下	兵部卿	参議・中衛大將	
	9	丁丑(30)	宇治・山科	恭仁	藤原豊成	正四位下	奈良留守兵部卿	参議・中衛大將	5
天平14年		己亥(27)	紫香楽	恭仁	鈴鹿王	正三位	知太政官事	式部卿	6
					巨勢奈氏麻呂	從三位	左大弁	参議・神祇伯・春宮大夫	
					紀飯麻呂	從四位下	右大弁		
				平城	大伴牛養	從四位下	摂津大夫	参議	
					藤原仲麻呂	從四位下	民部卿		
	12	庚子(29)	紫香楽	恭仁	鈴鹿王	正三位	知太政官事	式部卿	7
					巨勢奈氏麻呂	從三位	左大弁	参議・神祇伯・春宮大夫	
					紀飯麻呂	從四位下	右大弁		
					藤原仲麻呂	從四位下	民部卿		
天平15年	4	壬申(3)	紫香楽	恭仁	橘諸兄	正二位	右大臣		8
					巨勢奈氏麻呂	從三位	左大弁	参議	
				平城	紀飯麻呂	從四位下	右大弁	参議	
					多治比木人	從五位下	宮内少輔		
	7	癸亥(26)	紫香楽	恭仁	橘諸兄	(從一位)	左大臣		9
					鈴鹿王	(從二位)	知太政官事	式部卿	
					巨勢奈氏麻呂	(從三位)	中納言	左大弁	
天平16年	閏正	戊辰(4)	難波	恭仁	鈴鹿王	從二位	知太政官事	式部卿	10
					藤原仲麻呂	從四位上	民部卿	参議・左京大夫	
	2	丙申(2)	難波	恭仁	鈴鹿王	從二位	知太政官事	式部卿	11
					小田王	從五位下	木工頭		
					大伴牛養	從四位上	兵部卿	参議	
					大原桜井	從四位下	大藏卿		
					穂積老	正五位上	(大藏)大輔		
				平城	紀清人	正五位下	治部大輔		
					巨勢島村	外從五位下	左京亮		
	戊午(24)	紫香楽	難波	橘諸兄	從一位	左大臣			12
	壬戌(5)	恭仁	甲賀	紀麻呂	從四位下	参議			13
天平17年	8	癸丑(28)	難波	平城	巨勢奈氏麻呂	從三位	中納言	左大弁	14
					藤原豊成	從三位	中納言		
天平神護元年	10	庚申(2)	紀伊国	平城	留守百官				15
宝亀元年	8	丙午(17)		平城	白壁王		皇太子		16
延暦4年	8	丙戌(24)	平城	長岡	早良親王		皇太子		17
					藤原皇公	從二位	右大臣	中衛大將	
					藤原種繼	正三位	中納言	式部卿・左衛門督・按察使	

監国」か「執契宰相」と解釈されている。古記成立の天平十年(七三八)までの実例としては、左大臣石上麻呂の例¹⁰が知られている。しかし、「留守」となった人物を一覧にした【表2】をみると、明らかに「宰相」ではない者も「留守」に選出されていることがわかる(【表2・11】)。そこで、実態を探るために、天平十七年の大糧申請文書に注目してみたいと思う。

井上薫氏¹¹は、この文書を詳細に分析され、天皇が紫香楽宮に滞在していた天平十七年に、一部の官人に率いられた仕丁らが、恭仁と難波にも分かれて勤務していたことを明らかにされている。この見解を踏まえ、天平十七年時の恭仁留守を見ておきたい(【表2・11】)。注目すべきは、「留守」となった者の帯びる官職である。すなわち、小田王の木工頭、大伴牛養の兵部卿、大原桜井の大藏卿は、井上氏が指摘された都に留まった一部の官司のうち、木工寮・兵部省・大藏省と合致するのである。特に小田王の場合は、二通の正倉院文書から確かめることができる。

天平十七年四月十八日左大舍人寮解三に、「從五位下守頭王」との位署があり、注書に「久仁宮留守」という文言がある。問題は、この「王」が誰なのかということだが、天平十七年四月に一番近い「留守」の任命記事は【表2・11】で、位階の面から推して小田王の可能性を見出すことができる。もっとも、橋本義則氏¹²が指摘さ

れたように、この時点で小田王は、「某王」に留守の任を譲っていたとも考えられる。しかし、いずれにしても小田王は、この時期まで恭仁宮の留守を務めていたことになるだろう。このことを念頭におき、天平十七年四月十七日木工寮解^{三四}をみてみると、この時点で「甲賀宮」と「恭仁宮」の月糧を申請していることが確認できる。つまり、井上氏の指摘と併せてみると、「木工寮」の一部は、恭仁宮に留まっていたということになる。そうすると小田王は、恭仁に残った「木工寮」で、仕丁らを率いていた官人であったことが判明するのである。したがって、残った官司の官人から、「留守」が任命されることもあるということになるだろう。

要するに、実態に即してみるならば、「留守」というのは、宰相のみに限らず、広く「鈴契」を給う者を意味する語だと考えることができる。さらに、早川庄八氏^{三五}が想定された「中務」を類例とし、天平十三年閏三月乙酉条に「詔留守従三位大養徳国守大野朝臣東人。兵部卿正四位下藤原朝臣豊成等」曰。(後略)」とあることを傍証として加えるならば、「留守」とは官職名だったと考えることもできるのではなからうか。

「留守人」は、宮衛令車駕巡幸条に確認される。この語句についての明法家による解釈はないが、文脈から判断すると、これは「理門」より出入りする人々の総称であると考えられる。具体例として

は、例えば、平城宮・京跡木簡^{三六}にみられる「留守内豎八人」などが該当するであろう。つまり「留守人」とは、「理門」より出入りが許された、「留守」を含めた都に留まった人々の総称ということになる。

「留守官」という語は、公式令車駕巡幸条に確認される。従来、例えば田井泰子氏^{三七}が、「令の規定では行幸に際して「留守官」が定められる。その者には緊急時に備えて「鈴契」が与えられ」と述べられたり、榮原永遠男氏^{三八}が、都に残った人々を「管理する官」として「留守」が置かれる」と述べられているように、この用語に対する理解は不統一だったのではないかと思う。これは、研究史の不足によって、漠然と「留守官」という用語を使用していることに起因すると思われるが、「留守官」とは官人個人を指すのか、それとも官司を指すのか、基礎的事項を検証しておきたい。

そのための材料として、集解諸説の解釈が参考となる。まず、義解では「謂。留守官者皇太子。若不^レ在者。餘官留守者亦是也。(後略)」と解釈されている。つまり「留守官」は、「皇太子」か「餘官留守者」の意であると説明している。ここでいう「餘官留守者」は、儀制令車駕巡幸条の義解に「執掌之長官留守者。」とあることから、「執掌之長官」であることが判明する。また、古記では「京師留守官。未^レ知。皇太子監国留守官哉。答。然。」と説明されており、「皇

ところが「後云」(朱説の引用か)として、「(前略)但留守官。以三外印二可レ行三公事一耳者。(後略)」との説明や、「後師云」(六記の引用か)として、「(前略)但理於三留守官」。可レ有三官印二。」との解釈がある。つまり明法家の一部は、「留守官」が「官印」や「外印」を使用すると想定しており、「留守官」を官司とみていたことが明らかとなる。そうすると「留守官」は、留守を任された官人に限らず、官司を指す場合もあると想定しなければならないはずである。となると、「留守官」という用語は、必ずしも「留守」の者、つまり官人個人を指すとは限らないのではなからうか。

以上のことをまとめ、図化してみたものが【図1】である。要するに、「留守官」といった場合、「留守」で構成される官司を指す場合と、「留守」となった官人を指す場合の、二つの意味を有していたのではなからうか。

では、実態にみられる官司としての「留守官」を確認しておく。

まず注目しておきたいのは、藤原京跡出土木簡三九である。この木簡は、七世紀末く八世紀初期とされるもので、「中務省牒留守省」

留官・留人

天皇

太政官
大臣
大納言
中納言
参議

弁官

八省以下

留守官
留守
留守
留守
留まった官司
留まった官人...小田正など

「契」で真偽を確認。

「鈴」を使って決裁を仰ぐ。

演出

演出
(絶対ではない)

演出されることもある。

管理・監督

留守人

(一部が留まる)

110

「留守」となっている^三。仁藤敦史氏^{三三}や仁藤智子氏^{三三}も、この本簡に記される「留守省」は、行幸時に置かれた臨時官司と想定されているところである。

次に、『日本書紀』天武天皇元年（六七二）六月甲申条の事例をみておく。ここには、

（前略）即遣^三大分君惠尺。黄書造大伴。逢臣志摩麻呂于留守司高坂王^一。而令^レ乞^三馭鈴^一。因以謂^三惠尺等^一曰。若不^レ得^レ鈴。廻志摩還而復奏。惠尺馳之往^三於近江^一。喚^三高市皇子。大津皇子^一逢^三於伊勢^一。既而惠尺等至^三留守司^一。举^三東宮之命^一乞^三馭鈴於高坂王^一。然不^レ聽矣。（後略）

とあるように、「留守司」が二例みられる。このうち傍線部は、高坂王を指して「留守司」と出てくる。しかし波線部の場合、傍線部とは異なる用法で、高坂王がいる場所、つまり官司としての「留守司」を指していると解釈することができよう。

天平十六年二月丙申条には、巨勢奈氏麻呂が難波宮に、「留守官司^レ給鈴印」を持つてきたと記されている。これは、天平十六年二月乙未条に「遣^三少納言從五位上茨田王于恭仁宮^一取^三馭鈴内外印^一。」とある記事と一連の関係にある。これを考慮するならば、先の「鈴印」は「馭鈴内外印」であると判断できる。とすると、「内外印」が個人に与えられていたとは考えにくいいため、この場合、「内外印」が

預けられていた官司と理解しなくてはならないだろう。

また、『東大寺要録』^{三四}にも「留守官」が確認される。このことから、「留守官」は東大寺への行幸時にも設置されていたことが明らかとなる。この事実から、行幸距離や期間に関係なく設置された官司であったと窺えることに留意しておきたい。

以上のことをまとめてみると、「留守官」とは、官司として用いる場合と、それを構成する「留守」となった官人を指す場合の、二つの意味を有していたことが明らかになったと思う。しかし、官司としての側面をより強調する場合には「留守官」、官人個人を指す場合には「留守」と、史料上ではある程度区別して用いられていたようである。これらの用語は、厳密に分けて理解しなくてはならないということを提示しておきたい。

二、行幸時における内印の所在

①八世紀における行幸と内印

ここでは、「留守官」に官司としての側面があるということを前提に、行幸時における内印の所在について考えてみたい。最初に、八世紀の行幸と内印について、基礎的事項を確認しておく。

そもそも内印は、儀制令天子神璽条に、「内印。方三寸。五位以

こうしたことから、八世紀における内印の必要性は、詔勅の発布、そして五位以上の叙位、諸国に下す公文に確認されるだろう。【表3】は、これらが八世紀の行幸時にみられるのかどうか、「留守官」の設置記事と併せて一覧にしてみたものである。ここから気づくことは、内印の動きが把握でき、かつ「留守官」の設置記事が集中するのは、天平十五年（七四三）から同十七年ごろだということである。そこで、この時期の動向を少し詳しくみておきたい。【表4】は、該当時期の動向をより細かく表にまとめたものである。

②内印携行と不携行の事例

まずは、内印の動きをより確実に跡付けてみたいと思う。「はしがき」でも触れたが、内印の不携行が確実な事例がある（表4・13・41）。そこで、これらを起点として、逆に内印携行の事例を探ってみたい。

天平十六年閏正月の難波宮への行幸時（表4・13）、内印は携行されず、同年二月に「駅鈴内外印」が恭仁宮から取り寄せられている（表4・15）。つまり内印は、行幸時に恭仁宮に安置されていたことになる。そして、これは天平十一年（七三九）十一月の還御記事まで遡ることができ（表4・7）、対応する行幸は天平十五年七月の紫香樂行幸である（表4・1）。この行幸期間中には、大仏造立の詔や（表4・4）、東海・東山・北陸三道二五国の調庸を紫香

樂宮に貢ぜしめる政策（表4・5）などがみられるため、内印を携行していた可能性は大きいだろう。

次に、天平十七年八月の難波行幸を起点にしてみたい（表4・41）。この行幸に内印は不携行で、同年九月の聖武天皇の不予によつて、平城宮から「鈴印」を取り寄せていることがわかる（表4・43）。つまり行幸時には、平城宮に内印があつたということになる。そして、これは平城還都のときにまで遡る（表4・40）。また、天平十六年二月の紫香樂行幸時には（表4・23）、詔勅の発布が散見されるなど、内印を携行していた痕跡が認められる。したがって、天平十七年五月の恭仁還御とともに移動し（表4・38）、その後、平城京にもたらされたと考えることができるだろう。

このようにみると、内印の携行は、天平十五年七月の紫香樂行幸（表4・1）、天平十六年二月の紫香樂行幸（表4・23）、天平十七年五月の恭仁還御と平城還都（表4・38・40）に認めることができそうである。そこで、これらの事例をより詳しくみてみることで、内印携行の規則性などを見出してみたいと思う。

まず、天平十五年七月の紫香樂行幸であるが（表4・1）、約四ヶ月に及ぶ長期滞在で、この間、大仏造立の詔や（表4・4）、東海・東山・北陸三道二五国の調庸を紫香樂宮に貢ぜしめる政策（表4・5）などが出されている。こうした動きから榮原永遠男氏^{三九}は、

この行幸の目的について、「大仏造願の工事と甲賀寺の造営工事とを開始し、かつそれを持続」するためのものだったと述べられている。先に確認した政策が実施されていることからすると、首肯すべき見解であろう。

次に、天平十六年二月の紫香樂行幸であるが（表4・23）、こちらでも約一年と長期滞在で、いわゆる紫香樂遷都と位置づけられる行幸である。この期間、「始營^三紫香樂宮^一。」といった文言^{四〇}や、「新京^一」といった用語^{四一}が確認される。さらに、聖武天皇が自ら盧舎那仏像の体骨柱の縄を引く記事もあることから（表4・33）、榮原永遠男氏^{四二}は、この行幸は天平十五年七月の紫香樂行幸の続きとして行われ、「大仏造願と甲賀寺の工事、さらには紫香樂宮の造営をさらに推進する」目的があったことを指摘されている。

恭仁還御と平城還都については（表4・38・40）、実施の直前に諸司の官人や四大寺の長官らにどこを都とすべきかの調査を行っており（表4・36・37）、皆が平城を願ったうえで実施されている。このことからすると、恭仁還御は平城還都の一環として行われ、經由地として通過したと考えられよう。

このように、内印携行の事例を概観すると、行幸時における内印の携行は、行幸期間や距離に影響しないことが明らかとなる。そして、加藤麻子氏^{四三}が指摘されているように、遷都時に窺うことがで

きる。こうしたことは、【表3】に当てはめてみても、概ね通用させることができるだろう。しかし、内印不携行の実例がある以上、内印の携行を直ちに一般化することはできない。一方で、内印不携行の事例についても、目的地が難波宮だったという共通点は見出せるが、内印携行の事例があることからすると、一般化して理解することは難しいと思う。となると、この内印不携行の事情をどのように理解するのが課題となってくる。そこで、この二つの事情について、以下、私見を述べてみたい。

③内印不携行の事情

そもそも、天平十六年閏正月の難波宮への行幸は（表4・13）、安積親王の薨去後の「留守」変化（表4・14）に注目される（表2）でいう10から11への変化）。藤原仲麻呂が「留守」の構成員から外れ、代わって「留守」の人数が増えていることが見て取れる。このことから、仲麻呂による安積親王の暗殺説が提示されているが^{四四}、ここでは、留守形態が充実していることに留意しておきたい。また、この「留守」変化を境として、難波遷都への動きもみられる（表4・20・21・24）。これについては、すでに直木孝次郎氏^{四五}が、「天平十六年二月二十日の前後」に「天皇が遷都の意図をもっていた」と指摘されるところである。とすると、件の「留守」変化は、難波遷都に向けての動きと連動しているとも考えられよう。したが

って、この難波行幸の目的は、難波遷都と考えるのが穏当であると思われる。

しかし、このように捉えてしまうと、行幸時に内印が不携行である理由を説明できない。なぜならば、行幸の目的が遷都であるならば、王権を象徴する内印は、携行されるはずだからである。そうすると、果たして行幸の目的が、当初から難波遷都だったのかと疑問に思うのである。榮原永遠男氏^{四六}は、前後の複雑な政治状況を考慮して、「聖武の心は大仏造営を推進するという点にあり、紫香樂にあった。それを、元正太上天皇が聖武を強く難波にいざなつた」と、この行幸について説明されている。

いずれにしても、行幸の確たる目的は判然としない。けれども、行幸出発時に内印が不携行であったことからすると、難波遷都を目的とした行動であったとは考えにくいのではなからうか。もともと、難波宮への遷都は、百官に対する事前調査が行われるなど（表4・11・12）、構想自体は行幸以前より持っていたようである。そして、ここに内印不携行の事実を併せて考えてみると、行幸当初は、視察のような目的で難波宮を訪れ、安積親王の薨去を境に遷都の実施へと意識転換し、このため「留守」を充実させて、内印を取り寄せることによって本格化した、という流れが想定できるのではなからうか。要するに、この行幸の当初の目的は、正式な遷都ではない視察

のようなものだった可能性が大きいと思われる。

【表4・41】の難波行幸は、従来、橘諸兄による勢力挽回策^{四七}や、遷都騒動の最終処理^{四八}と位置づけられている。しかし、榮原永遠男氏^{四九}の見解によると、この行幸は天皇の病氣平癒のために実施されたい。実際、天平十七年九月辛未条に「朕頃者枕席不_レ安。稍延_二旬日_一。」とあつて、聖武天皇の健康不良を看取することができ。よつて、この行幸の目的は、聖武天皇の健康回復とみることが説明できるのではないかと思う。

以上、内印携行と不携行の行幸について、その目的などを確認してみた。それぞれの天皇行幸の目的や意義と、内印の動きを併考すると、その事情などとは関わりなく「留守官」は設置されていたことが明らかとなる。つまり、当該期における「留守官」は、行幸の距離や期間、場所や目的などに関わらず、政務上の問題から設置されていたと考えられるのである。

むすび

本章では、官制研究としての留守研究を試み、「留守官」とは何かを確認したうえで、行幸時における内印の所在について考えてみた。その結果、「留守官」という官司は、行幸か遷都という特殊な状況下

で、政務上の問題から必ず設置されるということが明らかとなった。

遷都における「留守官」の役割は、百姓の動揺を回避するためや^{五〇}、仁藤敦史氏^{五一}が指摘される「官人集住の徹底」など、遷都に伴う業務であろう。また、一般の行幸時には、通常の律令行政実務が行われていたようである^{五二}。このようにみてみると、「留守官」は各局面において多様な政務を担当していたと考えられる。そして、遷都や行幸という行為自体は、王権の形成や律令行政の運営に必要なことであるから、ここに、八世紀における「留守官」の必要性を見出すことができるだろう。すなわち、「留守官」の設置がなければ、それは国家にとって重要な王権の形成や律令行政の運営が、遷都や行幸のたびに滞ってしまうことになる。つまり、こうした不具合を想定した場合、官制的な面からみた八世紀における「留守官」は、律令国家の運営上重要な官司であったと位置づけることができるのである。

しかしながら、実際に「留守官」の記事が集中しているのは天平期である。この時期には、いわゆる聖武天皇による彷徨などで政治状況が問題視され、当然、異例の皇太子阿倍内親王も深く関わりを持つてくる。となると、当該期における「皇太子監国」に対する理解が必要不可欠になってくるであろう。

「はしがき」でも触れたが、本章で試みた官制研究からの視点、

そして、王権研究としての「皇太子監国」の研究をそれぞれ成熟させ、それをすり合わせていくことで留守研究は進展していくのではないか、という若干の展望を述べ、欄筆したい。博雅のご批正を乞う次第である。

【註】

一 坂本太郎「上代駅制の研究」(『坂本太郎著作集八』所収、吉川弘文館、一九八九、初出一九二九)。

二 早川庄八「律令国家・王朝国家における天皇」(『日本の社会史第三巻』所収、岩波書店、一九八七)。

三 鈴木景二「日本古代の行幸」(『ヒストリア』一二五、一九八九)。

四 仁藤智子「行幸における従駕形態をめぐって―鹵簿と律令官僚制―」(『平安初期の王権と官僚制』所収、吉川弘文館、二〇〇〇)。

五 仁藤敦史「古代王権と行幸」(『古代王権と官僚制』所収、臨川書店、二〇〇二)。

六 仁藤智子「行幸時における留守形態と王権」(『平安初期の王権と官僚制』所収、吉川弘文館、二〇〇〇)。

七 仁藤智子氏前掲註六論文。

八 荒木敏夫「皇太子監国と留守官」(『日本古代の皇太子』所収、吉川弘文館、一九八五)。

九 瀧川政次郎「復都制と太子監国の制」(『京制並に都城制の研究 法制史論叢 第二冊』所収、角川書店、一九六七)。

一〇 関根淳「皇太子監国と藤原種継暗殺事件」(『ヒストリア』二四〇、二〇一三)。

一一 岸俊男「元明太上天皇の崩御―八世紀における皇権の所在―」(『日本古代政治史研究』所収、塙書房、一九六六)。

一二 新訂増補国史大系本『令集解』。以後、令文と集解諸説の引用は同本による。史料に附す傍線の類は、すべて筆者によるものである。

一三 鈴木氏前掲註三論文。

一四 『続日本紀』天平十六年二月乙未条、天平十六年二月丙申条、天平十七年九月癸酉条の三例がある。

一五 仁藤智子氏前掲註四論文。

一六 新訂増補国史大系本『律』。

一七 春名宏昭「太上天皇と内印」(『古代中世史料学研究 下巻』所収、吉川弘文館、一九九八)。

一八 公式令車駕巡幸条は、開元七年令と開元二十五年令が復旧され、

儀制令車駕巡幸条は、開元七年令と『大唐六典』卷四、礼部郎中員外郎条から復元されている(仁井田陞『唐令拾遺』参照)。

一九 鈴木氏前掲註三論文。仁藤智子氏前掲註六論文。

二〇 和銅三年(七一〇)三月辛酉条。

二一 井上薫「紫香樂宮」(『日本古代の政治と宗教』所収、吉川弘文館、一九六一)。

二二 『大日本古文書』二。

二三 橋本義則「天平十七年大糧申請文書の再検討―紫香樂宮攷(二)―」(『山口大学文学会志』四九、一九九九)。

二四 『大日本古文書』二。

二五 早川庄八「律令太政官制の成立」(『日本古代官僚制の研究』所収、岩波書店、一九八六)。

二六 『木簡研究』六。

二七 田井泰子「日本古代遷都論―恭仁京をめぐる―」(『寧樂史苑』二七、一九八二)。

二八 榮原永遠男『聖武天皇と紫香樂宮』(敬文舎、二〇一四)。

二九 『木簡研究』一三。

三〇 早川氏前掲註二五論文。

三一 和銅三年三月辛酉条。

三三 仁藤敦史「行幸観の変遷」(『古代王権と官僚制』所収、臨川書店、二〇〇二)。

三三 仁藤智子「留守官と鎮京使」(『平安初期の王権と官僚制』所収、

吉川弘文館、二〇〇〇)。

三四 群書類従本。

三五 鎌田元一「律令制と文書行政」(『律令国家史の研究』所収、塙書房、二〇〇八)。

三六 養老四年五月癸酉条。

三七 天平十六年二月庚申条。これによると、紫香楽行幸の際に難波宮に留まっていた諸兄が、難波を皇都に定める「勅」を宣していることがわかる。

三八 延喜太政官式内外印条。

三九 榮原永遠男「紫香楽大仏の造頭と聖武天皇の行幸」(『ザ・グレイトブッダ・シンボジウム論集第二号 論集東大寺創建前後』所収、法蔵館、二〇〇四)。

四〇 天平十六年四月丙辰条。

四一 天平十七年正月己未条。

四二 榮原氏前掲註三九論文。

四三 加藤麻子「鈴印の保管・運用と皇権」(『史林』八四―六、二〇

〇一)。

四四 横田健一「安積親王の死とその前後」(『白鳳天平の世界』所収、創元社、一九七三)。

四五 直木孝次郎「天平十六年の難波遷都をめぐる―元正太上天皇と光明皇后―」(『難波宮と難波津の研究』所収、吉川弘文館、一九九四)。

四六 榮原永遠男「行幸からみた後期難波宮の性格」(『難波宮から大阪へ』所収、和泉書院、二〇〇六)。

四七 横田氏前掲註四四論文。

四八 箕敏生「広嗣の乱後の遷都をめぐる二・三の問題」(『続日本紀研究』二五六、一九八八)。

四九 榮原氏前掲註四六論文。

五〇 岸俊男「長岡遷都と鎮京使―遷都における留守官の意義におよぶ―」(『長岡京古文化論叢』所収、同朋舎、一九八六)。

五一 仁藤敦史『都はなぜ移るのか 遷都の古代史』(吉川弘文館、二〇一一)。

五二 仁藤智子氏前掲註六論文。

第八章 春日大社成立考

はしがき

筆者はこれまでに、奈良朝政治史、特に天平年間の政治体制について論じてきた。その過程で、田中卓氏^二による、奈良時代における神祇政策の重要性を説く論に触れ、かかる視点も政治史究明には欠かせないものであることを痛感した。そして、これを念頭に置き、天平期の政治史を顧みようと思ったとき、真つ先に思い浮かんだのが、藤原氏の氏神社として名高い春日大社であった。なぜなら天平期といえば、藤原氏にまつわる歴史事項が頻繁に登場するからである^三。つまり、この氏族と深い関わりを持つ春日大社を知ることによって、藤原氏の新たな側面が見えてくるのではないかと思うのである。とりわけ、その創祀時期を適切に判断し、当初の社格を把握すれば、藤原氏による政権の有無を判断する材料になるのではないだろうか。

例えば、藤原氏が同社を氏神と崇めた時点では、氏神と定めるための相応な力を持っていたことになるだろう。逆に言う、それ以前の段階では、氏神とする時よりも氏族の権力が弱かったと判断する指標となるのではなからうか。これは一つの見通しでしかないが、

奈良時代の春日大社に注目してみることは、奈良朝政治史研究をするうえで無意味とはいえない。その一助となると考える。よって本章では、奈良朝初期での藤原氏権力の所在を探る材料とするために、春日大社の創祀と成立時期に迫っていく。

第一節 春日大社の創祀

一、先行研究の回顧と問題の所在

古代の春日大社を扱う研究論文は、社殿の完成時期と創祀された年代について詳述している。そして前者は、神護景雲二年説と平安初期とする見解とに分かれている。このうち、神護景雲二年（七六八）に社が建てられたとみる根拠をまとめみると、おおよそ次のようになる。

① ほぼ全ての社記に神護景雲二年十一月九日の日付が確認できる。例えば『古社記』^{（神道大系本）}には、「神護景雲二年十一月九日、^中寅時。宮柱立^テ御殿^ヲ造了。」とある。

② 『日本三代実録』^{（本章では、『日本三代実録』からの引用はすべて新訂増補国史大系本により、以下『三代実録』と略す）}元慶八年（八八

四）八月廿六日条に、「新造^ニ神琴^二面^一。奉^レ充^ニ春日神社^一。以^ニ神護景雲二年十一月九日^一所^レ充破損。」とあつて、伝承ど

おりの時期に朝廷から神琴が造進されていることが判明し、これを納める建造物の存在が裏付けられる。

③神祇官勘文^三にある祭文の日付が、社家の伝えや『三代実録』元慶八年八月廿六日条にみられる年月日と一致する。

以上のように、様々な史料を照合することで、社殿の成立を神護景雲二年十一月九日と伝えていることには齟齬がないと判断し、かかる時期を恒久的な社殿の完成とみているのである四。

一方で義江明子氏^五は、社殿の完成を平安時代の初期に求められている。その論拠を簡潔に紹介しておこう。

①正倉院所蔵の『東大寺山堺四至図』（本章では、第六三回「正倉院展目録」（公益美術協会、二〇一〇）を参照）には、三笠山（＝春日山）に「神地」という場所があるのだが、これは「神地」があつたことを確認するのみに留まり、建築物の存在を裏付ける確証ではない。

②『新抄格勅符抄』（本章では、新訂増補 国史大系本による）所収の延暦廿年（八〇一）九月廿一日官符に、「右件神封物。割充如^レ前。仍須^三毎年納^三送祭所^一。自余雜物一同^三前符^一。官宜^三承知依^レ件施行^一。」とあるが、これは「神封物」をあくまで「納^三送祭所^一。」していることを示しているだけであつて、春日大社への送付とあるわけではない。

③神殿の存在を示す史料の初見は、天長十年（八三三）九月廿

一日の「伊都内親王御施入願文」である（『平安遺文』巻一―五六）。

④春日祭祝詞の形式が、平安初期成立の平野祭や久度古関に類似している。

この義江氏による見解は、先に紹介した神護景雲二年説と議論が続いている。しかし、義江氏の論は、初見史料から判断した知見であつて、『三代実録』元慶八年八月廿六日条を素直に解釈した場合、神護景雲二年にまで遡る可能性は十二分にある。いずれにしても、社殿の完成期は奈良時代初期にまで遡ることはない。

創祀時期については、早く宮地直一・福山敏男両氏^六によつて、藤原不比等が活躍する奈良時代の初期に遡ることが指摘された。そしてこの見解は、昭和五十二年（一九七七）に実施された発掘調査で、八世紀初期と見做される築地遺構が発見されることにより、確実視されることになった。また、出土遺物の検証を通じて、平城京との類似点が多く含まれることも明らかにされている。これらのことは、『春日大社奈良朝築地遺構発掘調査報告』^七に詳しくまとめられているため、その要点を抽出し、次に掲げておきたい。

①発掘された築地遺構は、奈良朝にみられる築地の諸要素を踏襲している。

②土壁が平城京の羅城門近くの朱雀大路や朝堂院の築地と酷似している。

③石造暗渠の構造が、出土した遺物の年代観と同じである。

『調査報告』^八では、この発掘成果によって、「春日の築地は八世紀代に築造を見た遺跡であるということの確証が得られた」とし、「国家権力か或いはこれに相当する権力者級の背景を考慮することが出来る」と結論づけられている。そして諸先学は、この報告を踏まえ、春日大社の創祀年代を奈良朝の初期と断定しているのである。

これまで紹介してきたように、従来の議論では、創祀の起源や社殿の建築時期に論点が絞られてきた。その結果、恒久的社殿の造営については二説に分かれているものの、奈良朝初期にまで遡ることはないという点で一致しており、創祀は社殿の建設時期以前、すなわち八世紀初期で確定的という通説が成り立った。

しかし、創祀に関わる問題で、より限定的な時期の追究や、「国家権力か或いはこれに相当する権力者級の背景」というものの具体性、なぜ創祀されたのかという諸点については、十分な考察がなされていないと思えない。とりわけ、『神宮雜例集』^(は、すべて群書類従本による。)に、

元正天皇和銅二年己酉。都_レ在_二奈良京_一之時。近奉_レ崇_二居春日神社_一也。爾時遷都之由。被_レ祈_二申太神宮_一。勅使祭主神祇伯中臣朝臣東人參_二神宮_一也。

とある、「和銅二年」(七〇九)という年紀はあまり注目されていない。

たしかに、「勅使祭主神祇伯」と記されている中臣東人は、『続日本紀』による限り、和銅四年(七一二)四月の時点で「正七位上」

なので^(和銅四年四月壬午条)、官位相当からすると、これ以前に当る和銅二年の段階で「神祇伯」というのは解せず^九、この史料を直ちに信用することはできないだろう。しかしながら中臣東人は、天平五年(七三三)

三月には従四位下となっており^(天平五年三月辛亥条)、この時点で神祇伯に就任できる位階に到達している。さらに、『尊卑分脉』や『中臣氏系図』^(群書類従本)

によって、時期こそ不明であるものの、神祇伯に就任していたことが知られるのである。ということは、『神宮雜例集』には彼の極官が反映されているのではなからうか。このことは、宝龜二年(七七二)に右大臣となる大中臣清麻呂が^(宝龜二年三月庚午条)、天平十二年(七四〇)に右大臣を冠していることから類推される。

また、「和銅二年」の段階で「春日神社」とあることも、事実を伝えているとは見做せず、信憑性が問われる要因となる。しかしこれは、『神宮雜例集』が成立した鎌倉時代には、そこに「春日神社」が存在していることを表しているのであつて、その立地場所を指しているとは理解すると、うまく説明できるのではなからうか。

菊地康明氏は^{一〇}、『神宮雜例集』が「神宮にかかわる重要事項を網羅した先例集」であることを考慮したうえで、同書に春日大社の縁起が入れられることについてを「伊勢神宮側からの春日勧請運動」

として説明されている。すなわち、『神宮雜例集』の和銅二年説は、

『祭主補任』(神道大系本)中臣東人条に、

祭主從四位下行刑部卿神祇伯中臣朝臣東人^{在任十九ケ年}

件卿者。中納言意美麻呂卿之一男也。以^三和銅元年^{戊申}蒙^二祭主宣

旨^一。始^レ自^二元明女帝之御代^一。迄^二千飯高女帝御時^一。二代朝

廷供奉。以^二和銅二年^一。奈良京被^レ立之日。被^二祈申勅旨^一參宮
矣。

とある、「奈良遷都のための參宮祈禱の記事を改竄利用したもの」と推測され、「本来春日社の創建とはかかわりのない伊勢祭主の就任年時に仮託したものを見て間違いないと思う」と述べられている。たしかに、菊地氏の想定は、史料的にみて説得力に富んでいる。しかし、先に紹介した発掘成果を踏まえられていないことには、問題が残るのではなからうか。というのも、「春日の築地は八世紀代に築造を見た遺跡である」^二との報告があることからすると、『神宮雜例集』に記される「和銅二年」という時期に、後に社殿が建設される場所で祭祀が行われていた可能性も否定できないからである。

このようにみえてくると、『神宮雜例集』の記事には危うさが残るものの、そのすべてを否定的に捉えてしまうことには賛同できない。よって、築地造営の時期を明らかにしていくためには、和銅年間を含めた幅広い視野を持つことが必要であると考ええる。

したがって、前述した課題については論じる余地が残ると判断し、本章での課題に据え、春日大社に鎮座されている祭神の性格や、奈良時代初期の政治状況を足掛かりとし、私見の提示を試みていく。そこでまずは、創祀につき勧請された神について触れ、その性格を確認することから始めたいと思う。

二、武甕槌神の勧請とその性格

筆者は、春日大社の創祀にあたり迎えられた最初の神を武甕槌神と想定している。その理由は、『神祇志料』(栗田寛著、栗田勤校訂『神祇志料』、思文閣、一九二七)による所が大きい。というのも、件の書には、『大鏡』やその裏書き、『神宮雜例集』・『伊呂波字類抄』などを典拠とし、

初元明天皇和銅二年、右大臣藤原不比等^{官姓襲後日本紀}、鹿島神を氏神と崇めて、天皇及び皇后の御為に、近くの三笠山に移し奉り、地名に依て春日神と申す。

との見解が打ち出されているからである。ここである「鹿島神」とは武甕槌神であり、『神祇志料』では、この神を和銅二年に三笠山に移し奉ったとみている。もちろん、この記述をすぐさま踏襲するわけではないが^三、抛りどころとなっている各史料を一覧してみると、単なる推測ではなさそうである。次に列挙しておく。

【史料①】『大鏡』（日本古典文学大系本）

みかど奈良におはしましゝ時に。鹿島とをしとて。大和国三笠山にふりたてまつりて。「春日明神」となづけたてまつりて。（後略）。

【史料②】『大鏡』裏書（日本古典文学大系本）

藤氏ゝ社事

鹿島社 大織冠於三常陸国ニ誕生。仍祝ニ此所一。

春日社 奈良帝都之時祝レ之。称徳天皇神護景雲二年戊申藤氏四所明

神奉レ祝ニ春日山一。

大原野社 長岡帝都之時祝レ之。文徳天皇仁寿元年二月二日始大原野

祭。

吉田社 平安帝都之時祝レ之。一条院御宇永延元年四月始吉田祭。元

中納言山蔭卿一家所レ祭也。

【史料③】『神宮雜例集』

既出史料参照。

【史料④】『伊呂波字類抄』（正宗敦夫編『伊呂波字類抄』、風間喜房、一九六五）

春日社日本紀云
聖武天皇御宇天平七乙亥

正一位勲一等 武雷命今坐三常陸国鹿島郡鹿島大神宮一也。

正一位勲一等 斎主命坐三下総国香取郡香取大神宮一也。

正一位勲三等 天兒屋根命今坐三河内国河内郡平岡大神宮一也。

正一位勲二等 相殿坐姫神三所明神之殿内相住給。故申三相殿神一。

右四所明神。都有三奈良京一時。都近春日山奉レ崇レ之。中臣藤原両氏共供祭来也。（後略）。

以上の史料は、いずれも時代が下ってから成立したものであり、伝承の範疇を越えることはない。しかし、春日大社が平城京の時代に祀られ始めたことを伝えている。したがって『神祇志料』では、こうした共通点に着目しつつ『神宮雜例集』に重点をおき、先の見解を導き出したといえる。繰り返し述べるが、先述した発掘成果によつて年代的な問題は解決されるため、『神祇志料』の見方も簡単に否定することはできないと思う。

また、春日大社の祭神は、第一殿に武甕槌神、第二殿に経津主神、第三殿に天兒屋根命、第四殿に比売神が鎮座していることを見逃してはならない一三。この序列は、勧請された順序を示し、武甕槌神が最初に迎えられたことを示唆しているのではなからうか。このことは、武甕槌神が最初に勧請されたことを物語る【史料①】があることや、例えば『古社記』に、鹿島神が「同二年戊申正月九日同国添上郡三笠山御跡御後。天兒屋根命・斎主命始。御神ノ御許へ各奉幣給。」とあるように、諸伝にも反映されていることが傍証となるだろう。さらに、枚岡神社にまつわる伝承と照合してみることによって窺うことができる。

枚岡神社には、天兒屋根命を主神とし、比売神・経津主神・武甕槌神が祭られている一四。ここで注目する伝承とは、『元要記』巻十六、河内国枚岡社（宮内庁書陵部蔵『元要記』二。筆者は、久保田収氏が撮影により所持していたもの（皇學館大学図書館蔵）を参照）に「社記曰」として、

光仁天皇依_二宣下_一。宝龜九年_{戊午}十二月九日。四所宮柱太敷立。

春日一宮二宮被_二祝副_一畢。

と記されている一文である。ここに出てくる「春日一宮」が、春日大社の第一殿に祀られている武甕槌神であり、「二宮」が経津主神を指すことに疑う余地はないだろう。すると、この「社記」の解釈は、「光仁天皇の宣下によって、宝龜九年（七七八）十二月九日に、枚岡神社の四所に宮柱を立て、春日大社から武甕槌神と経津主神をお移しになった」といった具合になる。つまり、枚岡神社の祭神のうち、武甕槌神と経津主神の二柱は、主神である天兒屋根命よりも後に迎えられたことになる。とすると、第一殿に天兒屋根命、第二殿に比売神、第三殿に経津主神、第四殿に武甕槌神が祀られている枚岡神社では、祭神が勧請された順序に近いかたちで鎮座していることがみてとれる一五。

このように、枚岡神社にまつわる伝承では、春日大社四座のうち、武甕槌神と経津主神は、天兒屋根命に先行して春日山に鎮座していたことになる。言い換えると、春日大社の創祀にあたり迎えられた

神は、少なくとも武甕槌神が経津主神でなくてはならない。無論、史実か否かは断言しかねるが、春日大社と枚岡神社、双方の説話に整合性を求めてみると、上述のように理解することもできるだろう。こうした理由から、春日大社の創祀にあたり迎えられた最初の神は武甕槌神と考える。そうすると、奈良朝初期には春日山に武甕槌神を移し、その神威を必要とする事情があったということになるだろう。だとすると、件の神が有する性格を明確にしてみることで、自ずとその情景が浮かび上がってくるのではなからうか。そこで次に、武甕槌神の性格について確認しておきたい。

そもそも武甕槌神は、常陸国鹿島宮に祭られており、蝦夷征討の軍神としての役割を担う一方で、中央政府の神としての性格があるという一六。この見解に異論はないが、武甕槌神の性格は、後の論の前提となるため、あえて慎重な態度をとり、記紀を中心に確かめておきたい。

『日本書紀』によれば、武甕槌神は十握劍の鐔についた軻遇突智の血より誕生した甕速日神を祖としている一七。「劍」という武力を示すものとの関わりを持ったため一八、武威を備えた神であることが窺える。このことは、『日本書紀』神武天皇即位前記戊午年六月条にも反映されている。次に引用しておく。

時神吐_二毒氣_一。人物或瘁。由_レ是皇軍不_レ能_二復振_一。時彼処有_レ

かった」と判断し、「天皇家と藤原氏とのつながりが背後に想定されると答える他ない」と述べられている。たしかに、【図①】に表したように、奈良時代初期での宮中と藤原氏との関係は、多分に深いものがある。

しかし、こうした繋がりが以外に答える術なしとは、やや言い過ぎなのではなからうか。ここではその原因について、当該期の政治政策を手掛かりとし、別な角度から考察を加えてみたい。具体的には、先ほど看過すべきではないと指摘した、「和銅二年」という時期に焦点をあててみる。そこでまずは、この年の政治動向を表にまとめておく（（前掲「表」
1」参照）。

ここで注目するのは三月壬戌条である（表番号7）。『神宮雜例集』が記す和銅二年に、軍事政策が行われていた事実を知ることができる。ちなみにこの蝦夷討伐は、半年後の八月に収束することになる（表番号25）。また、この軍事行為と並行して、平城京遷都が実施されていることにも留意しておきたい。周知のとおり、平城京への遷都は和銅三年（七一〇）三月のことである（（和銅三年三
月辛酉条）。ところが、和銅元年（七〇八）九月戊戌条によると、この時に「造平城京司」が任命され、和銅元年より造営に着手していたことが明らかとなる。つまり、春日大社の創祀時期と目される奈良朝初期に、軍事的行為である征夷事業と都の造営とが、同時に行われていたのである。そ

【表1】和銅二年の政治動向

番号	月	日	事項
1	正月	丙寅(九日)	叙位。
2		戊寅(廿一日)	下総国の疫病に對し、災を禱す。
3		壬午(廿五日)	詔して、私に鉾鉾を稱造する者への加断を定む。
4	二月	戊子(一日)	大宰府に詔して、筑紫蝦夷を早く降伏せしむことを催促す。
5		丁未(廿日)	遠江国長田郡を二郡に分ける。
6	三月	辛酉(四日)	陸奥國に疫病を加える。
7		壬戌(五日)	陸奥・越後の蝦夷、農民を害す。よつて、遠江・駿河・甲斐・信濃・上野・越前・越中などの兵を徵発し、巨勢麻呂を陸奥鎮守府軍とし、佐伯石満を征後鎮守府軍として、軍力と軍令を振ける。
8		庚辰(廿三日)	造幣法用司を置く。
9		甲申(廿七日)	鉾鉾・銅錢の運用の事を定む。
10	四月	丁亥(一日)	日食。
11		壬寅(十六日)	上毛野男足卒す。
12	五月	庚申(五日)	叙位。
13		乙亥(廿日)	河内・摂津・山背・伊豆・甲斐の五国、連日の雨により苗を損ず。
14		壬午(廿七日)	新羅使の金信福ら方物を貢す。
15	六月	丙戌(一日)	金信福らに賜ふ。
16		甲午(九日)	上総・越中の疫病に對し、災を禱す。
17		辛丑(十六日)	使いを遣わして畿内に寄す。
18		壬寅(十七日)	大宰府以下の勢力を半減し、糧を給す。
19		乙巳(廿日)	諸國をして、駅紀綱の帳を進めしむ。
20		辛亥(廿六日)	紀伊國の疫病に對し、災を禱す。
21		癸丑(廿八日)	大上王卒す。
22	七月	乙卯(一日)	叙位。
23		丁卯(十三日)	蝦夷を征するに、諸國をして兵馬を出羽に運送せしむ。
24	八月	乙酉(二日)	鉾鉾を稱し、一に銅錢を行ふ。
25		戊申(廿五日)	太政官染分により、河内縣司の官屬に轉任考選し、察に準ず。
26		辛亥(廿八日)	征後鎮守府佐伯石満ら事畢りて入朝す。
27	九月	乙卯(二日)	叙位。
28		丁巳(四日)	東宮符讀以上に物を賜ふ。
29		戊午(五日)	東宮、平城宮に至る。
30		乙丑(十二日)	征後鎮守府に糧を賜ふ。
31		己卯(廿六日)	遠江・駿河・甲斐・常陸・信濃・上野・陸奥・越前・越中・越後の軍士で、征伐五十日以上に及ぶ者に後一年を賜ふ。
32	十月	癸未(一日)	陸奥國を東海・東山二道に遣わし、關東を檢察し風俗を巡省せしむ。
33		甲申(二日)	日食。
34		庚寅(八日)	内外諸司の考選の文は、まず并官に進めて、処分が終わつた後、本司に送付して、さらに式部・兵部に申し送りしむことを制す。
35		癸巳(十一日)	備後國鞆郡甲斐村は、郡家を陥したにより百姓の往來が大害だったので、品置郡の三里を鞆田郡に譲らせ、甲斐村に郡を建てて、
36		丙寅(十四日)	造平城京司に對し、もし填隙を差置いた場合、その填隙を型めるべきことを勅す。
37		戊申(廿六日)	畿内・近江の百姓、浮浪・逃亡の士丁を容留して、私に販賣することを禁制す。
38		庚戌(廿八日)	藤原氏人郡司以下百八十八人入朝す。
39	十一月	甲寅(二日)	遷都により、当年の賦税を免ることを詔す。
40	十二月	丁亥(五日)	叙位。
41		壬寅(廿日)	下毛野古麻呂卒す。

して、この二つの国家政策は、武甕槌神に附された性格と見事に合致するだろう。

ところで、春日大社の創祀をめぐる議論の中では、次に引く『春日社私記』(神道大系本による)所引の天平勝宝七年(七五五)官符がしばしば引用されている。

春日社四所。紫微中台祭。件社入三宮神例^一。

ここに出てくる「紫微中台」とは、藤原不比等の娘光明子の皇后宮職を拡大整備したものである^三。先行学説では、こうした関係から光明子(＝藤原氏)と春日大社との結びつきを見出し、同社では藤原氏による祭祀が執り行われており、天平勝宝七年の段階で官社に列せられたことが分かるとしている^三。

たしかに、『万葉集』の記載と合わせてみると(後掲)、光明子と春日大社との関わりについては首肯すべきと思われる。しかし反面、藤原氏権力と直結しやすい「皇太后の私事に互る瑣末な事務をも執り行つた」という役割を重視するあまり、「國家の重大政務を執り行ふ」という重要な一面には触れられていない。天平勝宝年間の政治状況を踏まえてみると、果たして藤原氏による祭祀が行われていたのだろうかとの疑問が残る^四。

天平勝宝といえは孝謙天皇の治世であり、女帝ということもあつて聖武太上天皇や光明皇太后の扶翼を受けられ、これにちなみ紫微

中台が設置されている。つまり、当該期の国家運営には、光明皇太后の影響が少なくないだろう^{三五}。こうした政治的背景からすると、先の官符は、春日にて行われる朝廷祭祀を紫微中台が執行していたと解釈すべきではなからうか。

このことは、『万葉集』卷十九に、

春日祭^レ神之日。藤原太后御作歌一首。即賜^三入唐大使藤原朝臣清河^一。

大船尔 真梶繁貫 此吾子乎 韓国辺遣 伊波敏神多智
とみられる「春日祭^レ神」ことが、天平勝宝三年(七五二)四月丙辰条に、

遣^三参議左中弁從四位上石川朝臣年足等^一。奉^三幣帛於伊勢太神宮^一。又遣^レ使奉^三幣帛於畿内七道諸社^一。為^レ令^三遣唐使等平安^一也。

とあることと、無関係ではないことから察知し得る。というのも、『万葉集』に残る説話の時期は天平勝宝三年から同四年(七五二)の間であり^{三六}、時期的には一致しているし、「入唐大使」である藤原清河に充てて歌が贈られているため、遣唐使という共通用語のもと、内容的にも矛盾しないからである。つまり、天平勝宝三年四月丙辰条は、『万葉集』に残る出来事と一連の関係にあると推察できる。とすると、『万葉集』にみられる「春日祭^レ神」とは、「為^レ令^三遣唐

使等平安」の祭祀となるだろう。したがって、仮にこれが「藤原太后」主導でなされた祭りであったとしても、それはあくまで国家事業たる遣唐使派遣に伴う祈願だったと考えられるのである。よって『万葉集』の事例は、「為^レ令^二遣唐使等平安^一」の祭祀を朝廷の中心人物たる「藤原太后」（＝「紫微中台」）が執り行ったと見做すべきではなからうか。

もつとも、遣唐使の派遣に際して御蓋山を祀ることは、養老元年（七一七）二月壬申条にある「遣唐使祠^二神祇於蓋山之南^一。」との記事や、宝龜八年（七七七）二月戊子条に、

遣唐使拜^二天神地祇於春日山下^一。去年風波不^レ調。不^レ得^二渡海^一。
一。使人亦復頻以相替。至^レ是副使小野朝臣石根脩^二祭祀^一也。

とあることから確認される。これら二つの事例から、遣唐使派遣に伴い御蓋山（＝春日山）を祀ることは、早く養老元年の段階で確認でき、その後も踏襲されているため、『万葉集』の一例もこれに類するものと考えられる。また後者の場合、「脩^二祭祀^一」のが遣唐副使である小野石根となつていたので、藤原氏による氏神信仰とはいえないだろう。さらに、『古今和歌集』巻九（新日本古典文学大系本）には、阿倍仲麻呂の「あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも」という在唐歌が残されており、ここからも「三笠の山」（＝春日山）と遣唐使との深い関係を窺うことができる^{三七}。もちろん、これらの

事例すべてが春日大社を指しているとは限らないが、『万葉集』の「春日祭^レ神」が春日祭ではないとみる傍証になるのではなからうか。

このように、先の官符中に「紫微中台」とあるからといって、それを直ちに光明子（＝藤原氏）による私的な祭祀と結びつけることはできないと思う。また、天平勝宝三年では、紫微中台補任者のなかに、藤原氏出身者が仲麻呂しかいないことも有効な材料となるだろう^{三八}。「紫微中台」には複数の氏族がいるにもかかわらず、光明子（＝藤原氏）が私的な祭祀（＝氏神祭祀）を行ったとみるのは難しいのではなからうか。

要するに、天平勝宝七年官符にある「紫微中台祭」というのは、光明子（＝藤原氏）あるいは紫微中台による私的な祭祀ではなかったと考えられる。そうすると、天平勝宝七年官符が、例え信用できないものであったとしても、そこから藤原氏による私的な祭祀が存在していたことに確証を持たせることはできないだろう。むしろ、遣唐使の派遣が国政の一環であることを考慮してみると、奈良朝初期の段階で春日山に鎮まる神を祭ることは、国家事業の達成を願うためであったといえるのではなからうか。

以上のように、武甕槌神が勧請された理由について、その性格に留意しつつ考察してみると、軍事的行為である和銅二年三月の征夷と、国家形成に功績を持つ神の加護を必要とした平城遷都に起因し

ていると想定される。となると、「国家権力か或いはこれに相当する権力者級の背景」には、穂積親王・石上麻呂・藤原不比等のいずれかが該当することになるだろう。なんとすれば、『公卿補任』によると、和銅二・三年段階で、彼ら以外に有力者と呼ぶべき人物が見当たらないからである^{三九}。これについては、三宅氏^{三〇}による「権力者」とは平城京遷都後、春日の地に進出した藤原氏であったとみることもまず動かないであろう」との指摘がある。しかし、藤原不比等は右大臣という「国家権力」の代表者であるため、彼による武甕槌神の勧請は、国家政策の成功を期してのことであつたと捉えるべきではなからうか。すなわち、前述の三人のうち誰が該当者であつたとしても、「国家権力」の代表である以上、そこに私的な理由は存在し難くなるだろう。

このようにみても、春日大社の起源は、あくまで朝廷祭祀を掌っていたのであり、藤原氏の氏神としての一面は、創祀と同時に発生したわけではないと推測される。しかし、宝龜八年には藤原氏の氏神と認識されていたようである^{三一}。そうすると、これがいつのこと、どのような背景があつたのかを示さなくてはならないだろう。そしてこの課題については、中村英重氏^{三二}による貴重な研究成果を参照することで、解決できるのではないかと考えている。そこで節を改めて、氏の見解を紹介しつつ言及していきたい。

第二節 春日大社と藤原氏

一、中村説の紹介と疑問点

中村氏は、「藤原氏と鹿島神との関係を明らかにしようとする場合、まず方法的には藤原氏の中で常陸と最も関係の深い経歴をもつ人物を、洗い出していくことが正当な方法」と述べ、それが藤原宇合であると指摘されている。理由は、次の二点である。

- 一、宇合は、養老三三年（七一九）七月の時点で常陸守に就任している^{三三}。しかも『懷風藻』に収められる、宇合の「在常陸贈倭判官留在京。一首。」に、「待^三君千里之駕^一。于^レ今^三三年。」とあり、さらに「揺落秋」とあることから、養老五年（七二一）の秋ごろまで、常陸に滞在していたことが確実視できる。
- 二、征夷の際に、鹿島・香取の分霊が軍に帯同されるから、神龜元年（七二四）四月に持節大將軍として陸奥に派遣された宇合が^{（神龜元年四月丙申条）}、このときの征夷を通じて両神に対する認識や評価を高めることになった。

こうした官歴のほかに、宇合が『常陸国風土記』の編者^{三四}であることを補強材料として加え、鹿島神に対する信仰を深めていき、「私的

に鹿島神への尊崇をもち、式家の神として春日社を創祀した」と推定されている。そして、式家の神として創祀されたものが、「やがて四家体制に移行し、氏の基盤が形成されるにつれて、改めて氏神が必要になっていった」という背景のもとで、藤原氏が氏神創設への意識を高めていき、後に春日大社が氏神社として創建されたと結論づけられている。

さらに中村氏は、春日大社が創建される過程についても論じられている。氏はまず、『東大寺山堺四至図』から、三笠山には神殿などの建造物がなく、「当時の春日社は鹿島神などへの遥拝地であると同時に、祭祀の時に神の降臨を招くミアレ地、祭場のような性格」であったことを確認され、「この段階ではいまだ春日社が、藤原氏の氏神までに至っていないかった」ことを指摘されておられる。そして、

『春日社私記』

(神道大系本)

に引かれる天平勝宝七年(七五五)官符を論拠

として、「光明子は宇合の妹であり、宇合の信仰を引継ぎ、しかも紫微中台の関与があつたように、官祭的地位にまで引き上げ、藤原氏の氏神に整備していった」と考えられている。そのうえで、天平宝字四年(七六〇)、光明皇太后が崩御したあと(天平宝字四年六月乙丑条)、その後継として宇合の第二子良継が整備事業を引継ぎ、春日大社の官社化が進められていったと想定されている。氏が、ここで良継を中心人物とみる論拠は、次の三点である。

一、良継は宇合の第二子で、広嗣亡き後の式家後継者であるから、宇合が創祀した春日大社を継承するに最も相応しい。

二、宝龜八年(七七七)七月乙丑条に、「内大臣從二位藤原朝臣良繼病。叙其氏神鹿島社正三位。香取神正四位上。」とあつて、良継と両神との特別な関係が推し量れ、それは彼が官社化推進の中心人物であり、そのための特別措置といえる。

三、『新抄格勅符抄』(新訂増補国史大系本)によると、天平神護元年(七六五)に鹿島社から春日大社へ封戸の寄充がなされているが、この政策を進めたのは良継だと思われる三五。

こうした理由をもとに、春日大社の官社化を推進したのは良継であると断定し、加えて、当時の時代背景も絡め、次のような結論を導いておられる。

道鏡が法王として称徳天皇の庇護のもとで専権をふるい、藤原氏の結束が最も必要とされていた時期でもあつた。このために氏神創設のことが想起され、春日社の官社昇格の議もおこされたであろう。良継が中心となり永手の協力のもとに、これが実現されることとなるのである。

中村氏が想定される創祀から官社化への流れを整理してみると、以下のようなになるだろう。①養老年間に常陸守たる宇合が、鹿島神への崇敬心を高めていき、②神龜元年の征夷を機に、式家の神とし

て三笠山へ勧請する。③いわゆる「武智麻呂政権」^{三六}時に藤原氏が氏神創設を意識しはじめ、④光明皇后によって官社化への整備が進められていき、⑤これを引き継いだ良継が、神護景雲二年十一月、氏神社かつ官社として春日大社を創建する、といった具合になる。この中村氏の見解は、その後、上田正昭氏^{三モ}が「説得力に富む見解」と賛美され、鈴木拓也氏^{三八}も『蝦夷と東北戦争』のなかで踏まえられている。

中村説を概観してみた結果、特別大きな問題点を見出すことはできない。むしろ氏が、「春日社が、藤原氏の氏神までに至っていないかった」と述べられているように、藤原氏の氏神社として創祀されたわけではないとする視座には感銘を受ける。しかしながら、わずかなではあるが、賛同しかねる箇所もある。それは、氏が前提として、鹿島神の勧請を藤原氏と関連づけ、宇合が初期の春日大社を創祀したといわれることである。というのも、筆者は第一節にて、鹿島神が勧請された背景には、和銅年間の征夷と造都があるのではないかと指摘したからである。また仮に、中村説に従って、宇合が春日大社を式家の神として創祀したとすると、鹿島神に付随する武神としての性格は、宇合が征夷に携わっているため関連づけることもできるが、もう一つの性格、国家の守護神としての一面は^{三九}、私的な要素があるため反映させるのは難しいのではなからうか。

このように、筆者は中村説に対し、若干の疑問を抱いている。ただし、氏の見解を否定的に捉えるつもりは毛頭ない。そこで以下、中村氏の研究に倣い、氏が注目した宇合の動向を今一度跡付けたうえで、春日大社が藤原氏の氏神社となった事由を説明していきたい。

二、藤原式家の神祇思想

国史における宇合の初見は、靈龜二年（七一六）八月癸亥条で、遣唐副使として唐に派遣されていたことが明らかとなる。そして帰朝直後の養老三年正月、位階は正五位上に達している（^{養老二年正月壬寅}）。同年七月には、「常陸守正五位上」とあることからすると（^{養老三年七月庚子}）、帰唐後ほどなくして常陸守に就任し、任国へ派遣されていることが確認される（^{懷風}）。また、安房・上総・下総の按察使となり（^{養老三年七月庚子}）、以後、持節大將軍（^{神龜元年四月丙申}）や知造難波宮事（^{神龜二年十一月庚午}）、式部卿などを歴任し（^{公卿補任}）、天平三年（七三一）八月、参議として太政官入りを果たす（^{天智三年八月丁亥}）。その後、天平三年十一月の畿内副惣官（^{天平二年十一月丁亥}）、同四年（七三二）正月の西海道節度使を経て（^{天平四年八月丁亥}）、同六年（七三四）には位階も正三位となり（^{天平六年正月己卯}）、政界の中枢を担う存在となる。宇合は天平九年（七三七）八月に四十四歳で薨去するが、この時の官位は正三位参議式部卿兼大宰帥であつた（^{天平九年八月丙午}）。

こうした経歴からすると、中村氏が指摘されたように、宇合が常陸守に就任して任国の統治に当たっていたことと、持節大將軍として東国蝦夷の征討へ赴いたことは、彼が鹿島神を信仰するようになった契機とみることができる。しかも、鹿島神にまつわる説話が散見される『常陸国風土記』の編纂が、宇合の手によるものならば四〇、中村氏の主張はより説得力を持つことになるだろう。したがって、宇合が「私的に鹿島神への尊崇」を持った可能性は大きいと思われる。しかし、だからといって、春日大社を創祀したのが宇合とは限らない。というのも、卑見によると、鹿島神は宇合が常陸守となつた養老三年の時点で、国家の守護神的存在として、すでに三笠山に鎮座しているからである^{〔本章第一節参照〕}。となると、これがどのような経緯で藤原氏の氏神となつていったのか説明を要するであろう。

そこで重要な意味を持つてくるのが、中村氏が明らかにされた、宇合の有する私的な鹿島神への信仰である。すなわち、これが宇合の子息らに継受され、そこから藤原氏内部に伝播し、何らかの契機があつて氏神社として整備されることになつたのではなからうか。以下、この臆測が妥当なものであるのかどうかを確かめていきたい。まずは、宇合の子供らに、神祇に関する思想がみられるのかどうかを確認してみる。

長子の広嗣は、第四章でも触れたが、次に挙げる二つの記事から

神祇への関心を窺わせる。その一つは、天平十二年（七四〇）十月壬戌条に、

（前略）広嗣云。而今知^二勅使^一。即下^レ馬。両段再拜申云。広嗣不^三敢捍^二朝命^一。但請^二朝廷乱人二人^一耳。広嗣敢捍^二朝廷^一者。天神地祇罰殺。（後略）

とあり、もう一つは、天平十二年十一月戊子条に、

（前略）広嗣自捧^二馱鈴一口^一云。我大忠臣也。神靈弃^レ我哉。乞頼^二神力^一風波暫静。

と記されている。これらの史料は、広嗣の発言として『続日本紀』に収められているため、彼の心情を読み取るための材料として用いることができるだろう。

前者には、広嗣が朝廷に背けば、「天神地祇」が自身を誅殺するだろうと述べたことが記されている。後者からは、広嗣が「神靈」に見捨てられたことを嘆く様子が窺え、「神力」をもつて風波が止むことを請う姿が看取される。当該期の前後は、天平十五年（七四三）の大仏造立事業が有名なように^{〔天平十五年十月辛巳条〕}、仏教政策が多く実施されている。そうした世情の中で「仏力」などの用語ではなく、あえて神祇を想起させる単語を使用しているところに、彼の思想がよく表現されているのではなからうか。

次子の良継には、神祇思想を有していたことを示す、直接的な史

料はない。しかし、中村氏が指摘されたように、彼が神祇と無関係だったとは思えない。

そもそも中村氏は、先に紹介したとおり、良継を「宇合の創祀した春日社を継承するに最もふさわしい」人物と考えられている。氏は、その論拠の一つとして、宝亀八年（七七七）七月乙丑条の、

内大臣從二位藤原朝臣良継病。叙其氏神鹿島社正三位。香取神正四位上^一。

という記事を示したうえで、「良継と両神との特別な関係がおしはかれる」とし、「良継が官社化の推進者であり、そのための特別措置」であると捉えて重要視されている。後述するように、春日大社の整備を良継が主導したとする見解は受け入れ難い。しかしながら、氏の指摘どおり、宝亀八年七月乙丑条から「良継と両神との特別な関係」が推し量れるのであれば、彼が神祇と関わりを持っていたと見做すことができるだろう。

このようにみると、広嗣や良継には神祇の思想を垣間見ることができよう。しかし、式家全体が共有していたのかというと、どうも、そういうことではなさそうである。というのは、五子田麻呂の薨伝に、次のような記述がみられるからである（延暦二年三月丙申）。

（前略）天平十二年。坐^二兄広嗣事^一。流^二於隱伎^一。十四年有^レ罪徵還^二隱居蛭淵山中^一不^レ預^二時事^一。敦^二志釈典^一。脩行為^レ務。

（後略）

これによると、「広嗣の乱」に坐せられ隱岐に配流となった田麻呂は、天平十四年（七四二）に罪を免ぜられたあと、「蛭淵山中」に隱居し「釈典」に志を持ち、修業を務めとしていたという。つまり田麻呂は、どちらかといえば仏教に傾倒していったようである。また、先に神祇思想があると確認した良継も仏教に関心があったといわれている^{四一}。

残りの子息達については、思想を示す史料が残されていないため、詳細は不明である。けれども、『続日本紀』に「神力」・「神靈」・「神威」といった用語が散見されることや^{四二}、田中卓氏^{四三}が説かれたように、奈良時代における神祇政策を重要視してみると、当該期に神祇を敬う姿勢は広く浸透していたと考えられる。とすると、式家の一部に宇合の思想が引き継がれていたとしても、不自然ではないと思う。

ただし、中村氏が提唱されたように、良継が春日大社に関する政策を主導していたのかというと、そうとは言い切ることができない。なぜなら、数ある伝承の中に、例えば、『春日御社御本地并御託宣記』（神道大系本）に、

高野天皇即位神護景雲元年丁未。藤氏長者左大臣永手春日御社始振立三所。鹿島香取相殿

とあるように、春日大社成立の功労者として、北家の永手が登場しているからである^{四四}。もつとも、ここに記される年代には諸伝との食違いがあるため、直ちに信用することは避けなければならない。とはいうものの、諸伝に永手が出てくることも事実である。したがって、こうした伝承に目を向けるならば、春日大社を整備した人物として、永手も考慮しなくてはならないだろう。このことは、多くの社伝が成立期としている、神護景雲二年段階の廟堂構成員を概観することで補足できる。次に、『公卿補任』神護景雲二年条を参考に列挙しておく。

左大臣 正二位 藤原永手（北家）

右大臣 正三位 吉備真備

大納言 正三位 白壁王

弓削清人

中納言 從三位 中臣清麻呂

参議 從三位 藤原清河（式家）^{四五}

石川豊成

文室大市

藤原縄麻呂（南家）

石上宅嗣

藤原魚名（北家）

從四位上 藤原田麻呂（式家）

從四位下 藤原繼繩（南家）

一見すれば明らかなように、式家からは田麻呂だけ（しかも参議）しか太政官入りしていないことが見て取れる。ひるがえってみると、当時の式家には、春日大社に関する政策を主導していく力はなかったといえよう。しかも、中納言たる中臣清麻呂が神祇伯を兼任しており（『公卿補任』神護景雲二年条^{四六}）、永手と協力して春日大社の創建に尽力していたとの指摘もある^{四六}。これを踏まえてみると、神護景雲二年の段階で春日大社に関する施策が実施できたのは、永手が政府首班として存在し、神祇伯を中臣清麻呂が務めていたからとみるのが、穏当な理解となるだろう。

では、神護景雲二年に、永手はなぜ春日大社を整備しなければならなかったのだろうか。また、そもそも永手は、どのようにして神祇の思想を身につけていったのであろうか。以下、考察していく。

三、藤原永手の神祇思想

まずは、北家の永手が、何を契機として神祇思想に触れたのかを考えてみたい。そこで注目してみるのには、式家との婚姻関係である。すなわち『尊卑分脉』によれば、良継の娘が永手の室になっており、

雄依を生んでいることが知られるのである。

この雄依は、残念ながら生年不詳であり、彼の年齢から逆算して、良継の娘と永手との婚姻時期を想定するのは困難である。しかし、雄依の初見記事をみると、神護景雲元年に正六位上から従五位下に昇叙していることがわかる（神護景雲元年正月己巳条）。仮に、この正六位上が初叙だとして、蔭位の規定により二一歳で授けられたものだとすると四七、雄依の誕生は天平十九年ということになる。もともと、雄依の初見記事＝初叙記事ではないため、もう少し幅を利かせて考えておく必要がある四八。それでも、せいぜい天平十七、八年くらいであろうか。それというのも、このように推定しなければ、良継に婚姻の適年齢を迎えた娘を儲けていたと想定することができないからである四九。というよりは、このように考えることで、年齢的な問題は解決することができるのである。

要すれば、良継の娘と永手が婚姻を結んだ時期は、天平末年ごろだったと考えられる。そうすると、式家の思想は良継の娘を媒介とし、天平末年に北家へと伝わった可能性を見出すことができるのである。したがって、この見方が妥当なものであるならば、伝承どおりの神護景雲二年の段階で、永手が鹿島神に対する信仰を有している、何ら不自然なことではないだろう。

また、永手と式家官人との人的関係も考慮しておきたい。このこ

とは、『日本紀略』宝龜元年（七七〇）八月癸巳条（新訂増補 史大系本）が引く、百川伝が一つの根拠となる。長文であるため、必要箇所を引用しておく。

百川伝。（中略）皇帝遂八月四日崩。天皇平生未_レ立_三皇太子_一。至_レ此。右大臣真備等論曰。御史大夫從二位文室浄三真人。是長親王之子也。立為_三皇太子_一。百川与_三左大臣内大臣_一論云。浄三真人有_三子十三人_一。如_三後世_一何。真備等都不_レ聽_レ之。冊_三浄三真人_一為_三皇太子_一。浄三硬辞。仍更冊_三其弟参議從三位文室大市真人_一為_三皇太子_一。亦所辞_レ之。百川与_三永手良継_一定_レ策。偽作_三宣命語_一。宣命使立_レ庭令_三宣制_一。右大臣真備卷_レ舌無_三如何_一。百川即命_三諸伎冊_三白壁王_一為_三皇太子_一。十一月一日壬午。即_三三位大極殿_一。右大臣真備乱云。長生之弊。還遭_三此恥_一。上_三致仕表_一隱居。

右の記事によると、式家の百川が永手（＝左大臣）や良継（＝内大臣）と協力して、白壁王を立太子していることがわかる。この百川伝は、信頼性について別に議論を要するようだが五〇、宝龜二年（七七一）二月己酉条に、

（前略）宝龜元年。高野天皇不予時。道鏡因以籍_三恩私_一。勢振_三内外_一。自_三廢帝黜_一。宗室有_三重望_一者。多羅_三悲辜_一。日嗣之位。遂且_レ絶矣。道鏡自以_三寵愛隆渥_一。日夜僥_三倖非望_一。洎_三

「于宮車晏駕^一。定^レ策遂安^二社稷^一者。大臣之力居多焉。及^レ夢。

天皇甚痛^二惜^一之^一。(後略)

とあることを重視すると、永手が主要人物の一人であったことは確実視される^{五二}。また、後掲する宝亀元年八月癸巳条には、永手と一緒に良継の名も明記されているため、二人が白壁王の擁立に携わっていたことは間違いないだろう。したがって、広く説かれているように、百川伝には誇張こそあれ、一定の事実関係を物語っていると判断できる。となれば、永手と良継、そして百川は、互いに協力し合う仲で、友好関係にあったといえるだろう。であるならば、永手は式家との交流を通じて、神祇への造詣を深めていったのかもしれない。

いずれにしても、永手と式家との婚姻関係、及び人的関係を併考すると、北家の永手はこれらを介し、式家の神祇思想を身につけていったと考えられる。では、このようにみた場合、永手が春日大社を整備しなければならなかった理由とは、いったい何であったのだろうか。

四、氏神社としての春日大社

そもそも、神護景雲二年前後の政治動向は、称徳天皇と道鏡によ

る仏教中心の治世であった。いわゆる「称徳天皇・道鏡政権」と呼称されるこの時期については、研究成果の蓄積があるため^{五三}、ここではその概要を記しておく。

聖武天皇と光明皇后から崇仏思想を受け継いだ孝謙太上天皇(＝称徳天皇)は、道鏡を「大臣禪師」^(天平字八年九月甲寅条)、次いで「太政大臣禪師」に就任させることによって^(天平神護元年四月庚寅条)、仏教主義政治の徹底化を図っていく。無論、道鏡は、皇権を抛りどころとして朝廷内で権勢を得ることになる。しかしこれは、称徳天皇との個人的な結びつきに拠る権力であって、貴族層に支持基盤はなかったようである。そのためか、当該期の太政官構成を概観してみると、意外なほど藤原氏が多く存在していることがわかる。その藤原氏は、同族の仲麻呂による事件以降、実は、飛躍的な躍進を遂げていることが知られている^{五四}。これは、太政官内に支持勢力を持たない道鏡が体制を維持するため、称徳天皇からの信頼篤い藤原氏に、頼らざるを得ない状況にあったからだと考えられている。故に藤原氏は、公卿として一定の人材を輩出しており、人事の要衝を抑えることができていたのである。

このように、神護景雲二年前後の政治動向を概括してみると、藤原氏について、次のように整理することができるだろう。すなわち、「称徳天皇・道鏡政権」下において藤原氏は、道鏡の権力維持の都

合上から不遇であったわけではなく、太政官内に一定の地位を保っていた。しかも、こうした状況からか、「称徳天皇・道鏡政權」に正面から対抗していた様子はない。なかには、個人的に道鏡を嫌悪する者もいたようだが^{五四}、称徳天皇の藤原氏に対する信頼は篤く、一族を挙げて同政權に反発していたわけではなかったようである。

こうした情勢から類推する限りでは、「道鏡が法王として称徳天皇の庇護のもとで専權をふるい、藤原氏の結束が最も必要とされていた時期でもあった」から、「氏神創設のことが想起」されたという中村氏の説明だけでは不十分であろう。なぜならば、前述したように藤原氏は、「称徳天皇・道鏡政權」に対して真つ向から反発はしていないからである。しかし、中川収氏^{五五}が、いわゆる「仲麻呂の乱」後、「藤原氏は四分家が定着し、この段階においても一族が必ずしも結束している状態でもなかった」と指摘されていることに留意すると、このころ藤原氏内部の結束が必要であったとする中村氏の意見は傾聴すべきである。要するに、「一族が必ずしも結束している状態でもなかった」藤原氏は、「称徳天皇・道鏡政權」に対抗する形でまとまりを必要としたのではなく、何か別の目的があつて結託したと思われる。となると、その背景とは何だったのかを説明しなくてはならないだろう。

そこで想起されるのが、藤原氏による白壁王の擁立である。国史

では、これに関して宝龜元年八月癸巳条に、次のように記されている。

天皇崩于西宮寢殿^一。春秋五十三。左大臣從一位藤原朝臣永手。右大臣從二位吉備朝臣真備。參議兵部卿從三位藤原朝臣宿奈麻呂。參議民部卿從三位藤原朝臣繩麻呂。參議式部卿從三位石上朝臣宅嗣。近衛大將從三位藤原朝臣藏下麻呂等。定策禁中^二。立諱為皇太子^三。左大臣從一位藤原朝臣永手受遺宣^四。曰。(後略)

右の記事によると、藤原永手、吉備真備、藤原宿奈麻呂(良繼)、藤原繩麻呂、石上宅嗣、藤原藏下麻呂らが、策を禁中に定めた結果、白壁王の立太子が実現している。なかでも、永手の働きが強調されることは、先に確認したとおりである。しかも、前掲の百川伝に信を置くならば、ここに百川も加わることになる。さらに、木本好信氏^{五六}の分析によると、太子を撰定するために、公卿らが議論を行っていたことも認められる。総じてみると、この政略には南家の繩麻呂も関与しており、決して北家の永手、式家の良繼と百川だけの施策というわけではないから、白壁王の擁立には、藤原氏が氏族単位で関与していたことになるだろう。こうした見方は、すでに中川収氏^{五七}が、永手・良繼・繩麻呂・藏下麻呂・百川の「五人はきわめて強い親族的紐帯で結ばれている」から、藤原氏は「挙族的体制」で

白壁王の擁立を望んでいた、と述べられているところである。

もう一つ、白壁王の擁立に関することで、確認しておきたいことがある。それは、当該期に皇嗣問題が深刻な課題となっていたことである。光仁天皇の即位前紀に、

（前略）自三勝宝以来。皇極無_レ式。人疑_二彼此_一。罪廢者多。

天皇深顧_二横禍時_一。或縦_レ酒晦_レ迹。以_レ故免_レ害者数矣。（後略）

とあることから窺うことができる。ここである「人疑_二彼此_一」。罪廢

者多。」というのは、天平神護元年八月の和氣王による謀反事件（天平神護元年八月庚申）や同二年四月の偽皇子事件（天平神護二年四月甲寅）

、神護景雲三年（七六九）五月に氷上志計志麻呂が配流されたこと（神護景雲三年五月壬申）などを指している

のであろう。とすると、即位前紀の記事は、当時の実情をよく反映した記載といえる。であるならば、早く天平勝宝年間から、皇位継承問題は、政治的に大きな問題として存していたことが明らかとなるのである。

以上のことを総括してみると、藤原氏が白壁王の擁立を「挙族的体制」で実行するために、春日大社の氏神化は進められたと考えることができるのではなからうか。整理してみると、王の擁立を推進する永手は、神護景雲二年の段階で、当時、政治的に課題となっていた称徳天皇の後継者問題について、良継・百川はもちろんのこと、南家の縄麻呂らの協力を得るために、「必ずしも結束している状態では

もなかった」一族を強固に結束させる手段の一つとして、春日大社を氏神社として整備したと考えることができるのである。

また、神護景雲二年を契機として、春日大社が藤原氏の氏神として認識されるようになったとの見通しは、義江明子氏^{五八}による研究成果も参考となる。氏は、春日祭祝詞が「平安ごく初期」に成立したと結論づけ、そこには「朝廷の長久安泰」が込められていると同時に、「藤原氏の繁栄を祈願するという私的人格」が一貫しており、「祝詞の成立時に、藤原氏の氏神としての性格が既に固められていた」ことを明らかにされている。この指摘を踏まえてみると、藤原氏が春日大社を氏神化したのは、祝詞成立と期を一にしている。換言すると、春日祭の開始時期とも連結しているのである。

義江説に従うと、春日祭が始められるのは「平安ごく初期」となる。しかしこの点は、岡田氏^{五九}が説く神護景雲二年説も傾聴すべきである。すなわち氏は、春日祭に「神琴師」が奉仕することや（改定版^{六〇}）、『延喜式』に「神琴二人」が確認できることから、『三代実録』元慶八年八月廿六日条の「神琴二面」を祭祀に用いられる祭具と断定し、春日祭の成立を神護景雲二年とみておられる。

春日祭の議論に私見をはさむ余裕はないが、『三代実録』元慶八年八月廿六日条がある限り、神護景雲二年の段階で、春日祭もしくはその前身たる祭りが執行されていたことは想像に難くない。また、

『延喜式』に収められる春日祭祝詞の冒頭には、「天皇^我大命^尔坐^世。恐^岐鹿島坐健^御賀^豆智^命。香取坐伊波比主^命。枚岡坐天之子八根^命。比賣^神。四柱^能皇神等^能広^前白^命。(後略)」とあり、四神が揃ってこそ春日祭には意味があることを示している。前述したように、諸伝を食違いなく整理すると、祭神が揃うのは神護景雲二年である。つまり、「祝詞の成立時に、藤原氏の氏神としての性格が既に固められていた」という見方が正鵠を射ているのであれば、春日大社に藤原氏の氏神的性格が存するようになるのは、神護景雲二年と考えられるのである^{六〇}。

むすび

本章では、春日大社の創祀から成立までについて、主に現存する伝承に重点を置きながら考えてみた。最後に、各節で明らかにしたことと要点を改めて明記し、筆者が想定するその過程を提示しておきたい。

まず第一節では、『神宮雜例集』に確認される和銅二年の創祀説話に着目し、春日大社の創祀時期について考察した。そこでの結論は、次の二つである。

①奈良時代初期に遡る春日大社の創祀時期は和銅二年と考え

られ、その背景には、同年に実施された征夷と平城京への遷都事業が想定される。

②初期の春日大社は、あくまで朝廷祭祀を掌る場であり、藤原氏の氏神社としての性格は、何かしらの契機があつて、後に備わることになる。

第二節では、先行する学説に導かれながら、第一節での成果を交え、春日大社が藤原氏の氏神社へと転化した時期や、その背景について考察した。その結果のみを抽出すると、次のようになる。

イ、伝承の中に、北家の藤原永手が登場してくることなどからすると、春日大社の成立に式家の良継が主導的な役割を果たしたとみる中村氏の説には、疑問が生じてしまう。

ロ、式家の字合は、個人的に鹿島神への崇敬を高めていき、この思想が式家の内部に伝わる。

ハ、北家の永手は、婚姻関係などの交流を経て、式家の持つ鹿島神への信仰を身に着けた。

ニ、藤原氏は、白壁王の擁立を背景に、神護景雲二年、永手を推進力として春日大社を氏神社として整備する。

以上、二節に亘る論を総括すると、春日大社の創祀から成立までの経緯は次のように考えられる。

一、和銅二年、平城遷都と征夷事業をきっかけとして、三笠山

に武甕槌神が勧請され、国家守護の役割を期待された、初期の春日大社が創祀される。

二、常陸守就任や『常陸国風土記』の編纂、神龜元年四月の征夷を経て、宇合が「私的に鹿島神への尊崇」を深めていく。

三、宇合が形成した思想は、彼の子息らへと伝播。

四、式家内部の思想が、婚姻や人的関係によって北家の永手へと伝わる。

五、「称徳天皇・道鏡政権」による仏教主義政治が展開されるなか、白壁王の擁立を背景として、藤原氏の結束を図るために、神護景雲二年、永手を推進力として春日大社は氏神社として整備され、社殿を創建するに至った。

この見通しは、現存する伝承と国史から窺うことのできる歴史事実を、整合的に捉え導き出したものである。春日大社にまつわる伝承を重要視し、これまでに明かされてきた史実と齟齬なく理解するならば、このように把握することも許されるのではなからうか。しかし、現段階では、伝承が史料の根拠となってしまうこともあり、実証的かを問われると、心許ないことは否めない。よって、これを解決していくことが、これからの大きな課題となる。

藤原氏との関わりが深い春日大社の研究は、「この時代の政治史研究は、相変わらず低調である」と言われる^六、奈良朝政治史を論じ

る視点として、今後、より必要とされていくだろう。そういった意味で、あえて卑見を提示してみることで、奈良朝政治史研究、あるいは春日大社の研究に、問題提起ができればと考えている。諸賢のご批正を乞う次第である。

【註】

一 田中卓「聖武天皇の神祇崇敬」(『神社と祭祀 田中卓著作集十

一—Ⅰ』所収、国書刊行会、一九九四)。

二 この時期を扱う研究は数え切れないほどあるが、近年では、木本好信氏が『藤原仲麻呂』^(ミネルヴァ 房二〇二二)の中で、藤原仲麻呂の生涯と共に触れられている。

三 筆者は原史料を見たわけではないが、幸いにも、関係論文のほとんどが用いているため、それを参考にさせていただいた。

四 岡田莊司「平安前期 神社祭祀の公祭化・上—平安初期の公祭について—」(『平安時代の国家と祭祀』所収、続群書類聚完成会、一九九四)。岡村孝子(『平城京における日神信仰—都祁氷室神社と春日大社の創祀をめぐる—』(『日本宗教文化史研究』一四—一、二〇一〇)。土橋誠氏(『維摩会に関する基礎的考察』／『古代史論集 下』所収、塙書房、一九八九)は、もう少し幅を持たせ、天平勝宝末年から神護景雲ごろと見ておられる。

五 義江明子「春日祭祀詞と藤原氏―氏神信仰についての一考察―」
『歴史学研究』五三七、一九八五。三宅和朗氏（『古代春日社の祭祀と信仰』
『史学』七一一、二〇〇二）は、義江氏に賛成の意を示されている。

六 宮地直一「春日神社の成立」（『神社論攷』所収、古今書院、一
九四二）。福山敏男「春日神社の創立と社殿配置」（『日本建築史の
研究』所収、桑名文星堂、一九四三）。

七 『春日大社奈良朝築地遺構発掘調査報告』（春日顕彰会、一九七
七）。以下、『調査報告』と略す。

八 前掲註七参照。

九 養老官位令（『令義解』）による限りでは、神祇伯の官位相当は従四位下
である。

一〇 菊地康明「春日神社と律令官社制」（『律令制祭祀論考』所収、
塙書房、一九九二）。

一一 前掲註七参照。

一二 西田長男氏（『春日大社創立の諸問題』／『神道考古』
『学講座』第六卷所収、雄山閣、一九七三』）は、『神祇志料』が用いている
各史料には歴史的信憑性がないとし、記述に対し「資料（史料）
批判の甘さがあるとおもわれる」と述べられている。

一三 『式内社調査報告』第二卷、京・畿内2（皇學館大学出版、一
九八二）。

一四 『式内社調査報告』第四卷、京・畿内4（皇學館大学出版、一
九七九）。

一五 枚岡神社の伝承は、『和漢三才図会』卷七十五、平岡大明神（『寺島良安
三才図会』下巻、日本図書
大成刊行会、一九二九』）に、「神護景雲二年十一月、自河州平岡。天兒屋
根命。飛移三和州三笠山。即春日大明神是也。」とあるように、江
戸時代にまで継承されていく。

一六 岡田精司「香取神宮の起源と祭神」（『千葉県歴史』一五、一
九七八）。

一七 『日本書紀』神代上、参照。なお、『日本書紀』同条によれば、
「亦曰三甕速日命。次燖速日命。次武甕槌神」とあり、十握劍の
鐔についた軻遇突智の血より誕生した神を、甕速日命・燖速日命・
武甕槌神の三柱とも記している。なお『古事記』では、十握劍の
本（鐔）より誕生したのは、甕速日命・燖速日命・武甕槌神の三
柱となっている。

一八 『古事記』には、「因御刀一所生之神」という一文が附されて
いる。

一九 『古事記』神武天皇段でも、同様の話が確認できる。

二〇 『古事記』による。『日本書紀』によると、経津主神も同時に派
遣されている。

三 三宅氏前掲註五論文。

三三 瀧川政次郎氏〔紫微中葉考〕／〔法制史研究〕四、一九五三の研究により、天平宝字四年六月乙丑条に「改_二皇后宮職_一曰_二紫微中台_一。」とあることをもって、「紫微中台は、沿革的には皇后宮職の延長」であることが判明し、「大政の輔翼、詔奏の傳宣といふが如き國家の重大政務を執り行ふと共に、かやうな皇太后の私事に互る瑣末な事務をも執り行つた」ことが明らかにされている。

三三 福山氏前掲註六論文。西田氏前掲註一二論文。岡田氏前掲註四論文。岡村氏〔前掲註四論文〕は、「朝廷による御蓋山の祭祀から一歩進んで紫微中台の祭りになった」と推測されている。なお宮地氏〔前掲註六論文〕は、この官符の確実性を認めていない。

もつとも、この史料の取り扱いについては、宮地氏が述べられているように、信頼性を疑ってしかるべきであろう。しかし、福山氏が「宮神」とは恐らく「官神」の誤写であろう」と指摘されて以来、こうした見方が支持されている。よって本稿では、一応、信用性があるという前提に従うが、あくまでこの官符を使用して論を展開する先行研究に対し、意見を述べるためである。

二四 土橋氏〔前掲註四論文〕は、「発掘調査の結果からみる限り、不比等が氏神祭祀を確立させたとする理解は必ずしも正しいものとはいえない

い」ことから、天平勝宝七年の段階で藤原氏の氏神と捉えることについて疑問を抱かれ、「紫微中台祭」とある以上、機関としての奉祭を考えるべき」ことを指摘し、「天平勝宝七年の段階では、藤原氏の氏神としての契機と考えてもよからうが、まだ、光明皇太后の私的な祭祀もしくは宗教政策としての関わりと考えておく方がよい」と述べられている。

二五 吉川真司『聖武天皇と仏都平城京』（講談社、二〇一一）。関連する先行研究については、列挙すればきりがなかったため、最近出版された書を紹介するに留めることを断つておく。

二六 藤原清河の遣唐大使就任が天平勝宝二年（七五〇）九月のことであり〔天平勝宝二年九月己酉条〕、節刀を賜るのが同四年閏三月〔天平勝宝四年閏三月丙辰条〕、そして入唐するのが同五年（七五三）正月〔天平勝宝六年（七五四）正月丙寅条の大伴古麻呂による奏上から、大伴天智十二歳、すなわち天平勝宝五年に入唐していたことがわかる〕であるから、『万葉集』の出来事は、天平勝宝三年から同四年の間と考えられる。

二七 岸俊男氏は、「阿倍仲麻呂と「みかさの山」」〔『古代宮都の探求』所収、増書房、一九八四〕の中で、以下のような想定をなされている。『東大寺要録』に、行基が「御笠山安部氏社之北高山半中」に天地院を建立したとあることから、春日山には阿倍氏の祭る社があったとみたうえで、養老元年二月壬申条にある「遣唐使祠三神祇於蓋山之南」というのが、

同行した阿倍仲麻呂と無関係ではないとし、唐という異郷で月を眺めたときに、この時の祭祀が連想されて、「春日なるみかさの山」を想起したのではないかと述べられている。

二八 天平勝宝元年八月辛未条によれば、紫微中台の少忠までの任官が確認できる。内わけは、令_二藤原仲麻呂、大弼_二大伴兄麻呂・石川年足、少弼_二百濟王孝忠・巨勢堺麻呂・背奈王福信、大忠_二阿倍虫麻呂・佐伯毛人・鴨角足・多治比土作、少忠_二出雲屋麻呂・中臣丸張弓・吉田兄人・葛木戸主、である。

二九 『公卿補任』和銅二年条、同三年条によれば、穗積親王は二品知太政官事、石上麻呂は正二位左大臣、藤原不比等は正二位右大臣として列記されている。ここに、『令義解』職員令太政官条の「謂与_二右大臣以上_一共参_二議天下之庶事_一。若右大臣以上並無者。即大納言得_二專行_一。」という一文を併せてみると、大納言以下は除外することができ。なぜなら大納言は、大臣がいる時には「得_二專行_一」ことができないからである。つまり、和銅二・三年では、左右大臣が揃っているため、当然ながら、大納言以下では「国家権力」の代表を担うことができなくなる。したがって、和銅二・三年での「国家権力か或いはこれに相当する権力者」とは、大納言以上に名がある者、すなわち穗積親王・石上麻呂・藤原不比等

に他ならない。

三〇 三宅氏前掲註五論文。ちなみに氏は、義江氏前掲註五論文を踏まえたうえで指摘されている。

三一 宝龜八年七月乙丑条に、「内大臣從二位藤原朝臣良繼病。叙_二其氏神、鹿島社正三位。香取神正四位上_一。」とあり、このころには、鹿島・香取の両神が、藤原氏の氏神と認識されている。

三二 中村英重「中臣氏の出自と形成」(『古代氏族と宗教祭祀』所収、吉川弘文館、二〇〇四)。以下、中村氏による見解は、すべてこの論文を参照。

三三 養老三三年七月庚子条に、「常陸守正五位上藤原朝臣宇合」とある。

三四 日本古典文学体系本『風土記』解説(岩波書店、一九五八)。井上辰雄『常陸国風土記』編纂と藤原氏(『古代中世の政治と地域社会』所収、雄山閣出版、一九八六)。八木毅「常陸国風土記、勘造者に就いての研究史」(『古風土記・上代説話の研究』所収、和泉書院、一九八八)など。

三五 中村氏は、当時の常陸守が石上宅嗣であることに着目し、宅嗣は良繼と政治的にも系譜的にも密接であることを確認したうえで、これを論拠とされている。

三六

野村忠夫氏（「長祿王首班体制から藤原四子体制へ」、『律令政治の諸様相』所収、塙書房、一九六三）が提唱されて以来、「藤原

四子体制」との呼称が広く普及していたが、近年、木本好信氏（『藤原

房、二〇一三）が藤原四子を専論し、「武智麻呂政権」を使用されている。

ちなみに筆者（『藤原四子体制』の再検討）は、「藤原四子体制」および「武

智麻呂政権」に対し、疑問を持っている。

三七

上田正昭「春日の原像」（『春日明神』所収、筑摩書房、一九八

七）。

三八

鈴木拓也『蝦夷と東北戦争』（吉川弘文館、二〇〇八）。

三九

岡田精司「香取神宮の起源と祭神」（『千葉県の歴史』一五、一

九七八）。

四〇

前掲註三四参照。

四一

山本幸男「藤原良継・百川―時代を変えた式家の俊英―」（『平城

京の落日』所収、清文堂出版、二〇〇五）。

四二

管見に及ぶ限りでは、『続日本紀』中に三例の「神力」（『神道大

年十二月丁巳条、延暦四年七月癸丑条）、「一例の「神威」（『大正三

月）が確認できる。

四三

田中氏前掲註一論文。

四四

『中臣祐賢春日御社縁起注進文』（『神道大』にも、「同四年正月十二

日、三笠山下津磐根三南向三宮柱立。御遷宮在之。其時第四御殿ハ

奉祝副之。長者左大臣正一位藤原朝臣、永手御時也。」とある。また、

『大乗院寺社雜事記』文明十年（一四七八）五月八日条（『大正三

「藤原永手大臣八神護景雲二建三立春日社。」との記事がある。

四五

藤原清河は、天平勝宝二年に遣唐大使となり（『大正勝宝二年

は節刀を賜つて（『大正勝宝四年三月丙辰条））、入唐してから薨去時まで在唐している。

四六

宮地氏前掲註六論文。岡田氏前掲註四論文。

四七

選叙令授位条（『大正勝宝二年三月丙辰条）に、「以蔭出身。皆限三年廿一以上。」とあ

る。

四八

選叙令五位以上条（『大正勝宝二年三月丙辰条）によれば、蔭によって正六位上が授けら

れるのは、一位の庶子と嫡孫である。雄依の父永手は、神護景雲

元年の時点で正二位であり、上記の規定に当てはまらない。また、

祖父の房前は贈正一位であるが、雄依は嫡孫ではないため、これ

が適用されることはない。そうすると雄依は、房前の庶孫として、

正六位下を最初に授かったと思われる。したがって雄依は、神護

景雲元年の段階で、すでに一階叙位されていることになる。

四九

配慮しなければならないのは、良継と雄依の母（良継の娘）

の年齢である。雄依は、すでに述べたとおり、神護景雲元年の段

階で二歳を過ぎており、誕生が天平十九年以前となることは確

実である。そうすると、薨伝に「薨時年六十二。」とある良継は（『大正三

九月丙寅、このとき三二歳よりも若い計算となる。
資 参

このことを念頭に置き、良継の娘が雄依を生んだ年齢を考えてみたい。例えば、それが十七歳であったとすると、天平十九年から逆算しても、良継が十六歳のときの娘となる。つまり、良継の年齢に留意すると、良継の娘はかなりの若さで雄依を生んでいると見做さなければならない。かといって、良継の娘が適当な歳で雄依を生んだと仮定すると、良継はかなりの若さでその娘を儲けていたことになってしまう。

こうした事情を踏まえ、両者の年齢の落としどころを探っていくと、良継が十七、八歳で娘を授かり、その娘が十四、五歳で雄依を生んだとするのが無理のない範囲となる。やや早いと思われるかもしれないが、このように推測すると、雄依の誕生は天平十七、八年となる。

五〇 管見に及ぶ限りでは、百川伝の史料的重要性を認める見解が主流である。例えば、中西康裕氏（『桓武天皇と皇位』／『続日本紀と奈良朝の政変』所収、吉川弘文館、二〇〇二）は、信憑性を疑う河内祥輔氏（『奈良時代後期政治史の基調』／『古代政治史における天皇制の論理』所収、吉川弘文館、一九八六）の見解に対し、疑義を呈しておられる。近年では、木本好信氏（『称徳女帝の「道宣」——光仁天皇の立太子事蹟——』／『奈良時代の政争と皇位継承』所収、吉川弘文館、二〇一三）が、先行学説を整理しながら、従来とは異なる見解を示す瀧浪貞子氏（『藤原水手と藤原百川——称徳女帝の「道宣」をめぐって』／『日本古代宮廷社会の研究』思文閣出版、一九九二）の論を退けつつ、改め

て史料の重要性を指摘されている。

五一 中西康裕氏（前掲註五）は、「永手は井上皇后の皇后宮職の大夫に嫡子家依を配するなど、井上皇后・他戸皇太子の有力な擁護者」であるとし、白壁王擁立から井上内親王の立后（宝龜元年十月甲子）、他戸親王の立太子（宝龜二年正月辛巳）までを「順調に永手の意向通りに事が進化した」とみておられる。俣野好治氏（『藤原水手——その政治姿勢と政治的立場——』／『平城京の落日』所収、清文堂出版、二〇〇五）は、「藤原永手は、天武系から天智系への皇統交替に大きな役割を果たしたのである」と評価されている。林陸朗氏（『藤原水手——光仁天皇を擁戴した宰相——』／『奈良朝人物列伝——』／『続日本紀——奈良朝の検討——』所収、同朋社、二〇一〇）は、「称徳女帝の後継をきめる禁中の策定会議を主導したのは永手」と紹介されている。

五二 「称徳天皇・道鏡政権」に関する研究は膨大にあるが、本稿では、以下の先行研究を参照した。中川収「称徳・道鏡政権の形成過程」・「称徳・道鏡政権の構造と展開」（『奈良朝政治史の研究』所収、高科書店、一九九二）。榮原永遠男『天平の時代』（集英社、一九九一）。佐藤信「律令国家と天平文化」（『律令国家と天平文化』所収、吉川弘文館、二〇〇二）。古市晃「孝謙・称徳天皇——孤高の女帝」（『平城京の落日』所収、清文堂出版、二〇〇五）。鷲森浩幸「道鏡——政界を揺るがせた怪僧か」（『平城京の落日』所収、清文堂出版、二〇〇五）。吉川真司『聖武天皇と仏都平城京』（講談社、

二〇一一)。木本好信「称徳・道鏡政権の実態―貴族官人層との関

係―」(『奈良時代の政争と皇位継承』所収、吉川弘文館、二〇一

二)。内田敦士「景雲一切経の写経・勘経事業と称徳・道鏡政権」

(『続日本紀研究』三九九、二〇一二)。

五三 野村忠夫「藤原式家の政治的進出」(『政治経済史学』第二二七

号、一九八五)。中川収「称徳・道鏡政権下の藤原氏」(『奈良朝政

治史の研究』所収、高科書店、一九九一)。

五四 山本氏前掲註四一論文。

五五 中川氏前掲註五三論文。

五六 木本氏前掲註五〇論文。

五七 中川収「光仁朝の成立と井上皇后事件」(『奈良朝政治史の研究』

所収、高科書店、一九九一)。

五八 義江氏前掲註五論文。

五九 岡田氏前掲註四論文。

六〇 岡田氏(前掲註四論文)は、神護景雲二年の社殿完成をもって、春日大社の

「公祭化」と位置づけておられる。しかし筆者は、この見方には

賛成しかねる。なぜなら、本章で論じてきたように、春日大社の

始まりは、あくまで朝廷祭祀としてのものだからである。つまり、

私祭に公的な面が加わったのではなく、本来公的であつた祭祀に

私的な性格が備わつたと考える。

六一 「二〇一二年の歴史学会―回顧と展望―」(『史学雑誌』第二二

二編、第五号、二〇一三)。

終章 天平期政治体制の実態

―天平三年八月辛子条の解釈を中心に―

はしがき

本稿では、奈良朝政治体制の研究という枠組みのなかで、天平期の政治体制に焦点を絞って論じたうえで、それにもなう諸問題を検討してみた。詳細は各章を参照していただきたいが、先行する学説の矛盾点を明らかにし、それぞれの議論に問題提起をすることができたと思う。

しかし、通説として確立された政治体制が認められないとすると、天平期の実態はどのような体制だったのかという問いに答えきれていない。そこで、最後の試みとして、天平三年八月の参議推挙を事例に挙げ、その問いに対する見通しを示し、本稿を締めくくることがしたい。

一、天平三年八月辛巳条

『続日本紀』天平三年（七三二）八月辛巳条に、

引ヨ入諸司主典已上於内裏^一。一品舍人親王宣^レ勅云。執事卿等

或薨逝。或老病不堪^二理務^一。宜^下各举^中所^レ知^レ堪^レ濟^レ務者^上。

という記事がある。これによると、「執事卿等」が「薨逝」したり、「老病」のため「理務」に堪えることが出来ないのので、務めに堪え得る人材を推挙せよとの「勅」が下り、これを舍人親王が「諸司主典已上」に宣している。「執事卿等」が「薨逝」したというのは、この「勅」が下される直前、時の大納言であつた大伴旅人が薨去したことを指しているのだろう^{（天平三年七月辛未条）}。「老病不堪^二理務^一」^{（天平四年四月乙未条）}は、翌年四月に中納言阿部広庭が薨じていることに留意すると^{（天平四年四月乙未条）}、彼が、この時すでに病床にあつたことを示していると思われる。よつて、これらの事情から類推する限りでは、ここで発せられた「勅」の内容は、当時の現状を物語っていると判断される。

こうした状況のなか、この「勅」に応える形で、諸司らが「可^レ堪^レ濟^レ務者」を推挙することになる。このことは、天平元年八月癸未条に、

主典已上三百九十六人詣^レ闕上表。举^レ名以聞。（後略）

と記されており、「主典已上三百九十六人」による「上表」が行われたことが確認できる。養老職員令の規定では、京官の主典以上は四三二人であるから、実に九割以上の官人が関与していたことになる^一。

そして、「主典已上三百九十六人」による「上表」を受けて、天平

三年（七三一）八月丁亥条に、

詔。依^三諸司^一。擢^三式部卿^一從三位藤原朝臣宇合。民部卿^三從三位多治比真人^一。兵部卿^三從三位藤原朝臣麻呂。大藏卿^三正四位上鈴鹿王。左大弁^三正四位下葛城王。右大弁^三正四位下大伴宿祢道足等六人^一。並為^三參議^一。

とあるように、式部卿藤原宇合、民部卿多治比真人、兵部卿藤原麻呂、大藏卿鈴鹿王、左大弁葛城王、右大弁大伴道足の計六名が、「諸司^一」によつて参議に就任するのである。

二、先行学説の紹介と問題の所在

そもそも、この参議補任記事は、「藤原四子体制（武智麻呂政権）」の成立、ないし確立の根拠として提示されてきたものである。そこではまず、先行する学説が、この参議推挙をどのように把握し、論拠として用いているのか紹介しておく。

「藤原四子体制」論を最初に展開された野村忠夫氏^三は、「参議を正官化する形態」と位置づけたうえで、①「行政的官司の主要な代表者を一括して議政官に結集した」ことと、②結果「藤原四子がすべて議政官に列した」ことを注意点として挙げ、「人数の上からも議政官の約半数を占め、表（議政官の首座）と裏（議政官の実力者）

との要点を握つた藤原氏は、ここに藤原四子体制を確立したのである」と結論づけておられる。

野村氏の「藤原四子体制」論を継承し、その拠りどころとして言及された中川収氏^三は、「其の選任の方法と結果をみると単なる人材不足とそれに伴う補充の新方法といえない意図的なものを感じる」との理由から、「長屋王の事変後の不安定な廟堂体制を強化するため採つた方策」と考えられている。そのうえで、

その任用に諸司推挙という前例のない方式を採つたのは、二人の弟がすでにそれぞれ卿の任にあることから必ず推挙されると考えたからであろう。この方式を採れば抵抗なく意中の者を議政の座へ進めることができるし、また行政官兼務ということとで実質的な権力掌握にも連動するのである。

と整理し、武智麻呂による策略であつたと主張された。

こうした野村・中川両氏の説く「藤原四子体制」論に対し、「武智麻呂政権」論をいち早く提唱された瀧浪貞子氏^四は、参議の性格がそれまでの恣意的要素が強いものから、「オープンな形になつたことで天皇（側）の意思は大きく制約される」ように変化し、「これが契機となつて資格や規準、人数などが定められ、参議がはじめて正規の官となつた」と指摘されている。そして、これを推進したのは武智麻呂であるとし、一氏族から代表一人を出す慣例を破つて、「藤原

四子」を政界に導くことに成功した政治手腕を高く評価されている。

このように、藤原氏（武智麻呂）を軸に論述される傾向に対し、やや異なる視点から解明を試みられたのが本川清裕氏^五である。氏は、藤原四子の相互関係を詳しく分析し、彼らは「互いにもっとも警戒すべき存在」であつたということを導き出された。そのうえで、「この推挙が藤原四兄弟の団結した策謀によるものだつたとは思えない」と指摘し、「皇親の立場の確保と皇親政治への道を開こうとした」舎人親王の関与を想定されている。しかし、このように仮定すると、宇合と麻呂の補任事情が説明できないことから、併せて武智麻呂が関係していると推測された。そのうえで、「天平三年八月の参議推挙は、皇親勢力と武智麻呂が結束して推進し、それぞれの思惑通りの人物を補任させたのだろう」と総括されている。

また、林陸朗氏^六は、選出された人物六名の位階に注目され、「現職の位階の低い治部と宮内を除いた六省の卿」が推挙されたと述べておられる。さらに、この人事を「別の観点」からみると、「藤原氏の二人宇合と麻呂を入れるための仕掛けと見ることもできる」ので、「武智麻呂の主導下に藤原四兄弟が揃って参議に列したかたちは前例のない政治体制であり、その限りでは武智麻呂の主導による藤原四兄弟体制といつてよいであろう」と、「藤原四子体制」論を擁護されている。

こうした研究成果を整理しつつ、より詳細に考察を加えられたのが木本好信氏^七である。氏は、諸司の推挙による方法となつた理由について、「武智麻呂らにとっては政権を確固たるものにするからも自派閥よりの選任を思慮していたが、反対派勢力の反発にも配慮することが求められていた」からだとされている。宇合・麻呂・葛城王・大伴道足は、「式・兵部卿、左右大弁は枢要官司の長官という職掌上のことから当然」任用されることが予想されていたとし、多治比県守は「長屋王の変」から「権参議」としての功績があり、鈴鹿王は「長屋王の事件に関して弟鈴鹿王への特別な配慮」によるものから、任命に至つたのだと説明されている。そして、こうした人事は、「ただ一人の大納言であつた武智麻呂の意図のもとに進められた結果」であつたと位置づけられて、

ここに長兄武智麻呂の主導のもとに、参議・式部卿の宇合、参議・兵部卿の麻呂を中心に、中納言阿部広庭、参議・中務卿の房前、そして親藤原氏というよりは親武智麻呂派というべき参議・民部卿の多治比県守、参議・右大弁の大伴道足に、参議・大藏卿の鈴鹿王、参議・左大弁の葛城王らを加えた「藤原武智麻呂政権」が成立したといえる。

と結論づけ、「武智麻呂政権」の成立を提唱されている。以上、天平三年八月の参議推挙について意見されている、主要な

研究を概観してみた。それぞれの説に若干の違いはみられるが、これら諸説の共通認識を抽出してみると、およそ次のことが挙げられるだろう。

一、参議が正官となった。

二、「諸司掾」は、藤原氏（武智麻呂）の策略である。

三、「藤原四子体制（武智麻呂政権）」の成立、ないし確立の根拠。

さて、ここで筆者が疑問視するのは、「諸司掾」による選任の方法が、なぜ藤原氏（武智麻呂）主導によるものと見做せるのかである。たしかに、先学による検証によって明らかなように、就任者と武智麻呂との人的関係は良好であり、筆者もここに異論があるというわけではない。したがって、これを前提として参議推挙の結果に注目してみると、武智麻呂の策略と見做すこともできるであろう。

しかし一方で、先に掲示した天平三年八月辛巳条を読み解くと、一連の動向は聖武天皇の御意によるものだったと考えられる。なぜなら、「諸司主典已上」に「所_レ知可_レ堪_レ濟_レ務者」を推挙するよう命じた文書は「勅」であり、これに応じた「主典已上三百九十六人」は「上表」によって推挙し、その結果「詔」によって六名の参議が任命されているからである。つまり、この一連の流れは、天皇の意向で実施されていた可能性もあり、藤原氏（武智麻呂）の恣意的な

要素のみを見出すことはできないのである。同様に、本川氏が説かれる皇親勢力（舍人親王）の関与もまた認め難いのではなからうか。

もう一つ、諸氏の見解を概括したとき、「諸司掾」＝藤原氏の策略とみる根拠で、行政官司の要職に就く六名が自ずと選出された、と言われるようなことには合点がいかない。特に、中川説に顕著なように、八省の卿であることが重要視されていたのであれば、ここで選出されなかった宮内卿・治部卿・刑部卿なども、当然、候補に挙がってくるからである。しかし、これらの職が欠員であり、必然的に先の六名しか適任者がいなかった可能性もあるだろう。そこで、ことの真相を説明すべく、以下、宮内卿・治部卿・刑部卿に就任していた人物がいたのかどうか検討してみたい。

三、天平三年八月時点の宮内卿・治部卿・刑部卿

まずは、宮内卿について確かめてみる。天平三年八月の時点で、宮内卿の存在を直接示す史料はない。この前後で、もっとも早く宮内卿が確認できるのは、天平七年（七三五）閏十一月己丑条である。そこには、「宮内卿從四位下高田王卒。」とあって、天平七年閏十一月の時点で、高田王が宮内卿を務めていたことが判明する。ところが、この人物については、神龜元年（七二四）二月の從四位下への

叙位がわずかに知られるだけで(神龜元年二、月丙申条)、在任期間を特定することができない。けれども、卒伝によつて、從四位下で宮内卿の任にあつたことが看取されるため、少なくとも、神龜元年二月の叙位以降に宮内卿を帯びることになったことは確実である。

ところで、高田王の前任者は誰なのだろうか。神龜元年二月以前で、宮内卿を示す記事を探してみると、靈龜元年(七一五)五月壬寅条が該当する。そこには、「(前略) 從四位上阿部朝臣広庭為三宮内卿」。(後略)」とあつて、阿部広庭が就任していることがわかる。

これ以後の官歴は、養老五年(七二二)六月に左大弁(養老五年六、月辛丑条)、養老六年(七二二)に参議朝政(養老六年二、月壬申条)、神龜四年(七二七)十月に中納言となつていて(神龜四年十、月甲戌条)、天平四年の薨伝には「中納言從三位兼催造宮長官知河内和泉等国事」とみられる(天平四年、月乙未条)。したがつて広庭は、薨去するまでに宮内卿を離れていたことが確認される。

これらの情報から、高田王の宮内卿在任期間を推定した場合、阿部広庭が神龜四年に中納言となるまで宮内卿の任にあり、その後任として高田王が就任したとみると、うまく説明することができるとはなからうか。そして、この仮説が妥当であるとすると、高田王が宮内卿となつた時期は神龜四年十月頃で、その任を卒時まで務めていたということになる。したがつて、あくまで推論の域を脱することはできないが、天平三年八月のころには、高田王が宮内卿を帯

びていた可能性は大きいだろう。

次に、治部卿について確認してみる。先の手法と同じように、天平三年八月前後でもっとも早く治部卿が確認できる記事拾つてみると、天平三年十二月乙未条となる。そこには「(前略) 得_二治部卿從四位上門部王等奏_一稱。(後略)」とあつて、門部王の名を知ることができる。問題は、件の王が天平三年八月に治部卿であつたのかということになる。この王については、すでに指摘があるように二〇、同名の二人が確認されるため、官歴を跡付ける際には注意を要する。したがつて、ここでは先行する学説に基づきながら、少し丁寧に見ておくことにする。

門部王の初見は、和銅三年(七一〇)正月戊午条に「授_二无位門部王。(中略) 並從五位下_一。」とあつて、无位から從五位下へと昇叙していることがわかる。ところが、和銅六年(七一三)正月丁亥条に、「无位門部王從四位下」との記事が確認される。となると、先の初見記事との間に、位階の面で矛盾を来たすことになつてしまうので、当該期には二人の門部王がいたとみられるのである。

前者は、養老元年(七一七)正月に從五位上(養老元年正、月乙巳条)、同三年(七一八)に「伊勢国守」として伊賀と志摩の按察使となり(養老二年七、月庚子条)、同五年には正五位下(養老五年正、月壬子条)、神龜元年二月には正五位上(神龜元年二、月壬子条)、同五年(七二八)五月に從四位下と(神龜五年五、月丙辰条)、順調な昇進を重ねている。

後者は、従四位下となった後、養老五年（七二一）六月に刑部省の大判事^{（養老五年六月辛丑条）}、神龜三年（七二六）に造頼宮司となつてゐることが知られるのみである^{（神龜三年九月壬寅条）}。

このように、天平三年以前における二人の門部王の位階は、共に従四位下であることが判明する。しかしながら、天平三年十二月の記事では、「従四位上」たる門部王が治部卿を務めていた。しかも、天平六年（七三四）二月には、従四位下を冠する門部王がみられるため^{（天平六年二月癸巳条）}、位階が合致せず、ここに整合性がとれなくなつてしまふ。

これを解決してくれるのが、天平六年の年紀を持つ「聖武天皇勅旨写経御願文」^二である。その末筆には、「写経司治部卿従四位上門部王」という記載があつて、従四位上を有する門部王の存在が証明されるため、先の問題は氷解するだろう。すなわち、国史の記事には採用されていないが、神龜五年以降、二名の門部王のうちどちらかが従四位上に昇進してゐたことが裏付けられる。よつて、昇叙に預かつた方の門部王が、天平三年十二月までに治部卿に就任してゐたことが明らかとなる^{二三}。

また、『懷風藻』に、「従四位上治部卿境部王」の詩が残されてゐる。題詞には、「長王が宅にして宴す」とあつて、天平元年（七二九）二月の「長屋王の変」以前の宴であることが窺える。ここにみられ

る「境部王」は、養老五年に治部卿となる「坂合部王」のことである^{（養老五年六月辛丑条）}。このことから、「長屋王の変」以前に、坂合部王が治部卿を務めていたことがわかる。ということは、神龜五年以降に従四位上に昇叙した門部王は、この坂合部王の後任として治部卿に補されたということになるだろう。ようするに、天平三年八月の参議推挙の時点で、門部王が坂合部王のいずれかが治部卿として存在していたことは、ほぼ間違いないことだといえる。

刑部卿といえば、和銅三年にみられる竹田王から^{（和銅三年三月乙未条）}、天平十三年（七四一）の長田王の任官記事まで^{（天平十三年八月丁亥条）}、他の人材が充てられた形跡を見出すことができない。しかも竹田王は、靈龜元年に「散位」で死去しているから^{（靈龜元年三月丙申条）}、今のところ、靈龜元年から天平十三年までの刑部卿は不明である。

四、天平三年八月の参議推挙の実相

以上みてきたように、宮内卿と治部卿に限つていえば、天平三年八月の時点で在任者が想定される。とりわけ治部卿が存在していたことは確実である。このことからすると、少なくとも宇合と麻呂が「卿の任にあることから必ず推挙される」^{一三}とは限らないだろう。その点、林氏^{二四}が、「現職の位階の低い治部と宮内を除いた六省

の卿」から採択されたとする指摘は有効である。というのも、参議
拜命者は正四位以上を冠しているが、宮内卿の高田王は従四位下、
治部卿の門部王もしくは坂合部王は従四位上で、選ばれた六名の最
低位階と比べても、一階ないし二階、低いからである。したがって、
「可_レ堪_レ濟_レ務者」の判断材料に、位階の高低があつた可能性は大
きいだろう。もつとも林氏^{二五}は、先に紹介したとおり、結果からみ
て「藤原氏の二人宇合と麻呂を入れる為の仕掛け」と結論づけてお
られる。しかし、前述したように、諸司の推挙による参議の補任は、
聖武天皇の「勅」に依え、太政官の人材不足を補うものであつたと
みるのが穏当であると考える。

他にも、先行学説が述べる論旨に、疑義が生じてしまうことがあ
る。もし仮に、天平三年八月に、武智麻呂の思惑通り「藤原四子体
制（武智麻呂政権）」が発足し、藤原氏の勢力拡大が図られていくと
すると、武智麻呂の嫡子たる豊成は、飛躍的な昇進を続けることに
なるのではなからうか。式部卿には房前がいて、兵部卿には麻呂が
いることを併考してみると、これが阻まれる理由はないだろう。し
かし事実は逆で、豊成に「武智麻呂政権」下での目立つた叙位や任
官は認められず、天平四年（七三二）正月の従五位上^{（天平四年正月甲子条）}、同九
年（七三七）二月の正五位上への昇叙^{（天平九年二月戊午条）}がわずかに知られるだ
けである^{（第二章参照）}。こうした事実からすると、当該期に、果たして藤原

氏（武智麻呂）による政治権力が形成されていたのかと疑問に思う
のである。

さらにもう一つ、武智麻呂の策略とは思えない理由を提示してお
く。従来は、武智麻呂が自身と友好的な六名を確実に参議とするた
め、彼らが必然的に選出されるという確信を持ったうえで、藤原氏
に対抗する勢力に配慮し、当たり障りのない「諸司掾」という方法
が採られたと論じられている。しかし、このように立論する場合、
藤原氏に対抗する勢力もまた、彼らが必ず推挙されるだろうと予測
していたとみるべきではなからうか。必然的に選出される六名が、
武智麻呂と親しい間柄であるならば、このような視野も必要である
と考える。そうすると、藤原氏が有利となることを前提にした「諸
司掾」という方法を、これに対抗する政治勢力が、なぜ実施に踏み
切ったのかの説明されなくてはならないだろう。

このような諸点を総括し、筆者は、先行学説とは違った捉え方を
するのである。すなわち、天平三年八月丁亥条に窺える六名もの参
議任命は、史料が伝える以上に意図的なものは見出し難く、聖武天
皇の「勅」に応じた諸司らが、位階・官歴などから「可_レ堪_レ濟_レ務
者」と判断し推挙したので、彼らは参議に就任したものだと思われる。
それが結果的に、宇合と麻呂の政界進出となるのだが、これはあく
まで結果論として捉えるべきであろう。

むすび

本章で述べてきたことを簡潔に整理しておく。①天平三年八月の「諸司挙」による参議の任命は、聖武天皇の「勅」に応じた「主典已上三百九十六人」らが、式部卿藤原宇合、民部卿多治比県守、兵部卿藤原麻呂、大藏卿鈴鹿王、左大弁葛城王、右大弁大伴道足らを「可^レ堪^レ濟^レ務者」と判断し推挙した結果であり、藤原氏（武智麻呂）が意図した人事だとは考えにくい。②なぜならば、この段階で宮内卿や治部卿の存在が想定されるため、宇合と麻呂が必ず選ばれるという確証は持てないからである。③このことは、武智麻呂の嫡子たる豊成に、天平三年八月以降で際立った出世がないことから補足することができるだろう。④これらを要するに、天平三年八月の参議推挙の実相は、史料が伝える以上に意図的なものではなく、「藤原四子体制（武智麻呂政権）」の成立ないし確立に結びつけることはできないと結論づけたい。

さて、天平三年八月の参議推挙の理解が、如上の通りで大過ないとなると、当該期の政治体制には、聖武天皇の政治意識が存していた可能性を見出すことができるだろう。つまり、天皇を中心に据える太政官の合議体制が、しっかりと構築されていたと考えられるの

である。聖武天皇は、後に「喚^二会百官於朝堂^一。」して「恭仁難波二京何定為^レ都。」と問わしめたり（天平十六年閏正月乙丑条）、使者を遣わして「就^レ市問^二定^レ京之事^一」たりしている（天平十六年閏正月戊辰条）。また一方で、有名な大仏造立の詔では、「夫有^二天下之富^一者朕也。有^二天下之勢^一者朕也。」という力強い発言をされている（天平十五年十月辛巳条）。これらの事例から類推されることは、あくまで聖武天皇が政治の中心にあつて、その御意を公卿らが実現させていくという、当該期の政治体制の在り方なのではなかろうか。

そしてこの姿勢は、元正天皇の御代より受け継がれたものと推測される。なぜなら、元正天皇は、「左右大弁及八省卿等」に「国家之大事。有^レ益^二三万機^一。必可^二奏聞^一。」と述べられているし（養老五年二月月癸巳条）、養老五年二月の詔には「有^二政令不^レ便^レ事。悉陳无^レ諱。直言尽^レ意。无^レ有^レ所^レ隱。」という言葉があるからである（養老五年二月月甲午条）。これらの類例からもまた、天皇が親政をされるため、官人らに意見の上申を求めている様子を窺い知ることができるだろう。

このようにみてみると、天平期の政治運営には、聖武天皇の政治意識が根底にあったと考えられる。しかし、最初に触れたとおり、これを実証することは難しい。よって、これ以上の言及は避け、天平期政治体制の実態に関する見通しを提示するに留め、擧筆しておく。博雅のご批正を乞う次第である。

【註】

一 新日本古典文学大系本『続日本紀二』二四七頁―注二六（岩波書店、一九九〇）。

二 野村忠夫「長屋王首班体制から藤原四子体制へ」（『律令政治の諸様相』所収、塙書房、一九六三）。

三 中川収「藤原四子体制とその構成上の特質」（『奈良朝政治史の研究』所収、高科書店、一九九一）。

四 瀧浪貞子「武智麻呂政権の成立―「内臣」房前論の再検討―」（『日本古代宮廷社会の研究』所収、思文閣出版、一九九一）。

五 本川清裕「天平三年八月の参議推挙の実相」（『古代史の研究』九、一九九三）。

六 林陸朗「天平期の藤原四兄弟」（『国史学』一五七、一九九五）。

七 木本好信「藤原四子」（ミネルヴァ書房、二〇一三）。

八 中川氏（前掲註
三論文）や木本氏（前掲
註七）の検討によって、多治比県守・葛城王・大伴道足らが、藤原氏（武智麻呂）と親しい関係にあったことが明らかにされている。

九 中川氏前掲註三論文。

一〇 澤瀉久孝「萬葉作者複攷」（『萬葉の作品と時代』所収、岩波書

店、一九四一）。『日本古代人名事典二』（吉川弘文館、一九五九）。

黛弘道「万葉歌人『門部王』小考」（『上代文学論叢』所収、一九七七）。『日本古代氏族人名辞典』（吉川弘文館、一九九〇）。

一一 『大日本古文書』二四―補遺一。

一二 澤瀉氏（前掲註
〇論文）と黛氏（前掲註
〇論文）は、筆者でいう「後者」の門部王が、天平三年一二月の治部卿だと判断されている。

一三 中川氏前掲註三論文。

一四 林氏前掲註六論文。

一五 林氏前掲註六論文。

【初出一覧】

序章・・・・・・・・新稿。

第一部

第一章・・・・「藤原四子体制」の再検討」（『皇學館論叢』第四十三卷、第四号、二〇一〇）。

付論・・・・新稿

第二章・・・・「藤原豊成について―榮原論文にふれて―」（『史料』第三三〇号、二〇一一）。

第三章・・・・「橘諸兄とその時代」（『皇學館論叢』第四十二卷、第二号、二〇〇九）。

第四章・・・・「広嗣の乱」に関する一考察―「時政之得失」の解釈についての提唱―」（『皇學館史學』第二十七号、二〇一二）。

第二部

第五章・・・・「天平元年四月の礼式改変をめぐる覚書」（『続日本紀研究』第三九四、二〇一一）。

第六章・・・・「知太政官事に関する一考察」（『政治経済史学』第五六五号、二〇一四）。

第七章・・・・「八世紀における行幸と留守」（『ヒストリア』第二四七号、二〇一四）。

第八章・・・・「春日大社創祀に関する一考察―奈良朝政治史研究の一助として―」（『神道史研究』第六十卷、第二号、二〇一二）。
・・・・「春日大社の創祀と藤原氏」（『神道史研究』第六十一卷、第二号、二〇一三）。

終章・・・・「天平三年八月の参議推挙についての一試論―「藤原四子体制」論、「武智麻呂政権」論の一助として―」（『皇學館論叢』第四十六卷、第五号、二〇一三）。

【参考文献一覧】

- 青木和夫 「駅制雑考」(『続日本古代史論集』所収、吉川弘文館、一九七二)。
 荒木敏夫 「皇太子監国と留守官」(『日本古代の皇太子』所収、吉川弘文館、一九八五)。
 市村宏氏 「橘諸兄」(『東洋学研究』九、一九七五)。
 稲光栄一 「藤原広嗣の乱に関する一考察」(『歴史教育』六一六、一九五八)。
 犬養孝 「長屋王の変と万葉集」(『国文学』一一一十三、一九六六)。
 井上薫 「紫香楽宮」(『日本古代の政治と宗教』所収、吉川弘文館、一九六一)。
 井上辰雄 「『常陸国風土記』編纂と藤原氏」(『古代中世の政治と地域社会』所収、雄山閣出版、一九八六)。
 井上光貞 「古代の皇太子」(『日本古代国家の研究』所収、岩波書店、一九六五)。
 井上亘 「朝礼の研究」(『日本古代朝政の研究』所収、吉川弘文館、一九九八)。
 「参議朝政考」(『日本古代朝政の研究』所収、吉川弘文館、一九九八)。
 茨木一成 「式部卿の研究」(『続日本紀研究』十・十一合併号、一九五三)。
 今井啓一 「橘諸兄恭仁京経略の一考察」(『皇學館論争』一一三、一九六八)。
 上田正昭 「春日の原像」(『春日明神』所収、筑摩書房、一九八七)。
 請田正幸 「長屋王家の復活をめぐる」(『続日本紀の諸相』所収、塙書房、二〇〇四)。
 内田敦士 「景雲一切経の写経・勘経事業と称徳・道鏡政権」(『続日本紀研究』三九九、二〇一二)。
 遠藤慶太 「尚侍からみた藤原仲麻呂政権―議政官とヒメマチキミ―」(木本好信編『藤原仲麻呂政権とその時代』所収、岩田書院、二〇一二)。
 大野保 「『宇合』年齢考」(『早稲田大学国文学研究』五八、一九七六)。

大山誠一 「長屋王と吉備内親王」(『長屋王家木簡と奈良朝政治史』所収、吉川弘文館、一九九三)。

岡田莊司 「平安前期 神社祭祀の公祭化・上―平安初期の公祭について―」(『平安時代の国家と祭祀』所収、続群書類聚完成会、一九九四)。

岡田精司 「香取神宮の起源と祭神」(『千葉県歴史』一五、一九七八)。

岡村孝子 「平城京における日神信仰―都祁氷室神社と春日大社の創祀をめぐって―」(『日本宗教文化史研究』一四―一、二〇一〇)。

澤瀉久孝 「萬葉作者複攷」(『萬葉の作品と時代』所収、岩波書店、一九四一)。

笥敏生 「広嗣の乱後の遷都をめぐる二・三の問題」(『続日本紀研究』二五六、一九八八)。

加藤麻子 「鈴印の保管・運用と皇権」(『史林』八四―六、二〇〇一)。

金井清一 「藤原宇合年齢考」(『万葉詩史の論』所収、笠間書院、一九八四)。

鎌田元一 「律令制と文書行政」(『律令国家史の研究』所収、塙書房、二〇〇八)。

川崎庸之 「万葉集の時代的背景」(『記紀万葉の世界』所収、御茶の水書房、一九五一)。

「橘諸兄―初期諸兄政権と藤原広嗣の乱―」(『記紀万葉の世界』《川崎庸之歴史著作選集1》所収、東京大学出版会、一九八二)。

河内祥輔 「奈良時代後期政治史の基調」(『古代政治史における天皇制の論理』所収、吉川弘文館、一九八六)。

菊地康明 「春日神社と律令官社制」(『律令制祭祀論考』所収、塙書房、一九九一)。

岸俊男 『藤原仲麻呂』(吉川弘文館、一九六九)。

「光明立後の史的意義」(『日本古代政治史研究』所収、塙書房、一九六六)。

「郷里制廃止の前後」(『日本古代政治史研究』所収、塙書房、一九六六)。

「元明太上天皇の崩御―八世紀における皇権の所在―」(『日本古代政治史研究』所収、塙書房、一九六六)。

「阿倍仲麻呂と「みかさの山」」(『古代宮都の探求』所収、塙書房、一九八四)。

「長岡遷都と鎮京使―遷都における留守官の意義におよぶ―」(『長岡京古文化論叢』所収、同朋舎、一九八六)。

「朝堂の初歩的考察」(『日本古代宮都の研究』所収、岩波書店、一九八八)。

喜田新六
「令制下における君臣上下の秩序維持政策」(『令制下における君臣上下の秩序について』所収、皇學館大学出版部、一九七二)。

北村進
「長屋王の変と小野老」(『上代文学』五〇、一九八三)。

北山茂夫
「万葉における慶雲期の諸様相」(『万葉の世紀』所収、東京大学出版会、一九五三)。

「七四〇年の藤原廣嗣の叛亂」(『日本古代政治史の研究』所収、岩波書店、一九五九)。

「知太政官事」(『日本古代政治史の研究』所収「七四〇年の藤原廣嗣の叛亂、補記」、岩波書店、一九五九)。

本本好信
『奈良朝政治と皇位継承』(高科書店、一九九五)

「橘諸兄と奈良麻呂の変―諸兄の変への関与―」(『日本史学集録』十五、一九九二)。

「石上麻呂と藤原不比等」(『律令貴族と政争』所収、塙書房、二〇〇一)。

「称徳・道鏡政権の実態―貴族官人層との関係―」(『奈良時代の政争と皇位継承』所収、吉川弘文館、二〇一二)。

「称徳女帝の「遺宣」―光仁天皇の立太子事情―」(『奈良時代の政争と皇位継承』所収、吉川弘文館、二〇一二)。

『藤原仲麻呂』(ミネルヴァ書房、二〇一二)。

『藤原四子』(ミネルヴァ書房、二〇一三)。

倉本一宏
『奈良朝の政変劇』(吉川弘文館、一九九八)。

桑門知亜紀
「藤原広嗣の乱と災異記事」(『日本歴史』六一六、一九九九)。

胡口靖夫
「美努王をめぐる二、三の考察」(『国史学』九十二、一九七四)。

小杉則義
「律令国家成立期に於ける式部卿の研究」(『政治経済史学』三四四、一九九五)。

近藤信義 「橘諸兄と万葉集」(『国学院雑誌』六十九―一、一九六八)。

笹山晴生 『日本古代史講義』(東京大学出版、一九七七)。

『奈良の都』(吉川弘文館、一九九三)。

榮原永遠男 「藤原広嗣の乱の展開過程」(『太宰府古文化論叢、上巻』所収、吉川弘文館、一九八三)。

『天平の時代』(集英社、一九九一)。

「紫香樂大仏の造顕と聖武天皇の行幸」(『ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集第二号 論集東大寺創建前後』所収、法蔵館、二〇〇四)。

「藤原豊成―軍事と仏教―」(『平城京の落日』所収、清文堂、二〇〇五)。

「行幸からみた後期難波宮の性格」(『難波宮から大阪へ』所収、和泉書院、二〇〇六)。

『聖武天皇と紫香樂宮』(敬文舎、二〇一四)。

坂本太郎 『日本全史、二、古代Ⅰ』(東京大学出版会、一九六〇)。

「藤原広嗣の乱とその史料」(『古典と歴史』所収、吉川弘文館、一九七二)。

「天平の政治と文化」(『坂本太郎著作集 一』所収、吉川弘文館、一九八六)。

「律令政治の展開」(『坂本太郎著作集 一』所収、吉川弘文館、一九八六)。

「上代駅制の研究」(『坂本太郎著作集 八』所収、吉川弘文館、一九八九)。

鷺森浩幸 「道鏡―政界を揺るがせた怪僧か」(『平城京の落日』所収、清文堂出版、二〇〇五)。

佐藤絵梨 「長屋王の変と政治過程」(『新潟史学』五六、二〇〇六)。

佐藤信編 『律令国家と天平文化』(吉川弘文館、二〇〇二)。

篠川賢 「「知太政官事」小論」(『日本常民文化紀要』一九、一九九六)。

鈴木治 「三野王について」(『天理大学学報』九十八、一九七五)。

鈴木景二 「日本古代の行幸」(『ヒストリア』一二五、一九八九)。

鈴木拓也 『蝦夷と東北戦争』(吉川弘文館、二〇〇八)。

「天平九年以後における版図拡大の中断とその背景」(『杜都古代史論叢』今泉隆雄先生還暦記念論文集刊行会、二〇〇八)。

関晃 「知太政官事と藤原氏」(『日本古代の国家と社会』所収、吉川弘文館、一九九七)。

関根淳 「皇太子監国と藤原種継暗殺事件」(『ヒストリア』二四〇、二〇一三)。

「奈良朝政治史研究に関する一考察」(『史聚』四七、二〇一四)。

蘭田香融 「惠美家子女伝考」(『日本古代の貴族と地方豪族』所収、塙書房、一九九二)。

平あゆみ 「黄文王帝位継承企謀と橘奈良麻呂の変―長屋王皇統への可能性とその再挫折―」(『政治経済史学』二八七、一九九〇)。

「吉備真備右大臣就任の歴史的諸前提―孝謙稱徳女帝の師傅と「軍事参謀」への論考―」(『政治経済史学』二九五、一九九〇)。

高島正人 「知太政官事の性格と補任事情」(『史聚』一七、一九八三)。

「奈良時代における藤原氏一門の女性」(『奈良時代諸氏族の研究―議政官補任氏族―』所収、吉川弘文館、一九八三)。

『藤原不比等』(吉川弘文館、一九九九)。

「藤原不比等の藤氏振興策」(『奈良時代の藤原氏と朝政』所収、吉川弘文館、一九九九)。

瀧川政次郎 「紫微中臺考」(『法制史研究』四、一九五三)。

「複都制と太子監国の制」(『京制並に都城制の研究 法制史論叢 三』所収、角川書店、一九六七)。

瀧浪貞子 「武智麻呂政権の成立―「内臣」房前論の再検討―」(『日本古代宮廷社会の研究』所収、思文閣出版、一九九一)。

「藤原永手と藤原百川―称徳女帝の「遣宣」をめぐる―」（『日本古代宮廷社会の研究』思文閣出版、一九九一）。
『帝王聖武』（講談社、二〇〇〇）。

竹内理三 「「知太政官事」考」（『律令制と貴族政権』所収、御茶の水書房、一九五七）。

竹尾幸子 「広嗣の乱と筑紫の軍政」（『古代の日本 三 九州』所収、角川書店、一九七〇）。

田井泰子 「日本古代遷都論―恭仁京をめぐる―」（『寧楽史苑』二七、一九八二）。

田中多恵子 「長屋王の変についての一考察」（『日本歴史』二八三、一九七七）。

田中卓 「所謂「上階官人歴名」について」（『続日本紀研究』三一、一九五六）。

「聖武天皇の神祇崇敬」（『神社と祭祀 田中卓著作集十一―I』所収、国書刊行会、一九九四）。

角田文衛 「不比等の娘たち―初期律令政治運営の秘奥をめぐる―」（『律令国家の展開』所収、塙書房、一九六五）。

「藤原袁比良」（『律令国家の展開』所収、法蔵館、一九八四）。

「藤原朝臣家子」（『律令国家の展開』所収、法蔵館、一九八四）。

寺崎保広 「長屋王」（吉川弘文館、二〇〇一）。

東野治之 「「長屋親王」考」（『長屋王家木簡の研究』所収、塙書房、一九九六）。

土橋誠 「維摩会に関する基礎的考察」（『古代史論集 下』所収、塙書房、一九八九）。

虎尾達哉 「知太政官事小考」（『日本古代社会史研究』所収、同成社、一九九一）。

直木孝次郎 「長屋王の変について」（『奈良時代史の諸問題』所収、塙書房、一九六八）。

「大宰府・平城京間の日程」（『奈良時代史の諸問題』所収、塙書房、一九六八）。

「天平十六年の難波遷都をめぐる―元正太上天皇と光明皇后―」（『難波宮と難波津の研究』所収、吉川弘文館、一九九四）。

「額田王の年齢と蒲生野遊獵―第一子出産年齢考―」（『続日本紀研究』三三一、二〇〇一）。

中川収 「藤原広嗣の乱」(『奈良朝政争史』所収、教育社、一九七九)。

『奈良朝政治史の研究』(高科書店、一九九一)。

「長屋王とその王子たち」(『政治経済史学』三〇〇、一九九一)。

「阿倍内親王の立太子」(『政治経済史学』三七〇、一九九七)。

中西康裕 『続日本紀と奈良朝の政変』(吉川弘文館、二〇〇二)。

「藤原仲麻呂―星は昇り、落つ―」(『平城京の落日』所収、清文堂、二〇〇五)。

中村修也 「女帝の世紀」(『続日本紀の世界―奈良時代への招待』所収、思文閣出版、一九九九)。

中村英重 「中臣氏の出自と形成」(『古代氏族と宗教祭祀』所収、吉川弘文館、二〇〇四)。

長洋一 「藤原広嗣の怨霊覚書―太宰府文化の側面―」(『歴史評論』四一七、一九八五)。

西川重幸 「「知太政官事」一試論」(『日本史論叢』所収、横田健一先生還暦記念会、一九七六)。

西田長男 「春日大社創立の諸問題」(『神道考古学講座 六』所収、雄山閣、一九七三)。

仁藤敦史 「古代王権と行幸」(『古代王権と官僚制』所収、臨川書店、二〇〇二)。

「行幸観の変遷」(『古代王権と官僚制』所収、臨川書店、二〇〇二)。

『女帝の世紀―皇位継承と政争―』(角川学芸出版、二〇〇八)。

『都はなぜ移るのか 遷都の古代史』(吉川弘文館、二〇一一)。

仁藤智子 「行幸における従駕形態をめぐって―鹵簿と律令官僚制―」(『平安初期の王権と官僚制』所収、吉川弘文館、二〇〇〇)。

「行幸時における留守形態と王権」(『平安初期の王権と官僚制』所収、吉川弘文館、二〇〇〇)。

「留守官と鎮京使」(『平安初期の王権と官僚制』所収、吉川弘文館、二〇〇〇)。

野村忠夫 「所謂「上階官人歴名」断簡補考」(『続日本紀研究』三一七、一九五六)。

『律令政治の諸様相』（塙書房、一九六三）。

「藤原式家の政治的進出」（『政治経済史学』二二七、一九八五）。

橋本義則 「朝政・朝儀の展開」（『平安宮成立史の研究』所収、塙書房、一九九五）。

「天平十七年大糧申請文書の再検討―紫香楽宮攷（二）―」（上）―」（『山口大学文学会志』四九、一九九九）。

早川庄八 『日本の歴史 第四卷 律令国家』（小学館、一九七四）。

「選任令・選叙令と郡令の「試験」」（『日本古代官僚制の研究』所収、岩波書店、一九八六）。

「大宝律令制太政官の成立をめぐる」（『日本古代官僚制の研究』所収、岩波書店、一九八六）。

「律令太政官制の成立」（『日本古代官僚制の研究』所収、岩波書店、一九八六）。

「律令国家・王朝国家における天皇」（『日本の社会史 三』所収、岩波書店、一九八七）。

林陸朗 『光明皇后』（吉川弘文館、一九六一）。

「天平期の藤原四兄弟」（『国史学』一五七、一九九五）。

「藤原永手―光仁天皇を推戴した宰相―」（『奈良朝人物列伝―『続日本紀』薨卒伝の検討―』所収、同朋社、二〇一〇）。

原朋志 「八世紀における親王と議政官」（『続日本紀研究』四〇三、二〇一三）。

春名宏昭 「皇太妃阿閑皇女について―令制中宮の研究―」（『日本歴史』五一四、一九九一）。

「知太政官事一考」（『律令国家官制の研究』所収、吉川弘文館、一九九七）。

「太上天皇と内印」（『古代中世史料学研究 下』所収、吉川弘文館、一九九八）。

彦由三枝子 「大納言大伴旅人の薨去と藤原四卿政権の確立過程―知太政官事舍人親王・知五衛及授刀舍人事親田部親王との

関連について―」（『政治経済史学』二八四、一九八九）。

廣瀬明正 「皇親政治の諸問題（下）―太政大臣・知太政官事について―」（『芸林』二四―六、一九七三）。

福原永太郎 「橘奈良麻呂の変における答本忠節をめぐる」『続日本紀研究』二〇〇、一九七八。

福山敏男 「春日神社の創立と社殿配置」『日本建築史の研究』所収、桑名文星堂、一九四三。

藤木邦彦 「奈良・平安朝における皇親賜姓について」『国史館大学人文学会紀要』二、一九七〇。

古市晃 「孝謙・称徳天皇―孤高の女帝」『平城京の落日』所収、清文堂出版、二〇〇五。

細井浩志 「藤原広嗣上表文」の真偽について」『古代の天文異変と史書』所収、吉川弘文館、二〇〇七。

堀井崇晴 「知太政官事と奈良時代前期の親王」『高円史学』一六、二〇〇〇。

俣野好治 「藤原永手―その政治姿勢と政治的立場」『平城京の落日』所収、清文堂出版、二〇〇五。

松尾光 「橘奈良麻呂の変」『古代の王朝と人物』所収、笠間書院、一九九七。

「藤原広嗣の乱と聖武天皇」『天平の政治と争乱』所収、笠間書院、一九九五。

松田好夫 「大伴家持と藤原広嗣の乱」『国文学、解釈と教材の研究』十一―十三、一九六六。

黛弘道 「万葉歌人『門部王』小考」『上代文学論叢』所収、一九七七。

「『日本書紀』と藤原氏」『律令国家成立史の研究』所収、吉川弘文館、一九八二。

「橘三千代」(『古代を飾る女人像』所収、講談社、一九八五)。

丸山二郎 「藤原広嗣の乱と鎮西府」『歴史教育』三一五、一九五五。

水野柳太郎 「関東行幸と恭仁遷都」『日本歴史』六七六、二〇〇四。

三宅和朗 「古代春日社の祭りと信仰」『史学』七一、一号、二〇〇一。

宮田俊彦 『吉備真備』(吉川弘文館、一九六一)。

宮地直一 「春日神社の成立」(『神社論攷』所収、古今書院、一九四二)。

本川清裕 「天平三年八月の参議推挙の実相」(『古代史の研究』九、一九九三)。

森公章 「長屋王家の興亡」(『長屋王家木簡の基礎的研究』所収、吉川弘文館、二〇〇〇)。

森田 剡

「藤原広嗣の乱について」(『政治経済史学』三四七、一九九五)。

八木 毅

「常陸国風土記、勘造者に就いての研究史」(『古風土記・上代説話の研究』所収、和泉書院、一九八八)。

八木 充

「藤原広嗣の叛乱」(『山口大学文学会志』一一二、一九六一)。

柳雄太郎

「広嗣の乱と勅符」(『古代史論集』所収、塙書房、一九八八)。

山田英雄

「知太政官事について」(『政治社会史論叢』所収、近藤出版、一九八六)。

山本幸男

「藤原良継・百川―時代を変えた式家の俊英―」(『平城京の落日』所収、清文堂出版、二〇〇五)。

横田健一

「天平十二年藤原広嗣の乱の一考察」(『律令国家の基礎構造』所収、吉川弘文館、一九六〇)。

「橘諸兄と奈良麻呂」(『白鳳天平の世界』所収、創元社、一九七三)。

「安積親王の死とその前後」(『白鳳天平の世界』所収、創元社、一九七三)。

吉川真司

「律令太政官制と合議制―早川庄八著『日本古代官僚制の研究』をめぐって―」(『日本史研究』三〇九、一九八八)。

『聖武天皇と仏都平城京』(講談社、二〇一一)。

義江明子

「春日祭祀詞と藤原氏―氏神信仰についての一考察―」(『歴史学研究』五三七、一九八五)。

「古代女帝論の過去と現在」(『天皇と王権を考える―第七巻 ジェンダーと差別―』所収、岩波書店、二〇〇二)。

『県犬養橘三千代』(吉川弘文館、二〇〇九)。

吉川敏子

「律令貴族と功封」(『律令貴族成立史の研究』所収、塙書房、二〇〇六)。

「奈良時代の内臣」(『律令貴族成立史の研究』所収、塙書房、二〇〇六)。

利光三津夫

「広嗣の乱の背景」(『律令制の研究』所収、慶應義塾大学法学研究会、一九八一)。

渡辺晃宏

『平城京と木簡の世紀』(講談社、二〇〇一)。